甲乙付けがたい下僕ハッ？

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

甲乙付けがたい下僕ハツ？

【Nコード】

N7562X

【作者名】

宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

一人称で、『僕』の話ですねー。お暇だったら、どうぞ。

僕は今日の陽が差し込まれてくる時間帯に音について新たな認識を持った。いままでは僕は音というものに対して感じていたことが、ひとことと言ってしまふと纏まりだった。集合体であつて、その集合だけで完結されているものだと思つて、音ひとつひとつ自体が景色にもなつていているんだということは知らなかった。思いもよらなかつたんだ。

でも今日ね、声の無い、失敗がない録音された音の集合体を聞いている途中にさ、ほら楽器ひとつひとつのかき鳴らすそれらの音が、景色を生み出してきて、雫が葉からこぼれるとかいう何ともありきたりな景色を思い起こしてしまつたんだ。でも瞬間瞬間のことさ。所詮、僕なんてその程度のものでね、何時だつて安定していなくてさつきまではこうだと思つていたことを、次には否定してしまつていたりする不安定だ。で、今はこういう四方面を灰色の壁で覆われている、淡い西洋のただ中に放り投げられてしまつていような気がする。

実際にここは何処かは、わからない。目を開けたらこの灰色の壁や、色鮮やかな子供の喜びそうな玩具ばかりが転がっている牢獄のような、窓が高くて格子がかかつていて、それが陽の日差しに縦の模様を作つて縞々なかんじさ。僕はそこに馬のぬいぐるみを置いて、シマウマを即興で製作してみた。で、こんな程度のことをしてしまふような自分自身の軽薄さに呆れて、空しくなつたりする。ただ床に転がっている子供が喜ぶような玩具は僕は嫌いで、あんまり楽しそつでもないから、適当に蹴つ飛ばしたりしている。

娯楽がたくさん溢れている充足された世界の中で、まるで百年前の子供たちが喜ぶような工夫しかしていないように見える玩具を与えられているのは、本当に屈辱的というのかな、僕がなさない愚かな人間だということを叩きつけてきたようつで、つまり喧嘩を売ら

れているとかいう野蛮な格好悪い言葉を言いたくなるような行為をされているんだ。でも誰がこんなことをしているのかはわからないんだよね。例えば、この牢獄のような灰色と子供の玩具の部屋には、訪問者は日に一人しかいない。何処か砂漠の民族という雰囲気のが、仮面をつけた、わざとみずぼらしい格好をしているらしき仮面の人々が毎日くるんだ。来て僕が生きるための御飯や、新しい玩具、そういうものを置いて、置くだけで、立ち去っていく。言葉をかけられた覚えはないな。また同時に、僕が言葉をかけた覚えもない。何をされるかわからないからね。仮面のそいつは物々しい斧を持っていて恐ろしいから話掛け辛いのだ。下手に怒らせて斧で惨殺されるなんて、ごめんだ。

それにしてもお腹が減ってきた。今は陽が落ちそうな時間帯でね、外のおそらく西洋世界では今頃お仕事という義務のようなそれを終えた人々が、朱色の夕焼けを背にそれぞれの自由を謳歌するための歩行を始めていることだろう。そんな時間だ、僕だってお腹くらいは減る。どうか仮面の人に、早く来て欲しいものだ。でもいつも、陽が落ちてからそれはやってくるんだよね。この時間帯には僕は、することも、されることもない、完全に社会的に一人となれている孤独でもあり、幸福でもある時間なのだろうさ。この灰色に塗れて、自分自身も灰色に染まってしまえばいいのだと自惚れることが出来るほど、ここでは他者からの干渉がない。自分の世界に浸れと脅迫されているかのような、圧倒的な孤独の環境だよ。なんでここにいるのか、僕は理由を知らない。記憶は壊されているらしくて雑音混じりのテレビから流れるザー、ザー、の砂嵐になっているからさ。どうという理由でこうなっているのか、僕は知らない。知ることも、仮面の人斧をまず降ろしてくれなきゃ、何も知ることはできないんだろうから、そうなるとふと閃いたけど、玩具で何かを探った方がいいのかもね。ここには玩具がたくさん転がっている。色とりどり、形も様々、使用の仕方も様々な玩具たちは、ここでずっと転がっていて、埃を被っているんだ。でも埃を被らせているだけじゃ存

在意義が無くて可哀想だから、少しはいじくつてあげた方が良いのかもれないから、うずくまって手を伸ばしてみるんだ。まずは赤い牛みたいな玩具だね。かくかく首が不安定なその玩具を、両手の十本の指で支えて、僕の目の前に持ち上げてやって、夕陽の差し込まれてくる光をそれに重ねてあげる。赤い牛は光を得て、水を得た魚とはいかないで、ただ首をかくかくさせるだけだけど、生き物になつてくれたように見えて、ひとりで退屈なこの部屋にいるから発生する僕の孤独感を紛らわしてくれてはいるかもね。でも、それつてつまり一人じゃなくなるってことだ。

僕は今は一人が良い。だって腹も減っているし、音について閃いて僕の存在意義に意味を持てたような気がして心地よい時期なんだ。一人について、孤独はあるけど心地良い気持ちも味わってもしる時間帯なんだ。だから赤い牛が首をかくかくさせることは、僕にとつては嫌な風景だな。そういえば音の景色だなんて、楽しい話をしていたものだな。もう楽しくなんかないかもしれない。でもゴミ箱に捨てるなんて汚いことは言わないさ。そんな偉そうなこと、よくできるものだよ。でも僕は今一人だからそうやって自信を持って言えるんだけど、大勢の前で一緒に生きていく時には、偉そうなことなんて勇気を振り絞るか鈍感になるかしなきゃ、できやしないことだよ。ね。ああ、赤牛はもう置こう。丁度夕焼けも沈みはじめて、玩具たちも色を無くしていく。僕も色を無くしていく。灰色の壁たちも、床も、天井も。いや、目が慣れれば青白い夜の世界に包まれるのだからね。僕は何を言っているんだろう。非生産的な思考を繰り返しても、得にはならないし誰かを楽しませたりできない。仮面の人が悪いんだ。或いは、この牢獄に僕を閉じ込めた存在が悪いんだ。仮にそいつのことをクズと名づけよう。いや、違うな、NOと名づけよう。これも違う。牢と名づけよう。甲と名づけよう。ああ、甲ということにしよう。甲が悪いのだとして、じゃあ僕は乙だろうか。でも今は甲に文句を考えることは止めよう。飯が仮面の人によつ

て運ばれてきた時にそれは考えることにしよう。そもそも僕には甲の見当なんてまったく付かないんだ。少なくとも個人ではない。甲には僕自身のこと含まれているような気がするし、世界全体が内包されているような気もする。つまり手強い奴なんだ甲は。つかみづらい靄みみたいなもので、ああいやだなということなんだよ。考えるのは面倒だ。様々な知識を得て、編集し、纏めて、文章化する、という行為を何年も掛けてようやく手触りくらいはわかるようになるのが、きつと甲に違いない。輪郭をわかること自体が難易度の高い存在がそれだとしたら、まったくもって一番厄介なのは、そういうわかりづらい存在の甲を認識してしまおうとする乙たる僕自身で。僕は馬鹿で阿呆たる乙であると感じてしまうのは、甲という認識する必要がない存在を認識してしまうのは、あまりに愚かだからだ。実際に甲に深い痛みを負わされた訳ではないのに、実際に与えられた苦痛というのは、総量としてはおそらく、世間一般程度のレベルだったに違いないのに、僕はそれを深く深く僕自身の中に根ざしてしまった。だから甲乙の関係性はいつになっても消えないままに、灰色の牢獄の中においても空気越しに繋がってしまっている。あの鉄格子の向こう側に果てしなく広がっている甲、そしてここにいる甲の一部でもある乙。音を景色だとかいったさつき。赤い牛で暇つぶしをしたさつき。

ため息をついた。とても深く、ため息をついた。

そして黄色いきリンの大きなぬいぐるみを尻に敷いて床に座ることにした。とても静かだ。ほぼ無音と言っても良い。

瞳を閉じると瞼が下りて来たということだから、真っ黒になって光の残影のようなものだけが仄かに見える。あと、集中すれば金の粒子たちが泳いでいるのが見える。これは僕以外のみんなだつてそうだろう？目を瞑れば見える、星の流れのような、金色の粒子たちが真っ黒の中を踊るようにして走り回っている。集中しないとぼやけてしまうけど、見ようと思えば見ることが出来る、金色の粒子さ。どういふ理由でこれが見えるのか、僕は知らない。これも甲の一部分ということだ。

にしても寒い。毛布の一つや二つがあつてくれても良い。玩具ばかり一辺倒に置かれているこの灰色の牢獄で、僕は上は長袖のシャツ一枚だし、下は薄手のジャージだし靴下だつて無いよりはましだが大して温かくもないさ。毛布が欲しくなる寒さだ。陽も落ちたんだ。これからは寒くなつていくばかりだ。

ガタン…

聞き覚えのない音が聞こえたせいで僕は瞼を開く。寒さのせいで鳥肌をたてながらもキリンのぬいぐるみから立ち上がり、静まり返つてしまった牢獄で、じつと耳を澄ましてみる。自動車が走る音も人の喋る声も小鳥のさえずる声も聞こえない、隔離された無音の空間で、聞き覚えのない音を聞くのは珍しい事だ。

再び　ガタン…は鳴つて、ああ、やはり何か…何かがいる気配がする…と実感して僕は、音の方へと歩を進めてみる。壁の向こう側から聞こえてきている音。丁度鉄格子の窓がある側の壁だ。ガタン、という音は頻繁に鳴り響くようになって、壊している、そう、壁を破壊しようとしてくれている何者かがガタンガタン言わせているのではないか、と僕は察した。

途端に気持ちが高揚した。光線が放射状に僕の頭から光を放ち、牢獄の暗闇を照らし上げる光源となつてパーツと開けた世界。煮詰

まっていたらしい脳味噌が新たな活路を開いてくれたおかげだ。存在する意義を音がなんちゃらとか言っでごまかしたりして時をやり過ぎしていた孤独を好むはずの僕も、壁が壊れてくれる可能性を知った瞬間にパーツとなってしまうた。矛盾とはこのことか。でも誰にも言っただけなんだから良いんだ。僕の脳味噌の中で僕が矛盾したことを想像しようが、誰に迷惑がかかる？僕の思考が透けて世界に伝播されない限りは、何の問題もないんだよあははは。つつわけで期待。壁よ開けー、開けー。

しかし、と冷静にならなければならぬ。陽が落ちて真つ暗の牢獄内と僕のお腹の減り具合から察するにもうじき奴が来るはずだ。仮面をつけた物言わぬ監獄者にガタンという音を聞かせては……。

僕はそう気が付いて慌てて灰色の部屋に唯一ひとつだけある鉄扉その方角に身体をむけたら、すぐ目の前に、監獄者、いた。

仮面をつけて斧と食事を持った僕と背丈は同じくらいの監獄者。「……………」彼の無言の威圧が恐ろしい。そして、ガタン……が鳴った。鳴ってしまった。大きな音だ、監獄者がよっぼど耳の聞こえない人でなければ、聞き取ったことであろう。そして実際に聞き取って、異変を感じ取ったらしい。平常が壊れる可能性が近づいていることを理解し、そうされないよう抵抗しようと感じたらしい。監獄者は始めて声を発した。小さな、ちいさな、とても聞き取り辛い声というか呻きだったわけだが、僕の耳にかすかに聞こえて、僕はそれをこつこつという言葉だと認識した。秩序を乱すものは抹殺して血みどろ。聞き違いでないならば背中に背負っている斧で、ガタン、という音を鳴らして壁を壊してくれていると窺えるその僕にとっての救済を、斧を背負った監獄者は血みどろにするといった。血の塊にするという意味だ。

監獄者は僕への飯、盆に乗っている夕食を一人用テーブルの上に置いてから、颯爽と立ち去ろうとする。心なしかいつもより足の進む速度が早く見える。ガタンはまだ鳴っている。とめなければ、救済は消える。光明は血に、僕は青白い牢獄で闇を纏う。いやだ、い

僕はキリンのぬいぐるみの上に腰を下ろしていて、瞼を開くとすぐに左手が大丈夫かどうかと視線を動かした。大丈夫だった。左手はそこについている。安堵した。あれは夢だったんだ、と僕は今そのことを実感した。何時の間に寝てしまったんだろう。どうやら丁度、陽が落ちた辺りらしいけれど、夕飯はまだ運ばれてきていないみたいだ。テーブルには埃を被っている本が数冊置かれているだけで、お盆も、食事も、血もない。

僕はひどくどきどきしている。心臓はフルに稼働していて、血管が収縮してるような圧迫感があつて、どこか息苦しい。さっきガタン…という音が鳴り始めたのは、ちょうど陽が落ちて少し経ち、夜の青白さが灰色の牢獄を染めるようになった頃。ちょうど今辺りだ……。

ガタン……

聞こえた。心臓のどきどきという喧しさはさらに強まりを見せ、いても経つてもいられない気持ちにさせられ、僕は駆け出していた。背後に振り向く暇も無い。さっきのが夢で今が現実だとして、さっきの夢が正夢だとしたら、僕には一切立ち止まって様子を窺っている暇などない。何としてでも壁の向こう側にいる僕の救済に、逃げる、と伝えなければならぬ。ガタン。ともしっかりその音が大きく聞こえる壁の位置を特定してから、僕は声をあげた。まだ仮面の人は鉄扉を開けていない。叫ぶなら今の内だ。「逃げる！ 僕のこととは後で助けてくれ！ 今はタイミングが悪いから、そこを立ち去ってくれ！」心臓がやばい、破裂しそうだ。でも伝わってくれたのだろうか、ガタン、という音が一旦止んだ。僕は安心する。一旦離れてもらって、夕飯を食べ終わった頃にでもまた来てくれれば、その時は本当に僕は救済してもらえるかもしれない。

ガタゴトン！

しかし予想以上に凄まじい音が鳴ったことで、驚かされる。何が起こったのかと壁を注視すると、さらに驚かされてしまって、足元

もしれない、この肩ア！死ぬ死ぬ死ぬ死ぬどうにかして引っ張れ、
ていうかそうだと向こうにいる救済の奴助けてちょんまげ、引っ張っ
てくれちょんまげって何だよ、早く引っ張って引っ張って引っ張っ
て、ああ、もう目の前にまで仮面の人に来てしまった！ 逃がし
てしまうなら、血みどろに 短絡的な思考回路をしている人だ、
と僕は思った。逃がしてしまふなら血みどろ、って極端にも程があ
る。冷静になれよ。頭を冷やせよ。仮面を外せよ。

斧が僕の目の前で、刃を月明かりに反射させながら、振り上げら
れる。銀色に輝いている刃の部分が、僕の頭目掛けて、振り下ろさ
れる……。

しかし本当に刃が、僕の視界から1という数字のように縦になっ
て落ちてきた瞬間、僕の頭を貫くであろうその時に、僕の両足はす
ごい勢いで引っ張られて、一気に上半身が向こう側に抜け出た。

……ガキンツ！

刃が床に振り下ろされてしまった音が背後から聞こえる。あれが
ザシュ、という音だったら僕の頭は大出血サービスだったろうが、
僕は今牢獄の中にはいない。外にいるのだ。

見上げれば明るい満月。夜空にはラメのようにキラキラしている
星々と、暗い色をしてはいるが広大な雲たち。穏やかではあるが、
たしかに吹いている夜風。かすかに感じる生き物の気配。そして目
の前には、犬の耳を生やしている幼い少年。どこか野生児染みた、
服を着た犬みたいなの、しかしどうみても幼い少年である者が、目の
前で。

「危ないトコロだったね」

ちよつと馬鹿っぽい口調で、にんまりと笑った。その笑い方もな
んか馬鹿っぽい。

「立てますかあ」

などと言つので僕はうなずいて、そして「助けてくれてありがと
う」と言つと、デヘヘ、と汚らしく笑ってから、頼まれたんですよ
ー、と犬耳の少年は言った。誰に？と尋ねようと思つたが、背後の

壁が斧で壊されようとしている音、ガアン、ガアン、と聞こえてきたので、僕は慌てて飛び上がりそうになる。

「た、助けてもらってありがたいけど、いろいろ事情もわからないけど、遠くに逃げないと斧を持った監獄者が来てしまう」

と僕が言つと少年は「なるほど」と言つて、

「なら僕の背中に乗るとよろしいでしょお。巨大な犬に変身することもできますよ」

とへらへらと馬鹿な感じで舌を出したと思つたら、もう少年は巨大かつ毛むくじゃらな大型犬に姿形を変えていた。茶色。何て奴だと驚きながらも僕は彼の背に乗つて、遠くに逃げてくれ、と頼み込んだ。「りようかいー」と軽い調子で大型犬は喋る。

僕は大型犬が走り出して遠くに逃げるその寸前に、周囲の様子を窺つた。この建物の様子は覚えておいた方が良くかもしれないと思つたのだ。

すると不思議な光景が目につく。緑の、蛍光色という奴だろう。月明かりを吸収してとても光り輝いているそれが、いたるところに散乱していた。門らしきレンガとか、こげ茶の土とか、背後の僕が今までいた牢獄の壁とかに。緑色の蛍光色のそのこびりつき方は、夢でみた僕の左手が作った血貯まりに少し似ていたから、何か怪物の血とかかな、と思つて苦笑したくなる。スプレーか何か、落書きみたいな感じが血に見えるだけだろう、蛍光色の血なんて、まさに怪物が流すような血があるはずがない、と僕は思った。そしてそんなことを思っている時に、背後の方から、仮面の人のそれと思わしき絶叫が聞こえてきたのだけれど、僕はその絶叫が繰返し繰返し、「犯罪者め、嘘つきめ!」と言っているとわかった。何だか不愉快だった。僕が犯罪者?嘘つき?それともこの僕を救済してくれた少年のことを言っているのか?監獄者の癖に人を殺そうとしたあいつの方が、よっぽど犯罪者だ。きつとあの仮面の人は僕を逃がしてしまつたから気が狂つてしまつて、適当なことを言っているのだろう。

「犯罪者め、嘘つきめ!」

僕は犬になった少年の背に乗って、夜の風をぶわーっと全身に浴びながら、満月の下を駆けた。

爽やかな風だ。牢獄の中では味わうことの決してできないことだ。僕は自由になったんだ。孤独をやめることになったんだ。胸がざわつくが、きつとこれは興奮しているに違いない。

甲が僕を待っている。乙たる僕を、待っている。

両眼は僕が生まれた時から、僕の顔の上の方に二つ、ずっと変わらずについてきて僕に景色を見せてくれてきた。そういう役割を持っている存在が、僕の眼球二つだ。それが今映してくれている景色、風景というものに僕は違和を感じざるを得ない。

犬少年に跨って眺める、人が住んでいる都市らしき空間は、今まで僕が知っている都市とはまるで違う風景を僕の眼球に映し出してくるのだ。

それに犬少年である彼に跨っている僕は、特に目立つ存在じゃないということも不自然だ。そこら中で犬に跨って都市を駆け抜けている人々が見受けられる。僕の知っている都市という奴では、みんなは自動車や自転車に跨って、道路を走っていたのに今はどうだ、道路というよりかは、砂利道というのだろうか、そんな感じで自動車が走りづらいであろう造りになっているではないか。

建ち並ぶ建造物だって、何と言うのだろうか、こういうのを独創的というのだろうか、アイディアーとか、オリジナルティーというのに溢れてる感じで、鉄くずだけで構成されている巨大な鉄塔とか、まるでサザエの貝殻のような外見をしているドームのような建物とか、時計が壁に何百種類と貼り付けられているビルだとか、赤白の縞々模様が奇抜な一軒家だとか、どうみても見た目はダンボールにしか見えないものだけで造られている建物とか、他にも様々あるが全てが一筋縄ではいかない外見をしている。

街中の街灯も何だか小洒落っていて、オレンジ色の暖かみある色彩が犬少年や僕、街中を駆け抜けている人や、歩いている人、それら全てを照射してくれている。治安は良さそうに街行く人々はどこか知性的に見えたり穏やかそうに見えたりするし、衛生面もよろしいのだからゴミなども見受けられない。

ここは一体どういう都市なのだろうか。変わっている建物のセン
スはこだわり過ぎてて好ましくもないが、嫌ではないし、行き交う
人々の様子がどこか良さそうに見えて友達になれそうだ。つまり住
みやすそうな場所なのだ。不良っぽいのもいなければ、変質者らし
き人も、常に怒っているような人もいない。なんて都市だ。人間社
会の中に、こんな場所があるなんて信じられない。

僕は知っている。人間社会はとて不完全で、失敗だらけで、不
条理なものだ。それは何時どんな時代でも変わらないことのはずだ
った。歴史という一側面の過去記録を覗くだけでも、そこにはたく
さんの不条理があつて、幼い頃の学校だとか近所とかにも、不条理
はあふれ返っていた。なぜなら人間は機械じゃない、生物だからで、
失敗をしてしまう動物だからだ。機械を作ることではできても、自分
自身を機械にすることはできないのが人間だったはずだ。

でもこの都市は何と言うか、そういう『失敗』が本当に少なそう
な、異様な雰囲気を放つ空間だ。何なのだろうこれは。僕は未来
にでも来たのか。様々な失敗が防がれるようになった素晴らしい社
会にタイムワープでもしたのか。わからない。僕の記憶はザー、ザ
ー、と壊れてしまっていて、思い出す、という行為が上手く出来な
い。ノイズが走って駄目だ。眼をつぶれば、金色の粒子が踊ってく
れるだけで、過去は映し出されない。

考えている内に、犬少年は立ち止まった。その急停止に驚きつつ
両眼を開くと、宙にオブジェみたいなのも独特のセンスをしてい
て、細かな彫刻が表面にされていて、赤、黄、青、の点灯ではなく
て一つの円に七色くらいの点灯があつて、それが事細かにチカ、チ
カ、と点滅していた。丁度交差点のような所で、四つくらいそのオ
ブジェが取り付けられている。

「綺麗なもんだね」と言うと、

「はあ。まあ、言われてみればそうかもしれませぬ」

などと、何を言っているんだらうこの人は、みたいなリアクショ
ンをされたので恥ずかしい。で、よく考えてみると、あれは信号

機なのかもしれないな、と察するのだった。察している内にそのオブリエダか信号機は点滅して、「しっかり捕まっていってくださいね」と僕に告げてから、犬少年は再び急加速をかけて砂利道を駆け抜ける。たしかに、しっかりと捕まっていけないと振り落とされてしまうような加速で、これは慣れが必要だな、とわずかに嘔吐感を催しながら考えた。

やがて都市から人気がなくなってきた。どうやら都市の中心からは外れた位置に向っているらしく、湖が左側にある砂利道を走るようになった。湖の周辺を弧を描く感じで回っていて、大きい湖だからこれ三十分くらいは、湖が左側にあつた。何湖？と尋ねてみると、犬少年はくすくすとおかしそうに笑ってから、ネリイです、と答えた。ネリイ湖。聞き覚えの無い湖だ。ネリイ湖のその周囲全てには深海色の街灯が設置されていて、都市と比べると何処か寂しくも見える。まあ、郊外だから落ち着くような雰囲気にしたいのだろう。先ほどから男女、カップルらしき手を繋いでいる人々が通りすぎる。そういう場所、らしい。

「ネリイ湖公園とも呼ばれるトコロですよ。えっとお、ここを抜けてもまだ目的地には着きませんから、少し休憩していきましようか」。あ、でも今の時間帯だと、いろいろとお邪魔かもしれないですねー。えへへー」

僕の位置からでは犬少年の顔は見えないが、犬の顔をしていながらも、きつと馬鹿みたいに歪んでる表情をしていることだろう。命の恩人(?)に馬鹿というのは失礼だけれど。

「後、どれくらいかかるのかな」

とその答えによって休憩するかどうか決めようと思って尋ねると、軽く二時間くらいすすかねー」

という眩暈がするような返事が返ってきた。

「きゅ、休憩していいこう」と慌てて言うと、

「じゃあカップルのふりでもしますかー。なんつってえ、どへー」

とか言うので、もう何だかこの犬少年、わけがわからない。

とりあえず気まずいながらも公園っぱい空間で一休みすることにした。ベンチはたくさんあったけど、カップルが全部使用しているし、木陰とかも危うくて入り込みづらいし、ブランコにも男女がいて、トイレにも男女が殺到している。もうわけがわからない。

「この、色ぼけどもがッ！」

僕は一人ごちて唯一空いていたベンチで眼を閉じて金の粒子を眺めようとした。

それをする前に少年に戻った犬耳くんが飲み物を二つ抱えてやってきて、いやー男一人で並ぶのはさすがに恥ずかしかったんですけどおいしいんで買ったよー、などと言った。十分くらい姿を消していたのは並んで飲み物を買っていたかららしい。人気のジュースという話のそれを二つ、片方を僕に渡してくれた。

「ストローが一つのジュースにつき二本なんですよ、これ、カップル専用なんですよねー、使っちゃいますかねー。あ、さすがにそれはないっすね。はい、調子に乗りました、ごめんください」

異様すぎるほどに馬鹿げた話し方をする犬少年であった。

僕を牢獄から救ってくれて三十分以上背中に乗せてくれて、これからは二時間も乗せてくれるらしく、しかもジュースまで買ってくれた最高な人だ。何だか知らないが、こんな少年に助けられてとてもラッキーだと思う。幸運だと思う。

でも馬鹿なのも間違いないかな、と思いながらジュースについている二本のストローをどっちも無理矢理口に含んでジュースを飲んでみた。そんなことをする僕も馬鹿かもな、と思いつつ隣の少年をチラッと何気なく見てみると、もうジュースを飲み終わって満足そうな顔をして馬鹿面だった。

何この人、と正直思った。

しかもゲップしたし。

「さあ、行きましようか」

まだ僕は全然飲み終わってない。

「遅いですねー。あ、僕が飲んで差し上げましようか。あ、お呼び

でないですよー。ぐほー」

「一々最後に変な声を発するのは何なのだろうか。」

「あー、遅いですよー。暇つぶしにマーキングでもしてこようかなー」

それってすなわち立ちションだろ。カップルが多いこんな場所でマーキングするなよ。

「あ、ウンコもしたくなってきた」
いろいろと問題だ。

「ああ、腹減ったなあ」
落ち着きが足りない。喋らないと気が済まないのだろうか。

「何か持ってません。上手いもの。あー、匂いがしないなあそーいう」

牢獄にいたんだから当たり前じゃないですか。

「すみませんでした、調子乗ってましたちょっと黙ります。だからそんな怖い顔しないでよ」

「けっこうびびり。」

「ぐひー」

また変な声をあげやがった。

うーん、この謎めいた都市に住んでいる人々はみんなこんな性格をしているのだろうか。だとしたらこの都市に住むのだとしたら、僕も最後に、ぐひー、とか、ぐほー、とか言わなければいけないのだろうか。だとしたらある意味住み辛い。犬少年という存在がいる時点でだいぶおかしいけれど。まるでファンタジーの世界だ。そーいえばこの少年は何と言う名前なのだろう。

「そーいえば、なんてお名前でしたっけ」

「僕は、サントリーという名前です。略してサトと呼んでくだされば結構です。ほひー」

「そーですか」

「あなたは何と言うお名前か、僕は知っていますかね」

何故だか知らんが犬少年はベンチから立ち上がると偉そーなポ-

ズを取ってくる。僕の名前を知っていることが何だというのか。つか僕の名前……僕自身、が思い出せない、んですけど。

「…………あれ」

人には名前があるのが普通ではないか。

思い出すことができない。

目を瞑ってみても記憶は何も思い出されませんが、まさか名前まで覚えていないのか。

「本当に記憶喪失みたいですね。でっへへへ。ずびー」

野蛮な人のように汚らしい笑い方をするが笑う所じゃない。失礼な犬少年だ。サトくんは馬鹿で失礼な犬少年ということだね。嫌な奴だな、と思う。まあ憎めない感じという奴だけれども。

とりあえず自分の名前を思い出せないというのは不気味だ。

だから僕はサトくんが僕の名前を教えてくださいながらそれに越したことは無いとを感じる。だからいろいろと助けてくれたサトくんにまた助けてもらうのは、何処か気恥ずかしいという感覚があるのだけれど、尋ねなければわからないままだ。

「そうみたいだ。あの、教えてもらっても良いかな。できれば……」
するとサトくんは偉そうなポーズをさらに偉そうに見せる、両腕を組んでフンと鼻息をもらすみたいなのだった。サトくんはみっともない奴らしい。人の名前を教えるくらいでこんなに偉そうな態度をするのは失礼だ。

「あなたの名前は、ポリフェノールDXガンバレルマーチ・スペインキンデリートマツハ・シューマツハ・イトウ・ホンジャルツク・アバハマダナドンクサイ・ドンクサイ・ベルサンマーチタイムDX・パンツ・ポリフェノールDXです」

ん、と僕は呆然とした。

そしてこっただけ長い名前をソラで言えるサトくんは、とても暗記力のある素晴らしい犬少年だな、と思つて偉そうなポーズをするのも仕方がないな、と納得した。

でもその名前は長すぎだよね、とツツコミを入れたのだった。

覚えらんねえよ……。

犬少年くんが行方不明。公園から出発する寸前、『ハーデス公園』と表札みたいなのが貼られている門の所まで出て来たというのに彼はちょっとマーキング忘れてました、とか言っぴゅんと風のように立ち去ってしまい、闇影夜に紛れた。そのせいで僕は公園に入りしていく男女の影と交錯するだけで、にっちもさっちも行かないという奴だろう、前後不明の都市の中では行き場は無くして落ち着かない。

生い茂る木の緑葉は黒い影となって風に揺れ、さわ、さわ、と騒がしくもなく、かといって静かという訳でもない按配でそのせいでさらに落ち着かない。公園というのは何故、ここの木というものがいっばいあるものなのだろう。僕にとってはこのさわ、さわとうるさい木たちは、不安を煽る嫌らしい奴としか映らない。かといって視線を下にさげたら、『ハーデス公園』という表札が光を放っているのが眼にまぶしいし、通り過ぎる男女に不審がられているような視線を送られている気がして、ああやはり落ち着かない。

僕はその場突っ立って犬少年を待つ、ということに耐え切れなくなりネリイ湖とかいうのがある方角へと歩き出してしまふ。どうにも堪えられない。犬少年は鼻が良いのだから、場所を離れてもきつと僕を見つけてくれるだろう。何せ、犬なのだから。

適当に見当をつけて夜道を進み、途中犬人間の走っているのに轢かれそうになったが、犬側の方から避けてくれた。乗っている人の睨みつけてくる視線が痛かったので、それからは左右に気を取りながら砂利道を横断し、ちょうど草が植えられた坂になっている所があるので、その上り坂を上がってみると、ネリイ湖とその輪郭を取り巻く青の街灯たちの、その一部分に出ることができた。本当に広い湖らしくて、右を見ても左を見ても延々と青の街灯が等間隔に

設置されているのが幻想的でさえある。坂を下りてコンクリに立ち、湖のその深淵を覗き込んでみると本当に暗くて、藍色で、波しぶきだけが少し白いから見える。たまに水が撥ねてきて、肌や服がわずかに濡れるのが嫌だなと思って、一步下がり、何気なく周囲を見回してみると、左側の方には都市の輝き、朱色のそれがあるのがわかるし、右側はしかし対照的に暗くて、青の街灯がより寂しげだ。

その右側を覗き込むようにして眺めてしまう。何て暗いのだろう。引きずり込まれてしまいそうになる。左側の都市は、あれはあれで楽しげで暖かそうだろうけれど、青の街灯だけが頼りの今にも消えてしまいそうな灯りしかない闇や影が、妙に深く、もしかすると目の前にある湖の黒い深淵よりも深い黒を持っているように見える。僕は息を呑んで、しばらくその風景を眺めていたのだけれど、ふと鼻に匂いがついた。花、をイメージさせる香りだと気が付いて、それが左側の深い暗闇の側、そっちの方角から漂っている、ような気が、した。でも確かに左側に鼻をひくつかせてみても、匂いは薄くて、ほとんど感知できないが、右に顔を向けて匂いを嗅いでみれば、ああ花の香りに間違いないとわかる。花に関しては詳しくないから、何の花だとかは全くわからないのが寂しいところだ。僕は引きずり込まれるようにして、匂いのする側へと歩を進めてみる。何だか、気になるのだ。で、二、三分湖の縁を右の方角に向って歩き続けたみたのだけれど、歩く内に寒くなってきてしまっ、そういえば長袖のシャツを一枚着ているだけなのだった、と薄着で湖のところまで降りてきたことを後悔する。ここは少し寒い。

そんなことを思っていた辺りで、地面のコンクリに視線を落とっていた僕は花を見つけた。香りを放っていたその大元かはわからなかったが、歩き始める以前よりも匂いは、たしかに強い。膝を落としてみて、僕は鼻で匂いを嗅ぐ。ああたしかにこの花が匂いの根源だ。たった一輪で、こんなコンクリのひびの隙間から生えてきていて、湖のすぐ縁で花は蕾で開いてはいない。だがたしかにここで力強く咲いているように見える。二、三分前までずっと左側にいた僕

のところにもまで香りが届くのだから、コンクリのひびの隙間を縫って地表に出ることなんて、もしかしたらこの花には容易なことなのかもしれない。でも、こんな他には仲間もない湖の隣で咲いていても、どうしようもないのもまた事実だろう。何だか無性に、この花を見ていると根っこからむしり取って、草原の所に埋め変えてあげたい気分にもなるが、根っこを引つ張るつもりで中途からちぎってしまつては、殺してしまうことになる。花を開く前に、匂いを放つこともなくなって枯れてしまうだろう。茶色くなって萎れてしまふ、だろう。

「それは、そのままにしておくんだ」

声が背後から聞こえたと思つたら羽交い絞めにされた。何…？と予想だにもしない背後からの行為に驚かされながらも声の主は男性だったとはわかる。羽交い絞めにされた部分には凄まじい圧力がかけられて、身動きを取らせてもらえないな、と冷静に考えている間にはすでに坂の辺りに放り投げられてしまったので、僕は腰辺りを強打してしまい痛みには堪える。うごっ、という感じ。

「摘み取るうとしただろ」

男は暗闇の中でそのシルエットが巨大だということがすぐくわかる。筋骨隆々の大男とお見受けするが何処か口調の荒いところから、怒りの感情を発露しているのだと理解できるが、花を摘み取る気持ちなんて、まあ、場所を移してやるうという気持ちはあつたが、悪いようにする気なんてなかつた。それが急に羽交い絞めにして坂のちよつと固いところに放り投げるなんて、どうかしてる、ひどいにもほどがある、不躰がすぎる。

「っっ……」

しかし相手が大男だというのは困る。周りに一切手助けをしてくれそうな人の見当たらないことから、自分の憤りを相手にぶつけることがどうにも恐ろしいというか、怒つてもいるみたいだし下手したらぶん殴られて骨折、殺される可能性だつてあるのではないかと思える。ああ、びびつてしまつていふというのだろうが、仕方が無

いじゃないか、ていうか僕は何も悪いことはしていないのだけれど。でも一言くらいは言ってやらないと気が済まない。

「ひどいですね」

僕が言ったのはこれだけだ。挨拶程度の言葉じゃん。それなのに僕が立ち上がる前に大男は迫り来て、ああっ、と怒鳴るような調子のままに一発僕を殴打した。考えらんねえ、と思いつながら殴られてしまつて肌がひりひりするの事実。僕は起き上がろうとしていた体を再び坂に転がされてしまつて、みっともない醜態を晒されたということだ。

惨めな気持ちになりつつ、青白い街灯のぼんやりとしていくのがわかる…あんなにはつきりとしていた青が、にじんで分裂している……暗い……というよりか寒い……。

羽毛に身体を包まれていると思ったのと、ああ、何だか夢を見ていたけど何だったっけ、ということも思った時に、丁度ぼやけていた視界が開けてきて、意識の覚醒をわかる。殴られた所が腫れているので表情が張り詰めているのが自分でもわかる。ここはどこだ。

燈灯が一つ天井にぶら下がっていて、ギイ、ギイ、と揺れて錆によつて発生している音を鳴らしている。毛布を被せてもらっていて、寒そうだと思われて着せてもらったのだろうか、青色の上着を身につけてる。

ギイ……ギイ……。

しばらく燈灯を見上げていた。静かだ。そして揺れている、と思つた。別に錯覚とかふらついているとかということではなく、地面がゆさゆさと揺れているのがわかる。不思議に思いながら、この感覚は水の上か、と察して、そうだ気絶させられたのだ……と大男のシルエツトを思い出す。

何がどうなっているのだろう、水の上……湖の上だろうか、と見当がつくが、実際にそうかどうかはわからない。だが、ふと緑の蛍光を視界に捉える。円形の枠をしている窓から入り込んだ輝きだった。それがこの建物中の鉄の色を緑に染め上げて、どこか不気味だ。僕はベッドより降りてから、窓に近づき外を眺める。緑がまぶしい。ああそしてやはり、水の上、だ。

「ネリイ湖……緑色に発光してる……」

いや、そうではないかもしれない。ネリイ湖の水面が光っているのではなくて、その水の奥だとか底にあるものが力強い緑色の発光をしている、という風にも視える。もつとよく見たい。ここは水の上ということとは、船、とかだろうか。船内だとしたら甲板に上げられるな。

そう思いながら回りを見渡してみれば白色づけをされている錆

気味の梯子が目につく。この船内は古めなのだろうか、何かと錆が見受けられる気がする。

早くしないと緑の発光は終わってしまうかもしれないと思いながら足をかける。そして上る途中で、不思議なほどに柔らかな感触とぶつかった。

「ん」

「あ」

聞こえてきた戸惑いの声は明らかに女性の声だった。

女性の尻と顔からぶつかったらしかつた。しばらく奇妙な沈黙が続いた後、向こうから動き出して彼女は甲板に戻っていった。僕は呆然としていたがハツと気を取り戻して、だいぶ気まずいのでベッドに戻っちゃおうかなと思ったが、一度梯子に手をかけていた手前、それもおかしいので上る。

甲板に出ると夜風と緑色の発光を知覚する。

そして二つの人影を見て、あと、ここがやはり船だったのだという確認ができた。

僕は緑色の発光を一瞥だけしてから、さっきの気まずい出来事を謝るなりした方がいいと察して先ほどの彼女の姿、近い位置にいる人影に、声をかけようと思ったがどう言えいいのかわからなくて戸惑う。それでどうするか戸惑っている内に、無言の時間というのは過ぎていった。

緑の蛍光のせいでお互いの姿がハッキリと映されるというのも不都合だ。真つ暗なら気まずさも紛れたかもしれないが、僕の目から見て彼女の姿は映っているし、彼女から見ても映っているだろう。まあ、もう何言っているかわからないので、気まずさを含んだ会釈だけを試してみる。すると向こうから声を掛けてきた。もうさっきのことなどすっかり忘れた、という風な雰囲気だ。

「あの……痛かったですよね……」

僕の脳内は疑問に包まれる。痛かった？痛いってのは……ああ、そうか僕が殴られたことをこの人は言ってるんだ。となるとこの女性

はあの大男の親族、ということになるのだろうか。それとも仲間とか仕事仲間、まあ話してみないとわからないことだけだ。

「正直、驚きました」

僕はひそひそ声で、ちょい遠目の距離から緑の発光を眺めている大男に聞こえない程度の大きさで言葉を呟いたのは、先ほどの二の轍を踏まないようにするためだった。が、聞こえたのかもしれなかった。大男が、こちらに顔を向けたと思うと、ずん、ずん、という音が聞こえそうな雰囲気垂れ流して近づいてきて、僕の襟を掴みやがった。

「殴られてもまだ生意気だな、お前」

大男はまたも拳を振りかぶりやがった。何だこいつ狂人か。

「やめて。この人、多分何もわかってなかった」

お、女性が叫んだ途端に振われそうだった拳が止まった。何これこの人に感謝。

やっぱり仲間とかなのだろう、大男は彼女の言葉に従って僕の襟を離してくれた。僕は自由になったので襟を戻してから、とりあえずいろいろと状況を理解したいと思うのだけれど、どこからどう訪ねていいものか。でもやはり気になるのは、今も光り続けているあの緑の蛍光。

大男に対しては顔も見たくないくらいに怒りがわなないているので、顔を彼からは背けて、その女性に尋ねることにする。あれはなんなんですか。

「お前、あれを、わからないってのか」

大男が隣から驚いた調子で口を出してきたが、とりあえず顔を見たくないのにシカトしたのだが、隣からでも彼がシカトされたことできり立ちそうになっていることがわかる。ああ、コワッ。女性の方はまたブチギレそうな大男を軽く睨みつけてから、しかし緑の蛍光について知らない僕にたいしては彼女も驚きを隠せないらしい。

「久しぶりに見ました……。あなた、咎を犯した人」

「え」

「わかってないんですね。右腕の袖をまくってみてください」

言われた通りに捲くってみた。着せてもらってる上着と長袖の袖を捲くってみる。捲くる途中、この服貸してくださいとあってありがとうございます、などと礼を述べる余裕さえあったというのに捲くってから僕は生唾をゴクリと、呑むことになった。人面瘤……？緑色に染められている、しかも発光している、あの光と同じ色の人面瘤が、右腕の中ほど辺りに、たしかにある。何で僕は今までこんなに大きな人面瘤を放置していた……。

「咎を犯した人には、この世界に落ちた時にその瘤が付くと言われていきます。本当は無限牢獄に囚われているはずなのに、どうしてかあなたは、世界を歩いてる……。」

咎：犯罪者、ってことだろうか。そう言えば仮面の人も言っていた。犯罪者なら牢獄にいたことも納得がいく。でも、世界を歩いているのがおかしいって？僕は乙だから甲を歩くのは別に、そこまでおかしいことではないのだが。まあそんなことは今は、どうでもいい。

僕は慌てて右腕の袖を戻した。で、今のは無かったことにしたいなと思うけれど、全身から発汗が止まらないし、つうか無かったことには出来ないレベルの光景だった。何、今の、っていう衝撃。

単純にまず心配したのは、病気ということ。つまり自分の身体が人面瘤が原因でどうにかなくなってしまふのではないか、死ぬのではないか、という本能的な危機感だ。何せ湖を光らせている怪しげな光と同じ発光をしている人面瘤なのだから、かなり得体が知れない。

僕はとりあえず湖の発光の原因を教えてくださいたく思い、彼女に尋ねてみる。

「僕には記憶がないんです。そしてあなたの言うとおり咎を犯した人、なのかもしれない。でもこれは信じてもらうしかないんですけど、僕には本当に記憶がないから、湖の中で発光してる緑だとか、いまついていた僕の瘤のことも、何にもわからない。教えてくださいたいんです、差支えなければ」

「記憶がないんですか……」

「はい」

「で、今まで牢獄に囚われていたということは、この世界のことも何もわかっていない……？」

「そうです。で、犬少年に助けられて」

「犬少年。ああ、ということはあなたは……」

「え」

「いえ。犬少年はある人に遣われている身です。この都市で走り回る犬人間の類は全て、その人に遣われているんです。その犬少年に助けられたということは、あなたはその人の所に早く行った方が、この世界のことを様々、教えてもらえるとと思います。私では、上手に説明できるかどうか……」

「じゃあ、せめて湖のことだけでも、教えてもらえませんか。あるいは、この瘤のこと、もしくは咎について」

「私に説明できるのは湖のことくらいです。このネリイ湖だけでなく、この世界の全ての湖はこのように、緑とは限りませんが、蛍光する」

「蛍光する……」

「そして生まれてくるんです。この世界の象徴、繁栄の三日月に影響されて他の世界から引きずり出されてくる……」

「他の世界……？ 繁栄の三日月……？ 影響って……」

「ほら、見えてきました。浮かび上がってきました」

「何だ、あれ……」

「私にもまだわかりませんが……めずらしい……かも……！」

「レアってことですか？」

「そうかもしれない。あれは……すごいもの、その気配がありますね！」

先ほどまで、緑の蛍光色に染まっていながらもネリイ湖の水面は静まり返っていて、例えば”音”、なんて一切鳴らずにただ発光だけが凄まじかったのであるが、これは何かしらの反響効果なのだろうか、壁を幾重にも反射して……例えば牢獄で音楽を流して聞いている時に感じた三百六十度からの音の洪水……。そうだ僕はこういうサウンドな音の回転で、音には何かしらがあると思っただけだ、そう牢獄の中にいる時に……ああ、もう忘れたな、っていうかこの音は頭皮や身体に染み込む感覚……びりびりと電流のように全身の表皮を震わせて、鼓膜を突き抜けるような錯覚を味あわせる……

…たしかにすごいことが起きる前兆か……………。

僕がそう思った時に鼓膜を突き破るような音の感覚は、キィィィイ
キィィィィイというすさまじい耳鳴りに転じて、状況がよりすこ
くなるのがわかる。思わず両手で耳を塞ぐ。大男と女性もそうし
ていた。そしてキィィィィィィィィィィと共に水面が揺れ、崖下で波が
しぶきを上げるかのような勢で湖が荒れ始めた。波しぶきは白色を
緑の蛍光に紛れながらも主張し、僕の視覚と聴覚が捉える情報は凄
まじい何かが起きることを脳髄に予感させる。

そして荒れ狂う湖の中から、水をその身に纏いつつ何かが上がっ
てきた。水底から…………… あれは、僕の目からは、なんと云えばいいの
だろう…。

「あれ……………」

湖の中からそれが浮かび上がってくる。

考えられないことだ。

「人形、か」

「いえ、実際に人……………」

僕はどちらの回答も違うとわかる。そして僕はあれを知っている。
金の粒子がざらざらと脳味噌の中を洗ってくれるような錯覚が起
きた。いや、錯覚だったろうか。今僕の脳味噌から記憶が一つ、呼
び起こされたようだ。これは、どういうこと、だ。世界…………… そうだ
この二人は、アレ、を知らない。皆が知っているはずのアレを知ら
ないということが、僕のノイズがかつた記憶を呼び起こしてくれる
かもしれない。鍵となつて。

人体強化のためのパウードスーツ、B a b e l・あれは僕らにと
つて大切な道具であり希望を託す対象でもあつたはず。希望と絶望
の狭間で揺れ動く世界に希望を拡散させるために人に力を与えてく
れる発明、また戦乱をより激しくすることにも一役を買つた……………で、
僕は今これをこうやって知識を思い出してみた、記憶を復活させる
ことができたけど、何も嬉しくはないな、感情は何も湧き立たない
なつて感じだな。ただ眼に見えたり、耳で聴こえたりこのネリィ

湖の光景は、圧巻だなと感じれるけれど。まあ、思い出した記憶はたった一つだから、そう興奮もしないのかもしれない。全ての記憶を思い出した時、僕は感動するだろうか！。

「ありや、鉄で出来た人形か何かか？」

「鎧……とか、そういうものにも見える……黒？ 緑の発光に混じって色はよく判断がつかないけど……」

「黒じゃないか。そう見える」

「そうかも」

「どうにしろ始めて見るものだ。船を近づけて回収するぞ。あれは高く売れるかもしれないな」

「ええ、そうね」

耳鳴りは止んだ。緑の発光はまだ続いているが、波しぶきが上がるのも終わって再び静まり返ったネリイ湖。緑の蛍光が薄くなり多少暗くなった船上にて、二つの大小、身長と横幅に差のある影がは忙しく甲板上で作業を開始し、船を緑色の蛍光のあるところに近づけていく。近づけていく途中で、作業をしながら吠えたくる大男ありえねえだろ、って呟きなくなるくらいに大きな声を張り上げているが、よく聞いてみると、こちらに話しかけているみたいだった。野生の獣か何かなのだろうか、興奮を包み隠そうともしない大声は、野蛮人成分百%。

「今日は実にラッキーだぞ、おおおい！ ネリイ湖のここら一帯は俺たち兄妹が任されている縄張り……生意気なお前も、それから卑劣な横取りが得意な糞野郎どもも、この俺たちの縄張りのド真ん中の位置で蛍光が起きれば、邪魔をすることなんざ出来るはずがねえんだ！ あれを老いばれに献上して、報酬は俺たちがたらふくいただけることになるんだぜ！ ざまあみやがれよ！ どいつもこいつも、悔しがることになる！」

……うるさい。

Babelを誰かに売り払うつもりらしいが、はたしてあれはそんなに売れるものなのだろうか。この社会は、さっきの都市の様子

から窺うに文明レベルがかなり高いように思える。僕が理解していた都市というものとはかけ離れた都市の姿を、さつき見せられた。そういふ文明の中でB a b e lが価値あるものとして扱われるかどうかは疑問だ。ていいうか何で湖の中からB a b e lが浮かび上がってくるのか、ちつとも理由がわからないな。

「いやっほおおおおう！ おうおうおうおう、妹よ、あの向こう側で止まつてる船が見えるか！ あいつらマヌケ丸出しで呆然としてやがるぜ！ 緑の蛍光に誘われてやってきたんだろうが、ああ、残念だろうなあ、悔しいだろうなあまったくよお阿呆だなあ！ ああ、まじで良い感じだ。良い予感がするぜ、俺は興奮してきた、俺はめっちゃ興奮してきたぜええええ！」

うるさい狂人は自分が興奮しているということを自覚できる程度の脳味噌はあるんだな、と思う。発狂寸前とも見えるその大男、兄妹の兄の方、その発狂ぶりを一瞥することもなく作業を黙々とこなしている妹さんの方は、実に冷静な調子でそれに打ち込んでいる。まあ、あんなノリについていくのは面倒だろう。作業で気を紛らわすのが正解に違いなし。

「すみませんね、うるさくて」

途中僕に謝ってくる。妹さんの方は常識人だ。よかったよかった。二人して狂人では僕も、何だか同じ船の上にいることが不安になるって話。

「あの、本当に兄が申し訳ないことをしました。本当に、すみませんでした」

彼女が作業の手を一旦止めてから、謝ってきた。

いえ、と僕は言う。それ以外に言葉が思いつかない。彼女は頭を上げない。そんな彼女を兄が背後から叱咤する。なにやってんだ妹おう、などと絶叫しながら激しく作業をこなしている。大丈夫だろうか、頭脳。

やがて船は緑の蛍光のその中心地、つまりB a b e lの宙に浮かんでいる所に接近し、そして停止した。兄は歡喜の叫びを繰返し、

妹は落ち着いた様子。二人は水面に網を放り投げて、Babelをそれに引っ掛けると、甲板に引き上げて、回収した。

船上に上がってきたそれを僕も眺める。眺めれば眺めるほど、僕の脳内に金色の粒子がざわざわと蠢いて、記憶を提供してくる。Babelの第四試作型、企画時の名称はOmnipotent. どのような状況、環境においても戦果を上げれるよう最新鋭の技術をこぞって投入するというコンセプトの元製作された、最後のプロトタイプBabel。しかし、製作の途中にてBabel計画の縮小が決定、それによって万能の神として崇められるはずだった第四試作型は、Master of none、略してMonという蔑称を与えられた。黒と青の装甲を持つパワードスーツ。一度人間がそれを装着すれば、人としての実力を遥かに超えることができ、力を得る。そのための道具。だがその不幸たる失敗作、第四試作型のBabel、Mon.

無くした記憶の隣辺として、見た途端にこのBabelに関する情報が湧いてきた。この都市に住んでる人間はBabelのことを知らないらしい。だが僕はこれを知っている。

何故僕が知っていて、彼ら彼女らはBabelを知らないのか。おそらく世界が違うから、ということ、だろう。犬が自動車の代わりに走り、オブジェのような信号機が立ち並び、湖から道具が浮かび上がってきた奇妙で、滑稽だが、独創的でもある世界。こんなのは僕の住んでた所とはどう考えても別世界だ。

「変な話だ」

と僕は呟いた。

大男がはしゃいでいる。変な踊りを踊っている。笑い声がやかましい。

「もしかしたら私たちの邪魔をする者かもしれないという可能性が捨てられなかったので、あなたを船に乗せていたんです。眼に付くところに置いておけば安心かと思って…それに気絶していましたし…あの、本当にすみませんでした。すぐに、陸に戻りますので…

…」

妹の方は本当に礼儀正しいと思う。正しすぎるくらいだ。まあ、この兄妹の場合はこれでバランスを取っているということなのかもしれない。

彼女はにこっと微笑んでみせる。作り笑いだと思えるが、良い笑顔だな、と思った。

あの兄妹はテスタという名を持つそうだ。テスタ兄妹。

僕はテスタ兄妹たちの主に妹だけと会話をして、別れの挨拶をして、船から降ろしてもらった。

あの香りの強い花はテスタ兄妹の湖内での縄張りを示すために置かれている一輪なのだそうだ。だから僕はテスタ兄の鬻ぎを買ってしまったらしい。にしても花なんていう脆いものを縄張りに利用するなんてどうかしてる。ただ僕は妹さんに恨みは無いので、そのことは喉に押し込めたまま B a b e l とネリイ湖に別れを告げて、坂を上っていった。陽がもうすぐ登りそうな気配、夜が少しだけ藍色を強めてきている。僕はどれくらい気絶していただろう、犬少年は……。

高くなつた坂の天辺で、僕はそこから一望できる三百六十度を見渡すことで、犬少年がいないかなと期待する。でも彼は見当たらない。その代わりに白髪：真っ白な髪の毛をした男性の姿がまだ薄暗い藍色の中で、見えた。それなりにがっちりしているが、テスタ兄とは違ってどこか紳士的とも言うのだろうか、雰囲気からして話しがいろいろ通じてくれそうな礼節のある方なのではないか、と窺えた。見ただけでそう思わせるのだ、話してみればもっとその人から礼節を感じるであろう。かなりの紳士であろう。

その紳士は向こう側から歩いてくる。坂の上をずっと暗い向こう側から歩いてきたのだろうか。丁度良い、この人にものを訊ねれば親切に対応してくれるだろうと思ったので、犬少年を見たかどうかを聞くことを試みる。見かけませんでしたか、人を乗せていない犬の少年を、と。

そう白髪の彼の雰囲気は実に紳士的だ。服装もどこか落ち着いた風なチエックのシャツを着ているし、近づいてきて見えた彼の瞳の色は茶色で、何だか渋い。そんな彼なのだ、僕の質問に快く対応し

てくれるに違いない、犬少年を見ていないとしても、人を探すなら
こういう場所が良いですよとか機転を利かして親切にも良い情報を
教えてくれたりするに違いない。…と、予想していた。

が、彼は僕の訊ねをシカトして、すっ、と軽やかに通り過ぎてい
きやがった。

な、なにに。

全然紳士違うじゃん。全然真摯な対応してくれないじゃん。

驚きつつ悔しがりつつ、僕は通り過ぎていった石像のようにガツ
チリした背中にもう一度声をかけた。だがやはり彼はぼつぽつと坂
の天辺を歩いて進んでいき、何も僕に返事をしないまま背中を小さ
くしていくのだった。僕は少しずつ明るくなっていく夜の中で自身
が否定されたような感覚に襲われて、朝日が昇らなければいいのに
と何故か思った。不親切な対応をされると嫌な気持ちになる。こう
いうことがわからなかったら、社会は黒ずんで死ばかりが横行する
ようになるんだ、失敗ばかりが横行するようになるんだ、それが連
鎖して社会は最悪に住み心地が悪くなるんだ、だから僕達は親切を
心がけなければいけないのが本当なんだきつとそうなんだ、なのに
白髪の彼は普通にシカトした。鹿十した。今度あの男を見かけたら、
拳を振るってやろう。いや、返り討ちに遭うのは嫌だけどね。ああ
驚いたわー、悔しかったわー。

テスト妹の笑顔でも思い出して気分を良くしてみよう。あ、もう
どんな顔だったか忘れかけてる。必死に思い出そう。あれはいい笑
顔だったから。そうだ昇り上がる朝日のようにね！

僕は馬鹿みたいな思考をしつつ、白髪の彼とは逆の方向に坂上を
歩いていった。高い所を歩いていけば犬少年も僕のことを見つけや
すいだろうと思ったからだ。まあ、犬少年がまだ僕を探しているか
どうかはわからないのだけど……だって、気絶して、起きて、もう
すぐ朝日が昇ろうとしてるんだもん……しかし犬少年くんはわざ
わざ牢獄から僕を引っ張り出してくれたんだから……きつとまだ探
してるよな……案外、逃げちゃった方が僕にとって都合が良かった

りして。

「わからないことだらけだもんな」

一人ごちた時に、丁度日の出に頬を照らされた。丸くて、情熱的に赤い昇り上がる太陽は、僕の知っている世界と同じ円形をしていて、万物に色彩を与える光を提供する。僕も色彩を与えられているだろう。

見下ろせるネリイ湖も、黒かったのが、明るめの藍色という色彩を光によって与えられていた。テスト兄妹と僕が乗っていた錆の多い小船がここからでも見える。小船の上でテスト兄妹は *B a b e l* を包装などして、買ってくるところに運ぶための準備をしているらしく、相変わらず忙しく動き回っている。野太いテスト兄の声、離れた位置になったここにもよく聞こえてうるさい。花の香りも届かない位置にも来たのに聞こえるのだ、テスト妹はよく耳が潰れないものだと関心したくなるね。

遠くに見えるテスト妹の顔がわずかに見えて、彼女の顔を僕は思い出した。

朝日に彼女の笑顔が重なって、僕はゾツとした。何故だかわからないけど、ゾツとした。朝日を眺めるのはしばらくよそよそと思うされる程、何か自分自身の個性だか何だかが、顔を思い出したことと朝日が重なることを否定して。で、僕はまた歩き出して、それから長いこと歩いた気がするけど、時間のことは気にしなかった。どれだけ長いこと歩いたのかは、わからない。でも三十分は間違いなく歩いたな、と思う。ずっとネリイ湖が左側にあつた。朝日が昇り、暖かい日光。途中すれ違う人々は都市の中心地にいたころよりもみずばらしい姿である人が多くて、やっぱり、こういう所もあるんだなと僕は納得するのだった。浮浪者、貧乏そうな人、不機嫌そうな人……。

「ああ………」

集団暴行が目についた。ネリイ湖側とは反対側の、つまり右側。僕から見下ろせる位置の前方にて明らかに多人数で一人をぼこぼこ

にしている光景が見えた。何故あんなことをしているのか、理由は分からないが見てて気持ちの良いものでないことは間違いない。Babelがあればな、と僕は閃いた。でも直後、聞こえた。金の粒子が僕を諭すかのような声が聞こえた。

『お前が発明したのではない』

その声を聞いた途端に気持ちが暗くなった。

そしてそういえばさっきの不親切な、がたいの良い男もあの集団暴行を見ないで通りすぎたのだろうな、と想像してみた。想像してみたら、僕は阿呆らしくなった。あんなに肉体の頑丈そうな奴が手助けをしないのに、牢獄に閉じられていた僕があなほこぼこにされている人を助けられる訳がない。僕の役割じゃない。言い訳かな？僕は足を止めなかった。集団暴行の側を眺めないようにした。途中、『助けて』と聞こえたような気がした。それが幻聴なのか実際にその人が言った言葉なのかは、知らない。

僕は坂の上を、歩き続けた。

「結局、何処に行っただって、変わらないものは変わらない。そういうことかな」

何処に行っただって、と僕は思っている。そうだ、記憶はなくとも都市というものがどういうものであるかとか、人間がどういうものであるかとか、言語のことだとか、音楽、金色の粒子、そういうことを僕はわかっている。個人的な記憶という奴は思い出せないけど、変わらないものは変わらない。そうだ僕のいた世界でも集団暴行は溢れていたし、ああそうだ、僕らの世界はここよりもひどい不完全ぶりだった。人は争って、争って、争っていたはずだ。

馬鹿丸出しで。否定をして。信じることをせず。疑い深く。ただ保身だけをせざるを得ないと決めた人たちの、いかに多かったことか。僕はそれを知っている。覚えている。薄汚いんだ。

…そうだ、確かBabel。僕は……。

立ち止まった。脳髓で粒子たちが忙しく動き始めた。ぐるぐるぐるぐると小魚の大群が水の中で泳ぎまくっているようなイメージ。記憶が再生されようとしている。復活する。映し出されるのは白衣を纏った人、研究者、あるいは黒いスーツ、そうだBabelを…。

「ようやく見つけましたあああああッッッ！ ずばああああああああん！」
「わっ」

背後からの衝撃。突き飛ばされて身体の姿勢を崩されて、よたよたしてたら、団子虫みたいに坂を転げ落ちる醜態を晒すことになっていてててっ、という感じで突如すぎる展開に混乱したけれども、転がるのがようやく終わって、坂下から坂上を見上げると、息をせーはー、と肩を激しく上下させている犬少年の、犬耳のびくびくし

ている姿、尻尾がぶんぶんしている姿、が僕を睨むような目付きで見下ろしていた。…犬少年、やはり探し続けていたのか。少し驚く。彼は坂下にごろごろ転がった僕を引っ張り上げて後に、こう言った。

「いやー、ほんと見つかった良かった。急がないとマジやばいで、さっさと背中に乗ってくれませんか？ 全速力で飛ばしますけど、吐きそうになったら道に吐いてくだされば結構ですから」

僕は青ざめた。吐くこと前提のスピードを出すのかよ、と訊ねたかったが、犬少年の目付きがかなり真剣なので反論ができない。

彼の皮膚から茶色の毛が生えて、二足で立っていた身体が骨格を変えることで四脚に転じ、人間の顔をしていた彼は犬そのものとなる。茶色の大型犬、だ。大人一人を背に乗せて走ることが出来るほどの、体長一・五メートルは超えていそうなの。

「早く乗ってくださいよ。糞野郎」

などと悪口まで言うてくるのでムツとしたが、よっぽど彼は怒っている様子に見えた。あるいは急いでいる。ここは大人しく従うしかなさそうだった。吐くのは嫌だなあ……。と思うが愚図ってばかりの餓鬼でもいられないので、僕は彼の背に跨った。

そして跨った瞬間にあり得ないほどの縦揺れと横揺れ、僕はすぐに気持ち悪くなって、おええ、と出てしまったが余計に速くなった。容赦ないねえ、と怒りたい所だが怒る前に僕は吐いてしまった。逆流と嗚咽。こうして嗚咽無限地獄は始まった。その記念すべき第一回目の嗚咽だ、なんてその時僕は考えることができなかった。余裕がなかった。全ての思考を停止させられるほどの圧倒的不快感を与えてくる乗り心地。僕は犬少年を呪うことも、怒ることも、恨むこともできなかつた。

「うわああああああん」

何故だか、犬少年は走っている間ずっと絶叫していた。走りながら絶叫しているのにスピードがより加速していくという不思議。で、僕はずっと吐き続けて、すっかり屍のごとく疲弊してしまった僕が

落ち着くのはそこから三十分後のことになる。

たしかに到着は速かった。二時間で着くはずとか言ってた場所に、三十分で着いたのだから。

僕は犬少年から降りて真っ先に、ふらふらと地面に倒れてからゲロした。

涙がぼろぼろで、身体がくたくたで、服も汚れて、気分が最悪だ。でも僕は知らなかったんだ。この時、犬少年の方が気分は最悪だったに、違いなかったり。

彼ら犬人間は消耗品でしかないということを、世界にやってきたばかりの僕はまるで知らなかったから、彼がどうして「うわああああんん」などと圧倒的な走りを見せたのか理解できなかった。彼だけでなく犬人間は全てそうなのだった。すぐに代わりが利いてしまうから、すぐに捨てられてしまう。僕は知らなかった。可哀想な犬人間の实状なんて、甲を歩き出したばかりの乙にはわかるはずがない。僕は所詮、牢獄に閉じ込められていた犯罪者、そういうことだから。辿り着いたのは館。ド派手で、うわ、芸術ですね、という感想を百人中八十人くらいは言いそうな、残りの二十人は啞然として口を閉じられなくなるような。そんな館が寝転がったまま起き上がれない僕の前方で、聳え立っている。と表現したくなるほど、巨大。館、というよりかは、四角い箱、という見た目に近かったのだけれど、犬少年が「館に到着しました」などと言ったから、僕はこれを館だと認識したのだ。

形自体はただの立方体。しかし装飾がすごい。あれは彫り込まれているのだろうか、どういう造りをしているのか全くわからないが、描かれているのが何であるかを知っている。あれは終末の時を描いているのだろうか。彫っているのだろうか。ならばこの館の主は終末を好む者ということ？人の悪癖が暗雲を生み起こし、神の怒りを買い、現世に悪魔を呼び起こす不幸の最たる時。その様子が始まりから終わりまで描かれているその彫刻が、立方体に万遍なく描かれているように見える。僕の目線から見えない位置に彫刻が為されているか

は、確認ができなかったが。

庭は広い。門もでかい。使用人と思わしき風体の、白黒の服を着た男女が忙しなく道を行き交い、そして犬耳を生やしたそういう者もたくさん見受けられる。

テスタ妹の『犬人間は遣われている』という言葉を思い起こす。この館の主は大金持ちであることは、まず間違いない。犬人間は都市に住まう人々の多くに利用されていたことを見れば、その見返りが館を大きくし、庭を広げたということだろう。僕は立ち上がったから館をわずかに見ただけだが、圧巻される。正直、怖気づいた。怖気づく他、ないだろ。

嫌な感じだ。僕の目の前で聳え立つ巨大な館は、人から人に向けられる侮蔑、その象徴だと思えたから。黄金が目立つ配色が、そう感じさせるのか、大勢の人間と犬人間が館のために駆けずり回っている光景を見せられて、そう感じさせられるのか。

僕は嫌なところに連れてこられたと、自覚する。

「遅かったじゃないか、主がお待ちだぞ」

多くの者から挨拶をされながら庭の奥より現れた人物は、干からびたミイラだとしか見えなかった。僕は口をポカンと開けてその人を眺めてしまつて、それに気が付いたミイラは僕を鷹のような鋭い、つて感じの目で射た。僕は慌てて目を反らした。

犬少年が偉そうなミイラの言葉に頷いてから、

「お役御免ですね。これにて。ひゅーひゅひゅー」

と言つた意味を、僕は深い意味に取る事をせず聞き流していたが、この時犬少年はひどく恨みがましい目で僕やミイラ、館、その周辺にいる人々、を見ていた。口笛を吹いて軽い調子を演じていたが、彼の心底はひどく絶望していて、その絶望に付随している怒気を周囲に目線で訴えていたのだろう。僕は、馬鹿だから知らなかった。

それで、僕は犬少年が何時の間にもその場からいなくなったのか、分からなかった。

彼は僕にもミイラにも挨拶をしないまま、どこかに消えた。いや、

消えたのか連れて行かれたのかもわからない。僕は彼が消えるその時を、絶望へと引つ張られていくのを、気が付くことすらしなかった。

「さあ、こちらへどうぞ。我々の配下の者がお手間を取らせたようで、失礼いたしました。主がお待ちです。私の後についてきてくだされば」

「はい」

僕はそう言われたのでミイラのように活力の無い、老いた執事、といった男の背後をついて歩いた。この時になってようやく、犬少年が見当たらないことを認知する。

でも、特に気にもとめない。

また会うこともあるのだろうか、と思考していた。

犬少年は廃棄処理場に送られて燃えるゴミとして投棄されて二度と現世には帰ってこないという、そういう処置を為されたということを知ったのは、この館の主に会ってからのことだ。そして僕はまた新たな犬少年と出会う。見た目などほとんど以前と変わらない、クローン、或いはドッペルゲンガーという言葉がぴったりな、姿形の変わらない再生された犬少年。でも投棄された彼と新しい彼は別の彼だ。記憶は削除されているらしいから。

僕は館の主と出会う。

老いた臆病者さ。こんな館に住んで、王座にて座り、奇抜な部屋で守銭奴をするしか脳の無さそうな、意気地を完全に無くした老人さ。

でも僕は実質、彼の指示のおかげで牢獄から引つ張り出されたとも言えるんだ。

僕を牢獄から実際に出してくれた犬少年はもう投棄されてしまったのに、指示をしただけの老人に感謝しなきゃいけないのだとしたら、いや、僕は感謝しない。

僕はその老人に、魅力を与えられなかったからだ。

豪華絢爛の至りと呼べる館に踏み入ってから、老人と挨拶程度と
いった会話だけを交わし、僕は客人として持て成しを受けた。館に
従事する者が芸を尽くし、そういえばいろいろありすぎて忘れてい
た空腹を思い出された。黄金の食卓に座って、でも僕はがむしゃら
とはいかず、様子をつかがいながら空腹を満たすために、手を動か
し、口に料理を運んだ。ばりばり、ばりばり、と喧しい音が鳴った
時、黄金の食卓は静まり返っていて、僕はその自分のばりばりと鳴
らす音を意識させられてしまうのは心地が悪い。僕を客人としても
てなすなら、そういうところにも気を配ってくれば良いのに、と
考えてから絶望した。人ってこんなに簡単に甘えるようになってし
まうんだ。

僕は黄金の食卓から立ち上がり、言わなければならないことを、
近くで突っ立っていた綺麗な執事風の男に言った。

「僕には知らなければならぬことがある。世界のことや、あと、
このことだ」

僕は右腕の袖をまくって人面瘤を、見せ付けた。

さっきまで芸をしていた人や、コックと思わしき人など、多くの
従事している人間や犬人間が空気のように屯しているこの部屋で、
僕は人面瘤を見せ付けたことによって目立つたらしい。…人面瘤だ、
人面瘤：という人々の呻きを確かに耳で察知したのだ。

綺麗な執事は息を呑むような震え方をしてから、後少々お待ちく
ださい、と確認をするためだろうか歩を進めて部屋からいなくなる。
そして数十分後まで執事は帰らず、僕は黄金の食卓で相変わらず
ばりばり、ばりばり、と噛み潰す音を目立たせなくてはいけなかつ
た。人間たちの空気のような佇まいの中、ばりばり、はまるで恥ず
かしいし、生きているのが嫌になってしまう。嫌気が刺して食べる
のをやめると、することがなくなってしまうって、犬少年、サトと会

話して暇つぶしできたらな、と思うのだが彼は見当たらない。そう
ださつき彼はお役御免、と言っていたのだったと思いきり、退屈
に囚われるしかない諦めて、目を閉じて金色の粒子と遊んだ。

やがて綺麗な執事が戻ってくると、僕に告げる。

「主が、お話ししましょうと申しました。ついてきていただけますか」
僕は黄金の食卓で、金色の粒子と遊んでいることで満足する、と
いうことはない。

「YES」

ふざけた回答の仕方をして、僕は開眼した。

黄金の食卓には、大きな海老を焼いたもの一匹、奇抜な味わいを
もたらず卵を抱えた魚、鯨を小さくして小魚のようになったもの
揚げ物、緑色の液体の香しいやつ、棒状のぷるぷるとした甘味のある
もの、そして最後に食べられるのを待っているような爽やかな色
遣いをしている平べったい果実。僕は人面瘤のことを知らなくては
いけないし、世界のことを理解しなければいけないから、黄金の食
卓の全てを腹に入れることはせず、老人の根城であるような、奇抜
な四角い部屋に綺麗な執事の案内の元、足を踏み入れた。

綺麗な執事は、軽やかなステップを踏んで僕の前方から背後に下
がっていくと、その下がっていくままにソノ場所から出て行った。

翡翠のルーム。翡翠色の宝石が埋め込まれている壁や天井、床を
持つ、不可思議な力でキューブが浮かんでいる、そんな場所。それ
が老人の根城だった。意気地無しのこと……。

僕はまだそのことを知らない。

自身が犯罪者ということと湖が蛍光するということ。この程度し
か僕は知らない。

老人は、最初に挨拶のような軽い会話を交わした時には、気が付
かなかつたが、彼ではなく、彼女、らしい。老人というよりは、老
婆、ということだ。彼女は派手な装飾に身を包み、青紫色のキュー
ブに乗ったままその玉座に腰を下ろしている。そして、

「この部屋にはルーピックキューブにあるような色彩は何一つ無い」

と独り言を呟いた。僕は訳が分からないのでその言葉をスルー。つまり返事をしないまま、老婆が何かしら言うのを待ってみる。余裕があるように見せないと、足元を掬われていいようにされるといふ危機感があつたから、相手から話させようと思案、した。ルーピックキユーブなんて、そういうえば僕は並べるのが無理だと幼い頃に…… ああ、あやふや。記憶ってあやふや！。

老婆の指は枯れ木の枝のように細く、その動くのが不思議なほどの朽ち果てている指を、彼女は一差し指から小指までを順番に動かしてくねくねしている。ただ、やはり枯れ木であるから、やつとこさ、という雰囲気。老婆は玉座より立ち上がると、派手な黄金色のアクセサリーを煌かせることで枯れ木をごまかしているが、老婆は、やはり老婆だ。…老い。

老婆は青紫色のキユーブから風のように軽やかに降りてくると、僕の前に立ち、教えて欲しいことは全て教えて差し上げるさ勿論、と隙間風のような声付きで言う。

僕は執事にやってみせたように、袖を捲くり、老婆の落ち窪んだ瞳に人面瘤を見せ付けるようにしながら、

「僕はこのことだけではなく、僕の知らないほとんど全てを教えてください。落ち窪んだ目が悪くて眠ることさえできません。落ち窪くことができません」

こう主張した。老婆は案外、素直なもので、首肯すると、己の身につけているアクセサリーをわざと主張するような、そういう嫌味のようなものが含まれた動作を惜しみなくする。彼女のプライドそのものがアクセサリーを身につけている自分、に集約されているのか、そう想像させられるほど主張の濃い、よくわからないが印象深い動きをする老婆なのだった。

そういう彼女は、首肯したにも関わらず、
「教えるよりは、経験するほうが早いだろう。見聞きする方が早いだろう」

と言った。僕はいらつく、と思った。だが、はやる気持ちを抑え

て、ここは老婆の言う通りに従った方が事は案外、近道なのかもしれぬと思ひ直して、僕は首肯を返した。すると話は本当に早いもので、その十分後には二十匹くらいの犬人間と、その背中に跨る二十人くらいの従者、それに囲まれて僕は甲の世界を知るための、外出をしていた。犬少年ではなくて黒い犬の背に跨って、僕は陽が昇り上がっている昼を、道を、都市を、駆け抜ける。

その途中で出会ったのが、顔の無い天使。

この世界を八十年周期で破壊するために作られる、災害。

灰色のローブで二メートルはある全身を包み、足がついていなくて幽霊のよう。顔があるのに目鼻口、耳さえもない、のつぺらぼう。背中に半円の形をした羽のようなものを付けて、突如として都市内に現れ、物を壊し、人を殺す。それが、顔の無い天使の役割。秩序を象徴とする仮面の人とは対照的な、破壊を象徴とする存在だそう。

そして僕の人面瘤は、顔の無い天使の血を啜る。

それがどうにも、僕が牢獄から出されたことや、人面瘤の意味、そして老婆の目的。この世界の法則。老婆の言っていた、ルーピックキューブ。

全ては関連していることだ、と都市の中で僕は老婆に教えられる。そして今、僕の目の前には顔の無い天使が浮かんでいて、僕を見下ろしている。

殺さなければ、お前が殺される。老婆は平然と僕にそう告げた。

芸術的な都市であるそこは、夜の時分よりも昼の方がどこか寂寥としていて、人通りも少ないように見える。

あんなに点灯していたオブリジェと見紛う信号機も、発光が昼の陽光に包まれて、夜の時よりも主張をわずかにしているような。

ただ、今はそれを気にしている場合ではない。そういう時ではない。

乾いた風を身に受けながら 顔の無い天使 を見上げる。久しぶりの緊張感だ、と脳髓が喚くので、ああ戦いということを僕は昔していたのかもしれない、でも殺し合いをしていたのはわからないよな、と天使を見上げながら思う。こんな天使があつてたまるか、天使とは人の顔をして微笑むとされる安らぎの象徴ではないか、と僕は心の中で反対意見を唱えつつ袖を捲くた。たしかに人面瘤が普段より腫れ上がっている。ぼこつとしていて、ああ蛍光している赤色に。湖の時は緑だったが、今は赤、赤、まぶしい点滅が目にも優しくなくて、やはり僕はこの人面瘤は好きになれない。身体に悪そうだと本能的に感じさせられる、そういう瘤だ。この瘤が嫌いだ。「この世界に住まう限り、何処までも、何時までも付きまとうのがその瘤だ。それがお前に力を与えるのだから、源となるのだから、頼りにするといいい。それで 顔の無い天使 の蛍光する液体を啜るが良い」

背後で控えて犬に跨っている老婆が、まったく平然とした声音で言うてくる。

他人事だろうが、僕はこんな瘤嫌に決まっただよボケナスが、と絶叫したくなる混乱に襲われる。でも闘争心は滾る。おそらく八つ当たりをしたいと思っただのだ。ただやはり 顔の無い天使 はその幽霊のような佇まいが不気味で、何をしてくるのかわからない。

とりあえず武器がなければ戦うことはできない。
それに……。

「人質のつもりなのかこれは。これは人質ですか、人面瘤が光ってるからって勝てないじゃないですか！ 人質もいて、武器もなくて、顔の無い天使 なんて初めて見た！」

最悪の状況じゃないかと感じる。

気を失っているらしき男性が一人、顔の無い天使 のすぐ頭上に浮かされていて、何時でも殺される準備は整ってますよみたいな全身が真っ赤に染まっているのは、あれは酔っている？酒のせいで赤くなったというような紅潮。全身が赤くなるのはあまり良くないことらしいが、まあ酒の話はどうでも良い。まだあの人は生きているように見える。なら僕はあれを……というか、どこかで見覚えのある姿だと思っただけ目を凝らせば、ネリイ湖の坂上で出会った、僕をシカト、鹿十、していったチエツク柄シャツを着ていたがたいの良かった男ではないか。

何故、顔の無い天使 の頭上でぶかぶか浮いているなどという醜態を晒しているのか。

屈強そうで知的な印象の人であったのに、酒によったせいで捕まってしまったとか、そういうことだろうか。人をシカトするような不親切 GUY は放っておいてしまおうか。てかその前に武器とかなかったら僕も人質にされる、あるいは、殺されるなどしてしまうのは、嫌だ。

ならば、これを食べさせるのだ……。

老婆の隙間風 voice が耳に入ってきて、驚きつつ、差し出されたのを受け取る。老婆がそそくさと逃げていくのを憎々しく眺めながら、僕は渡されたのを見ると、それはグミだった。

正確にはグミの形をした、凝固した血の塊ということだろう。青色に蛍光しているグミの塊が僕のでのひらの上でぶるぶるしている。食べさせる。食べるのではなく。誰に。この右腕に貼り付いて膨れ上がっている人面瘤に。

鼓動、心臓が躍動して血流が全身に駆け巡ることが、どく、どく、どくどくどくどくと力強くて手元が震えてくる。本当に、人面瘤に餌を与えるような真似をしていいものか。僕は明らかにこの人面瘤に対して嫌悪の感情を抱いている。それに対して、このグミを食べさせるということは不愉快、だ。きっとグミを食べさせたらむしゃむしゃと人面瘤は口を動かすのだろう。僕自身がどれだけ不快に思うかなど気にも止めずに、むしゃむしゃするのだろう。だが、顔の無い天使 は顔が無いから何を考えているかわからない。本当、今は見下ろしているだけだけど、早くしなければこいつは僕を殺す。宙に浮かんでいる男を殺す。

のっぺらぼうは表情がわからない。まったくわからない表情。だが、突然蛍光を開始した。黒い影のような色遣いをしていた、のっぺらぼうが、蛍光した。赤色に。僕の人面瘤も赤色に蛍光している。人面瘤が同調しているということ？それとも 顔の無い天使 が？ だめだ同調だけはしてはいけない。

焦りつつもそう悟って、唯一赤とは違うグミの青色に期待を寄せる。青は僕を冷静な気持ちにさせてくれる色だ。ならばきっと青と同調するが正しい。嫌悪するべき人面瘤や 顔の無い天使 に同調してはいけない。そうか餌ではない。このグミを食べさせることは人面瘤に対する、どちらかというところ攻撃、たる行為か。

そう閃いたことで決意が固まって、ならば話は早い、僕は青色のグミを人面瘤の口の部分に突っ込んだ。捻りこむようにして、押し込んだ。人面瘤は、いやいや、とでも言うような気味の悪い動作をするので、僕は腹正しくなってもっと力強くグミを押し込んだ。

無理矢理、食させる。

喉に押し込ませれば押し込ませるほど、人面瘤は苦しそうに、いやいや、と顔を動かす。ナイフで横に線を一本入れただけのようないない両眼と、小さな鼻、ポカンと開いている口。僕は迂闊にも、人面瘤に対して赤ん坊というイメージを感じ、感じてから後悔する。赤ん坊なんて可愛らしい、守らなくてはならないものじゃ

予兆と転じ、激しい頭痛という副作用を味合わせてはくる。

『腹の中で何かが造られた』

繰返し強調するかのようにその感覚は強まってきた、頭はジンジンと痛い。

だが腹の中から『造られた』それが迫り上がってくるのもわかって、そしてその迫り上がるモノは消化した食物ではなく、血反吐という奴でもなく。そう、人間の中から通常出てくるはずのものではない、だから『造られた』なのだ、と僕はジンジンする頭で支離滅裂な思考をした。混乱している混乱している、と自分でもわかる。だが『造られた』それが腹から喉へ、喉から口へと、そうやって登り上がってくるに伴って、快樂、安心、みたいな感覚も登り上がってくる。僕はめちゃくちゃな頭になりながら、遂に口からその柄が見えた時、握る所が見えた時、そうだその時、僕は激烈に感動した。武器だ、なるほどこれで 顔の無い天使 を……。弓なりに硬直して痙攣するかのような姿勢になっている僕の、その口から登り上がってきたのは柄。

柄を僕は握って、一気に身体の中から引ツぱり出した。その時には異様と言っていい痛みが走り、ただでさえ痙攣していた身体がさらに震える。だが柄を握る拳にさらに力を込めて。

ずぶしゅあ。

そんなひどい音を鳴らしながら、露出させたのは一本の刀。血しぶきと共に、身体の中から。口の中から刀、細めではあるが長い刀身を持ったそれを。武器。……僕は右手にそれを持ち、青の霧を纏うそれを構えた。

お見事、お見事。皆、拍手、拍手喝采を！……………

背後から老婆の隙間風。

すると二十人くらいの人々が犬人間に跨ったまま、手と手を打ち合わせて、騒がしい拍手。完全に見世物だった。多くのその打ち鳴らされる音は、本当に感嘆して打ち鳴らされるというのではなく、形式的、という雰囲気がある。ただ僕自身は碌に事態を理解してい

ない。わけがわからない……。ただわかることは 顔の無い天使 は
まだイキリ立っていて、今しがた身体の中から出て来た青い霧を纏
う細長い刀身の刀、これで戦わなければ、両腕で叩き潰されるなど
して、殺されるということ。

僕は拍手喝采を背にしたまま、拍手が終わるのを待たないまま、
駆け出す。

顔の無い天使 に斬りかかった。

赤色に蛍光している液体が斬り口から噴き出したと思うと、霧の
ようなものになる。その霧となったのを人面瘤が吸い取っていく。
こうやって吸い取ることによって力になるのか、とわかりながら
追撃していく。

だが、横殴り。ふきとんだ。

あ、死んだ、と思った。

全身を包帯で巻かれて、いる。

脛が腫れている感じがある。全身が重たい。ベッドの上で毛布に身体が包まれてはいるが、感覚でそれらが損傷していることがわかる。腫れとか、動かし辛い、とか。痛みもある。なんでこんなことになっているんだろう。

「まったく記憶が無い。……いて」

パツと見た感じ洋風な部屋だ。が全てが黒で塗られている家財であり、その自身が被っていた毛布の色でさえ黒。スタイリッシュとでも呼べば良いのだろう。ただ僕の身に着けている包帯だけは真っ白だが。そういえば、服を着替えさせてもらっている。これは、黒のスーツ……。何でスーツ？

ベッドから降りると眩暈。立ち眩みがする。

立ち眩みが終わってから思い出したのは人面瘤と、のっぺらぼうで長い手を持った、半円のような羽を持った灰色のローブ、顔の無い天使 のこと……。僕は慌てて黒スーツの袖をまくってみると、包帯がぐるぐると巻かれていて見えないので、ほどく。

「……………」

やはり、人面瘤は、ある。今は蛍光していないし、腫れも治まっています。

僕は段々と思い出してきた。顔の無い天使 が馬乗りになって僕をぼこぼこに殴りつけて……。骨が折れた、武器を手離して、死ぬと悟った辺りで、意識がなくなったはず……。この黒い洋間は棺桶を連想させるものがあるが、まさか死んだわけじゃないよな。

黒光りしている棺桶が縦向きで、壁に立てかけられているな、と思っ近づいて見たら、洋服箆筭だった。開けてみようかと思っしたが、鍵がかかっているので開かない。開かないのでは、棺桶という

ことだろう。

棺桶とは反対側、ベッドの隣にある窓。三角形の窓。それを両開きに外側へと開いて、入り込んでくる風が冷たいとわかる。長袖一枚だけではさらに寒く感じたことだろうと思えば、スーツを着せてもらえていたのはありがたいことだなー、と漠然と思う。

見える景色は庭。とても広い庭で、僕の目線から見下ろせる景色のほとんどが庭。果物が生っている樹や花園、うねうねした道、明らかに不自然なのは黄金の生っている樹。黄金が生るなんておかしなものだ。悪趣味なことだ。そういう樹が百本以上。果物だけ生らしていれば綺麗な庭って感じなのに、むしろ黄金と果物の両方の樹を生らしていることで、老婆が悪趣味だとより伝わってくる。食と金両方なくちゃ、みたいな。

庭師みたいな人だけで三十人くらいいる。その内の一人が僕が見下ろしているのに気が付いたらしく、会釈してきた。僕は彼らを見下ろしていることに何だか居たたまれなくなったので、

「やはり嫌なところに来た」

言いながら外開きの窓を閉じると、針の落ちる音さえも聞こえそうな静寂、と思えば、ハッ、ハッ、という吐息のような。後ろからなので振り返ると、入り口のドアがあるところに、何時の間にか犬少年がいた。茶色い大型犬の状態で。

わん、と吠える。

大型犬の尻の穴と尻尾を頼りにして、僕はタロットカードの置かれている通路を歩く。何でタロットカードが置かれているのだろう。しかも純金製。月のカードを引いてから、スーツの胸ポケットに何気なく入れて歩くことを再開する。犬少年は僕が立ち止まった時は、へッ、へッ、と舌を出してこちらを見て待っていてくれた。犬少年は忠実だな。と思いつつまた茶色い大型犬を頼りにして通路を進んでいく。右往左往。右往左往。通路は複雑で、長くて、老婆のいる

であろう部屋につくまでタロットカードを何組見たことだろう。大型犬は途中犬少年に変身して、

「ナラク様は、タロットカードがお好きです」

と説明した。老婆はナラクという名らしい。僕は心の中では、きつと彼女は金の方が好きだろう、と思ったが口には出さないでおいて、大型犬に戻った彼の尻尾と尻の穴を頼りに、右往左往、右往左往。迷宮のような館だ（犬少年がいなければ館から出ることもできない）。つまり老婆に命を握られてるようなものだろう、と僕は悲しくなって空しくなって衝撃が走ったが、そんな頃には翡翠のルーム。辿り着いてた。相変わらず浮かんでいるキューブだけは青紫色。他の色遣いは翡翠。

僕はそれらを見渡してから老婆に目をやる。ナラクという名のその人を。大型犬は犬の姿に戻るとナラクに一礼をしてから、僕にも一礼をし、そして左脇に下がった。僕は数歩前に出て、ナラクから見下ろされる位置で跪くような姿勢を作ってから、立ち上がり礼をした。

身体中が痛かったが、痛いからこそ礼を欠かせば甘く見られると思いついた礼儀であったが、それのおかげかナラクは、ふふつ、と薄く笑い玉座から降りると、風に吹かれる枯葉のように弱々しく、青紫色のキューブから降り立ち、僕の前にしわがれた装飾品だらけの身を、降ろしたと思うと、相変わらぬ隙間風のような声、それをさらに潜めたような息遣いで言葉を紡いだ。

「痛かるう……？」

そして僕の手を握り取ると、枯れ木の枝のようなシワガれた手で、僕の包帯を巻いている、つまり痛い所を、老婆とは思えない力の強さでギュッと握り締めやがった。

「ぐっ……」

下手に声を上げて痛がれば負けだと思った。全身に汗が走り、神経に電流が走るような感覚が回ったが、しかし声は押し殺す。だが老婆は力を込めるのをやめない、このナラクという老婆は負けず嫌

いなのか、と動揺し、やがて気が錯乱してきて、声こそあげなかったが、その場で跪くことにはなった。片膝について。

ふざけんな……と怒りたい気持ちに塗れる。だが声を押し殺すことに気を配るに精一杯だ。反論をする余裕などもあるはずは無い。やがて老婆が腕を解放してみせた。僕は一気に脱力してその拍子に押し殺していた声を上げそうになったが、それも何とか堪える。全身の汗は冷や汗のように変わり、体中を寒くする。

解放された僕は跪いたままナラクを見上げると、彼女は何時の間にか僕が通路で拾い上げた、純金製の、月のタロットカード。あれを僕に見せ付けるようにして持ち、

「勝手に持ち出したというのは、調子に乗っているのではないかい？」

と呪うような言葉を呻く。そして彼女は自分自身の懐に、月のタロットカードを入れた。がめついとはこういうのを言うんだ、と口に出すことを堪えながら立ち上がるが、もう何か言葉を告げる気力も湧かないほど消耗したので、とにかくナラクという老婆が僕に用があるならさっさと告げて欲しいし、用がないならこの館から出させてもらおう、という気持ちになった。

だからしばらく黙っていた。

ナラクも何も言わないでアクセサリを愛でるようなことをしているの、しばらく翡翠ルームは静まり返ったものだった。

さっきまで青紫色キューブの上にあった玉座が、突如として空間転移でもしたみたいにナラクの居る所に置かれた。そしてナラクは玉座に座る。玉座に枯れ木が植わっている、というような光景にも見える。だがナラクは両眼だけが鋭い。鷹、或いは、鷲、か。目だけは動物としての意志を持っている、そういう老婆だ。

「お前は自由の身でもなければ、ものを楽しむためにこの世界を歩き始めたのではない。私ナラクの力があってこそ、あの同じことを繰り返すだけの無限牢獄から出られたのだということを、努々忘れるな。私の館にあるものを好き勝手に手に取り、さらに懐にしまう

など、なんたることか……信じられぬ愚かさ、考えられぬ浅はかさ……お前はこの世界のことを何も知らぬ、人面瘤があるからこそ利用される価値のある、その程度の人種だということを覚えておきなさい」

「……………」

何も答えずにいるのが吉だと思った。というか、それしか思いつかなかった。

そしたら隙間風を洩らすばかりだった老婆の癖に、大声を上げて笑った。はっはっはは、と翡翠ルームに響き渡る大声をあげたのだ。音が部屋中を跳ね回り、やがて反響が終わってから彼女はようやくく言った。

「世界のことを、教えてやろう」

一度は懐にしまったタロットカードを取り出して枯れ木の枝で弄ぶようにしながら、彼女はこの世界、について語り出した。僕はとりあえずそれを鵜呑みにすることにして、痛みを堪えながらだが、しっかりと、聞いた。

そもそもこの空間は、僕のかつていた世の中から言うと、つまり『死後』の世界ということらしく、天国とか地獄だとかいう類に分けられてもおかしくはない世界なのだが、いるのは天使ではなく顔の無い天使。だし、針地獄もなければ蜘蛛の糸が垂れ下がってくることがなさそう。あるのは建物や湖、生前の世界とあまり変わらない。だが、話を聞いていく内に、これまで僕が生きてきた生前の世界と、この死後の世界では、まるで違う代物だとわかってくる。

まずこの世界で独特なこと。それは人類というものが、秩序の象徴と、破壊の象徴、その二つの象徴に挟まれたまま、八十年周期で滅び、そして再生するということを繰り返すサンドウィッチの具のような存在である、という点。破壊と秩序に挟まれて滅びることを余儀なくされる、八十年ごとに再生されるためにあるのが人類、ということらしい。

それはこの世界での根本的鉄則。
ちなみに僕が仮面の人と言っていたあれは、本来 腑抜けた悪魔と呼ばれるらしい。

秩序の象徴は 腑抜けた悪魔。
寡黙な様子で人間文明が混沌に包まれるのを防ごうとする。
破壊の象徴は 顔の無い天使。

悲鳴をあげながら人間文明が秩序に守られるのを防ごうとする。
八十年間 顔の無い天使 は人類をめちやくちやくにすることに普請し、 腑抜けた悪魔 は人類が心穏やかに生きていくその手助けをすることにだけ普請する。まったく正相反な性質を持つ 顔の無い天使 と 腑抜けた悪魔 だが、その両翼は湖が『ウロボロスの満月』に照らされる夜、湖より誕生するのだそうだ。数十匹ずつ湖より誕生したその二対は、その場で血肉の争いをし、どちらか片方が全滅するまで争いは終わらない。

ちなみに八十年周期の内の、前半から後半に行くに伴って 腑抜けた悪魔 の誕生数は減り、その逆に 顔の無い天使 の誕生数は増える。そのため、八十年周期の前半、四十年程度は、 顔の無い天使 は全て湖から誕生する時に、数の多い 腑抜けた悪魔 に全滅させられることになる。同じ場所に誕生するから、自然そういう流れになるのだ。

だが四十年を過ぎた辺りから、誕生数の多い少ないが逆転する。 顔の無い天使 が数で 腑抜けた悪魔 に勝るようになり、誕生時に 腑抜けた悪魔 を虐殺するようになる。当然、そうなる顔の無い天使 は死なないので世に放たれることになり、人類を滅ぼすための活動を開始し、建物を壊し、人を殺しはじめる。つまり四十年を越した辺りから、自然世の中の治安が悪くなってくるというわけだ。勿論、一年目から四十年目までの間に数を増やし続けた 腑抜けた悪魔 たちもいるし、数が逆転したからといってその全ての誕生した 腑抜けた悪魔 が殺されるわけでもないのだから、すぐに治安が最悪になるというわけではない。だが確実に治安が悪くなっていくこともまた事実。 顔の無い天使 に怯え、混乱した人々が犯罪を犯すということも増えていく。そして最終的に、八十年目が訪れた時には人類文明は滅びてしまう。勿論、 顔の無い天使 によるものだ。全てが荒地となり、山も川も畑もなくなる。残るのは、湖、だけだ。

再生のキツカケとなるのは、まずは湖である。この世界には湖が六つ、ある。そして一つの湖につき九つの birth spot というのがあるらしく、そしてその birth spot から 腑抜けた悪魔 が誕生する所から世の再生は始まる。

というのは新たな世界の周期が始まるその一年目に、圧倒的な数の 腑抜けた悪魔 が誕生し、秩序の力を持ってして圧倒的速度で文明の再生を開始する。そして八十年周期のその最期の時まで生き延びた人々、というか、 顔の無い天使 に殺されなかった人類や建物を、再生してみせるのだそうだ。

だから世の秩序は自然と、再興される。再生させられた人類も腑抜けた悪魔と協力して文明を築き、年々誕生数が増加する。顔の無い天使に殺されないよう、精一杯に世を再興して、文明をより強いものにして、顔の無い天使に抵抗するというわけだ。ただ顔の無い天使に殺されたり、壊されたりしたもののだけは再生することが出来ない。建築物に関わらず、人にかかわらず、とにかく顔の無い天使の手にかかって殺されたり破壊されたりしたものは、二度とこの世界には再生されない。その行方が何処へ行くのかは、勿論誰にもわからない。つまり僕がいた以前の世界で言う、いわゆる『死』はそれにあたるのだろう。八十年の間、事故で死んでも、老衰で死んでも、病気で死んでも、再生はさせてもらえないから『死』とは言えない。顔の無い天使によつて殺されることそれだけが、想像のつかない終わり『死』を迎えるための条件である。人間は毎日毎日、以前の世界よりやってくるといふのに、この世界での人間の数が飽和しないのは、顔の無い天使によつて殺され『死』を迎え、この世界から退場している人間も毎日いるから、だそうだ。

なぜ顔の無い天使に破壊されたものは、腑抜けた悪魔に再生させてもらえないのか。その理由はわからないらしく、そもそも顔の無い天使に人類は近づこうとしないため、その研究は進まないらしい。誰だつて『死』にたくはないということだ。顔の無い天使に人類が抵抗するための兵器というのは発明されているらしいのだが、せいぜい追い払うのが限界なため、いまだ顔の無い天使の正体は解明されていない。腑抜けた悪魔にもわからないことだそうだ。

腑抜けた悪魔は基本的には人類の味方らしい。人類が穏やかに生きるための秩序を作ること努める存在だ。ただ何故彼らも自らがそうしたいと思うのかは、感覚的なものらしく、理由は言葉に近づいたらしい。ただ秩序を守るのは当然のことだと思っているのだそうだ。

僕は牢獄にいた時 腑抜けた悪魔 に斧で殺されそうになったが、彼らは監獄に入れている存在を秩序を乱す者だと捉えているため、基本的には捕えておくか、それが達成されない時は殺してしまうかという判断に至るのだそう。犯罪者の僕が逃げようとしたのを殺そうとしたのは、秩序を守ることが当然のこととする彼らにしてみれば、やらなくちゃいけないことだったのだろう。「嘘つき」呼ばわりまでされた理由は、わからないが。それに、犯罪者、ということとは確定的なのだろうか。前の世界に居たときの記憶が無い僕には、思いつかないことだ。思いつかない方が、いいのかもしれないが。

ただ無限牢獄に捕えられている者とは、前の世で犯罪を犯した者であるということは間違いないらしいので、ああやはり僕は犯罪者だったのだろう。何をしたら犯罪者とみなされたのかは、記憶が無いからわからないけど。ただ、嘘つき、と呼ばれたことは関係しているのかもしれない。無限牢獄に捕えられた者は、毎日同じ一日を過ごす。そして自分が何日そこに捕えられたのか、ということを理解することもできない。ひたすらに一日が始まり、一日が終わる、ということを繰返し、前後は無い。だから僕は何日間あそこで過ごしていたか、とかはわからない。覚えてない。知覚さえできていなかっただろう。ただ一日があつて、また一日がある。それが無限に続くから、無限牢獄なのだそう。僕は何年、何十年、いや何百年と、あそこで捕えられていた可能性がある。無限牢獄は 顔の無い天使 に破壊される対象ではないのだそうだから、何千年とあそこで一日を過ごしていた可能性もあるのではないか。僕の年齢は八十年ごとに若年に再生されるのだそうだし。この世界に以前の世界からやってくる人間というのは、ランダムで肉体年齢が決定されるそうだから、若年として肉体が再生されるのは幸運なことだろう。どうにもやはり、湖、がもっとも重要な根源たる何かしら、らしい。

湖から何かの誕生、或いは召喚、される現象を”ルーピックキューブ”と呼ぶのだそう。六つの湖と九つの hot spot。白、

赤、青、黄、オレンジ、緑の六色が一つの湖につき九つあるhot spotで不規則に蛍光するという様子が、ルーピックキューブに例えられたのだそう。確かに、ルーピックキューブは六つの面に六つの色、それが一つの面につき九つに不規則に並んでいる。一つの面がそのまま一つの湖だと考えれば、なるほどルーピックキューブだと言えなくもない。

hot spotは湖一つにつき九つある訳だが、『繁栄の三日月』というのに当たる日に、三箇所のhot spotが蛍光するのだそう。蛍光した湖の中から現れるのは、以前の世界からの贈り物だと言われている。勿論、以前の世界側からすれば贈ったつもりなどないのだが、現に『繁栄の三日月』に当たる日にはhot spotから何かしらが召喚されてくるものらしい。この世界の人類の繁栄を手助けしてくれるような、何かがある。

なるほど、テスト兄妹が縄張りと言っていたのは、そのhot spotのことか、と思いがた。そして昨日はちょうど『繁栄の三日月』に当たる日だった、ということだろう。だからネリイ湖のhot spotが緑色に蛍光し、Babelの第四試作型Monが召喚されてきたということだ。あれが繁栄の手助けになるのかは、僕は疑問だが、湖から召喚されたということは手助けになると判断されたということなのだろう。この世界では湖は重要な役割を持っているように見える。何せ、八十年置きに壊されることを前提とする世界で、何回も再興のためのキツカケを生み出してきたのが湖だ。顔の無い天使 と 腑抜けた悪魔 を誕生させるのも湖。うーん、そういう湖が六つ。……不思議な世界だ。そもそも八十年置きに終わるといって、それがどのような光景なのかまったく想像がつかない。無限牢獄も八十年置きに滅びていたのだろうか。それとも無限牢獄は例外だろうか。まあ、わからない。僕は、こうやって世界のことを聞かされたが、結局何がわかっただろう。

そう大切なことを聞かされていない。

人面瘤とは、何なのか。なぜ僕は口の中から刀を引ツ張り出すこ

とができたのか。

青色のグミ。赤く蛍光していた人面瘤と 顔の無い天使。犯罪者にだけ付く人面瘤。

僕は袖を捲くり、ナラクに尋ねる。

「このことについても、教えてください」

ナラクは笑うことをせずに、こう返事した。

ならば、私に従う下僕になると、誓うかい？

幾つかの情報を引き出して後に首を横に振って見たら、牢獄にぶち込まれた。まったく、災難なことだと思う。あのナラクという老婆は何でも自分の思い通りになると思ったら、大間違いだ！ちよつと自分の不都合があつたからつて癩癩を起こしやがつて……。ああここは寒い。鉄で囲まれた牢獄だ。僕が閉じ込まつていた無限牢獄と比べれば狭くて、玩具も転がつていない、なんか変なおいのするじめじめした所だ。じめじめした所にいると脳まで湿る気がして、ぐにゃぐにゃする。つまり調子が悪くなつて、死にたくなる。これは良くない。

と言つたつて牢獄の中なのだ。自由に湿り気のない所にいけるわけじゃない。木枯らしが吹くような乾燥地帯にいけばぐにゃぐにゃも治まるのかもしれないが、僕こと乙は牢獄に居たままでは、甲を彷徨えない。ここにはきつと小鳥さえも訪れないだろう。小鳥のさえずりが聞こえることすらも、怪しい。

食事は朝、昼、夕と、三食運ばれてくる。

案外、おいしい。残り物みただけで、元々が黄金の食卓だからね、その残り物というのは結局ご馳走が少しグレートダウンした程度のもので、美味しいのは間違ひなかつた。ただ時折、嫌がらせか何かだろうか、やけに調味料がかかつた、激烈に辛いのか、激烈に苦いのか、激烈に甘いのかがあつて、それを食べた時だけは最悪な気分になつた。ぐにゃぐにゃ、ぐにゃぐにゃ繋がりでとグミのことを思い出した。青色のグミ。あれは 顔の無い天使が 人間から追い払われた時に噴出させた蛍光する液体を、凝固させたものらしい。 顔の無い天使 には種類があつて、その種類数は六。六種類、それぞれ蛍光する液体の色が違う。白、赤、青、黄、オレンジ、緑。その種類によっていくらか違いはあるらしいが、大きな違いは

ないらしい。どの種類の 顔の無い天使 も、人を殺し建物を壊す。その習性、目的は、変わらない。僕が人面瘤に食べさせたのは青色のグミ。

赤と青は反目しあう。黄と緑も。白とオレンジも。それぞれが反目し合うから、赤色に蛍光する 顔の無い天使 が現れた時には青色の液体を利用しなければならぬ。人面瘤は 顔の無い天使 に同調しようとするので、同調すればするほど赤対赤という対立になるので、 顔の無い天使 を追い払う或いは殺すということは難しくなる。だが向こう側はこちらが 顔の無い天使 と同調すればするほど、こちらを殺すことを容易にするらしい。だからなるべく反目しあう状態にしなければ、 顔の無い天使 に殺されてしまう。人面瘤を持つ人間は常にそういう、属性、を気にしなければならぬのだそうだ。

「それにしたって、何だって僕が……」

戦わなければならないのか。

人面瘤がついているからといって。

そんな風に落ち込みながら、人面瘤と睨み合いをしている時に、犬少年がやってきた。

僕はそこでようやく、彼が以前の彼とは別の犬少年だということを知る。

知ったからどうということもない。僕は楽しく彼とお話することも出来ず、暇人となり、牢獄の中で一週間ほど生活した。ただ犬少年に僕の名前を尋ねてみると、

「あなたの名前は、ヒンニヨウDXガンバレルマーチ・スパンキン
デリートマツハ・シューマツハ・イトウ・ホンジャルツク・アバハ
ーマダナドンクサイ・ドンクサイ・ベルサンマーチタイムDX・ク
ソ・ヒンニヨウDXです」

と、より悪い方向に傾いた珍名になっていると思った。

そんなこともあった一週間の間だが、嬉しいことも一つあった。

僕の牢獄に一つ付いている鉄格子の窓越しに、歌が聞こえて来る

のだ。

綺麗な声で、透き通っているそれだった。何処から響いてくるのかはわからない。ただそれは僕の退屈な一週間の中では、最高に心地良い時間であったのも、また事実だ。

ずっと、歌を聞いていた。

誰のものかはわからない、透明たる声を。

嬉しいことはそれだけだった。歌声。でもその歌声のおかげで、こんな牢獄生活も悪くないなと心底から思えた気がする。僕は気が付けば、歌声がいつ聞こえるのだろうと、耳を澄ますばかりの一日を過ごすようになっていた。無限牢獄で身体が慣れているのだろう、待つことは苦痛じゃなかった。嬉しいことがその先に待っているというのなら、猶のことだ。僕は鉄格子を見上げて、ずっと座って、耳を澄ましていた。

一日に二回、それも十五分程度のことだけど、歌は聞こえて来る。透明な声が風に乗って、この牢獄の一室に届いてくる。それを耳にして、ずっと自分の息さえも潜めて、それを聞く。僕は長い間歌声を聞く事だけを楽しみにして、朝、昼、夕に出される食事の味が、わからなくなるほどだった。

だから二週間が経ち、ようやく牢獄から出された時、僕は嬉しくなったのではなくて、むしろ落ち込んだかもしれない。それほど聞き惚れる歌声だった。僕はおそらく以前の世でも、あんな綺麗な歌声を耳にしたことは、無かった。

牢獄から出されて招かれた所は、やはり翡翠ルーム。ナラクの待つ所だった。

老婆は以前と変わらないシワガレタ様子のまま、玉座から降り立ち、僕の傷が癒えた様子を見て取って、

「さあ。下僕よ、戦いの時だ。これを受け取れ」

と巾着袋を差し出した。毒林檎を渡されるかのような錯覚を起しながら、巾着を受け取り中身を覗くと、あったのはグミ。色とりどりの、六色入りである。当然、おやつをくれたということではないだろう、このグミを使って 顔の無い天使 を殺せということだ。巾着の口をきゅッと絞ってから僕は言った。

「下僕になつたつもりは……！」

「下僕でないということは、つまりこの館に侵入してきた盗人というのが、お前の正体ということではないのかな？ 招待した客人ではないのだから、盗人ということだ。盗人ということは、この館にはいらぬ敵ということだよ。敵ということは侵入者ということ。侵入者を見過ぎすほど、私は寛容でもなければ優しくもない。そういうものには私刑を与えなくてはならない。顔の無い天使 が誕生する所に身包みを全部剥いだお前を連れて行き、その湖内に放り投げてやる。そうすりゃ侵入者は『死』ぬことになる。真正正銘の退場だ。終わりだ。……………下僕なら話は別なのだけれどねえ……」

「今後とも、よろしくお願いします。僕は下僕でございます」
命を握られているとあつては、こう述べるしかないではないか。
うるっ、と泣きそうになったが堪える。頭を垂れて、丁寧にお辞儀。すると目の前にあの純金製、月のタロットカードが差し出されていた。僕は、受け取って黒スーツの胸ポケットにそれをしまった。
「それでいいんだ。……………さて……………では君に下僕としての名、を授けよう」

それが契約とでも言うつもりだろうか。僕の名前はヒンニョウDXガンバレルマーチ・スパンキンデリートマツハ・シューマツハ・イトウ・ホンジャルック・アバハマダナドンクサイ・ドンクサイ・ベルサンマーチタイムDX・クソ・ヒンニョウDXではなかったのか。

「その月のタロットカード、その裏面をしてみる。そこにお前の名が書いてある。努々、それがお前が私の下僕になった証ということ、を、忘れないように」

「…わかりました」
僕はタロットカードを胸ポケットから取り出し、裏返して、そこに彫られている文字を見た。

『ゲロ野郎』

見なかったことにして、しまつて、二度と見ないようにしようと誓う。

「ではゼロ野郎。 顔の無い天使 を殺すために、これから頑張ってくれたまえ。 おほほ」

僕はナラクに対して怒りを感じるが、やっぱり感じるだけである、言葉では、

「了解しました」

などとヘコヘコして、そういえば何で 顔の無い天使 を殺すということをやらなくちゃいけないんだろう、 腑抜けた悪魔 に任せればいいのにと考えた。 それだけだ。

僕は犬少年に案内されて、館を出た。

久しぶりの外だ、と甲を歩き回れることに感謝しながら僕は庭を通り過ぎていく。 庭師の連中は僕が『ゼロ野郎』になったせいか、僕に会釈をしないようになった。僕は最低ランクの下僕か何かなのだろうか。まったく敬意を払われていないのがわかる。まったく、と思いながら僕は大型犬に変身した犬の尻と尻尾を頼りにして、門前に立つ。

そしたら、

「おい」

と急に男性の声が背後から聞こえてきたので、振り返ってみると、そこに男がいた。

誰かなー、と思って良く見るとあのガタイの良い、不親切なGUYだ。 顔の無い天使 に捕まっていたお馬鹿なGUYではないか。先日と服装は違って、なんか物々しい銀色の甲冑などを身につけている。見た目は紳士的なだけけれど、格好良いのだけれど、ナサケナイGUYという印象の人だ。

「先日、助けていただき、誠に感謝しています。どうぞ、その恩を御返しする気会を俺に与えていただけないだろうか。それでも俺は元騎士だ。これまで 顔の無い天使 と戦い、都市が破壊されるのを防ぐために腕を磨いていた者だ。あなたは 顔の無い天使 を討伐するために出発するのだと、庭にいる人から聞いた。どうか、その出陣に、俺も加えてもらえないだろうか。俺は人にされた恩は、

返さねば気がすまない性質なのです」

意外にも丁寧な挨拶をするのだった。彼は甲冑を鳴らしながら僕がナラクに対してしたように、地面に片膝をついて、ひざまづいてみせた。だいぶ急展開すぎて戸惑うけれど、しかし彼は元騎士だといふのが本当ならば、なるほど確かに助けになつてくれるだろう。以前 顔の無い天使 に捕まっていたのも酔つ払っていたせいだと思えば、まあ、彼の腕が弱いのだとは限らない。誰でも酔つ払つたら実力は発揮できないだろう。それに何だかんだ言つて、僕はまだこの世界のことについて何もわかつちやいない。犬少年が僕に御付きとしてくれるが、彼のことはどうにも、当てにできない気がする。となれば。

「突然で、驚きました。とりあえず、歩きましょうか」
と提案して彼と話をしてみることにした。

そこで、あ、この人を仲間にしたら犬少年の背に乗って駆けずり回るといふことが出来なくなるのではないか、と不安になった。

だがそのことを訊ねてみると、彼は「それは問題ありません」と言つてから、口笛を吹いた。

そしたら羽の生えた真つ黒な馬、ペガサスみたいなのが曇り空を引き裂いて降りてきて、館の門前に着地してから、ヒヒーン、と唸つた。完全にファンタジーである。しかし目の前に確かに、黒いペガサス君は、これはCGとかじゃなくて現実だ。

「す、すごいですねー」

と関心したが、やはりその騎士GUYはどこか陰を帯びているといふのだろうか、ひねくれている感じで、

「全然、たいしたことじゃ、ないんですよ」

と褒めたのに俯くので困る。やり辛い。彼の過去に何かがあったのだろうか。ただ僕がそのことに首を突っ込むのは、良くないことだろう。僕はとりあえず、彼と仲間になるなら、まずは名前を教えてもらおうと、尋ねてみた。すると、

「レイナードと言います」

と普通に格好良い感じの名前が飛び出てきたので、僕は嫉妬した。
風が穏やかに、駆け抜けていく。

他者の名に嫉妬しつつも茶色い大型犬の背に乗って”墓標荒野”と呼称されている荒野を駆け抜ける。都市の東側に位置するこの荒野は、この世界においては二番目に大きな荒野とされ、また顔の無い天使の出没確率の高い、危険区域としても認識されているのだとか。

巨大なる都市のその東側周辺を取り囲んでいる広大な荒野であり、東側のさらに遠くに歩を進めたいならば、どうしても墓標荒野は通り過ぎなければならぬ人類にとっての関門である。顔の無い天使に殺される危険性ははらみながらも、人類は東側のさらにその先を目指すならば、ここをやり過ぎす必要がある。

だが殺されてしまう者が多いから、この場所を人は”墓標荒野”と呼称し、恐れるようになったのだから、準備もなしで、そう簡単に踏み入って良い所ではないのだが…。

廃棄され記憶を消去されたばかりの犬少年は、記憶を消去されたことによって脳内情報がまだ整理整頓されておらず、墓標荒野の危険性を忘れているという失態だったらしい。

仲間になったレイナードは、墓標荒野の危険性を当然のように知っていたが、彼はどうやら、僕が顔の無い天使など楽勝に倒せる猛者だと勘違いしていたらしく勝手に僕が何とかしてくれるだろうと想像していたらしい。というのも、彼は僕が顔の無い天使との初戦をした当時、泥酔状態だったがために記憶が混乱していて、実際には僕は顔の無い天使にほこすかにやられたというのに、恩を返すなどと言って、勘違いしている。騎士だけど馬鹿だ。

当然僕はこの世界のことなど知らなかったから、”墓標荒野”という危険区域に足を踏み入れたという認識すらなかった。

記憶というのは大切だね。記憶を喪失してなければ、都市で準備をしていただろう。

犬少年の嗅覚と聴覚に任せて 顔の無い天使 を探してもらって、結果、いきなり窮地に追い込まれるなどマヌケにも程がある。

僕らはマヌケであった。雑談などして余裕ぶっこいてる場合じゃなかった。

「レイナードって名前、格好良いですねー」

僕は少し上空を飛んでいる銀の鎧を纏った白髪の彼に、話しかける。

彼は礼をする。

「ありがとう。だが、そんなことはないよ」

謙遜した。僕は悔しくなったのでレイナードをもじってみようと閃き、荒野の乾燥した風を浴びながら、悶々と彼の名を脳内でいじくってみる。で、アダ名を思い付いてみた。

「ドナドナ」

「……ん？」

「レイナードを逆から読むとドーナイレ。ちょっと無理矢理で、ドナドナ」

「……………」

ドナドナは口を閉じて何か言いたそうな表情で僕を黒ペガサス上から見下ろしていたが、しかし何も返事しないまま前を向いた。彼はドナドナと呼ばれることに抵抗がないのだろうか。哀れな子牛。

ドナドナ。ドナドナ。僕はこんなことを思いついた自分ぐだらないと自嘲しながらも、ドナドナ、ドナドナ、と脳内で何回も繰り返した。何回も何回も繰り返す内に、黒ペガサスに乗っている彼を本当にドナドナという名前だと認識できそうになってきた。僕はもう、彼はドナドナでいいや、と適当なことを思った。彼が怒りそうなことを、思った。

マヌケである。そんなことを考えている間に、 顔の無い天使 に標準をつけられてしまったのだから。

「キヤアアアアアアアアアアアア」

「キヤアアアアアアアアアアアア」

「キヤアアアアアアアアアアアア」

降臨、してきた。

三重奏トリオしてる 顔の無い天使 三体の歌声は、ひどく甲高く、不協和音とかいう奴と関係あるだろうか、ひたすらに耳障り。不安にさせられる音の組み合わせが僕らをトライアングルで囲むのだった。何のキツカケも無い。突然、頭上から三体の天使は降臨し、僕らに逃げ場を与えないまま歌声を無理矢理に聞かせる。赤、白、黄。三体はそれぞれのつぺらぼうを点滅させていて……僕の人面瘤が反応し袖の中でいっきに膨張したのがわかる。

僕ら三人は、顔の無い天使に囲まれたのだった。

冷や汗を掻きながら、袖を慎重に捲くり、腰につけているグミの入っている巾着袋に手を掛けるが、全身がフワフワして手の感覚がよく、わからない。どこかおかしな方向に手が行ってしまった感じがする。動悸が激しい。指先が麻痺してる。喉に異物が入り込んでいる感じがする。僕は犬少年より降りてから、言った。

「い、犬少年のサ、サトくん。こういう時は、どのグミを食べれば、いいのかな」

喉がイガイガするせいで上手く声を発することができない。我ながらナサケナイ。だが犬少年はもつとナサケナかった。大型犬から人の形に変身すると、犬耳をへこへこさせて、両手で顔を隠して、怯えた様子のままその場でうずくまるのだった。ひい、ひやあ、とか呻くのだった。

こ、こいつ、だ、だめだ…。

となると頼りはドナドナだ。いや、レイナード、だ。騎士である彼ならば 顔の無い天使 を追い払う手段を知っているに違いない。頼むよ、レイナード。

しかし彼はドナドナだった。

こ、こいつ、だ、だめだ…。

明らかに腰が引けているではないか。何だこの男は、見た目は格好良いのに剣を持ったその構え、めっちゃくちゃへっぴり腰やないか。

しかも剣、ちよつと錆びてるし。

最後の頼みは黒ペガサスか、と思つて見渡してみたら、既に彼は天高く飛び上がつて一匹で逃げていたのであつた。このパーティー、終わつてる。

なんたることであろうか。

三体の 顔の無い天使 が僕ら三人を嘲笑うかのようにして浮かびながらぐるぐるすると時計回りに回転、不協和音 voice のその音量をさらに上げてきて、鼓膜が震える。金縛りにされるのではないかと不安になる。このままでは『死』ぬのは間違いない。…やるしかない。

怯えている場合じゃない。巾着袋を腰からちぎり取つて、中を覗く暇などない、手をつ突つ込んでいくつかの粒を掴み取る。赤、黄、

白…赤、黄、白…赤、黄、白……。

僕は人面瘤に赤と、黄と、白のグミを無理矢理に食べさせた。不思議なことに以前とは違つて嫌がらず、もぐもぐ、と美味しそうにほおばつて、すぐ食べ切つてくれるのを眺めて、何かがひつかかると思った。何か間違つている。何か、おかしい。そして三色のグミを食べたら余計に膨れ上がつて、三色に点滅する。赤、黄、白…で、その点滅を眺めてようやく僕は何がおかしいのかに気が付き、冷や汗をどわつと全身に掻いたのである。うすら寒くなつて、ああつ！、と声が自然と洩れていた。同じ色のグミを食べさせるのではない、その反発し合う色を食べさせなくてはいけないのだつた！赤なら青、緑なら黄、白ならオレンジ、と！その属性の関係を覚えておいて、食べさせるグミは顔の無い天使と反目しあうようにしなければならぬから、僕が食べさせるべきグミは青と、緑と、オレンジだつたということになるじゃないか！

「ぶげぐえあ」

初歩的なミスを犯してしまったことに呆然としている僕に、同調を強めたことによつて余計にイキリ立つた 顔の無い天使 からの殴打。長い腕に十分な遠心力を加えてから、僕のことを殴りつけた

ようだ、僕は思いつきり吹っ飛んで、地面に横たわり土埃に塗れる。強い衝撃を受けたせいで身体が痺れて、立ち上がることがなかなかできない。

「くっ！ 我が恩人に、報いる！」

レイナードがそんな言葉を大声で張り上げながら、僕を殴りつけた白の 顔の無い天使 にへっぴり腰のまま接近したが、そんな構えで振り下ろす剣に力が入る訳もなく、呆気なく彼の一撃は、当たりはしたが、 顔の無い天使 の灰色のローブに傷をつけた程度のことだった。まったく効果がなかったようにしか見えない。

だが 顔の無い天使 からすれば灰色のローブに傷を付けられたことは問題であるらしかった。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」
耳がジンジンするほどの雄叫びが白い 顔の無い天使 より発せられる。わなわな、といった様子で両手の指を動かしてから、 顔の無い天使 は『何か』をした。というより、目で捉えられない程の速度で回転して、レイナードに打撃を加えたのだ。…顔にそれが当たっていたら、と僕はまだ震えが止まらないまま、息を呑む。幸い、銀色の甲冑に打撃は当たったことで、彼は吹き飛んで意識を無くしたようではあったが、げほっ、げほっ、とむせている声が赤と黄の 顔の無い天使 の奏でる不協和音に混じって聞こえてくるので、息はあるのだとわかる。

白い 顔の無い天使 は怒っている様子だが、そのおかげかこちらに近づいてこないし、赤と黄の 顔の無い天使 は歌っているばかりだ。

今の内だ、と思い痺れの治まってきた身体をなんとか上半身だけは起こし、巾着袋が何処にあるのかと見渡す。すると、不幸なことに 顔の無い天使 三体がいる方角に、巾着袋が転がっている。三体に気付かれないよう慎重に巾着袋を回収しなければ、間違いなく『死』ぬ。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「キヤアアアアアアアアアアアア」
「キヤアアアアアアアアアアアア」

慎重に、慎重に身体を動かして音を鳴らさないように。四つん這いの形でゆっくりと、とにかく気付かれないことを最優先として……。かなり冷や汗を掻いているのが自分でもわかる。バレたらおそろくイキリ立っている白いのに殴られるか潰されるかして、オシマイだ。慎重に……。

こんなに巾着袋が大きく見えたことが、かつてあっただろうか。こんなに着袋の形を意識したことがかつてあっただろうか。僕には記憶が無いが、間違いない、こんなことは初めて、だ……。あと少し、あと少し……。指が、届いて……。手で、……。掴んだ！

僕はもう堪えることが出来ず、掴みとったのだから後はバレても構うもんかと、巾着袋を勢い良く握り締めてからは音も気にせず立ち上がり、なるべく時間を稼げるようにと 顔の無い天使 のいる方向とは逆方向へと駆ける。走る。……。だが、すぐに絶望は訪れた。

ない。

ない。

ない。

さつきよりも随分とひどい衝撃だった。頭に一本の線が走って、それが僕の全気力を奪っていくのを感じる。

さつき殴られて吹き飛ばされた時に、巾着袋の紐は緩んでいた。

だからグミは全部、荒野の土くれに落ちこちてしまったから、巾着袋の中には、ない。ない、ということ、だ。

いやだ、と思う。ありえねえ、と思う。

心臓の音がどくどくどくどくどくどく。

背後からの視線を感じる。僕はもう立ち止まってしまった。逃げるなどできるはずもない。逃げたって追いつかれるに決まっている。僕は、ゆっくり、と背後に、振りむいて。

迫ってきていた。

三体の 顔の無い天使 が僕に向って、長い両腕を伸ばしながら

近づいてくるのが、スローモーションのようにゆっくりと見える。のっぺらぼうの天使。見れば見るほど、異様。不安をこちらに与えてくる。幽霊のように、すーっと、両手をこちらに伸ばしながら近づいてくる。

不協和音の歌がより大きくなって。悲鳴のような。キャア、キャア……………。

こういう歌を耳に残して、死ぬのか。牢獄で耳にしたああいう綺麗な歌声と共に死を迎えたかったけれど。屍と化して骨として墓に埋められて、虫に食われて肉を失う？

絶望をしている僕。だが、と、なった。

僕は救われた。

救ってくれたのは凄まじい横からの銃弾の嵐、だった。

空気を切り裂くだけではあらず、顔の無い天使 三体の灰色のローブをぼろぼろにしてしまうような激しい銃弾の嵐が、僕から見て左側から、ぴゅん、ぴゅん、と次々に飛来し三体を貫通していった。効き目があるのは明らかで、僕が殴られた時のように全身が麻痺しているかのような、痙攣しているかのような動作を 顔の無い天使 は突如飛来した無数の弾丸によってさせられている。弾丸にはそれぞれ色があった。青と、緑と、オレンジ…。それらが乱れ撃ちのように混じり合って放たれて、顔の無い天使 三体を、貫く。やがて銃弾の嵐が終わった時、顔の無い天使 たちは、消えていた。

血を流さず全て灰となって、”墓標荒野”の墓標の、その一部分となったということか。

弾丸が飛来してきた方を僕は見る。おそらくたくさん人間がいるのだろう、という予想をしながら。

だがそこにいたのは集団ではなく個人、つまり一人だった。

しかも女、で、僕は少し目を見張った。

(露、露出狂……………のような……………いや……………?)

黒のローブをはだけさせて両手で扇形になるように開き、その口

ローブの下に着ている薄地の白色の肌着が見えている感じ、ちょっと公共の場するには薄すぎ、って感じの。頭に三角帽子を被っているてやはりそれも黒色。なんか、魔法使い……？と僕は彼女の全体像から浮べたが、ローブをはだけさせて肌着を露出させてるのが不自然。こんな荒野であんな格好をしている女、がさつきの青、緑、黄、の銃弾の嵐を放つたのだとしたら、たしかにそれは魔法の成せる技だろうか。だが杖を持つてはいない。彼女が両手で掴んでいるのは、自らの黒のローブの裾だけだ。

まあ、細かいことはとにかく。

九死に、一生、らしい。

………あ、倒れた。

都市の名はHOME TOWNだということを、都市の中では割と簡素な設計のされている宿のその主に教えてもらった。主は僕がそれを尋ねた時、案外こういうことを尋ねる人は多いのだろう、平然と答えてくれた。やはりこの世界に新参者として現れる人というのは、頻繁に現れるということだろうか。だからこの世界でもっとも主要の都市のひとつであるこの場所の名を知らぬ人がいても、そこまで驚かれない、ということが。

木造の宿。木彫りが至るところにされているのが特徴的ではある。「ここもいつ破壊されるか…だけど、破壊されるまでは経営は続けるつもりさ。あんたらも気を付けなよ。……いのちはだいに、な」「ガンガンいつちやだめですかね？」

「いろいろやってみるのも、いいかもしれんが」「めいれいさせろ、ですかねえ」

「ははは。やっぱり、いのちがだいじだよ」「ですよね、ははは」

などと談笑してから、ホットココアを三つ、ミルクを一つ、もらう。ミルクは犬少年のサト用。

「わたしがこんな飲み物で満足すると思われては不愉快ですよ。…どひいー」

愚痴りながらも犬少年はミルクをぐびぐびと飲む。

（自分のことをわたしと言うようになってる。前は僕、だったよな。変な語尾をくつつけるようなのは同じだけど）

そんなことを思いながら犬少年のホットミルクを飲んでいる様子を眺めていた。口元だけを犬化させて、舌を長く伸ばしてべるべる飲んでる。慣れないと少し違和感のある光景だ、と思いながら犬少年の隣でひもじそうにくったりとしている黒髪セミロングの魔法使い、その様子を眺める。

今は黒のローブもはだけていない。ボタン止めるの大変だった。

とりあえず僕らは墓標荒野からは引き返して、HOME TOWN東口のすぐ側にあるこの宿に避難したわけだが、この女はずっと寝ているんだか意識を失っているんだか、その狭間みたいな様子でぐったりしている。時折声を掛けてみると、……腹が……減つ、と悪夢にうなされるようにして言うので食べさせてあげないと可哀想なのだが、僕ら一行は、金銭不足。金が無い。つうか、宿に泊まる金すら無かったのだが、この宿の主が気前の良い人で助かったというわけだ。部屋を用意してあげることは難しいが飲み物くらいはタダであげるさ、などと言ってホットココアとミルクを用意してくれたというわけだ。全員が見るからに具合の悪そうな様子だったから、そういう待遇をしてくれたのだろう。不協和音やら、殴られたりやら、腹が減ったりやら、怯えるあまりの憔悴やら、で宿に入った時の僕らはひどく惨めな様子に映つたに違いない。

だったら飯も気前よく用意してくれたら最高だよねん、なんて甘えられるはずはない。このHOME TOWN東口のすぐ側にある宿は、場所のおかげなのかサービスのおかげなのか知らないが、やけに繁盛していて人の出入りが激しく、なんか旅する者つて雰囲気の中で賑やかな感じなので、ハッキリ言つてここの宿、暇じゃないのだ。多忙なのだ。そんな宿だというのに金の無い僕らを追い出しもせず、飲み物を振舞つてくれたとあつては頭が上がらない。この店の繁盛を願わなくてはバチが当たるに違いない。僕は木造の古めの椅子に座つてから、ホットココアに口を付ける前に、この店が破壊されることなく繁盛し続けますようにと、祈る。の形となるその祈り。誰から教えてもらった祈りの仕方だろう、でも僕はこの祈り方を知っている。以前の世界の記憶の欠片。

さて祈りのことはともかく。ホットココアを啜ると、芯からほどばしるような温もりが、のぼりあがってきた。何だこの温かさ、と驚愕しながら温かさに何度も口を付ける。口を付ければ付けるほど温かくなる。僕はそのことについてドナドナと語り合う。

「これ、めっちゃくちゃ温まるよね」

「あ、俺もそれは思いました」

「ていうか、この宿全体が何か、暖かいというか」

「そうですね。この宿は結構俺も使わせてもらってますが」

「うん」

「いつも宿の主人と、その奥さん。この二人が中心となってるね、墓標荒野とかから憔悴しきって疲れている旅人とか、まあ、あとは料理を食べたくてやってくるお客さんとかもいるんだけど。そういう風に、お客さんはいつも集まってきますね、ここに。良い宿なんですよ」

「いい所にあるしね」

「そうですね。場所も。ただ、やっぱりここに来る人のそのほとんどが求めているのって、暖かさだと思うんですよね。温もり。ここは緋色のランプのおかげなのか、主さんとかの努力のおかげなのか、人が大勢集まっているからなのか、それはわかりませんが、とにかく暖かいでしょう」

「そうだね。さっきまで不協和音を聞かされていたってのもあって」

「特に、つてのはありますよね」

「うん、顔の無い天使 と向かい合った後にこの宿は、良い。かなり良い。癒されるね。お金があれば泊まらせてもらいたいくらいなんだけど……」

僕は一旦言葉を切ってから宿内を見渡す。

酒の入った杯をにぎやかに交し合う疲れを癒す者たちの、笑顔が眩しい。大きな笑い声は下品でひたすらに騒がしいが、まったく耳障りにならないのが不思議だ。スキンヘッド、モヒカン、パーマがあった昆布のような髪、直毛、様々な髪型があり、様々な顔がある。にぎやかな中で落ち込んでいる者もいるが、それも風景の一つとして、全く違和感がない。冒険者にとっての憩いの場。この宿はまさにそういう場所なのだろう、とわかる。料理が次々にテーブルに運ばれては、あっという間に手掴みで食べられ、空になっていく。殻

になっていく。それぞれのテーブルにランプが一つ置かれており、天井にもいくつか取り付けられている。全てが緋色で、暖かみのある色遣いだ。

僕はそれらを眺め終わると、これからどうするかと考えることにする。残り少なくなってきたココアをもう一口啜ってから、瞼を閉じて金色の粒子を見つつ、とりあえずこの女、この人があまりに衰弱しているので食べ物を食べさせた方が良くと思う。でもこの宿に頼るのは間違っているのだから、ならば、自然、ナラクのいる館に向う必要が出てくる。金もないし。ただ自分が下僕として扱われるようになったことを考えれば、はたして老婆の館に向っても黄金の食卓に合間見えることになるかどうか。だが牢獄にいる僕にも残飯が渡されたのだから、何とかなるような気もするのだが。

僕はふと思いついて、巾着袋の紐をほどいて中を覗く。

荒野に落ちてしまったグミは半分程度しか回収できなかった。特に荒野の色とだぶるせいでオレンジを多く紛失してしまって後二個だけになっていた。全色合わせて、大体半分くらいは探したけれど見つからなかった。慎重に探せば見つかったかもしれないが、次の 顔の無い天使 が現れたら終わりだったので、あまり探すことに時間は割けなかった。

ただその代わりに弾丸をいくつか入れてある。 顔の無い天使 を貫いた弾丸は、貫いて地面に落ちた後も、力強く蛍光していたのを見つけやすかった。グミはかすかにしか蛍光しないが、弾丸はそれぞれ赤、白、黄に蛍光していた。三体を貫いた時には青、緑、オレンジの三色として光っていたような気がするが、落ちていた弾丸の色は赤と白と黄だった。僕はそれが気にかかったので、いくつか拾ってきたのだった。色が変わっていた理由は、この涎を垂らしそうにしながら半気絶状態の魔法使いの女に話を聞くのが一番早いのだろうが……まだ意識は回復していない風だし……いや、意識は戻っているのだが、どこかぼやんとしていて、話のできそうな状態じゃない。あ、しかしホットココアに手をつけてぐびぐび一気飲み

した。

よっぱ喉が渴いていたのだろうか。ホットのココアを一気飲みだなんて。

「ぷはー……」

彼女は空になったコップをテーブルに戻すと、焦点の合っていない紅蓮色の両眼をキョロキョロと動かしてから、またぐったりとした。で、「腹が…腹が…」などと苦しそうに呻くのだった。なんか可愛らしいなと僕は思った。でもこの女わざとやってんじゃないだろうな、とも過ぎったのだが、まあやつれているのは確かだから御飯を食べなければ本当に危険なのかもしれない。

弾丸の話をしてもらうなら食事を取らせる必要があるだろう。何だか弾丸は気にかかる。

犬少年がぐったりとしてしている彼女の膝辺りに両手を乗せて、顔を覗き込んでいる。わざわざ大型犬の状態になって。ぺろっ、とその頬に舌を出した。

「おい、積極的だな」

とそんなどうでも良いことを言ってから、僕は館に向うために腰を上げた。

「いくのか？」

とドナドナが宿の暖かさが恋しいのだろうか、寂しそうにいうので、

「寒くなった方が、暖かさがより心地よく感じられるだろうさ」と言っただけだ。

宿の外に出てみると宿の電光看板（うさぎが酒をぐびぐび飲んでラリッてるっぽい絵）がチカチカと目に眩い。うさぎのお腹の部分に酒を表現しているのであるう液体っぽいロゴで、『憩いの竈』と書かれているのが何か、腸っぽく見える。うさぎの腹に文字が書かれているから、そういう錯覚を起こしてしまうのだろう。

この都市に帰ってきた時は夕方で、都市は傾いた陽の陽光に包まれていたが、いまやその情熱的な灯火は息を潜めて、ラメのような煌きの星々が天空を駆けている。今日は雲ひとつ見当たらないが、月は見えない。繁栄の三日月か、ウロボロスの満月か。それとも別の形をしているか。

見えないから、わからなかった。

それにしても寒い夜だ。僕は下僕専用の黒スーツを着用しているが、あと一着、暖かくなるコートでも羽織りたいところだが、そんなのは無い。都合よく向かい側のお店は、お洒落な感じの服屋だが、金ないし。（お店の名前はテリー・ブロッサムと言うみたいだ。シヨーウインドウに書かれてる）。

白の照明に塗れながらシヨーウインドウの中で服が、物寂しそうに見える。きつとあの服たちもあんな所に納まってるよりは『憩いの竈』でお酒を飲んだりしたいだろう。だが、誰かに買われて着てもらわなきゃ、その願いは叶わないだろうね。

そんなことを考えていると、後ろからドナドナと犬少年が出て来た。犬少年はすでに茶色の大型犬に変身していて、相変わらずぐったりしている黒のローブの彼女を乗せている。進んでそんなことをしてる彼を見て、こいつもしかしてスケベ？と思って表情を窺うが犬の表情はあまりわからない。まあスケベということにしておこう。ていうか犬少年は僕の使いだというのに何勝手なことをしているのだろうか。

「僕は、徒歩？」

と、くぐもった声付きで尋ねると、へっ、へっ、と舌を出しながらも間違いなく頷いた。首肯した。ふざけんなよ、と小声で言ってみると一瞬だけ悲しそうに地面を眺めるような様子をしてみせて舌を閉じたが、すぐにまたへっ、へっ、とご機嫌そうに舌を出すのだった。こいつ大型犬の状態でも喋れる癖に喋らない。僕は以前こいつが大型犬の状態でも会話したし。こいつ新しくなって記憶が紛失したから、僕がそのことを知っているのを知らないのかもしれないというか。

記憶がないのは、そういえば僕もそうだったな、と。

そんなことを思い出しつつ、ドナドナの黒ペガサスに乗せてもらおうかと視線をそちらにやれば、もう黒ペガサスは飛翔していた。あ、ちくしょ、と思って憎々しく黒ペガサスの影を上空に眺めていたが、顔を下ろしたらドナドナがすぐ脇にいた。

今にも泣いてしまいそうな、悲しそうな顔をしているのだった。

「置いていかれたの？ ペガサスに」と尋ねると、

「あいつ反抗期なんですよ、多分」

と調子の悪そうな言葉が帰ってきたので、ちよつと同情。僕はドナドナと横並びで適当に会話をしながら、徒歩でナラクの館に向うことにしたのだった。僕の頭の中でドナドナのメロディーが流れそうだったけれども、記憶の調子が良くなってドナドナのメロディー、思い出せなかった。思い出せなくて、良かったと思う。悲壮感強まるし。

しばらくHOMETOWNの東側メインストリートである”スマイル通り”を歩いた。大人間たちが頻繁に砂利道を行き交い、またファッションが奇抜な人が大勢いて、それらが夜道を賑やかそうにしながら歩いていく。この通りの街灯は、白色と緋色が交互に設置されておもしろい。

その、白の街灯と、緋の街灯に挟まれた位置に突っ立っている時

に、聞こえてきたものがあって、それが幻聴でないならば、間違はなく歌。牢獄の中で耳にした綺麗な歌が、幻聴ではなくて耳に流れ込んできたのだ。僕は街灯に挟まれているその位置で、立ち止まり、そしてドナドナに、

「悪いけど待つてくれ。ちょっと用事。……館までの道はわからないから、先に行かないでちょっとでいいから待つてくれ！」

とだけ告げてから僕は歌の聞こえてきたその方角に向って、駆け出す。「え、ちょっと」と戸惑うドナドナに申し訳なく思いつつも走る。白と緋をいくつも潜り抜けて。

やがて、スマイル街道の栄えている所から外れて、街灯の等間隔に設置されている頻度は下がり、行き交う人たちの賑やかさも無くなり、街灯とかに足をつけている灰色の梟が、何故かたくさんいるのが目立った。

僕はHOMETOWNの東側地区内でもっとも郊外なのではないか、と思えるひどい静寂に包まれた所に到着した。帰り道はちゃんと意識しているから大丈夫。右右真っ直ぐ右、と辿っていけばドナドナと犬少年の所に戻れるとわかっている。迷ってもスマイル通りへの標識は出ているだろうから、それを利用すれば何とかなるだろう。

……にしても、周囲の廃墟染みた建物を眺めながら、思う。……歌がこんなに遠いところから聞こえて来るはずはない。………だけが、歌が間違いなく僕の耳には聞こえていた。幻聴？僕は頭がおかしいのだろうか。

点滅している街灯、蜘蛛の巣の張っている標識。まるでゴーストタウンのように静かで、人気がなく、梟のほー、ほー、という鳴き声が頻繁に聞こえる。歌はもう聞こえない。街灯の点滅していて今にも消えてしまいそうな音は聞こえるのに、歌声はこの通りに着いた途端、途絶えてしまった。蜘蛛の巣の標識に書かれている文字は、かすれていて、上手く読むことが出来ない。この通りの名前が書いてあるのだとはわかるのだが、色彩が剥がれ落ちているせいで読め

ないのだ。

本当に暗い、裏路地のような通りだ。歌は残念ながら聞こえて来る気配もない。さっきまではハッキリと耳に届いていたというのに急に、消えた。

……帰り道が面倒だ、と思いつつ、通りの暗闇に目を凝らすと、遙か向こう側だが通りのその最果てにはネリイ湖があるのだと気が付いた。といつても広い湖でこの都市の中心に位置しているのがネリイ湖だから、あれが見える所なんていくらでもあるらしいから、見えるからと言って別にどうということもないのだが。おそらくここは位置的には、東側地区のちょうど最西端に当たるのだろう。ネリイ湖は都市の中心にある。H O M E T O W Nはネリイ湖を中心として作られているのだ。だからネリイ湖から東側にあるのが東側地区とされるし、ネリイ湖から西側にあれば西側地区とされる。

ナラクの館があるのは東側地区の最北端だから、徒歩で向うのは多少骨が折れる。それを想像するとうんざりするが、幻聴を聞いてしまった自分自身にも幻滅する。幻聴に惑わされて十分間以上走ってしまった。疲れた。ただでさえ今日は牢獄から出してもらった初日で、顔の無い天使 にひどい目に遭わされて……そりゃ疲れるわけだ。疲労が原因かもな、幻聴を聞いたのは。

牢獄で聞いたあの歌声に脳味噌も魅せられてしまった、ということかもしれない。

……とんでもない歌、だ。……脳味噌をおかしくされた。

僕はため息をついてから、梟たちに背を向けて”スマイル通り”へと戻るために歩き出した。

あまり皆を待たせるのもどうかと思ったが、走り出すまでには、時間がかった。

幻聴なのが、あれだった。

かなしいって奴。

「右真つ直ぐ右、と辿ることです」スマイル通り」に戻っている途中で、さっきのは夢だったのではないか、幻聴のみならず幻覚まで見ていたのではないか、という気分が変わってきて、背筋がゾツと寒くなり、心細くなる。ドナドナでも犬少年でも魔法使いっばいあの人でも、何ならナラクでも良い。誰にでも言いから会いたいと思つた。会話を交わしていないと、背筋の薄ら寒さだけで死に追いやられてしまうようだ。

だから白色と緋色が交互に設置されている賑やかな表通りに出た瞬間、僕はひどくホツとして走っていたのを、歩きに変えてゆつたりと落ち着く。うさぎの着ぐるみの、もふもふしているのが道でポケットティッシュを配っている。僕はそれを一つもらってから、そこに書かれている広告を見て後に、スーツのポケットに。

ドナドナらしき影が見えてきた。緋色に照らされている銀色の甲冑と、白髪。なかなか目立つ風貌の人だから、遠くからでもよく見える。で、彼は暇つぶしのためだろうか、誰かとお話をしているようだ。丁度、僕の目線からではその人は後姿になっているので、誰なのかはわからないのだが、見覚えのある風格だと思つた………砂漠………斧………見覚えのある………。

僕は立ち止まった。

（なんでドナドナが仮面の人と仲良くしてるんだよ！）

明らかに談笑している様子だった。ドナドナの顔は雑談をしている者の表情をしている。僕は立ち止まったまま、あの仮面の人に見られたら僕は犯罪者としてまた殺されそうになるのか、と考えるとまた背筋がゾツとしてきた。ぞくぞくする。だが、どうなるかわからない以上、関わらないのが吉なのは間違いない。ならば。

僕はピュー、と口笛を吹いた。以前牢獄に居た時に、犬少年と話しておいた彼を呼ぶための手法だった。ここから聞こえるのか心配だが、彼は犬なのだから耳は良いはず。僕は何度もピュー、ピュー、と口をおちよぼさせて口笛を吹く。ぴゅー、ぴゅー。

すると遠くからでも犬少年の耳がびくびく反応しているとわかる。

そして彼はすぐにこちらに気が付いた。さすが犬少年だ。耳が良い彼は、相変わらず魔法使いの人を背に乗せたまま、こちらに駆けてきた。白色と緋色に彼の毛並みが染まる。素早く僕の目の前にまで来てくれて、わん、と吠えるので、

「僕はお前がその状態でも人間の言葉を話せることは知ってるぞ」と言つと、悲しそうに地面を眺めて落ち込むような素振りをしてから、

「し、知ってたんですか」

と申し訳無さそうに言つた。まったく、世間知らずだと馬鹿にするにも程がある。

僕は、これでドナドナも僕が帰ってきたことに気が付いてこっちに来てくれるだろうし、これで僕は背を向けてナラクの館側に歩き続けていけば、自然と仮面の人には背を向けることになるので、仮面の人にはばれることはない。さすがに僕の後姿だけで、しかもちよつと遠い位置からでは、僕だと判断することはできないだろう。

それに仮面の人と言つても、要は 腑抜けた悪魔 なのであり、腑抜けた悪魔 にもたくさんの 腑抜けた悪魔 がいるに違いないのだから、あの仮面の人が僕を牢獄で監視していた仮面の人とは限らない。だつたら、僕が犯罪者だということを知らない可能性もある。だつたら、僥倖なのだが。

「レイナードさんのこと呼んで来ましようか。いくんですよね、ナラク様の館にどへー」

「いや、ドナドナはもうこっちに気が付いてるから、勝手にきてくれるよ」

実際にドナドナは犬少年が突如としてこちら側に駆けてきたのを見たから、その流れで僕がいることに気が付いたみたいだ。それで仮面の人もとい 腑抜けた悪魔 との談笑を締めくくろうと思つたのか、何かを話していて、そして僕のいる方角に向つて一差し指を突き出した。察するに、あの人にずっと待たされてたんですよ、とかそういうことを語っている内に突き出た一差し指である。僕は

慌てて向こう側に背を向けた。そしてナラクの館の方角へと、すたと歩き出した。背筋めっちゃ寒い。ドナドナよ、お願いだからその 腑抜けた悪魔 を僕に近づけないでくれ。

僕は心の中で念じる。

すごく念じたよ。ぐわーっと念じたよ。

その結果。

「おい。紹介しますよー。この 腑抜けた悪魔 さんは俺の親友で……きつと何かあった時は助けになってくれますよー。おい」
「……………」

歩いてくる気配。何も知らない者が、陽気に背後から声を掛けてきて、そしてこちらに近づいてきているのがわかる。二人分の足音 幻聴？いや、違いますねー。ど、どうしよう逃げるか、いや、しかし……………。

と、考えている内にもうすぐ背後に来てしまっていた。逃げることはもう出来ない。逆に怪しまれる。僕はもうにこにここと笑顔作るしかできない。ゆっくりと背後に振り返ると、ドナドナの陽気な顔と、仮面の人の表情のわからない仮面。鉄でできた仮面を付けていて、鉄の板みたいな。工場で熱い火花が顔につくのを妨げるために持つあれ、みたいな。そんな仮面をつけてる 腑抜けた悪魔 がめっちゃ僕の目の前。戦慄が走るとはこのことだ。斧、背中に背負ってるし。凶器を持って街を練り歩くとか勘弁して欲しい。刃はさすがに剥き出しではないが、その威圧半端ナイ。

「こちら俺の恩人で、名前は、…えーと、あれ。…まあ、とにかく俺の恩人で素晴らしい人さ。 顔の無い天使 と戦ってる。……………だから、仲間みたいなもんさー！」

僕はそれは認められない。多分仲間になってすぐ人面瘤があることがバレた辺りで、斧で惨殺されると思う。ていうかこの男はこの世界で随分と長いみたいなのに、人面瘤が犯罪を犯したものにくっつく代物だと知らないのだろうか。 腑抜けた悪魔 は秩序を乱す者を許さないということを知らないのだろうか。おそらく、知って

いるのだろう。知っているが馬鹿なので、何も考えずにこんなことをやっているのではないか。僕は薄々感づいていたのだが、ドナドナは馬鹿だ。間違いない、こいつは馬鹿、だ。

なるほどよろしく。

仮面の人が握手を求めてきた。心臓の鼓動爆発寸前何秒前？握手した瞬間僕の内臓は破裂してぐちゃぐちゃになるだろう。ていうか、仮面の人の握手を出すその手付きが、何か違和感あった。きっと僕が犯人だと気が付いているに違いない。あ、せめて左手で握手してみたほうがいいか。人面瘤は右手についているのだから。

というわけで、僕はわざと左手を差し出した。親切にも仮面の人は右手を差し出していたのを、わざわざ、左手に変えてくれた。その行き違いから一瞬空気が凍ったような気がしたが、ほんの一瞬のことだ、僕は握手を、臓器が壊れること覚悟で、した。そしてすぐにその握り締め合った手を離して、あとは簡単だ、すたこらさつさである。

「では、また！」

と言って徒歩で向おうとしたがその背中にドナドナの陽気な声がかかるとまたもかかる。

「乗り物を貸してくれるそうだよ。ナラクの館を知っていて、乗せてつてくれるってさ！」

いい加減にしてくれないだろうか、と叫びたいのを喉にグツと堪えて、しかし徒歩でナラクの館に向うのは確かにもう疲れてるから嫌だ、という心もある。僕は数秒迷ってから、

「乗せてつてください」

と仮面の人をお願いした。

そしたら、立派な馬車がきた。

月夜を駆け抜ける空を飛ぶ馬車であった。僕らはそれに乗せてもらって、あつという間、数分間でナラクの館に到着させてもらった。多分臓器の一部が腐敗したなりの損傷は受けた気がするが（特に胃腸）、うん、ありがとう仮面の人って感じ。彼は馬車の中から僕ら

に陽気に手を振ってくれて、夜の闇に紛れて消えていった。

ナラクの館のいたる所にイルミネーション。

季節とか関係なく一年中つけてそうだな、と思える目に眩い豪華極まりない、アミューズメントパーク顔負けのド派手な装飾が、庭中にされている。その反射光が館の外壁をわずかに明るくしていて、終末の時が描かれている彫刻がうつすらと見える。どこか気味悪い。

「あれ…ここ、どこですか……」

いままで意識が朦朧としていた魔法使いの人が、犬に跨った状態のまま、起きた。

「なんなんですかこれはわけがわかりません！ ていうか暗いしこの館不気味だしあなた方は誰ですか！ こ、答えてください、あ、わかった誘拐犯ですね誘拐犯魔法使いを嫌ってる人種は外の街にはたくさんいるとお母さんやお父さんや先生から教わりました！ キヤー誘拐犯死ネー！」

荒ぶってる。

犬少年に跨ったままの姿勢で拳動不審にわたたししながら全力で叫んで後に、彼女は身軽に犬少年から飛び降りると、庭にザツと立ち、月の出ていない夜の下、僕がせっかくボタンを止めたばかりだというのに、それを器用なことに黒のローブの裾を左右に扇形となるよう引つ張ることによつて瞬間的に外し、白い薄地の肌着を露出させた。薄らボンヤリとした庭の中でも彼女が肌着と同じくらい白い柔肌をしていることと、あと明らかにひどい混乱をしているのがわかる。やばい、と思った時には彼女の黒のローブの内側、漆黒にあたる部分が、キラツと星の輝きをみせた。僕はその瞬間墓標荒野での夕方のことを思い出し、

「横っ飛び！」

と隣にいるドナドナとあと自分への強調という意味で全力で叫ぶ。そして、僕は左側に跳躍し、ドナドナは右側へと避けたと思われる。そして、僕らが横に広がったことで出来たスペースに容赦のない弾幕。庭師が泣くことになるであろう、くねくねとしている舗道のその敷石が吹っ飛ばされて飛び散って行き、道が曲がっていたのだがあつという間に真っ直ぐになった。舗道が、土埃をもくもくとあげる。

(……な、なんつう凶暴な女だよ……)

土埃のせいで薄目を開けることができない状況でも、凄まじい事が起きたのだと理解できる。やはり彼女は魔法使いだとわかってく

るといふものだ。この世界は本当に僕のいた世界での常識を覆してくる。記憶がなくても、魔法使いが普通に存在するのはおかしいとはわかる。しかも……

(弾丸……さっきのように蛍光はしていないが……あの黒のロープの内側から弾が発射されたように見えた……)

敷石吹き飛ばされて土が盛り返したり埋め込まれていたイルミネーションの一部がバラバラに砕けてしまっていたり。その合間に弾丸がいくつも地面に突き刺さったり転がったりなどし、その数は軽く百を超えているように見える。……身震いが自然と起きる……。危うく全身穴だらけにされる所だった。顔の無い天使 以外で死んでも再生させてもらえると言うが、痛みとはやはり嫌なものだから、弾丸を全身に浴びる味わいを体験しなくて本当に良かった。

僕がそうやって奇妙な安心をしていると、庭の奥、つまり館内が騒がしくなってきた。あんなにド派手な弾幕を場所も気にせずやってみせたのだから、そりゃ騒ぎにはなる。庭師などは憤慨するであろう。というかナラクも憤慨するであろう。僕はもしかするとまた牢獄生活を送る羽目になるかもしれない、であろう。僕がやったわけではなくてもありえそう、であろう。

まず現れたのは寝間着姿の庭師や執事やメイドたち。揃いも揃って水玉模様つまりドット柄のピンク色パジャマを着ていて正直何か嫌なんだけど、まあそれに関しては今はどうでもいい。

「なんかもつとたくさん来た！ なにこれ組織犯じゃんやだやだやだやだやだ身代金とかそういうののために誘拐されたんだー！ 何でお金なんて持ってないよやめてよー！ バカー！ アホー！」

第二射が躊躇なしに絶叫とシンクロしつつ発射されて弾幕すげー。いや、すげーとか言ってる場合じゃなくどうにか彼女を落ち着かせなければ、なんか誘拐されたとか勝手に勘違いしてるんで困った話だよ。自意識過剰な女だね。女ってみんなそうなの？ ふふん、困っちゃうる！

ズバババババババババババ。

…余裕ぶっこいてる場合ではなかった。調子ぶっこいてすみませ
ん。

庭はどんどん荒れていき、イルミネーションも金の樹も果物の樹も、その多くが弾丸にぶち抜かれて駄目になっていく。壊されていく。焦げ枯れていく。ああなんたる、庭師や執事にとつたらなんたる悲劇であろうか。日々手入れを入れてきた自らの命の証明とも言えるような存在でもあっただろうに、運が悪いという理由で三割くらいは焦げ枯れていつてる。こんだけ広い庭の中の三割だから、それだけでもすごい量だよ。土埃もすごい。目頭が熱くなるね、二重の意味で。

僕は懐に閉まってある巾着袋を取り出して中身をこっそり掴み取って適当に人面瘤に食べさせた。もがもが嫌がってるのが見なくてもわかるが、無理矢理食べさせた。そしてあの感覚が来た。『腹の中で何かが造られた』せりあがって来る血の気配。体が弓なりに硬直し、腹の中からせりあがって来るものを、引っ張り出す！が、何故か刀じゃなくて小刀だった。小さかった。何で？一応緑の蛍光を纏ってはいいるから属性は付いてるようだけど、なんですかこれは。小刀ちいさっ。戸惑っている間に、すぽんっ、と小気味良い、風呂の栓が抜けるような音が人面瘤のあたりから鳴ったので何だと思いい視線を向けると、血がついた弾丸が人面瘤の口元から吐き出されていた。ああなるほど僕はまたミスをした、グミではなくてさっき拾っておいだ蛍光する緑の弾丸を僕は人面瘤に食べさせてしまったということか、と理解。凝固されてた液体の量が足りないから小刀になってしまったのだろうか？

まあとにかく彼女を落ち着かせなくてはならない。彼女は肌着を見せる露出状態のまま第三射を放つつもりだ。一応下僕としてはこれ以上館を壊させる訳にもいかない。いや、下僕根性が座ってしまったということではなくて、ナラクにぶち切れられてひどい目に遭わされるのはごめんだからだ。もう遅いかもしれないけど。

僕は隅っこの茂みに隠していた身を立ち上げて、彼女に向かって両

手を振った。

「お、おい落ち着つくんだわあ！」

びびってしまったらしい。声が上ずって変なことになった。でもそのおかげでおそらく通りやすい声になったのだろう、いきり立っていた彼女は裾を広げたまま、僕の方に顔を向けた。くりつとした紅蓮色の両眼が印象深い。今は混乱に染まっているらしきその瞳に射られるとちょっと怖い、まあちょっと怖いと言った程度である。僕は説得をするために口を開こうとする。だがその前に、

「武器とか持って脅すつもりですか最悪だもう最悪ほんとうに最悪」
「うわちよ」

彼女の絶叫と共に第三射が僕目掛けて発射されると思い、僕は、さっ、と地面にうつ伏せになった。し、しまった小刀が逆効果になってしまった。そ、そうか小刀なんて山賊っぽいから、余計に誘拐らしさを演出してしまっているということか。う、うっかり……作戦失敗だ。ていうかうつ伏せになったからと言って弾丸を避けれるとは限らない。ていうか、第一射も第二射も、発射された後には庭は土ごと舗道がえぐれていた。……ということは、僕はうつ伏せになっているが……これは大丈夫どころか、安心どころか、超最悪な選択をしてしまったということではないのでしょうか…？

(死ぬ……！)

そう悟るが今顔を上げたらそれこそ弾丸直撃コースだ。終わった死んだ痛いだろうなあ苦しいだろうなあ再生できるといいなあ早く再生してもらいたなあ…などと考えていたのだが、あれおかしなことに弾丸が発射されてこない。死なない。何で死なないのだろうか？

不思議に思いつつ顔を上げた僕が見たのは、魔法使いの彼女が気を失った状態で一人の男に前倒れとなってよりかかっている状態、つまりまたも気絶してしまっただけということだが、自然に気絶したのではなくその彼女がもたれかかっている男の手によって気絶させられたことは明白だった。そして暗闇の中でもイルミネーションが全て壊れたわけではないから、その人物が誰かなんて一目瞭然で、そ

れは銀色の甲冑で白髪でがたいが良いということだから、つまりドナドナであった。レイナードであった。

何がどうしてへっぴり腰のドナドナが、格好良いレイナードになっているのか。それがよくわからないのだが、とにかくおかげで場は落ち着いた。執事や庭師たちは庭をぼろぼろにされたことを嘆きながらも、もう瓦礫の撤去作業などを行っていて仕事が早い。ピンク色のパジャマが汚れるんじゃないかねえのと心配になるが、まあ気にしないらしい。

やがて館から静かな怒りを心の中で溜め込んでいますみたいな雰囲気の間、三割が廃れ落ちた庭を一瞥。綺麗な執事とミイラな執事を呼び出して何事かを叱責した後に、何が起こったのかを聞き取ったらしく、魔法使いの彼女が気絶している方へと顔を向けた。そして、ぬらっ、ぬらっ、と悪霊のような気味悪いオーラを放ちながら彼女へと接近すると、その顔を覗き込んだ。もしかして知り合いつてもあるのかな、と僕はその様子を見ながら想像したが、

「ふんっ。どこの回し者だねこいつ。まったくひどい話だね、これは私刑かな。朝日が昇り上がると共に墓標荒野に貼り付けにしてほっぽり出して、顔の無い天使の餌食にしてしまおうかな」

などと言っているの僕はさすがに、可哀想じゃん、お前が私刑される気持ちになってみてもいいんじゃないのかね、という気持ちになって老婆の側へと近づいて何か言ってるうと思ったら、その前に何か知らんがレイナードがナラクに跪いた。そしてこう言った。「これは、私の妻でありますので、どうかご勘弁をー！」

すごく良く響く声で大嘘を付きやがった。つつか急に気合入ってるけどどうしたのドナドナ君は、って感じ。異様な気合の入った絶叫であった。

老婆はしばしの間そのあまりの気合に言葉を失っていたし表情も固まっていたが、やがて気を取り戻すと、

「つつかお前だれ」

と、結局何だか話がごちゃごちゃになって収集がつかなくなりそうな流れになったのだった。

やっぱりドナドナは馬鹿だと思う。

何時の間にか僕の隣で後ろ足で首回りを掻きまわっている大型犬状態の、犬少年。僕は彼に向かって「なあどう思うよあれ」と言ったらドナドナの方へと指を出すと、大型犬の彼は舌を出したまま、うなずくようなことをして、わん、と僕の意見を肯定するような吠えを發した。

「やっぱりそう思うよな」

と僕もうなずき返した。

結局、僕も魔法使いの彼女に關してはよく事情もわからぬし、ドナドナがどうせばれるような嘘を付いて事情をややこしくしてしまつたこともあつて、ナラクは僕らの意味わからなさに憤慨して牢獄を使用した。また牢獄かよつ、好い加減にしてくれと叫びたい衝動に駆られるがそれも控えなくてはならないのでイライラして涙が流出する内に涙も枯れて最後には屍のようになって廃人として無言になる、という悲劇を迎えてもおかしくないが、大丈夫だった。というか正直、ずっと牢獄の中にいたいと思うようになってくる程、牢獄生活が気に入ってしまったために、全然イライラしなくなつてきた。何故イライラしなかつたのか。その理由は自分でもある程度わかつている。

まず、もう 顔の無い天使 と戦いたくない、正直。

いや普通に殴られて痛かつたのが、時間を置くにつれてトラウマ化しつつあるというのかな、とにかくもう 顔の無い天使 の顔も見たくない。いや、顔無いんだけどね。人面瘤だつて右腕に付いてるのは不気味だけど、特に体に悪い影響を及ぼさない気がするし。なんつうのかな、赤ん坊に見えてきたよねもはや。可愛らしく見えてきたよねもはや。だから人面瘤なんて気にならないし、そもそも老婆に従えているからつて人面瘤を取り払ってもらえるという話ではなかつた気がする。なんか僕は特にメリットもないのに、下僕になつたような気がする。そういえば。

僕は一体何をやっていたというのだろう。グミなど渡されて口から刀を出して血反吐を吐き、天使にぶん殴られて、さっきなんて露出狂の女に撃たれて穴だらけにされる所だった。この世界は一体何なんだ。あり得ない化け物染みたのがたくさん。もしかすると無限牢獄で時を忘れ永遠の孤独を味わっていた方がマシだったかもしれない。はあ、ため息が出ちゃうわー。牢獄から出たらまた戦うこと

になるんでしょ？それってめっちゃ危険じゃん。しんどいじゃん。ため息出ちゃうわー。

僕はくれた気持ちになつたままだが、何の危険もないこの牢獄の安全ぶり平和ぶりに居心地の良さを覚えてきたのは事実だった。危険な方向だとはわかる。安全や平和を求めて一つの場所に止まるのは人間としてはひどい状態だと僕は知っている。人とは変化しなければならぬ動物だと知識として知っている。変化しなければ、いずれ息が詰まって窒息し、死ぬから。『生きたまま死んでいる状態ほど辛いことはないよ』今、記憶の閃光、みたいなのが走った。誰の言葉だ？まあ以前の世界でどっかの誰かが言った言葉なのだろう。僕は今は記憶のことなどどうでもいい。むしろ重要なのは何時までこの牢獄にいたことが出来るのか、だ。できるだけ長くここにいたい。顔の無い天使 と戦いたくない。……だいぶ、疲れているのかもしれない。

そもそも環境の急激な変化は人間に大きな負担を与えるものだ。帰り道もわからぬ見知らぬ土地を彷徨つたら不安になって疲れる。知らない人と一日一緒にいると言われたら多分、疲れる。急に世界が変わって今まで乙として孤独だったのに、甲を歩き回ることになったら、そりゃ、疲れる。…今まで拒否してこなかったのが不思議なくらいだ。あとどれくらい、この牢獄にいれるだろうか…。

またも、ため息が出た。なさけないことだ。悔しいことだ。しかし危ないもんは危ないし、嫌だと感じることは嫌だと感じる。それが形となつてため息になるのは、素直に感情を表現しているということだ。素直に感情を表現するということは溜め込まないということだ。だからストレスを上手く発散できるということだ。今の内にストレスは発散しておいた方が、いずれ来る事になるであろう。顔の無い天使 との対峙の時にも、立ち向かうことができるかもしれない。まあ、今はまったくそれが出来る気がしないんだけど……あののつぺらぼうを、想像するだけで、駄目になる。気分が悪くなる。つまりネガティブになる。それはよくない。

僕は時折、向かい側の牢獄に投獄されているドナドナに声を掛けて暇を潰したりしつつ、時を過ごした。

一度、なんで妻なんて嘘をついたの年齢的に少し無理があったよ、とドナドナに言った。少し尖った言い方をしてしまつて悪かったが、彼は答えてくれた。

「あれは、不覚だつたんだ」

不覚？よく意味がわからないので聞くと、寂しげな哀愁を漂わせながら、彼は答えてくれる。

「娘がいた。彼女はその娘に、似ていた。……助けたいと思った。だが娘ということには何か抵抗があつて、で、戸惑つて、出た言葉が妻だつた。自分でも思い出すと笑えるけどね。要は、テンパつておかしなことを言つてしまつたのさ。……だから、不覚、だつたんだ」

ドナドナドナドナ。子牛が僕の頭の中で軽トラックに乗せられてどこかへ連れて行かれていく。どうやら彼の過去にまつわる、深く入り込んで良いものかわからぬ話を尋ねてしまつたらしい。申し訳ないことをしたかもしれない。だが、興味も、湧く。

「今、娘さんは？ 奥さんとかも」

「いや」

「……………」

ドナドナは首を横に振つて、目を瞑ると俯いた。それが答えのようなものだつた。

何があつたのかは聞かなければわからない。ただ、それを躊躇なしに聞くほどの厚かましさは持つていないため、

「そういえば、あの子を止めた時のドナドナの動き、すごく速くて驚きました。あれは、あれですね、あれのおかげで庭の損害は食い止められたし、あの子も気絶するだけで済みましたよ。もしあなたが彼女に一撃を入れなかつたら、あの子はナラクの手で殺されていたかもしれない。あなたは彼女の命を救つたようなもんですね」
と急くようにして彼の偉業を褒め称えることで、深淵に向つよう

な流れを断ち切って明るい気分をもたらそうと反らした。

しかし、ドナドナは何か思い出したくないことを思い出してしまつたらしかった。

「う、うう、ううう」

苦しそうに頭を抱えて、彼は寝転がった体勢になると、そのまま起き上がらなくなった。

だから会話はそこで終わった。

僕は自らの浅はかさを感じ取りながら、しかしもう取り繕うことはできないとはわかったから、目を閉じて、寝転がるまではいかないが、壁に身を預けて脱力した。

顔を上げてから目を開くと、蜘蛛の巣が見える。蜘蛛が粘着の糸に虫を捕えている。

僕はあの捕えられた虫のようなものだろうか、と想像してから黒スーツの袖を捲くり人面瘤を眺めた。生まれたての赤ん坊のような顔をしたまま、穏やかにスーハー、と呼吸しているのがやはり不気味ではあるが、嫌いではなくなっている。

しばらく、視線を動かさなかった。人面瘤の呼吸をスー、ハー、と静かにしているのを眺めていたのだが。

顔の無い天使に怯え、牢獄の外に出て行くことを嫌だと感じる心が、静まった時というのがあった。唯一その時間だけ、心は休まり一時的に勇敢にさえなれた。

それが綺麗な歌の聞こえる時だったということだ。三日間牢獄に閉じ込められていたが聞こえたのは一度だけ。だがその一度だけこそが、凝縮された時間ではあった。幸福の凝縮。勇敢を蓄えさせてくれる、生の象徴みたいなぎゅうと詰まった。

僕はそのぎゅうぎゅうに詰まったのを浴びた日に牢獄から出してもらったから、実にポジティブな心持ちで犬少年の尻と尻尾にくっ付いてナラクのいる翡翠ルームに向かうことが出来たというわけだ。

牢獄の中で考えていたことがある。

どうすれば、ナラクの下僕をやめることができるのか、ということ。

少なくともそう簡単じゃない。何せ僕には弱みがある。無限牢獄から引つ張り出してもらえた恩、という弱みだ。ナラクは僕が下僕になることを拒否した時には、この弱みを引つ張り出してくると想像が簡単につく。となるとやはり、そう下僕をやめるのは簡単じゃない。

だが永久に下僕では辛い。つまりどこかで線引きをさせる必要があるのだ。ある程度下僕として活躍したならば僕の弱みは条件として成立しなくなる、というか僕の活躍という強みがその弱みに対抗できるようになれば、僕は下僕という縛りから解放されるはず。

となるとやはり難しい。顔の無い天使 と戦うことを老婆はお望みなだから、どうにしろあれとの対峙はやり過ぎ事の出来ない関門ということだ。また口から刀は引つ張り出さなければならぬ。あの身体が痙攣する感じはキモチワルイ。嫌だなー。だが嫌と言っていたらおそらく下僕のままだし、下僕ということは無理難題をナラクから押し付けられても断れなくなる可能性が高まるということだ。相手にとって有利で、僕にとって不利な状況が、濃厚に続いていくということだ。そうなれば辛いのは僕だ。理不尽な辛さは本当に辛いことだ。だから僕は、活躍しなければならぬ。老婆を驚かせ退かせるような活躍を、しなければならぬ。それこそが活路ではないのか。それこそが希望ではないのか。ならば僕は、やはりそれを目指すべきではないのか！活路活躍希望活路活躍希望活路活躍希望活路活躍希望！……うあー。

通路を歩いている途中は、そんなことを考えていた。念じていた。念じている間は犬少年の尻と尻尾をずっと見つめていたわけだが、

犬少年は勿論そんなことは知らなかつただろう。犬少年の尻尾はやけに、くるん、とじていて面白い。

そうこうしている内に、翡翠ルームに辿り着くと、ミイラな執事と綺麗な執事がナラクの両隣に位置し、そしてそれとは別に三人の人間が見受けられた。つまり計六人が、その翡翠ルームにて集まっていた。

そしてその別の人間とは、一人は黒のローブ、魔法使いの露出狂女である。

あとの二人は見覚えの無い人物であつたが、女性だとはわかる。その二人の女性は片方はナラクと同じ程度の見た目と思わしき老婆で、風貌は占い師といった印象で妖しい。もう一人はその付き人と思わしき雰囲気を持っている、丁寧語が上手そうな女執事と言つた所だろうか。その二人が部屋内の入り口から見て右側に位置している。左側には魔法使いの露出狂女。

そして中央にはナラク。浮かんでいる青紫色のキューブに玉座を置いて、全員を見下ろすような高い所に位置している。相変わらず偉そう。

だから、今しがた犬少年に連れられた僕とドナドナが入り口から入つてすぐの所に位置したことによつて、その計九人の位置を線で結べば丁度ひし形の形になることだろう。

僕は困窮する。見知らぬ人間がいるというのは想像していなかつた。しかも占い師という雰囲気の老婆はナラクと物腰が似ていて一筋縄ではいかない空気を醸し出している。さらには左側にいる魔法使いの露出狂女は、自由に動けないよう拘束されている状態で哀れだ。いかつい拘束具。彼女を辱めているような、不恰好となる拘束。どういふつもりなのだろうか。

そしてナラクはいつも通り枯れ木のような自身を装飾品で飾り付けて、上から僕らを見下ろしている。そして僕らは戸惑うことによつて何も言えない気分追いやられて、早速圧されている感覚だ。

様子見と行こう。

誰かが話すのを待つことにする。圧されている状態ではどうせ駄目だ。

そういう訳で僕の選択は沈黙。だんまりをすることだったが、右隣に突っ立っているドナドナが怒鳴るようにして声を発したのは沈黙の数秒後のことだ。

「あのように尻の痛くなる場所に三日も閉じ込めて！……イボが出来た！」

僕はそれは可哀想だなとは思うが、何もこんなタイミングで言わなくても良いではないかと感じる。僕はナラクが生意気な口を叩かれたことで不機嫌になるのではないかと不安になった。

しかし大丈夫だった。なんとドナドナは鹿十された。

僕をかつて鹿十したしっぺ返しが彼に訪れたのかもしれない。まあ、僕としても下手にナラクの怒りを買うよりかは、鹿十してもらった方が平和で好ましいので、良かった良かった。

ドナドナは鹿十されて戸惑ったらしく、目を見開いて口をぎゅっと結び体を硬直させている、みたいな奇妙な表情。へっぴり腰。ドナドナらしい弱気な姿勢と化して、口を閉じた。呆気ないものであった。

こうして場は沈黙した。何か稼動するようなゴオオ、というくぐもった音が鳴っていて、一体これは何の音だろうな、と青紫色のキューブを眺めながら思った。翡翠ルームは相変わらず翡翠色だらけで幻想的。

約一分後。

「はんむ……」

声を発したのは僕らから見て右側の位置にいる、占い師という風貌に見える老婆。小さなキューブの一つに腰を下ろしていたが、立ち上がる。ナラクは枯れ木だが、この占い師老婆は一言で言ってしまうと柏餅というイメージ。ぶくぶくしてるのに葉が纏いついてるみたい。丸い老婆である。

占い師は僕のいる方を一瞥してから、憎々しげに舌打ちをしゃが

った。ちやつ、という露骨に口の中で鳴らした音が聞こえる。で、ナラクに顔を向けてから言った言葉。

「頼りがいが無さそうに見える。本当にあれに、人面瘤を任せなければならぬのか？」

頼りがいがなさそうとは僕に対する評だろう。イキナリ悪口とは、言ってくれる。何かしらの反論を述べたい所ではあったが、ナラクが「頼りなさそうという点では同意するが」と言葉を継いだことによつて、二人の会話となつてしまった。

僕らは会話を黙つて耳にする他ない。

「反対だねえまったくもつて。どういつた人間なのかは知らないが、男なんてのは基本的には大概が甘えるばかりの産業廃棄物。…自分で甘えていると気が付くことすらもできない、自覚というのが下手糞な分類に一大事を任せるなど……」

「まあ、人によるだろう。少なくとも刀を引つ張り出すことはできた。素質はあるのだろうか」

「だが本性というものはわからない。どんな邪悪をその身に潜めているものか！ アア汚らわしい性を持ったこの連中さ。ならばやはり人面瘤などという手法を選択することは、過ちを導くぞ」

「だがこの男を信用さえすれば、成功の確率が高い。この世界にきてすぐに仲間を作っているようでもあるし、もしやすると人望のある者かもしれぬ。ならば、信用するに値するかもしれぬ……」

占い師の老婆は、ナラクのその言葉を聞いた途端にアハハハと大きく笑った。

「…信用？ 信用などといった？」

占い師のバアさんの琴線に触れたらしく、ヒステリックな調子で身振り手振りジェスチャー。

ナラクはそれを上から冷静に見下ろしている。

そこで何かナラクが彼女を煽るような言葉を放てば、占い師バアさんは暴発していたかもしれない。だがナラクがあまりに冷静な、冷徹と言つても良いほどの眼付き…そう鷹、鷲。その眼が占い師バ

アさんの感情の激怒を抑え込んだように見える。

占い師バアさんは左側にいる、拘束されている魔法使いの露出狂女、その目の前にまで歩いていくと彼女の耳元に何かを囁いた。何を囁いたのかは僕らの位置では、遠くて聞こえない。

が、どちらにも幸せそうな顔はしていないので、仲の良くなることを囁いた訳ではないのだろう。

魔法使いの露出狂は、その紅蓮の両眼で占い師を睨みつけていた。互いに睨みあう女。

先に眼を反らしたのは、占い師の老婆の側だった。

「この魔法使いは北西の果てにあるノーザン湖、その都市からやってきたのか？ 珍しいな、火あぶりの刑にでもして燃やし、その燃える時に発される異臭を楽しむ。そんな趣味に目覚めて、こんな拘束をしているのかい」

意味不明なことを言っているなと僕は思った。ジョークか何かであろうか。ナラクはウケたらしく相変わらずの隙間風みたいな感じで、スースーと笑ってから、

「お前ってマジで馬鹿だよな」

と言った。で、続ける。

「そんなグロテスクな趣味に走るわけないじゃん。そんな女私だって嫌だけどもさあ、そんなグロテスクな行為をすることで鬱憤を晴らすとか、そんなことしないよ。そんな、自分自身が恥ずかしくなったり打ちのめされて鬱屈気味になるくらいだったら、うまくその娘を利用して方策を考えて、手取り足取りとしてやる手法を考えるついで。あのねえ、世の中つてもっと複雑でしょうが。馬鹿と利口が二極化してると言っても良いよ。馬鹿に辟易させられて、利口に利用される。これが一番損だと思わないかい。私がここでグロテスクに走ったら、それこそ阿呆だよマヌケだよ」

ナラクは冷静な口調で長々と語っている。静かな怒りというものが滾っているように見えた。

僕は話し長えよ、ということと、娘を利用するって宣言したら娘

の方も警戒しちゃうじゃん、ということも思った。それとももう娘を下僕にする為の材料をナラクは揃えているんだろうか、とも感じる。下僕なんて、なっちゃんいけなないものだ本来は。負けて負けて負け続けて至る、最後の砦みたいなものだ。しかもその砦は紙で出来ていて、下僕の自分自身だけが見張り台に立たされて、砦の数箇所にも導火線が置かれていて、支配者から何時でも背後から火を点けられてもおかしくないみたいだ。

でも自らが生きる手段を持たないから、下僕になるしかない。

なんとという不幸であろうか。なんたる理不尽であろうか。いや、理不尽ではないかもしれない。

ただ不平等なだけだ。だが世の中が平等なんて嘘は誰が言った？ 勝ちを取らないままやり過ごすという選択は一定の負けを認めてもいる。だから不平等は、実は理に叶っている。勝利を掴もうとした人間は、ある一定の勝利を手に行ける。それでも一定だろうけど。

そしてそんなことを考えている僕自身は、この世界のことを何も知らないから、敗北し、下僕。以前の世界ではどうだっただろうか。そこでも下僕だっただろうか。まあ、誰かしらの下僕ではあっただろうね。一人称が僕だし。

そんなことを考えている間にも、ナラクと占い師のババアは色々話し合っていた。

この二人、ライバル、みたいな関係っぽい。

「お前は相変わらず単純だ」

「貴様は相変わらず他者を利用するばかりだな」

こんな牽制みたいな言葉ばかり掛け合って、一向に会話がもぞもぞして、次の展開に進まない。僕は隣にいるドナドナに小声で「楽しい？」と尋ねた。ドナドナは「つまらん」と答えた。だよなえ、と僕はうなずきを返す。

でもまあ、僕はそんな連中の下僕に過ぎないんだけど。ぬふー。

あ、犬少年の語尾がちよつとつつってきた。嫌だなあ間抜けっぽいじゃん。

で、まあ僕もドナドナも犬少年も左側にいる魔法使いの露出狂女も、占い師の側近づけばい女も、綺麗な執事もミイラの執事も、みんな彼女らに文句を言わず、ただ時の過ぎていくのを待っている。なぜなら彼女らに太刀打ちできないと諦めているからであって、厄介だと理解しているからだ。話している二人は自らが厄介だと思われていると知ったらシヨックは受けるかもしれないが、その態度を改めようとはしないだろう。人間とは誰しも、意地っ張りで頑固みたいな性質を持っているのはどの世界だって変わらない。見栄張りなこともね。だから勝ち負けを気にするんだもんね、僕みたいに。うほーん。

僕は捻くれるばかりで、

『自らが下僕にならないための交渉』

をすることもなくぼーっとしていた。相変わらずくぐもったゴオオという音のする翡翠ルーム。それがさらに眠気を誘う。老婆二人の話が長びいていて待ってるの気だるいなー、みたいな感じにされる。

その途中、脇に控えていたミイラな執事が、隣にいた綺麗な執事に何かしらの耳打ちをして、互いにうなずき合うのが見えた。ミイラ執事は小刻みに数回首肯してから、翡翠ルームの床を歩きカツ、カツ、と音を鳴らしてナラクに近づいていく。そして恐々とした様子も見せず、淡々とタイミングを窺っているかと思いきや、会話の合間を縫ってスツと、ナラクに耳打ち。そのタイミングがあまりに完璧だったので、老婆二人は盛り上がっていた長話を邪魔されたというのに怒りはせず、不機嫌にもならなかったようだ。ナラクはミイラ執事に何かを言われたことで納得したように頷いているじゃないか。老婆の機嫌を全く損ねなかった。ミイラな執事は熟練だね。素晴らしい。

さて僕は感心している訳だが、それはすなわち油断をしているということ。だから長話を止めたナラクが首肯を終えてから発した言葉に、戸惑わされたのだ。

「では、人面瘤を持った下僕よ。己の力を証明する機会を与えてやるるか」

証明？機会？

僕が期待していたことを老婆の方から口にした？

それは単純に受け入れていいことではない。僕から提案して老婆に考えさせるなら話は別だが、老婆側から提案するというのは……。だが、僕は拒んでいい立場でもないのも事実。老婆からの提案は全て受け入れるのが下僕というものの劣悪たる環境だ。

「どうということ、でしょう」

尋ねると、ナラクは萎れている身体の背筋を伸ばすような仕草をしてから、玉座に片肘を付き、ふうん、と何とも気だるそうなため息を付いた。その後には何かを言うのかと思っただが、案外何も言わず、ゴオオ、という翡翠ルームの嘶きが耳障りに感じられた。

……パチン。

音。それは、綺麗な執事が指ぱっちんをした音、だ。それが突如響き渡り、何かが起こるであろうことを僕らに予感させる。隣でドナドナが身構えてきているのがわかる。僕も周囲を警戒しておく。僕らにとっての不穏な気配が漂い出したのは間違いなかった。何処かしらからの殺意が、僕、に向けられている。そのせいか、見える翡翠ルームの景色が黒の濃霧に抱きかかえられているような……そんな風に感知できる。綺麗な執事による指ぱっちんから沈黙は数秒間、持続し、誰がその静寂を破るのかと思われたが……やがて生じた変化は、僕から見て左側、その位置より生じたのだ。

左側にあるもの。それは、露出狂女。そしてそれに取り付けられていた物々しかった彼女を辱める拘束具。それが、腐敗色の粒子、そのような姿形へと転じ始めた。固体から気体へ。拘束具はもはや彼女を拘束しなくなったが、その替わりに彼女の身边に纏い付く、匂いのようになって、漂うオーラとも呼べそうだし、禍々しい悪意だとも呼べた。

一体何が起きたのかと考えれば、綺麗な執事が指パッチンをした

ことから言つて、ナラク側の作為であることは明らかだ。魔法使いの彼女が魔法を使つて、拘束具を取り外したという事ではあるまい。その証拠に、彼女の紅蓮の両眼には光が映っていないように見える、というのはまさに死んだ魚の目のようであり、意識がないのだ。

だが彼女はこちらに身体を向けた。

(やる気……か……?)

あれは戦いをする構え、だ。眼には意識が灯っていないにも関わらず、彼女の身体は腐敗色に纏われながらも、よたよたともしておらず歩調はしっかりとしている。僕はナラクや占い師の老婆、またその近辺たる連中である執事など、その様子、主に表情などを探つた。すると明らかにナラクが楽しんでいることがわかる。ニヤニヤと悪趣味な笑みを浮かべていることがわかる。

(憎たらしい……!)

僕はナラクに対する感情として、真つ青な炎を内部で燃やした。どろどろとした粘度のある真つ青の炎。つまりこの状況、やはりナラクにとっての快樂!

奴が主催する奴が楽しむための催しですか!

(いや、占い師のバアさんに僕が人面瘤を持つ者としてどの程度の実力があるのかを示したいということでもあるのだろうが、にしても酷だな、僕はハッキリ言つて戦闘に自信なんてねえんだよ。顔の無い天使 に対するトラウマを簡単にこびり付かせてしまうような、弱者なんだよ。そんな僕に魔法使いなんてファンタジックな奴と戦えつて訳? ナラクは僕にどうしてもらいたいんだ? 占い師のババアの鼻を明かせてやりたいなら、僕は魔法使いに勝たなきゃいけないんだろ? あんな激しい弾幕を放つ奴に勝つて? 勝てるわけないよな。ハッキリ言つて)

そこまで考えて、ソウカ、と絶望した。

(ナラクは僕を負かしたいのか……! そして、僕のせいで占い師のババアに笑われたということを利用して、より僕を下僕化させる。そういう思惑……! 奴は僕が勝てないとわかっている……!)

殺されはしなくても負ける可能性は大。負ければナラクに一本取られたね状態になって、僕はより老婆の下僕として頭が上がらなくなってしまう。理、理不尽、だ……。

「さあ、ゲロ野郎！ お前が勝てば、そのゲロ野郎という醜い名を改めてやろう！ ただお前が負けたならば、私は恥をかくことになる。心底より憎んでいるこの占い好きの単純ババアに私が笑われることになる！ そんなことになれば、ゲロ野郎よりもさらに恥ずかしい名を与えられると覚悟しろ！」

僕は呆然とした。完全に、上から目線のぼこぼこじゃん。

「く、くそつたれだ……ド、ドナドナ……そ、そういうえあの魔法使い君の懐に踏み入って彼女を気絶させていたのは、あれはどうやったのさ」

最後の希望。だが彼は首を横に振ってから、お手上げ、みたいなジエスチャーをした。

「あれは騎士としての鍛錬の賜物。悪いが、口で教えられるものではない。すまないが、なんとなくやってる動きだ、あれは」

「く、くう……ば、馬鹿のドナドナに期待した僕が馬鹿でした！」

ドナドナのジエスチャーのせいでむかむかしたが、今はむかむかしている場合ではない。

やるしかないらしい……僕は息を大きく吸ってから、巾着袋を腰から外した。何色が効果的なのかは知らんが、まあまずは武器がなくては勝てない。人面瘤の様子を窺うと、呑気そうに口を、アー、アー、みたいにさせている。に、憎たらしい……。だが、今はそういう憎たらしいとかむかつくとか、そういう感情は邪魔だ！

僕は適当にグミを人面瘤に食べさせてから、前を向いた。

腐敗色を身に纏った魔法使いが、何時の間にか杖を手にしている。ステッキ、みたいな。

あの魔法使いは杖も使うのか。魔法使いらしいけどな、と思っているとナラクが上から声。

「この翡翠ルームに弾丸をぶちまけられても困るからな。遠距離戦

は互いに禁止だ。己の得物を使って、接近戦で決着をつけてもらう。そのステッキはそのためのものだ。当然、刀で一撃でスパツと切れような柔なものじゃないと、理解しておくように」

むかつとくるなあ。心の奥底の青い炎が滾りそうになるなあ。偉そうに説明しやがって、と怒りたくもなる。

だが重ねて自分に心がけておくが、そういう感情は今邪魔だ。

『腹の中で何かが造られた』

僕は喉から白い霧を纏った刀を引つ張り出す。血がずぶしゃあと撒き散る。痛みは以前よりも和らいでいる。刀の重さも、軽く感じる。身体も軽くなつたように感じる。なんか、思ってるより調子が良い？いけるかもしれない。

あの良い様にされている露出狂魔法使い。意識のないあれを倒すことが出来れば、僕はナラクのために活躍できたということになる。ナラクがライバルである占い師のババアの鼻を明かせることになるっばいから。活躍すれば、僕の権限は高まる。だから下僕から脱することができるようになるはず。良い名を与えられる。ゲロ野郎など、おかしなことだ。

「やってやるしか、ないな」

僕は刀を構えた。素人の構えだろうが何だろうが、勝ちやあいんだ。勝ちやあ！

まずは下僕卒業！

と意気込んでみたはいいが、腐敗色を纏ってる露出狂女の紅蓮の眼付き、めっちゃ怖い！

お化け屋敷のギミックみたいな。ただでさえ幻想的な翡翠ルームという背景と相まって、何か予想の付かないことをしてくる感がアリアリ。顔の無い天使と同じくらい不気味。こりゃ、トラウマ化する可能性が充分ではありませんでしょうか…。

僕は白のグミを食べさせたことによつて白霧を纏った刀の柄を、ぎゅっと握り締める他ない。冷や汗が出る。刀を手から滑らせて落としてしまうのではないか、という悪い予感がする。何か緊張のせいかふわふわして、足元がおぼつかない感じ。顔の無い天使と対峙した時と同じだ。

このままではおそらく、ただでさえ無い実力をまったく発揮できないまま、負ける。

えっ、負けちゃうの、って感じ。自分のことなのに他人事みたいな。なさけないなー、みたいなの。

まったくもって、そんな場合ではない。

こんなんだから、下僕になつてしまふ性分なのだ。

「う、う、うおお」

気合を入れるための唸り声みたいなのを無理矢理出してしまったのを、出してしまった後に、これは滑稽な声を出してしまったと感じる。

本当なら相手の出方を窺うなりの思考をしなければならぬのに、自分の滑稽な声だせえ、みたいなことを感じているのだから、それが遅れを取る要因となった。

「……………」

突き出した、突き。それを軽い感じで彼女は、しゃがみ、をすることで避けてみせたのだ。

つまり自分の滑稽な呻き声だせえ、とか考えながら突きを放ったせいで、その突きのコースが至極単純な真っ直ぐになってしまった。もっとフェイントとか入れた方がいいのに。当然、ただの真っ直ぐな素人の突きなど、簡単に避けられて当然。にしても彼女の動きは敏捷だった。おそらくこの魔法使いの露出狂、なかなかの手練れなのだろう、やはり別に強くもない僕が戦う相手でもなかった。僕は以前の世界で戦闘をしていたのではないかと、顔の無い天使との初戦の時に思ったが、終わった、こんなに一瞬の間に思考が鮮明ということ、僕は負けるのだ。もしかして死ぬこともありえないんじゃないの？

そう思いつつ視線をしゃがまれた方向に向ければ、瞳に光が入っていない紅蓮の両眼。それと、その下方向から力を込められて差し出される、ステッキによる、……突き。

ずんつ。

岩が昇り上がってくる、そういう重たい衝撃が腹部に走る。

「かはっ」

呻きが吐き出された。

そして気が付いたら地面に横たわっている。

今、一瞬僕は意識を失ったのか、と思いつつ慌てて倒れている身体を起こすと、こちらに無表情のまま突っ込んでくるステッキを構えた魔法使いの姿。その走行の仕方は戦うものの効率の良いそれ。僕の背筋は異様なほど震えた。

向ってくる魔法使いが悪鬼に見える。くるな、と叫びたい。

だが下僕にも下僕のプライドがある。誇りがある。せめて僕はさっきの滑稽な呻き声みたいなのは一言も出さないまま、無言で果てようではないか、と自らで誓う。

魔法使いはステッキを僕に突き出すための構えを取るのが、スロームーションで見える。ナラクが笑っているように見える。占い師のババアも。その他の執事たちも。憎たらしく、全てが……スロームーション……。

僕はスローモーションにステッキが振り回されてくるのを、自分もスローモーションであるがために回避することが出来ず、左頬に直撃。吹っ飛ばされた。

ずざざざあああと地面と黒スーツが擦れ合うことで背中が火傷したかと思えるほど熱くて痛い。当然背中だけでなく、殴られた瞬間など首の骨が折れたか、つか顔が吹き飛んだのかと錯覚した。痛すぎる。圧倒的に負けすぎる。やばいよこれ、聞いてないよこれ。彼女は容赦なく攻撃してくる。攻撃を絶やささない。

ステッキで打たれること一度や二度では済まなかった。全身をぼきぼきにされて、もはや再起不能ではないかと不安にされる。悪鬼は光の灯らぬ紅蓮の瞳で何度もこちらに棒を叩きつけてくる。ステッキというか、普通に棒。撲殺の臭気。腐敗していく自らの身体。繰り返される痛みは電流がほどばしるより遥かに刺激が強く、身が崩壊していくとわかる。電流が流れるたびに身体の組織が崩壊して、ミンチになっていくかのような苦しみを味合わされている。碌でもない経験だ、一度叩きつけられる度に身体が跳ね上がる。跳ねて、静まったと思っただけまた跳ねてる。それが何度も行われる度に、もう自分がどういう存在なのかわからないみたいな哲学的思考に塗り潰されてぐちゃぐちゃなイメージ。全て平らに潰されて、こねられて団子になっていくその過程であるかのような。抵抗が一切もう出来ないのでは料理される食材と同じ。思考がまだ続いているのが不思議なくらいだ。何度棒で叩かれた？脳味噌はまだ平らにされていない。でもいずれば……。

おう、おうおうおう。もう僕はまっただらだ。幽体離脱だ。自分の身体が外側と内側をひっくり返したみたいな様だよ。内臓が全て外側に飛び出ちゃったみたいな様だよ。それを僕が見下ろしている幽霊状態ってのは、きっと魔法使いの彼女が僕を叩きすぎたのが原因。当たり前だの木。ミンチ肉体。うげえ……。

ドナドナが間によやく入ってくれた。どうやら時間的にはさほど、経過してないらしい。ほとんど一瞬のことだった可能性もある

る。僕はあつという間にミンチだったに違いない。

そのミンチとなった僕を僕が見下ろしている。不思議な感覚だが、どうやら夢ではないのは残念でドナドナが悲しそうな怒りそうな吐きそうな顔をしながら、錆付いた剣で魔法使いが僕の身体をそれ以上臓器塗れにすることを防いでくれた。ガキン、と良い音。血管が浮き出ているドナドナは、すごいね、彼女と拮抗しながら大声を張り上げた。

「俺はこの方に恩を返すと決め、そのためにこの方の刃となることを誓った者！ 故に、私がこの戦いに手を出すことは、このお方の代理として振う刃である！」

僕は感動した。ドナドナなんて良い奴なんだ！ しかしナラクは嫌な奴だ！

「代理などは認められない。今すぐ下がれ。お前の刃は所詮お前の身体より、お前の力によって、振われるものだ。私が見たいのはその下僕、人面瘤を持った下僕の芯なる力。まだ決着はついておらん、私刑にされたくなければ、今すぐにその身を退くことだ！」

ナラクは何を言っているのだろう。

どうみてももう僕は再起不能。死としか言い様の無いほどに肉体を朽ち果てさせているし、意識である僕自身はこのように空間に浮遊し、僕を見下ろしている。芯なる力などもう出しようもない。身体は外側と内側がひっくり返り、人の同情を誘うグロテスクな有様。この世界では死んでもこのように幽体となるとは知らなかった。八十年周期で再生されるまでずっとこの状態か…。

そんなことを考え退屈なる時を想像してくよくよする僕であったが、しかしそう退屈な時間が簡単に訪れる訳ではないようだった。

ナラクの一差し指が、僕。幽体離脱している僕に、向けられていた。

「さあ、下僕よ。もうちょっと頑張ってみろ」

そう言われた瞬間にクイツ、と下に引き摺り込まれる。

うわわ、と慌てている内に、もう身体の中に意識がすっぽりと入

り込んだことを知る。

内側と外側がひっくり返っているまま、僕は復活し立ち上がった、刃の柄を握る。心臓も小腸も大腸も膀胱も食道も肺も肝臓すい臓も筋肉もその他全て、僕は剥き出し状態であるというのに生きていた。痛みも無い。間違いなく生きてる。身体が動いている。全ての臓器を剥き出しにしているのに僕は、生きてる……。こんな嫌だ。こんな姿で生きていきたくない。人体模型を百倍気持ち悪くしたものをやるうという企画の元作られた肉人形みたいな。何これ。

「 # % & \$ % \$ # \$ # & % ” % 」

声がろくに形にならない。めちやくちゃだ、怪物だ。執事とか占い師のババア、さらには犬少年やドナドナとかも僕の姿を唾然と眺めて、明らかにどん引きしている。どん引きなんてもんじゃない、この世の最たる不愉快に出会ったとも言いたげに、頬を引きつらせて、身体を強張らせている。当たり前だ。こんなの僕だって不愉快だ。

「 # % & \$ % \$ # \$ # & % ” % 」

こんな姿嫌だ。まっとうな姿に戻して欲しい。泣き叫ぶようにしてそう主張したいが、わけがわからない感じになるばかりで、感覚が混乱してくる。いやだ、外側と内側が何でひっくり返っているんだ。殴られて普通こんなになるか？そうか魔法の杖ということかステッキで殴られたからこんなに素敵なことになってしまったのかステッキなだけに。ありえねえありえねえ。

「お前がどうにも気合が足りないみたいだから、遊んでやったのさ。さあ、頑張らなかつたらお前はずっとその姿のままだ。それが嫌だったら、白の霧纏う剣で、腐敗した匂いを纏ったその魔法使いの女を、見事倒してみせよ。さすれば、すぐにまともな姿に戻してやるぞ」

はいやっぱりそういうことね。ナラクの差し金ね。はいはいなるほどね。

いつか絶対に……。

僕の中で粘度の強い青い炎が青い火炎と呼べるほどに燃え上がってきた。

「言葉にならない言葉しか叫べないし、その叫びによって皆を怯えさせてしまっているが、気合を入れるには充分だ。なるほど魔法のおかげか五感も鮮明だ。痛みもない。」

「だ、だいじょうぶなのか……」

ドナドナがそんなことを言っている。大丈夫なわけないだろう。だがこんな姿僕だって嫌だ。ナラクの思い通りになるようで悔しいが、どうやら、そういう理由で自分の全力を発揮できそうだ。

犬少年が背後で吠えた。それを契機にして僕こと人体模型のひどい感じにしたバージョンみたいな見た目の肉人形、走行を開始。こんなの怖くて普通なら相手に出来ないだろうが、光の灯つてない無意識の魔法使いは、当然そんなことを気にもしない。ステッキを振り上げてくる。だが今の僕はひどく冷静だ。青い炎を胸内で滾らせているが、とても落ち着いたものだ。翡翠ルームのくぐもった音が鳴る中、勝負は一瞬でついて静寂が広がる。そしてその後に撒き起こったのが、ナラクから発された賞賛。

お見事、お見事。皆、拍手を！

前も聞いた気がするこんな言葉。パチ、パチと執事たちの拍手。占い師も渋々拍手をしている。倒れているのは魔法使いの露出狂。服が裂けそうになっているがぎりぎりセーフみたいだ。ドナドナと犬少年も背後より拍手。ぱちぱちぱちぱちという賞賛の元、超不気味な僕の肉体は皆の賞賛に応えて、両手を挙げて大きく手を振る。で、手を振っている間に僕は元通りの姿に戻った。黒スーツの下僕の姿。で、勝利者には新たな名が与えられる訳なのだが、その新たな名というのが、

『テング』

という名だったので僕は何だか微妙だなと思ったので、やっぱりゲロ野郎でいいですと申し出たが、駄目だと即座に否定されたのだ

った。僕は今日からはテングである。ふうん、みたいなの。
不運、みたいなの。

数日が経過。

『ゲロ野郎』から『テング』に昇格させてもらった僕ではあるが、下僕として扱われるという点では以前と何ら変わらない。下僕として昇格した結果、館内での雑務を任せられるようになったのが意味わかない。理不尽だと思う。黄金の食卓の残飯ばかり食わされるし（まあ、めちやくちやおいしいんだけど）、基本的には黒スーツ以外の着用が認められないし、ナラクの命令が無い限りは自由に館外へ勝手に出掛けることも許されない。嫌な感じだ。鉛色の感情鈍くなる感情線。眼を瞑れば見える黄金色の粒子が、心無しかくすんでいて色落ちしているように見えてきた。

だがそんな感情の時にも、僕の部屋と化した牢獄内で時折聞こえて来る、あの歌。希望の歌。綺麗な歌。それを耳にすれば途端に感情は鉛色から清しい青色へと転じていく。数日の内に一回聞こえるか聞こえないか。時々一日に数回聞こえて来ることもあるのだけれど、僕とてずっと牢獄にいるわけではなく雑務をこなさなくてはならないので、歌声の全てを耳に出来ている訳ではないのが残念だ。

で、ある日僕は気が付いた。この綺麗な歌声はどうやら、僕にしか聞こえないらしいんだな。

他の人には聞こえない歌声らしい。ドナドナがね、不思議がったのだ。僕が歌のことを話してみたら、何ソレ、と隣の牢獄にいる彼にも歌は聞こえておかしくないはずなのに、リアクションは悪かった。で、おかしな人を見る目でドナドナは僕を眺めたのは間違いない。

僕は歌声のことを他者に伝えるのは控えた方がいいと察した。僕にしか聞こえない歌声。幻聴？いや確かに聞こえる。どういう理由

で僕にだけ聞こえる？さあ……。わからないが、歌が聞き惚れる代物だということはわかる。僕にしか聞こえないなら独り占めできるということだし、文句は無い。良いことだね、ははっ。

「……なあ……お前には聞こえるか……」

深夜に小さな声で人面瘤に尋ねた。人面瘤はスー、スー、と寝息を呼んでいる。いつものことだ、食事をするか眠りかけているか。僕の身体に寄生している人面瘤は怠け者。最近は一顔の無い天使討伐を命じられないから、グミを食べさせていないが、大丈夫なのだろうか。その分僕の体力が奪われていたりとか、するのだろうか。自覚症状は無いから、平気かな。

僕は袖を元に戻して人面瘤を隠してから、布団に潜り込んで朝日が昇り上がるまで眠りこける。そして朝になれば下僕としての雑務をこなし、残飯を平らげて、一日を終える。歌声を耳にするとテンションを上げる。ドナドナもそんな僕と同じような生活を送っていた。彼は下僕にならなくても良いというのに、律儀なことで、恩人である僕にとことん付き合うつもりらしい。僕と同じ下僕生活を送っているのも恩を返すことにはならないと思うのだが。

犬少年は時々話し相手になってくれる。ただ彼にも歌声のことは言っていない。うほーん、うぬーん、などと語尾にくっ付ける彼に、幻聴が聞こえる馬鹿な奴だと思われるのは嫌である。

ナラクの館での下僕生活の間、魔法使いの姿は見受けられなかった。彼女はどうしたのだろうか、僕は重傷を負わせてしまったのだろうか。姿は見えない。ただ彼女がナラクの館から解放されたわけではないと、なんとなくわかっていた。

ナラクが何かの準備をここ数日進めていることが関係していると思えた。忙しなく見知らぬ人間がナラクの館に訪れてきては、ナラクと翡翠ルームで話しをしているらしいと、他の執事が言っているのをよく耳にする。僕を一顔の無い天使の討伐に向わせないのも、その準備のことが関係しているのではないかと想像できる。

その準備が終わった時、僕は再びナラクの館の外へと出ることに

なるのだらう。

それまでは歌声を楽しみにして過ごす下僕生活を送る、ということだ。

そうして、僕の下僕生活は一週間くらいは続いた。

その終わりは唐突で、

「テンガ、お前の出陣の時だ。庭にて既にお前のための旅の準備は完了されている。今すぐ庭に向うように」

とミイラ執事に坦々と言われて、雑務を他の者に任せて庭に出てみた所、あら驚くことにそこにあつたのは馬車。あるのは馬車だけではない。ナラクやその他大勢の執事たちが庭に集まっており、今まで見当たらなかつた露出狂魔法使いの姿も、あつた。彼女は先日庭を荒らした時のような興奮した様子と違い、平静を取り戻しているように見える。紅蓮の目付きに光が灯っている所を見ると、ナラクに操られている状態からは脱したらしいとわかる。

綺麗な執事が僕に向つて叫ぶ。

「下僕よ、呑気に道を歩くものでない。ナラク様は随分とお待ちだ。そついつた失礼を下僕であるそなたがすることは、恥であると感じることだ」

たしかにのろのろと歩いていたらと思つた。だが、だからといって一々小言を挟まれるのはうざつたというもの。僕は少し機嫌を悪くされながら、既に壊された形跡など一つも残っていないくねくねとした庭の道を、急ぎ足で進み、ナラクたちの前に立つ。

別の場所で雑務に励んでいたはずのドナドナ、犬少年も庭にやってきていた。どうやら僕が一番到着するのが遅かつたらしく、皆を待たせていたらしい。のんびり歩いていたらのが悪いのだ、とでも言いたげな執事の険しい視線が痛い。ただナラク自身は待たされたことにイラついているわけではないらしい。だが、何か、何処か、表情が険しいのは間違いない。

やはりこれから大きな事を為そうとするつもりなのだらう。その為に、数日間準備をしていたということだ。大事を為すからナラク

の表情は険しいに違いない。その大事、つまり計画、それがどのよ
うな代物なのかは僕にはわからないが、僕がその計画の一端を担っ
ているのは間違いない。人面瘤を持つ僕は鍵キの一つなのであろう。
そう考えてみると怖くなってきたので、空を見上げる。

今日は実に良く晴れている。快晴だ。雲ひとつ無い。太陽が顔を
出して、僕らに陽の光を降り注ぐことで暖かな空気を作り出してく
れている。陽気な青の空。その麓で大事のために真剣な顔つきをし
ているナラクや執事、そして計画を知らないがなんとなくヤバイ、
大変なことを為さなければならぬのだらうな、と感じて滅入りそ
うな気分になる下僕の自分。ドナドナや犬少年は呑気そうな顔。魔
法使いの露出狂は、まだ彼女の性格がわからないので、その表情が
何を表しているのかはわからないが、晴れやかそうには見えるが。
天気のおかげでそう見えるだけかもしれない。空が晴れていてくれ
てよかった。僕に、いや皆に、鬱屈が湧くのを防いでくれるから。

「この馬車を下僕たるお前に貸し与えよう。この馬車の造りは堅牢
であり、またその車輪を引っ張る馬二頭の力も強大である。馬二頭
の名はパトリセアとナツウロク。努々、お前たちを目標の都市に運
ぶまでの力添えとなってくれる大切な仲間の一員だということを、
意識するように。どんな悪環境の道でも突き進もうとし、そして実
際に突き進んでみせる屈強たる選ばれし馬だ。お前たちはその馬の
活躍に劣らぬよう全力で、私の配下として、私の願いを叶えるため
に尽力を發揮するのだ。さすれば、自ずと良い結果も生まれよう」
ナラクはそんな言葉を僕らに告げた。

僕らとは、僕、犬少年、ドナドナ、露出狂魔法使いの四人だ。あ、
魔法使いの彼女の名はクローヨナウと言うらしい。長々しい名前だ。
あとであだ名を考える必要があるだろう。

ナラクは僕に太い巻物を渡した。とても長そうな巻物だ。開けば
そこには長々とした文章、つまりナラクが僕らにして欲しいこと、
つまり指令が書かれているのだと推測できる。巻物は銀色というナ
ラクらしい高級さを感じさせる色遣いをしていて、快晴である本日

の日射を浴びて、キラキラと輝いていた。僕は巻物を開こうとも思っただが、

「馬車の中で開くといい。折角の豪華な作りの巻物を地面の土で汚すのでは、愚かしい」

とおっしゃるので開くのを控える。

「正直に言わせてもらうならば、突然過ぎて心の準備も出来ていなければ、何を目的として行動すれば良いのかも僕にはわかりませんが」

と遭えて尋ねてみる。綺麗な執事とミイラ執事が生意気な口を叩いた僕に対して鋭い視線、殺意に近い気配、を発しているのが横目でもわかったが、ナラク自身は坦々としている。

「巻物を読めば大体のことはわかる。だがまあ、大雑把に、簡潔的に説明するならば、お前たちにやってもらいたいことは 顔の無い天使 から赤、緑、青、白、オレンジ、黄の六色の液体を収集するということと、あともう一つ、これが重要なのだが、私のもっとも敵と言える連中であるノーザンス湖に住まう魔法使いの保守派の連中に交渉を持ち掛けてきてもらいたいということだ」

交渉？魔法使い？ 顔の無い天使 の液体を人面瘤に飲ませるということは以前より言われているが、魔法使いの街に関しては僕は一切理解していないのだが。その僕に交渉に行けとナラクは言っている……おかしいではないか……？

「交渉の材料となるものを、僕は一切持ち合わせていませんが」

尋ねてみるが、ナラクはやはり坦々と答えを返してみせる。

「そう。お前たちには交渉の材料である代物を集めてもらう必要がある。また、ある程度向こう側に不利となる材料は、既に私の下僕となってくれた魔法使いのクローヨナウに持たせている。後で確認しあうと良い。クローヨナウは魔法使いでありながら革命という良き行いを促進しようと試みる者であり、私たちと志を共にする者だ。彼女は保守派の魔法使い連中を恨んでさえいる。故に彼女は魔法使いではあるが、私たちの仲間であると認識するように。お前たちに

集めてもらいたい交渉の材料に関することは、全て彼女、クローヨナウに私から情報を伝えてある。よって、交渉の材料について知りたく思った時は、クローヨナウに尋ねれば良い。さあ、テンガよ。他にも私に尋ねておきたいことはあるか？」

テンガという名が呼ばれる時、執事たちが顔を見合わせてニヤツと嘲笑っているのがわかるが、それに怒りを感じるのは面倒だ。他に尋ねておいた方が良さそうなことを思い浮かべてみることにする。僕はしばしの間、静まり返っている空気の中、考え、そして思いつく。

「交渉に失敗した時には、僕らの扱いはどのようになるのでしょうか」

尋ねてみてから、愚問だったなと感じる。

ナラクは返事をするまでもないと首を左右に振ってから、ジエスチャーを放ってみせた。

そのジエスチャーの意味とはすなわち。

DEATH。

馬車内のド真ん中に設置されている”水晶玉”が、危険を伝えるための暗めな紫色に染まった。

馬車に危険が近づいていることの知らせだ。

今日はこれで二度目。朝にも一度連中が現れた。その時はウヨク（クローヨナウのあだ名）が眠っていたので、きつかった。やばかった。犬少年が懸命に彼女を起こしてくれたので何とか助かったものであるが、彼女が戦闘に入るのが後少し遅かったら、殺されていたかもしれない。

で、やばいのは今回も同じ。またウヨクは寝ている。魔法を使うと眠くなるのだそうだ。彼女はだから頻繁に寝ている。馬車内に置かれていた朱色の革ソファで横たわってすーすー眠るのだ。僕は再び犬少年に彼女を起こすことを命じてから、「とにかく時間を稼がなきゃ駄目だな。なんかこの人、寝起き悪いし」とぼやくドナドナに首肯することで同意して、馬車の外に出た。「どこだ、天使さんは」。

顔の無い天使 は既に降臨していた。馬二頭は警戒し停止している。進路を塞ぐようにして現れた 顔の無い天使 の数は四体。点滅している色は赤、オレンジ、青、白。

「やり辛い組み合わせの連中だな…。赤を食わせれば青には有利になるが赤には不利になる。弱点を付こうと思えば、別の奴と同調してしまう…。こいつら狙ってこついう構成なのか……」

となると、無難な選択をする必要が出てくる。緑もしくは黄のグミを食べさせれば、どの色にも有利にはなれないが、不利にもならない。

僕は腰につけている巾着袋に手を掛けようとするが、上手く袋を掴めない。二、三回ほど空を掴んだ。相変わらず 顔の無い天使

と対峙するとふわふわとした感覚に囚われてしまふ。だが少しずつ慣れてきてはいる。

緑か黄のどちらかが食べさせる候補だが、緑を選択した。理由はある。どちらかというと派手な色は攻める時方で、そうでない色は防御用を使用するといいのだ。赤、黄、オレンジ、白、緑、青の順に色の派手さというのは決められている。つまり赤、黄、オレンジは攻めの時に食べさせたい。対して白、緑、青は防御時に食べさせたいということである。今はウヨクが起きてくるまでの時間稼ぎをしたい。そのために防御を固める必要があるから、緑のグミを人面瘤に食べさせるといふこと。

『腹の中で刀が造られた』

ずぶしやあ。グロテスクを鳴らしながら緑の霧を纏う刀を取り出して、比較的刀身は厚く重めではあるが強靱な堅さを持つが為に、盾代わりにもなると期待できる緑。さて、準備は完了。

緑ならばどの赤、青、オレンジ、白、いずれとも因果関係がないために安定した戦いが出来る。

「ドナドナ、いける？ 守りの姿勢で行こう」

一応聞いてみたが、やはりというべきか、ドナドナはどうやら人質にされた時の 顔の無い天使 に対するトラウマがこびりついているらしく、へっぴり腰。「い、いけるさ」と呟くが、持っている剣の切っ先がダウジングでもしているかのように、あっちにいったり、こっちにいたりしている。当然宝探しをするのではなく戦闘をするのだから、ダウジングなどしなくて良いし、剣はダウジングをするための武器ではありません。相手を斬るための武器ですよ。（ドナドナがウヨクを気絶させてくれた時ほどの動きをやってくれるなら、時間稼ぎも余裕でできるのだらうけど……こう、へっぴり腰では期待できないんだよな……）

対人戦のドナドナには期待して良いのだらうが……この状況の彼はどうしようもないとしか言い様が無いッ。僕が彼を手助けすることになるだらう。実際、何度か彼は命を落とす危険な状況になったも

のだ。おかげ様で僕は人を助けたという自信を身につけることが出来たが、ドナドナは僕に自信をつけさせる為に僕の仲間になったのではないというのに！まあ、彼には対人戦時に期待だ！交渉先や、交渉のための代物を集める時に、おそらく人と戦うことになるだろうし。その時にはドナドナにはレイナードになってもらおう。

「キヤアアアアアアア」

「キヤアアアアアアア」

「キヤアアアアアアア」

「キヤアアアアアアア」

悲鳴が四つ。”墓標荒野”にて鳴り響く。あと少しでこの荒野を突破し、北側に近づくことが出来るというのに、連中と遭遇してしまったのだ。墓標荒野はとにかく広くて、北側の門からHOMETOWNを出たというのに、北側にも跨っている”墓標荒野”を抜けるためにもう三日程度は馬車での旅を続けている。主にHOMETOWNの東側に広がっている”墓標荒野”だが、北側にまである程度伸びているのだ。ある程度伸びているに過ぎないはずなのに、もう三日をこの荒野で過ごしているのだ。パトリセアとナツウロ口の体力が心配になるといふものだが、今は心配している場合ではない。顔の無い天使 は既に悲鳴を上げながら身構えていて、拳を振り上げながら、まずは赤色の天使が近寄ってきた。僕を殴り殺すつもりなのだろう。

顔の無い天使 が放つ攻撃は、たしかに直撃すれば痛手を負う、重みのある拳だ。

だが当たらなければどうということもない、のも事実。僕は剣を盾替わりにすることで振り下ろされてくる拳を、受け止めた。

ガキンッ。

重たい衝撃が剣越しに押し掛かってきて、その重みはどんどん増してくる。顔の無い天使 は腕力が凄まじい。緑の霧を纏う剣だから防御余裕、とはいかない。だから僕は一瞬だけ片手を剣から離し、用意しておいたもう一つの黄のグミを、人面瘤に食べさせる。

黄のグミを食べさせたその瞬間に、阿呆みたいにもぐもぐしていた人面瘤の目が、カツと見開かれて。

衝撃波が僕の身体より発生。顔の無い天使 を吹き飛ばしてやった。

緑のグミを食べさせた後に黄を食べさせたことによって人面瘤に生じた影響とは、反発。

本来反発しあう緑と黄を時間を置かずに食べさせたことで、人面瘤は拒否反応を起こす。拒否反応は衝撃波に形を変えてくれて、僕の周辺に近づいてきていた 顔の無い天使 と赤色の 顔の無い天使、そのどちらも纏めて吹き飛ばしてくれた。一旦間合いが開く上に、衝撃波を受けると麻痺するらしく、さらには警戒もしてくるので、顔の無い天使 たちは様子見をしてくれるようになる。つまり拒否反応から転じて衝撃波を発生させるこの手段は、時間稼ぎには持ってこいの戦術なのだ。

グミを一度に二つも消費するが、馬車内のグミ瓶にストックはたくさんあるから、数のことは心配する必要は無い。また、人面瘤にグミを大量に食べさせるからと言って問題が発生することもないらしい。ナラクから渡された銀色の巻物にそう書かれていた。だから僕はこの戦術を三日前から多用している。他にもグミの食べさせ方はあるらしく、人面瘤は様々な反応を起こしてくれるようなので試したい戦術はあるのだが、四体という数が多いこの状況では、余裕を持って戦術を試すことなど出来るはずもないので、無難に時間稼ぎの戦術を選択している。

剣の霧色は黄色に変わった。

顔の無い天使 は次々に襲い掛かってくるので、次は緑のグミを食べさせて、拒否反応からの衝撃波で距離を再び引き離す。近づかれたり次は黄色のグミ。また近づかれたら、緑。と、繰り返すことで、巾着袋内の緑か黄のグミが無くなるまではこの時間稼ぎは有効だ。

(そろそろ限界か……)

巾着袋内の緑と黄のグミ数が0となり、ウヨクはまだ寝ているのかと焦りを抑えられないが、もう 顔の無い天使 の拳は振り上げられている。ガキンツ、と剣で防いでから、最後のグミを人面瘤に食べさせて、衝撃波を発した。繰り返すほど 顔の無い天使 もイヤつくらしく、再びこちらに向つてくる頻度は早まっている。もう相手は殺る気満々だ。

グミを補充してくるしかないか、と思いだナドナに時間稼ぎを頼もうかと思ひ周囲を見渡してみたら、既に僕の背後辺りで気絶していた。

「……………」

啞然としたくなる。何時の間に彼はやられたのか。それとも僕の衝撃波に巻き込まれたのだろうか。

僕はこれは危機じゃないか、と冷や汗を掻き、巾着袋と人面瘤を交互に見比べる。だが見比べた所で策など浮かんではこない。顔の無い天使 がスーツとこちらに近づいてくる……。垂れる汗の水滴。やられるつ。

スバババババババババババババババ。

色鮮やかに四色の魔法弾が、何百発と僕から見て右側から飛んで来て、左側に抜けていく。

まさしく一網打尽であった。丁度、真横に並んで僕の側に近づいてきていた 顔の無い天使 が灰色のローブを撃ち抜かれて穴だらけになり、次々に痙攣し、その撃ち抜かれた所で立ち止まった。

「チャンスですよ」

と右側の方からウヨクの声。言われるまでもない。穴だらけにされたことで身動きの取れなくなった 顔の無い天使 に接近して、美味しい所取り。トドメを四体に刺して、液体を体外に排出させる。噴出した液体全てを人面瘤は自然と吸い取ってくれていく。四色の液体全てを、満遍なく、一滴も残さず、人面瘤が吸収していき、全てを吸い終わった頃には、 顔の無い天使 は皺くちゃな皮のようになつて地面に倒れて、荒野の風に吹かれて砂に塗れた。

戦いが終わったので、剣は霧のようになって散る。無事、やられず、終わった。

僕は気絶しているドナドナを叩き起こそうとするが、完全に気を失っているので仕方無いので背負ってから、黒のロープをはだけさせたまま遠くよりこっちに帰ってくるウヨクに、

「お疲れ様」

とだけ言った。ウヨクは小さく頷いてから、

「作戦勝ちだねー」

と薄く笑った。

馬車内に戻ったら、犬少年が怯えた様子で丸まり、縮こまっていたので、

「もう終わったよ」

と告げると、嬉しそうに跳びはねた。

気絶している重たいドナドナをウヨクは使わない向かい側のソファーに寝っ転がしてから、”水晶玉”が青空色に戻っていることを確認して後に、パトリシアとナツウロロに口笛を吹いた。

馬車の車輪が回転し、僕らは再度出発する。

北西の果てにあるノーザン湖を最終目的地点として、まずはこの墓標荒野を切り抜ける。

巻物によれば、本日中には抜けられるとあるので、気分が落ち着かないものであった。

顔の無い天使の数は、墓標荒野を抜けてツララ氷森林に入れば減るそうなので、まあつまり戦いの回数が減ってくる訳だが楽できるということだ。まだ顔の無い天使に対するトラウマが抜け切っていない僕としては当然、墓標荒野を早く抜きたい気持ちになっってくる。

まあ、早く抜きたいと思う時に限って、時間の進み方は遅く感じるものなのだけれど。

しかし改めて感じるが、この馬車はすごい。というより、魔法の力というのがすごいのだろうが、とにかくすごいなあと感じて、眼を瞑ってみると僕の感心に呼応して、黄金の粒子がいつもより多くわなないているのだった。閉じたまま数秒間呼吸だけする。そしてふたたび目を開けてみてもやっぱり、相変わらず、馬車はすごい。魔法の力つてすごいんだなあ、と感心が強まる心。感心が新鮮たる感情を誕生させてくれて元気が湧き出るということ、すなわち歓びのほどばしり。情動、情動、情動！と高揚したくもなっちゃいますよ。

「ふう……」

と一息ついてから、”水晶玉”が青空色であることをチエックしておく。少なくとも今までは平均、五時間置きで 顔の無い天使は現れている。まだ三時間程度しか時間は過ぎていないので、仮眠を取っても良いかもしれない。まあ、かといって油断していると怖いので、超大詰めグミ瓶の蘇芳色の蓋を開けて、巾着袋にグミを補充するなどの、戦闘の準備はしておく。

で、一通り準備を終えてから馬車の中で立ち上がり、三百六十度を見渡してみても、ふと気が付く。そう言えば、僕が寝れる分のソファはもう無いじゃん、余って無いじゃん、と。ソファは残念ながら二つしか設置されていない。まあ、布団はあるんだけどね。はあ、床に近いと振動を感じるから眠り辛そうなんだけど……とは思うが、文句を言っではいられない、馬車内でこれだけ快適に過ごせるんだから、愚痴れるものでもない。

この馬車は本当にすごい、と三度目くらいだけど、やっぱりそう感じる。僕は眠りかけているウヨクを見下ろしながら、魔法使いつてのは皆こういう力があるのだとしたら超手強いんじゃないかな、とトンデモな相手と僕は将来的に交渉しないといけないわけであっ

て、ああ、気苦労しそうな予感。魔法つてのは何でもありだ。何でもアリの連中に立ち向かうなんて真つ当な神経で出来るはずないじゃない？気を狂わせるか、耐え忍ぶか、下準備を念入りに済ましておいて相手をぐうの音も鳴らない状態に仕立て上げるかしなきゃ……ああ、そうかだから交渉物を集める必要があるんだよね……で、ウヨクの持つてる交渉物とは『水』だった。五個の水が入った瓶を見せられて、「ただの水？」と尋ねたら、当然のように首を横に振った。首を横に振って後に、彼女はこう僕らに教えたものだ。

「これはね、湖の水。ノーザンス以外の湖の水は、全てナラク様が回収済みだったみたい。とりあえずこれは大切な交渉物だから、私が常にロープ内の広域空間に収めておきますので、紛失の心配はありませんから、そのところは心配しないで大丈夫」

湖の水。この世界の根源である湖の水。この世界にある六種類の内の五種類が、すでに揃っている、と。それが交渉物になるの、と尋ねたらウヨクはスラスラと答えてみせた。

「やっぱり下僕のテंगाは世界のことを知らないんですね。ええとね、じゃあちよつとめんどつちいけど説明しますね。簡単な話です。要は、湖の水が五個ここに揃っているということは、六カ国ある内の五カ国がナラク側、つまり革命側、と意見を共にしているということなんです。この水を見せれば、魔法使いの国、保守側は、完全に世界から孤立していると気が付かざるを得ません。ですからこの五個の水の入った瓶を見せれば、彼らは、まあ、焦る訳です。つまり交渉の材料にはなりません」

そこまで聞いた僕には、当然疑問が湧いたものだ。「五カ国が革命推進で、保守派が一カ国のみ。もうそれって、革命派が完全有利じゃないの。保守派に対する交渉の材料って、もうその瓶だけで充分じゃん」

だがウヨクは、そう簡単にも行きません、と不機嫌そうな表情を作って両腕を組んだ。身体が小さいからか腕を組んだのに偉そうに見える。ウヨクちいさつ。

「この馬車を御覧になつてもらえればわかるように、魔法というのは何でもアリです。魔力を使用しすぎると体を壊したり、すぐ眠くなったり、などの弊害はありますが、基本的には学べば万能の力となつてくれるのが魔法です。この世界の中ではもつとも優れた人間の知恵、発明、と呼べるでしょう。それほどに優れた魔法という技術でありながら、ナラク様は何故か多少心得ていたようですが、普通は、ノーザンス湖で栄えてきた魔法使い集団しか利用することが出来ません」

「何で？」

「ノーザンス湖に住まう魔法使いたちは鎖国をしているからです。閉鎖的だからです。何故、鎖国をしているかというと、魔法があるからで、そして彼らは他国に魔法の技術を絶対に教えようとはしません。その技術の鱗片でさえも、漏らすまいと徹底的な情報閉鎖を行つています。その徹底ぶりは凄まじく、魔法の技術を得るためにこれまで他の五力国は様々な手段を駆使してきましたが、魔法の技術は広がりません。ノーザンス湖に住まう人々だけが、その技術を保有しています。ナラク様は魔法を多少扱えたようでしたが、あれはほんの触りで、まあアノ程度の魔法だったら、使える人が他国にいてもおかしくはないのですが、技術、発明、と呼べるほどに熟練した魔法を扱えるのは、唯一ノーザンス湖を根城にするあの国の魔法使いだけです。魔法という技術の独占をしてきた彼らに他の五力国は当然、良い思いをしてはいません。だから……」

「こうして、五力国が足踏み揃えて革命を訴えるような状況が生まれた、ということかな」

「はい、そういうことですね。はい、大体はそれで合ってます」

「大体なの？」

「大体です。そんなもんです。で、つまりノーザンス湖の魔法使いたちは強敵なんです。五力国が戦力を束にしても、勝てるかどうか怪しいんです」

「そんな強いんだ」

「ええそうなんです。だから、もつと交渉の材料を集める必要がある。そのうちの一つには、液体を適量集め終えたあなたの人面瘤、も含まれています。ですから、顔の無い天使 を倒して液体を収集すること自体も、交渉の材料を集めているということに当たります」

「人面瘤が交渉材料：なるほどね、僕はおまけで、こいつは本体とということだな」

「ですが切り離すことは出来ませんから、どうにしろあなたも本体みたいなもんですよ。テンガ、そこは油断しない方がいいよ。という訳で、ちよつともう眠くなってきたんで、寝ますね。次に 顔の無い天使 が現れた時に備えて、魔力を溜め込まなくちゃいけないんで。では、おやすみー。くかー」

「僕はテンガじゃ……。あ、テンガか。嫌違う：あ、ていうか、ね、寝るの速いなー」

ソファでぐったり。揺さぶっても涎を垂らすだけだった。

そんな会話をしたのが三日前。で、この三日間は北西に進みつつ、ツララ森林を目指しつつ、ずっと 顔の無い天使 と戦闘を繰り返して、液体も結構収集できた感じ。ウヨクが魔法弾で敵を瀕死に追い込んで、僕はトドメの一撃だけ貰うというおいしいポジション。まあ彼女が起きて準備が完了するまでの時間稼ぎをするという役割はキツイけれど。まあ、ウヨクもドナドナと違って頼りになるので、飛躍的に戦闘は楽になった。おかげ様で、顔の無い天使 に対する恐怖感の日が経つに連れて薄れてきている。僕がこうして大丈夫になってきたのだから、ドナドナにも早くトラウマを克服してもらいたいものだ。へっぴり腰状態でなければ、ドナドナも強いのだろうし……。

さて、そうやって考えたり思い出したりなどしている内に、十分くらい時間が経過していた。

ド派手なピンクっぽい紫、の壁、に取り付けられている鳩時計から、小鳩が飛び出してクックルポッポーと馬鹿みたいに鳴いている

のだった。

改めて、馬車内を見渡す。本当にすごい馬車である。魔法の力とはすごいね。ちよつとすることが無いので具体的に説明してみるよ。馬車内のすごさをね。誰に言ってるんだ……ここは僕の脳味噌の中……誰も聞いていないだろう……あ、あの綺麗な歌声の人に話しているという勝手な設定を作つてその人に話しているという感じで、説明しよう……。あれ、これ、狂人だろうか……。

まあ、気にせず行こう。暇つぶしは大切だ。

馬車内の光景を、綺麗な歌声の人に喋ってる感覚で、説明して暇潰しますよー。準備は良いですかー。あーゆるいでいー。

ええとね、まず初めて僕が馬車内に足を踏み入れた時の、その印象を説明しようかな。いやあ、とても驚かされたのは、まさにそのド派手さで、ファンキーなぬいぐるみ好きのお嬢さんのお部屋って比喻できる感じだったんだ。しかも外から見る馬車の大きさと比べてみて、明らかに部屋の大きさはその四倍は広いんだよ。これも魔法の力だろうけど、違和感がすごいよね。外見はただの馬車で目立たないように作られてる。白の厚布、馬二頭、ぎしぎしと鳴る車輪でも一歩中に入れば異次元空間。

ピンクっぽい紫の、輝度明るめな壁。天井には電灯。電気を引つ張りようもないはずなのに、明かりは煌々。至る所にお人形、ぬいぐるみ、が置かれていて普通の見た目をしているのがあれば、明らかにゴスロリチックだったり、ホラーチックだったり、みたいな人形もあつて、例えば片目が溶けてしまっている小熊の人形、爆弾を抱えてニヤニヤしている子供の人形、顔の無い天使 にそっくりな天使の人形。あるのは人形やぬいぐるみだけではない。様々な、どこの民族が使っていた代物ですかと問いただしたくなる奇抜な置物、明らかに 腑抜けた悪魔 から奪い取ったと思える仮面が戦利品のようにたてかけられていたり、また冷蔵庫やバスルームなど、生活に欠かせない用品も一通り揃っている。要は、一つのリビンググだよ。もはや。キッチンもあるし。

黒と朱のソファが一つずつ置かれていて、そこに挟まれるかのようにしてある黒光りのテーブルには、大きなグミ瓶や、水晶玉、銀色の巻物、あとおやつの入ったバスケット、などが置かれていてリモコンもある。テレビが一台壁に取り付けられていて、ニュースとか見ることが出来る。暇つぶしもある程度はこのテレビで出来るだろう。部屋全体に漂う雰囲気と、あと匂い、が何処か妖艶とも言えは良いのかな、ちょっと雰囲気あるよねみたいな。でもちょっと、という程度で、まあやっぱり総合的な印象は、ファンキーな女の子が住んでそうな部屋、ってかんじ。

……こんなところかな。説明、終了。

時間はあまり潰せなかったけど、残りの時間は黄金の粒子でも眺めていようかな。

そう思って瞼を閉じて粒子を想ふ。わらわらとしている。今日も見える。

キラキラ眩いている粒子たちは、今日も夢遊していて瞼の裏を跳び回っているではないか。

この夢遊を眺めるといふ遊びをするだけでも、案外、テレビを見るよりも楽しかったりする。心が静まって無限牢獄に居た頃の孤独を思い出す。あの無限牢獄に居た頃の孤独、まだ僕が乙として甲を歩き回っていない独りの時間。たしかに停止していたはずなのに、それを心地良く思っていた頃。まったく、一人を好むなど贅沢なことだった。あそこにいた監獄者の仮面の人は、僕を逃がしてしまっただけだが、何か処罰を受けたりしたのだろうか。だとしたら可哀想、申し訳ないことをしたような気がする……毎日、面倒を見てもらっていた……まあ、彼の場合、仕事だったのだから……。

僕は毛布を頭まですっぽり被って、瞼の中に光がわずかでも入ってこないようにした。こうした方が金色の粒子がハッキリ見えるし、気分も落ち着いた。落ち着いている内に、幻覚とも現実とも付かない映像が浮かんでくる。……顔の無い天使 がわずかに浮かび上がったと思いきや……犬少年に姿形を変える……大型犬の彼が投

棄されて小さくなっていく姿が……錯覚……黄金の粒子が犬少年の骨となった姿に纏う……骨……骨……墓標荒野に建ち並ぶ木製の十字架……吹き荒ぶ寒風……歌が聞こえて来る……いつもの歌声……遠くから響く……人面瘤がスースー寝息をたてて……腑抜けた悪魔の仮面が割れた瞬間……血したたるルーピックキューブ……ナラクの邪悪な微笑み……テンガと名づけられた時の衝撃……嘲笑う執事や占い師の老婆の顔……再び骨……Babelの影……テスト兄妹……湖……墓標……以前の世界……白衣を纏った人……泣いている人……笑っている人……硝煙の匂い……笑っているのは僕じゃない……僕はどの立場……この戦いの場所が高笑いをしている憎たらしい奴と……泣かされている人……ああ、憎たらしいな……戦乱の跡……記憶……！

うとうとしている最中に、思い出しそうになった！
「……記憶がッ！」

僕は毛布を捲り上げながら叫んだ。頭まですっぱり隠して横になっていたのも、電灯がひどく眩しく感じられて上手く目が開けられなくなる。それほどの速度で起き上がったので、何時の間にか起きていた三人に何事か、みたいな眼付きで見られた。思うのだが、もうみんな僕のことをマトモな人間だとは認識していないだろう。最近、醜態ばかり晒しているような気がする。

「ハ……ハハハッ……」
と頭をぼりぼり掻いてから、

「みんな起きてたんだ。いやあ、恥ずかしい、恥ずかしい」

と再び布団に潜り込もうとしたのだがウヨクに、

「ちょっと起きてください」

と言われた。うとうとした寝起きの状態なので少し機嫌が悪く、

「え……」

と戸惑った声を発したのだが、ウヨクの紅蓮の瞳による無言の威圧が結構凄まじかったので、うわ怖ッ……と眠気も吹っ飛んで二度寝は止めて、その場で胡座を掻いた。

だが、今にして思えば、この時僕は無理矢理にでも寝てしまおうべきだったのだ……！

クラッカーが彼女の手元に突如として現れる。

かと思うと次にはその栓を引っ張っていて、パン、と小気味良い音が打ち鳴らされたのだった。

なになに、何が始まってしまっの、という不思議。クラッカーの中からパンと共に発射された一枚の紙が、ひらひらと空气中を舞い落ちて黒光りのテーブルに着地する。その紙には文字が書かれていて、こう読むことが出来る。

『交流会』

でかでかとした文字。黒字で書体が厳肅のある感じ。何、何、どうなってるの僕はずっかり眼を覚めてしまっってウヨクを眺め見ると、彼女のドヤ顔がそこにあつた。クラッカーを打ち鳴らした程度のこと何ゆえにドヤ顔をしているのか。不審に思っ僕をウヨクは不審に思ったらしく、

「読めないのこれが？」

と怒りを露わにするので、おお怖いな……。まあ、脅されたので「こう・りゅう・かい」とハッキリ発音してみた所、「はい、お利口さんです」と、何処か喧嘩腰な雰囲気、不機嫌な様相。あまり刺激したら噴火を起こしそうな気配がしたので、僕はとりあえず様子見をすることにす。

黙る。水晶玉を見ると青空色。顔の無い天使 はまだ来る気配を見せない。

ドナドナが次々に口の中に入れて消化していった饅頭みたいなオヤツの空き袋がたくさん転がっている黒光りテーブルのド真ん中に『交流会』と書かれた紙が、堂々と存在感を放っていた。

口の中を餡子やらでもぐもぐさせた状態のまま、ドナドナは紙を手で拾い上げてから、

「にゃんじゅこうるあ」

と言った。饅頭みたいなのを頬張ったまま喋るから翻訳不可能な言葉が紡がれてしまうのである。全部飲み込んでから話しをしると言いたい、その隣でガツガツと手当たり次第でオヤツを貪っている犬少年の方が断トツで下品なので、ドナドナの下品さが気にならなくなってくる。不思議。

ウヨクは紅蓮色ではあるが冷えた瞳、で二人を眺めながら、「さっきのは、なんじゃこりゃあ、って言ったの？」

と、よくぞ聞き取れたものであると感心する。にゃんじゅごうるあ、と、なんじゃこりゃあ。まるで接点が無い。

ウヨクはもう一本、またもクラッカーを空気だった空間から発生させると、パアン、と小気味良く打ち鳴らす。出て来た紙に書かれていたのはまたも『交流会』。何だ、強調したいのか？同じことを二回言うなと叫びたいが、僕は様子見をすると決めただけだ。黙ってしよう。

ウヨクは背後よりピンクの薬中熊ヲリッてるのぬいぐるみを鷲掴みにして、『交流会』と書かれている紙をぬいぐるみのおでこに貼り付けてみせる、という謎の行為をしてから、またもドヤ顔した。まったく意味がわからない。『交流会』をおでこに貼り付けたラリッてる熊のぬいぐるみは、まさにキガイで怖い。おう、怖い。僕はやっぱりこの空気の中では何も言えないよ。

ドナドナと犬少年の二人の馬鹿みたいにうるさいおやつを貪る音が、しばらく馬車内で響いた。ウヨクも案外、『交流会』をぬいぐるみに貼り付けてからは何も喋らず、僕のように様子を窺っているように見える。もしくはおやつばかり食べる二人に呆れて喋り出せないのかもしれない。知らんけど。とにかく、空気が変に重い。薬中の熊ぬいぐるみの見た目怖い。ウヨクの冷めた紅蓮の眼つきも怖い。どんどん空気が重たい鉛に沈められて、深い腐海の底に沈んで窒息するかのような。悪環境と化したこの部屋で、三発目のクラッカーが打ち鳴らされた。

そこに書かれていた文字は、今度は交流会ではない。

『第一種目』

と書かれていた。何か運動会みたいなノリだね、と心の中で思ったが口には出さないでいる内に、もう四本目のクラッカーが打ち鳴らされていて、そこに書かれていた文字が、

『セックス』

だった。見間違いではない。性交である。僕の頭の中は真っ白になって、口があんぐりと開いてしまつて、思わずウヨクに顔を向けると真剣な顔つきである。その次にドナドナと犬少年に顔を向けると、おやつを食べる手の動きが完全に停止して、啞然とした顔がそこにあつた。部屋はただでさえ静かだったものだが、おやつを貪る音すら止んで、馬車の車輪の軋む音とパトリセア&ナツウロ口の走る音だけが聞こえる。僕はもう一度クラッカーから飛び出した文字を見た。『セックス』やはりそう書かれている。しかもその手前には『第一種目』と書かれた紙。ウヨクは露出狂どころのレベルではなかつたということだろうか。とにかく、開いた口が塞がらない。

僕はもう様子見をしているのに耐えられなくなり、

「色の濃い冗談だね、これ」

とニヤけながら人差し指を第一種目セックスに示してみた所、紅蓮の眼つきの鋭いのに睨みつけられて、

「冗談？」

と厳しい口調で言われたのでまごまごさせられた。こいつ、マジなのか：魔法使いつてみんなこんなに大胆なのか、と生唾飲み込みそうになつたが、いやそんなナサケナイ様でいられるかつつうことで、ごほんと咳をしてから、

「いやいやいやいや」

とごまかしてみた。何をごまかしたのかよくわからないけど、ごまかしてみた。で、そのまま場がまた沈黙するのが怖かつたので、笑つてみた。大声をあげて、蛙が田んぼで騒がしく鳴くのよりも騒々しく鳴いてみた。すると、共鳴が生じた。犬少年とドナドナも大声で鳴き始めたのである。ゲコゲコとはいかず、だはは、という感

じだったが、僕達は蛙が集団で鳴き喚くよりも五月蠅かったことである。だが共鳴は三人だけでは終わらない。ウヨクも共鳴し始めて、彼女も大声を上げて笑うのだ。だはははっ、だはははっ、ははは。馬車内は、さっきまでの腐海へ沈み行く暗さが嘘のように明るく変わった。わけわかんないけど僕らは笑いまくった。これが笑いと云うものの本質なのかもしれない。わけが分からないけど何かもう楽しいというね。

「いや、笑ってる場合じゃなくて、マジですから」

唐突に楽しさは終わりを告げた。めっちゃ笑ってたウヨクは急に真顔になって声付きも真剣そのもの。僕らはまたも呆然とする他なくなり、だはは……は……は……という風に田んぼでの共鳴は終焉し、車輪の軋む音が聞こえる静寂が再度訪れてしまった。なんとこの状況だろうか……。沈黙が痛いので、僕はとにかく思いついたことを喋る。

「……どういう理由で？」

彼女は即座に答える。

「いや、したいから。やりたいから」

鼻血出そうになったわ。やはり彼女は真剣な眼差しでハッキリ、キツパリ、言うのだ。僕はそのあまりの物言いに何を言えばいいのかわからなくなってきた。すると数秒後、彼女は、

「いや、魔力を溜め込むのに効率が良いんだよ、性交は。それが本当の理由です」

などと言った。からかわれているだけの可能性もあると疑っていたけど、こう理由を答えられるとマジな確率が上がっているとわかる。まあ、露出狂のウヨクからすれば、まだ知り合って数日しか経っていない性病を持っているか持っていないかもわからない、しかも一人は犬少年、と性交することなど何てことは無いのかもしれない。大物でしょうか。それとも阿呆なのでしょう。

こんな言葉で戸惑わされている僕ら三人は、小物かもな。

そう思いながら、これから大きな事を成さなければならぬ使命

を背負っていることを思い出して、小物という性質を持ったままでは大事を成すことなど不可能ではないか、という気持ちになった。だから僕は怖がっている場合ではない、啞然としている場合ではないと思います。

「なるほど、なるほど、なるほど」

と三回言ったが、『よろしいでしょう』、という言葉が出てこない。やはり小物じゃないか、と自らの心の中で自らを戒める。よろしいでしょうと、口が裂けても言えそうになかった。僕は記憶がないが、もしかして童貞なのだろうか。それとも記憶が無いだけで、経験済みだろうか。まあどちらでも良いけど。今確かなのは、今僕があまりにナサケナイ状態だということ。

ドナドナと犬少年も、何か言えばいいのにずっと黙ってる。ドナドナは何か驚きの感情のまま思考停止でもしてしまっただみたいに石像化してるし、犬少年は鼻血出してティッシュで鼻を拭いている。ぶっ、何たるパーティーであろうか、もうちょっと男らしい男がいなければ大事など成せる訳がない。恥を知れて奴だな。

そんなことを思う僕自身も恥を知らなければいけない側だけどねはあ……。

ピンクの壁に取り付けられている鳩時計から、小鳩が飛び出してクックルポッポー。間抜けな僕らに似合いな、馬鹿みたいなクックルポッポー。

部屋はやはり静まり返った。鳩時計が静まった後の沈黙は、針で刺されるかのようにチクチクとするのだった。

ぶ……………ぶぶ……………

ぶぶぶ……………ぶぶ……………

ぶぶ……………ぶぶぶ……………

ウヨクが笑っている。笑いを堪えている。

彼女はセックスと書かれている紙を取ると、その紙の一部分に爪を引っ掛けるといふ仕草を試みさせた。そしたら、爪によって何かがペロンと剥がされた。シールのように。剥がされたのはセッ

クスという黒文字それ自体だった。そして新たな文字が紙に書かれていて、こう読むことが出来る。

『騙されたなエロ男ども。本当の第一種目は料理対決だ。もっとも上手に料理を作ることが出来た者が、料理当番の役割をこなすことになる。それを決めるのが、第一種目だ!!!』

やけに長文だったので読み終わるのに時間がかかった。でも読み終わってから、微妙に意味がわからない。騙されたせいで頭が麻痺してるのかもしれない。

ドナドナが大きな笑い声を上げた。ははははは、と今まで石像だった分も声を発している感じ。彼の笑い声は轟きとなって部屋中を突き抜けていて、うるさい。

彼はどうやらノリが良いらしく、また気持ちの切り替えも早いらしい。

「言うておくが、私の料理は人を殺すとまで評されたことがある。私を料理当番に出来るなどと、思うなよ」

どうやら新たな戦いの火蓋が切って降ろされたということらしい。料理を一番上手く作ってしまった者が料理当番。

すなわち、いかに料理を下手に作るかが戦いに勝つための条件……

ウヨクにからかわれた直後のこの状況。流れは彼女にあるかもしれないが、これ以上彼女を調子に乗らせては、男子の面目がまったく無いというもの。

糞のような料理を、作らなければなるまい……………!!

「みんな異論とかは無いんですね？　じゃあ、やりましょうか。料理対決」

「構わないよ。一番上手な料理を作った人が、料理当番を担当するってことだよな？」

「そういうことかな。どうせなら旅の道中、おいしい料理を食べながら進んだ方が、心も休まると思うし……」

「俺はもう随分やる気だぞ……。二度目だが、俺の料理は殺人兵器と呼ばれたこともあるからな」

「自慢できることではないと思いますよ。うひゃー」

「自慢してるわけじゃない。ただ、俺と争うならば、それ相応の覚悟をしておけてことをな……」

「ちょっとムキになってる気がしますよ。うっほほ」

「鼻血、まだ垂れてるぞ、エロ犬」

「あっあっ」

「……ま、ドナドナも犬少年もやる気みたいだし。僕も別に異論はないよ。料理とか、上手に作れる気しないし……」

「それは私もそうですけどね。女だからって、料理が上手いとは限りませんよ」

「…ふふふ、全員燃え上がってきたな。では始めるようじゃないか」「ドナドナに仕切られると……」

「そういう言い方はよしなさい」

さて、何故僕達がウヨクという魔法使いに頭があまり上がらないのかと言えば、彼女が　顔の無い天使　戦において圧倒的な戦力となってくれていて、つまり僕らと比べて活躍しているから頭が上がらないのであるが、その為に突如として交流会第一種目料理対決などと提案されてそれを拒否することが出来ないのである。はい、や

りましょう、という流れになってしまふのである。

そうここまでは僕らは押されっぱなし。負けっぱなし、と言える。だからこそ、この料理対決、負けるわけにはいかないということ。僕はナラクの下僕ではあるが、ウヨクとてナラクの下僕という立場なわけである。つまり同等の立場。ライバルということ。遅れを取り過ぎれば舐められるのは当然。彼女から見て僕に対する評価はおそらく、人面瘤という交渉物の一部分、パーツ、と言った所だろう。半ばそれが間違っているとは言えない状況なのが困ったことだ。現実、僕自身とて戦力と呼べるほどの活躍をこなしてはいない。

なればこそ、超絶に糞な、うんこな、吐き気を催し二度と食べたくなくなってしまふような、史上最低最悪な料理を作り出し、料理当番などという役割を他者に押し付ける必要が……あるのだ！犬少年かドナドナ、できればウヨクに押し付けたい！料理当番を押し付けることが、僕が下僕としてのランクを上げるためには、必要なのだ……。

僕は布団から立ち上がると、冷蔵庫を開けて中身を確認する。がちやがちやがちや、と面白い音が鳴ったかと思うと、冷蔵庫が左右に大きく内側から広がって、僕からの視界百八十度全てが食材の色鮮やかに染まる。これも魔法の力だろう。

「ここにある一ヶ月分以上の腐ることのない食材。ここにあるのは全て、使って良いんだよな？」

「うん、ルールはそんな感じでしょう。冷蔵庫にある食材を使って、一番上手、うまい、料理を作った人が優勝。優勝した人はもれなく料理当番の役割を与えられるってことで」

「おっけー……」

そのルールにどこか穴はないかと想像するが、特に思いつかない。犬少年とドナドナも立ち上がり、ドナドナは、よっし、などと言つて意気込みみんでから、

「自分の料理に魔法を使って味を悪くするのは禁止だぞ、ウヨク」と言つた。

僕はなるほどドナドナの言っていることはもつともだ、と自らが不孝だったと思い知る。ウヨクが魔法を使うことは充分に考えられるのだ。

「そうだね、それは禁止だ。当然だけど」

と言ったが心の中では（危なかつた）などと思っている。心の声なので聞かれてはいない。だがそこでハツとする。例えばウヨクは人の心を読み取る魔法などを覚えているのだろうか、と。魔法の力は一体どんな所まで利用可能な代物なのだろうか、と、うすら寒い思いになった。

（だから魔法の力を独占しているノーザンス湖の都市の連中は、他の都市の反感を買うのか。魔法がどんなことをしでかすのか、その技術が隠蔽されている限り、予想もつかない。心を読む魔法なんて普通にあってもおかしくはない。そういう不気味な力を持った連中が、魔法使いだよな！）

そんな連中と交渉をしに行かなきゃならないのか、と思うと 嫌気が刺してきた。

だが、だからこそ、この交渉を成功させれば見返りは大きいと考えることも出来るとも言えるが……………。

「何をむつつりしてるんですか。そんなに警戒しなくても、ずるなんてしませんよ」

背後からウヨクにそう声を掛けられて、びくっとしてしまう。今、心の中を読まれた訳じゃないよな…ただ単に塞ぎ込んでたから、気にかかれただけか…?…。

「いや、何でもない。よし、はじめよう。誰から作り始めるんだ。それとも 顔の無い天使 を倒してからにした方が安心して調理が出来るんじゃないかな。キッチンは一つしかないし……………」

「そうだな。その方がいいかもな」

ドナドナが僕の意見に賛同する。

ウヨクは首を横に振って、魔法の力は便利なんですよ、とまたドヤ顔した。

ぱちん。

彼女の指が鳴らされると同時に、馬車内の様相が一変し、キッチンが部屋の中に四個完成させられていた。やはり魔法の力は凄まじいんだな、と僕は息を飲む。

「顔の無い天使 に襲撃される前に料理は完成させましょう。そうだ、時間制限を付けなければいいかな。四十五分くらいにしましょうか。丁度良いんじゃないですかね。どうですか」

顔の無い天使 は最低でも後一時間は襲撃してこないだろう。その間の時間を潰すという意味では、四十五分という制限時間は丁度良いと思えた。だから僕は異論を唱えず頷く。それは他の二人も同じだ。

第一種目、料理対決が、そういつた事前の決め事の元、開始されました。

東西南北、四方向にて向かい合い、小鳩がクツクルーと十五分置きに小さく鳴く瞬間を、全員で向かい合ったまま待つ。それぞれのキッチンに冷蔵庫が一台ずつ設置されているのだが、その中身というのは全員で共有している。ということかというところ、誰かが冷蔵庫内から、一つしかないわさび、を取り出したとしよう。すると全員の冷蔵庫から、一つしかないわさび、が消える。中身の何を取り出すかは、早い物勝ちというわけだ。北に僕。南にウヨク。西に犬少年。東にドナドナ。四方向で向かい合う僕ら全員が、火花を散らしたまま、小鳩の鳴く瞬間を手に汗握りながら、待つ……………！
そして。

クツクルー！

鳴き声が響いた瞬間。全員の動きが眼で捉えられない程に素早く動いたが僕も負けてはいられない。速攻で冷蔵庫開けて何を取り出すのかと迷うこともせず驚掴みで手当たり次第でいくつかり取り出してやるつ、としたが考えることは皆同じ、僕は空を掴んでしまった。一瞬が命取り。どうやら他の誰かに僕が驚掴みしようとした食材を、先に取られてしまったらしい。ちっ、と舌打ちしつつも手は止めて

いられない、もう片方の手で何かを掴んでやろうと、適当に手を伸ばし食材を掴もうとしたが、またも失策。やけに表面がトゲトゲしているハリセンボンみたいな食材を鷲掴みしてしまい、

「うぎゃああああああああああああああああああああ、N
OOOOOOOOOOO」

と絶叫しなければ耐えられない激痛。痛い、痛い、と喚きながら冷蔵庫から一旦後退。絆創膏が欲しいがそんなものはキッチンには無い。手は血塗れである。さ、最悪だ、と泣きそうになりながら東西南南の様子を窺ってみる。

東、ドナドナは大量の食材をミキサーにぶっ込んで茶色の液体を作り出している。

西、犬少年は大量の調味料を、ぶっちゃ、ぶっちゃ、と一匹の魚に容赦なくかけまくっている。

南、ウヨクはキャベツをガスコンロで直接熱して、消し炭に変えている。

異様な光景だった。僕は手がハリセンボンによって大出血していることも忘れて、その光景を眺めてしまっていた。キャベツを消し炭にしたら消し炭が誕生するだけだよ？茶色の液体なんて色遣いかなり汚いよ？そんなに調味料を魚にかけたら、魚さんは窒息死してしまうよ。もう死んでるんだけどね？

「ま、負けるわけには、いかない……………」

僕は閃いた。グミ。巾着袋に手を突っ込んで、腰から外し、中身を逆さにして一つの皿に全部ぶちまける。顔の無い天使の液体が凝固されたグミ。人間が食べても問題は無い、と以前にナラクから聞かされた。その味が苦痛に歪むくらいに最悪だということも。

（ふ、は、ははは……………そうだ、僕は既に最悪の食材を手に行っているんじゃないか……………！この勝負、もらった……………！）

勿論、グミを使っていることをバレるわけにはいかない。端っこに寄せられた黒光りのテーブルに乗っているグミ瓶を他の三人に使われてしまえば、この対決どころか、顔の無い天使戦にも差支

える。

僕は三人から見えない位置に大量のグミを乗せた皿を寄せると、余裕をアピールするための口笛を吹きながら、冷蔵庫を香気にまぎって、あとはまずそんな食材を適当にかいつまみ、ぐっちゃ、ぐっちゃ、にしてやってグミ皿の上にドロドロになったそれをブチマケタ。これによって、グミは完全に隠蔽された。三人はこれでグミのことには気が付けない。

クツクルー。

小鳩が二回目の鳴き。残り時間は三十分ということだ。いやー、余裕が出来てしまっただね。東西南の連中の様子でも、窺ってみるとしよう。暇つぶし、暇つぶし。

東、ドナドナはミキサーにさらに食材を詰め込んでいて、茶色の液体を何故か虹色に変えているという逆にすごいことをやっていた。西、犬少年は、どういつつもりなのか、調味料を掛け終えてもはや姿が完全に見えなくなった魚を皿から手探りで取り出すと、それを水洗いしてから火で炙っていた。で、炙り終えたらまた調味料の液体山に魚を再度ぶっこんでいた。

南、ウヨクは消し炭になったキャベツを、粉のようにして、生肉にそれを振りかけていた。まったく意味がわからない。その生肉をどうするのかと思えば、薄切りにして、軽く火で炙ってるなど思ったら、それも最終的には消し炭になってしまっていた。どうするんだろう。消し炭を大量に生産してしまっただけ。

まったく、それぞれが激マズそうな料理を作っている。

だが僕のグミミックスにはそのどれも勝利できはしないだろう。ナラク曰く、たやすく人を気絶させることが出来るくらいに不味いらしいのだから。

僕は残りの三十分間、料理を作っていたが、それは僕に余裕がないように見せるためのフェイク。実際には余裕綽々で、三十分間を待ち、暇だなあ、と思いつながら皆の激マズ料理が完成されていく様を遠目で眺めて、どんどん異臭が溜まりこんで来た部屋内で、吐

だ僕達が位置する。

「最悪の出来だぜ。殺戮兵器だ」

嘔吐物をぶちまけていたドナドナが得意気に語る。

「悪いけど僕の作品もとんでもない出来ですよ、うぎゃふ」

犬少年なんかめっっちゃ顔色悪いんだけど大丈夫だろうか。

「私も正直、負ける気はしませんよ。頑張りましたから」

そういえば何が勝ちで何が負けなのかわからなくなってきたような気がするが、まあ僕も負ける気は一切ない。僕も一言いつてやるうと思っただが、あえて無言というのも雰囲気あるかな、と思って、

「……………」

と黙っていたら、皆から空気読めよみたいな感じで睨まれたので、焦って言葉を探して、

「まぐまげんどおうおう」

と吐き気と焦りのせいでまったく意味のわからない言葉を言ってしまった。く、悔しい。

「負けませんよ、って言ったんでしょうね」

ウヨクは相変わらず翻訳上手だが恥の上乗せをされたような気分で悔しさはより増す。

だが蓋さえ開けられれば……………。グミの力であり僕の努力の成果ではないが、これは幸運だったということだ。運も実力の内。四十分の努力の成果が、十五分で作られた閃きと幸運に破れることもあるのが、人生なのさ、ふふふ。勝つのは北である僕、乙である僕……………。

「一斉に開けましょうか」

ウヨクの言葉に、全員が頷く。

「では…………… オープン！」

東西南北、四つの蓋が開かれ、天下一激マズ料理決定戦のその選手が、今姿を現す……………！

眩い光が北の側、つまり僕の目の前より放たれた。

黄金の色。それが、僕の方角だけ、から。

今日、僕は何度驚かされるのだろうか。またも啞然とすることになっちゃった。

蓋が四者から開かれる時、馬車中には異臭が放たれるはずだった。だけど、何故か僕の蓋の中身だけは光り輝いている。黄金色に。さらには素晴らしいほどに食欲をそそられる匂いたち。湯気がそれらの料理より立ち昇り、僕らの胃がぐると食を欲求することを促進させる、ってのはどういふことかという黄金の食卓だよこれ。ナラクの館で出されるクラスの料理が、僕の目の前にある。何、どういふことですか、ドナドナと犬少年も啞然として僕の黄金色の皿を見ている。鼻をつまみながら。彼らの皿上には彼らが作っていた最悪な代物、努力の結晶が臭そうな匂いを放っている。そしてウヨクの皿上には……………。

「お、おい……………そ、それ……………」

わなわなと震えながら、その南側の皿に人差し指を突き出した。突き出すしかない。だってその皿上に乗っかっている料理は……………。

「ぼ、僕が作った料理やないかー！」

そして叫んでみてから僕はハツとして全てを瞬時に悟った。そして自らの皿上に展開されている黄金の食卓を見下ろし、もう一度だけ僕が作ったはずの料理が南側に展開されているありえない状況に、啞然とし、魔法の力の凄まじさを思い知った。ウヨクの奴、交換しやがった……………。

「ルール違反じゃん！魔法使わないって……………！」

「言ってますせん。禁止されたのは自分の料理に魔法を使ってそれを

不味くすること、だけです。魔法は禁止ね、なんて話ではありませんでしたよ」

「それは、言葉の捕え方であって、僕はあれは魔法は禁止だという意味で……」

「いえ、そういう意味ではありませんでした。ドナドナが発言したことで禁止となったことは、これだけです」

ウヨクは空中にスピーカーを出現させた。そのスピーカーが宙に浮かんだまま、ドナドナの声で音声を発した。

『……自分の料理に魔法を使って味を悪くするのは禁止だぞ、ウヨク……』

録音していたとか、どんだけだよ……と僕は口をあぐり開けてしまつて、本日何回目のおんぐり？つて感じ。確かに言っている。そしてそれを禁止でいいね、と頷いた僕自身の姿は覚えている。

ウヨクはスピーカーを空中から消すと、ふう、と息をついて、やれやれ、みたいなジェスチャーをしてからこう言った。

「あなたがズルをしなければ、こんな酷い手段は取らなかつたんですよ」

僕は驚く。

「ずる？」

少し心当たりがあつたので心臓が高鳴る。まさか、心を読まれていたのだろうか。

だがそういうわけではないようだった。

「急に目を輝かせて巾着袋を大きく持ち上げて、満面のにこやかな微笑みで皿にグミをぶちまけてる行為が、目立たない訳がないじゃないですか。犬少年とドナドナは調理に夢中で気が付かなかつたみたいですけど、当然私は見てましたよ。あんな目立つ行動。冷蔵庫に入っている食材以外の使用は禁止だつて、事前にルールで決めていたはずですよ。よつて、あのグミを使用した時点でテングの反則負け、という訳です。だからまあ、ちよつと魔法で小細工して、あなたは最高に美味しい黄金の食卓を作り出したので、まあ今回の料理

対決、勝者はテングってことにしてあげました。だから料理当番はこれからテングです。反則してなければ私も正々堂々、魔法なんて使わずに決着を付けましたけど、卑怯な奴を見逃す訳にはいきませんでしたので。はい」

よくもまあ、舌が回るものである。

だが完全にロンパされた感じでもある。

もう僕はぐうの音も出なかった。ドナドナと犬少年が鼻をつまみながら、僕を哀れんだ眼つきで見ている。何か僕が臭いみたいだから、鼻を摘みながらみるのは止めて欲しい。でも止めると発言する気力すらもう無い。僕は勝者。つまり負けである。反則負けである。僕は閃いた時にめっちゃテンションが上がっていて、冷蔵庫の食材しか使っちゃいけないという取り決めを忘れていたのだ。なんたる間抜けであろうか。また負けてしまった。完全に下僕。下僕らしいみつともなさ。もう恥ずかしくて外を歩けない。もうダメだ死にたい恥ずかしい。黄金の食卓を最期の晚餐にしようかな。おいしそうでももうすぐ。顔の無い天使も来るだろうから食ってる暇は無いかな。あ、顔の無い天使に殺されれば丁度良いじゃん。下僕らしい終わり。うんうん、もう参りましたよ、はいはい、負け組万歳。なんたるナサケナサ。

そういう訳で、僕は寝込んだ。顔の無い天使に殺されに行くという気力も、何だかぐにやぐにやしている内に失せてしまって、布団に潜り込んで、黄金の粒子と遊ぶことで、ふへへ、と塞ぎ込み状態を楽しむという有様に陥ったのである。

「ちょっと起きてくださいよ。人面瘤に液体吸わせないと」

「何時まで落ち込んでるんですか。たかが料理当番じゃないですか、うほーん」

「俺だけじゃ時間稼ぎしんどいからさ、おきなつて。もうテングとか言わないから、おきなつて」

「って、それも言うってますよドナドナ。ぼほほ」

「あ、ほんとだ。てへっ」

し蹴りを放ってから頭突きを手当たり次第に放って、人面瘤にグミを食べさせて刀を口から吐き出してから、血を見てえようだなあ、と低くうなりながら馬車内のそこら辺に逃げ回り出した三人の姿を追いかける。鬼ごっこ。僕はマヂギレしている鬼。三人がキヤー、キヤーと逃げ回る。

そのうちに三人は馬車の外に逃げ出していったが、その程度で僕が追いかけるのを諦める訳がない。テंगाと呼ばれ捲くつた怒りを湯気として全身から立ち昇らせたまま、刀という凶器を持ち墓標荒野に飛び出る。

そしたら三人が、逃げるのではなく、パトリセアとナツウロクの両隣辺りで立ち止まっていた。その背中に思いつきり斬り付けてやるうか、とも思ったが、様子がおかしい。

どうしたのだろう、と思って、どうしたの、と声を掛けるが、返事が無い。その代わりに、ドナドナが指を突き出したので、その方角に視線を合わせる。

「……………」

僕は、もう、啞然とするのはこれで最後にしたい、と思った。

顔の無い天使 が百体ほど、馬車の進路のその先で、立ち塞がっていた。

開いた口が塞がらないまま、あの”蜂の巣”を眺める。

顔の無い天使の群生、とても呼べば、いいのだろうか。

赤、青、緑、白、オレンジ、黄、の六色が不規則な形で集まっ
ていて、それぞれの色が、点滅している。

チカア、チカア、と目に眩いがHOME TOWNのような暖か
みのある街灯の安らぎは持ち合わせていない。点滅の色遣いと、背
景が、荒野と、さらに向こう側のツララ氷森林の黒い影であること
などの影響が相俟ってか、実に顔の無い天使の群生が恐ろしく
見えるが、それは当然。当たり前だ。暴力によって破壊を行う天使
なんてね。

何なのあれ、並び方のせいかなんか蜂の巣みたいに見えて、色鮮
やかな幼虫が巣の中から餌を欲しがって点滅しているみたい。ここ
にあっしがいるぜ、みたいな可愛い幼虫のアピールみたいな。
と、それならば実に問題は簡単で、幼虫たちのアピールに気が付か
ないフリをして口笛吹きながら馬車を通過させてしまえば済む話。
幼虫が毒針を突き出すわけじゃあるまいし。だが、蜂の巣の幼虫と
いうのは比喻に過ぎず、あれは間違いなく顔の無い天使という
敵であり、僕らが四、五体で苦戦していた破壊の象徴。

今までの二十五倍程の戦力が。破壊衝動の塊が、あそこで群がっ
ている。

明らかに僕らの足止めをしている。僕らを標的にしている。何せ、
点滅の全てがこちらに向けられているのだから。チカア、チカア、
と点滅を繰り返しているのだから、今すぐにも百体全ての群生が
僕らを馬車ごと呑み込んで、殴殴殴殴と僕らを抹殺してもおかしい
ことではない。

全員が『死』ぬんじやないか。

僕は、悪い子はいねえがー、みたいなテンションで馬車内から出

てきた時、テング、テングと呼ばれながらも気分は高揚していた。乙として甲を楽しんでいて、孤独から離れていて、僕はお祭りで皆と楽しみを共有しているような感覚を味わっていた。でも一瞬で、それは冷えてしまった。固まりついて、もう上手に動けない。僕はギコチナクなつて、巾着袋を上手く掴むことが出来ないのは、握力が出ないから。喉が詰まってる。息苦しい。刀を握ってる感じがしない。心臓の鼓動。無限牢獄に帰りた。こんなところにいるのは、おかしいことじゃないか。

「パトリセア、ナツウロロ！ 方向転換だ、今すぐに、逆向きへと走るんだ。方向転換しろっ！」

ドナドナが全力で叫んだ。暗闇の中でもわかるほどに、血管がびききつ、と額の辺りから湧き出ていた。それ程に強く叫んでいた。こんなドナドナは初めて見る。記憶がないから正確にはわからないが、こんな彼は滅多に見かけるものじゃない。ウヨクも見るからに焦っていて、

「私が魔法で足止めくらいは出来るからッ」

と僕らに向って言うてくれているし、犬少年は懸命に吠えている。僕は犬少年の頭を撫でながら、

「これは死ぬのかもな」

と、これは僕にだけ聞こえるように呟いた。みんなに聞かせてはいけない言葉だという自覚はある、後ろ向きな呟きだったが、これが僕の本心でもあった。そして『死』について考えたく思う。死んだらどうなるのだろう。死んだら僕はどうなるのだ。僕は僕じゃ無くなるのか。それともまた次の世界が僕を待っているのだろうか。それならいい。死ぬなんて、きつとたいしたことじゃないんだ。だからここで不様に果てることも、案外……………。

「……………」

「テ、テング……………？」

「いや、なんでもない。よし、逃げよう。ひとまず退散しよう。朝辺りにはあの蜂の巣も無くなっているかもしれない」

「蜂の巣……ああ、そう見えなくもないかもしれませんが……大丈夫？ うふふん」

「問題ない。よし、馬二頭の方向転換は終わったな」

パトリセアとナツウロロが蜂の巣とは逆の方向に足を向けてくれた。馬も焦っているらしく動きに落ち着きがなく、足がもつれるのでは、と心配だが転びはしなかった。

「急ぎましょう。ステルスを発生させているので、まだ 顔の無い天使 には私たちのことが見えなはずですから」

「さすがだなウヨク。便利なことだ！」

「ふふつ、才能あるんですよ」

「自分でいうもんじゃない。格が下がるぞ」

そんな会話を交わしながら馬車内に戻った二人に続いて、僕と犬少年も馬車内に入る。まだ少し思考がふわふわとしているが、ぼーっとしている場合じゃないと頭を振る。

「よし、急いでくれ」

馬二頭にそう告げ口笛を吹くと、彼らは急加速を付けて駆け出す。今までと違って乗り心地が悪い。ひどく揺れ、人によっては吐き気を催すだろう強い振動。僕は揺られながら、頭の中でさっきの蜂の巣の光景を思い返す。身震いがする。顔の無い天使 は得体が知れない。あれだけ密集されたらミスが土の中に千匹くらいいたかのようにキモチワルイ。のっぺらぼう。色彩だけの点滅するのっぺらぼう……。

「何か様子が変わらないか？ あいつ」

「まあ、怒りが治まってくれたと思えば構わないんですけど、黙られると逆に怖いかもですね」

「りゅーしと遊んでるんですよ、ぐふふ」

「りゅーし？」

「ええ……テンガは……」

三人が僕の背後辺りで会話をしている音量が、どんどん遠ざかっていく、小さくなっていく。そんな中、会話をする気にならず、聞

こえない振りをして立ち上がった。水晶玉に目をやった。青空色。どうやら、連中を撒く事が出来ただろうか。…よかった。

と思つた途端に、

危険を伝える紫色が生じた。それも濃い、濃密な紫。

「やばいんじゃないのか……！」

僕が唸るようにして声を発した途端に、照明が消えて馬車内が暗く……。

光を発しているのは、蛍光するグミ瓶と、紫色の水晶玉だけ。それらの仄かな光に当てられて僕らは暗闇の中でわずかに浮かび上がる。静寂。静かだ…、僕ら四人は互いに見合つて、しかしお互いに何も言わないまま様子を窺う。馬車はもう停止している。

僕はガタガタと全身が震え始めるのを止めることが出来ない。「百体なんて、魔法でだつてどうしようもないだろ……？」声が悲痛を纏っているのが自分でもわかるのに、その悲痛を抑えることができない。みんなが悲痛を抑えて息を飲んでいるが、冷静でいられるか、今すぐ、顔の無い天使 が馬車内に雪崩れこんで来るかわからない…。天井を潰して現れることもあるかもしれない…。死んでも次の世界があるかもしれないから、いいんじゃないか……。さつきまではそう思っていたが、僕は蜂の巣の点滅を思い出してジツとしていられなくなる。

「逃げよう。ここにいても、危険なだけだ」

「待て、方策をまとめてから……」

そんな方策をまとめている時間があるわけがない。もう囲まれているのだ。囲まれているから、馬は足を止めたし、馬車内は暗闇に包まれたし、水晶玉は濃密な紫なわけであつて。急がなければならぬ。だがドナドナやウヨクが戸惑っているのです、まどろっこしい。「逃げながら方策を練ればいいさ……」

一応そうやって告げると、二人とも渋々、というか何事か迷っている様子だったが納得してくれたいらしい。じゃあ行こう、って流れになるんだけど、ソノ前にウヨクが魔法を使用する気配を見せた。

「ここにいたら周りの状況も窺えない。だが、魔法の力で馬車を透過すれば、ここにおいても周囲三百六十度の景色を確認することは出来ます！」

そう叫びながら彼女は、魔法の発動のためと見える仕草。それによつて馬車の壁や天井、床がみるみる透明となり、外の景色が透けて見えるようになった。

そして状況が明らかになった。

見えてきた光景。

「……………」

僕達は逃げることを出来ないことを理解させられてしまつて、絶望に瀕する。これは四人とも同じ気持ちだつたと思う。だつて、百体が僕らの上空も含めて、三百六十度全ての逃げ場を防ぐようにして、浮かんでいた。ぶかぶか、とのつぺらぼうが六色に点滅して……………！

パトリセアとナツウロロが、殺されている。首と身体が分離して、首を 顔の無い天使 が収穫物とでも言いたげに誇らしげに持つていて、首の切断面から、ぼた、ぼた、と血が垂れているのが透過越しに見える。パトリセアとナツウロロはもう殺されてしまった。だとして次に殺されるのは誰だ？次に『死』ぬのは誰だ。

それは当然、僕達だ。

「終わりだね」

僕は独り言のように、でもハツキリとした発音でそう呟いた。そしてたら気が付いたら、ナラクに首元の襟を掴まれていた。おお、怖ッ。

「簡単に終わりなんて言わないで下さい。まだ手段が、……………」

ウヨクは口ごもってしまった。紅蓮色の両眼は怒りに染まっていた力強い。でもその火が少しずつ弱火に変わっているのがよくわかる。少しずつ彼女も諦めているようだ。そりゃそうだ、彼女は魔法使いなのだろうが、何せ数が、ね。百体。僕達は不幸の星の下に生まれたのだらう。運が悪かつたんだきつと。だから、諦めるしかない

いんだと思えばいい。

僕はウヨクの力が弱ってきたのを見計らって、彼女の両手を僕の襟から離させる。その両手は随分と熱い。僕の手が冷えているから、余計にそう感じたのかもしれない。

ドナドナが、座った。犬少年も、それを見てから座った。

ウヨクは透過の魔術を止めてから、座った。僕は最後に、座った。しばらくみんな黙り込んでいたが、沈黙に耐え切れなかったのか、ウヨクが声を発した。

「魔力を暴走させて自爆するという手法もあるんです。そういうことをすれば皆、巻き添えになって死にます。ですが、顔の無い天使に殺されさえしなければ、本当の意味での『死』にはなりません。八十年周期のこの世界で、また零からやり直しとなった時に腑抜けた悪魔の手によって再生させてもらえます。ただ、問題は、もしかしたら八十年周期の世界はもう今回限りで、終わりになるかもしれない、ということなんです」

「どうということ？」

あまり意味がわからなかった。

ウヨクは続ける。

「革命への希求は各地で広がりを見せ始めています。そして革命派は、この八十年周期の繰り返し返される世界という仕組み自体を変えてしまおう、という目標を掲げている。今、私たちのように、唯一の保守派であり革命派のもっともの敵であるノーザンス湖の魔法使いたちに交渉を持ちかけたり、あるいは滅ぼそうと準備をしている人というのはいくさんいるんです。それほどに、革命派の意識は高まっている。おそらく、この世界での革命が成功する確率は、五割程度は、ありえると私は思います。革命が成功すれば『再生と破壊』の八十年周期のこのルーピックキューブは、仕組みとして崩壊することになるでしょう。つまり、私が今ここで皆を巻き込んで自爆しても、みんなは本当の意味では死なないのがこれまでですが、革命が成功すれば、再生されないんです」

「でも、それってつまり、顔の無い天使 によって『死』ぬよりは、再生の確率は五十パーセントである方が生き延びる確率としては高いってことだよな」

「そうですね。革命が失敗すれば既存の世界は続くことになり、となれば、もし私の自爆によって死に、本来の意味で『死』ぬことを回避さえすれば、保守派が勝利した場合は私たちは既存の世界の恩恵で、復活することになります」

「なら。そうしようよ。生き延びる確率は高い方がいい。保守派が勝つことは革命派の僕らにとっては悔しいことかもしれないけど、でも今『死』ぬよりはきつといいよ」

僕は本当は革命が成功しようが失敗しようが、どちらでも良い立場なのが心の内での声だった。僕は所詮下僕に過ぎず、世界がどう変わろうが、それはそれで甲であることは変わらないのだから構わない。僕は甲乙の関係性の中で生きていけるなら、死ぬよりはマシだ。死んでしまっただ、また次の世界が現れてくれるとは限らないのだから。僕はそう心の中で思っていて、とにかく死ぬよりはマシだ、という考えだ。

だが、ウヨクはまったく違う考え方をしているのだった。自爆について提案したのは彼女だと言うのに。彼女は僕の言葉に首を横に振った。

「私は『死』んでしまった方がいいと思っています」

何を言っているんだと耳を疑った。死んだらそれでおしまいじゃないか。

だが彼女は続ける。

「革命派の敗北を前提にして、まるでそれを願いかけのようにして自爆をするという選択は、提案した私が言うのはおかしく感じられるでしょうが、それは二人にそれを提案される前に先手を打っておこうと思って言った言葉であって、その選択を選びたいと思っただけの発言ではないのですよ。私は革命派の勝利を信じている。世界が変わると信じている。この八十年周期で全てが滅び、再生されるとい

う世界のシステム。それは変わらなきゃいけないんです。魔法使いの国だって、革命が起きれば変わる他ありません。魔法使いの国が変われば、この世界には魔法の力が広まっていくのです。そうすれば世界はもつと発展する。著しく発展すると私は思います。餓死をする人もいなくなり、無益な争いをする必要だって、無くなる。そういう大きな大きな人間にとっての益が生まれる、絶対的に成功されなくてはならない革命が、今起きている革命なんです。だから私はそれが成功する未来しか信じない。ゆえに、それが失敗する未来を願うような行為をわざわざもしたくはない。つまり、自爆をして保守派が勝利し五十%の確率で生き延びることを願うのなんて糞食らえ、だったらさっさと『死』んでやる、というのが私の意見です。考え方です。これは変える気はありません。ですから三人は、死ぬなら自分たちで勝手に自害してもらえとありがたいです。これは言っておかないと駄目なことだと思つたので、長々ですが、言わせてもらいました。私の決意です。随分と前から、決めていることです。この修羅場だからこそ、これを宣言しておきたかった。長々と、ごめんなさい」

彼女は頭をぺこりと垂らしてみせた。本当に長々と語ってくれたものである。その途中で 顔の無い天使 に襲われて殺されてもおかしくはなかった。彼女からすればそれでも問題はないのだろうけど、僕はまだ決心など付けられたものじゃない。

僕には彼女のような一心不乱さは無い。

生きてこそ人じゃないのか。死んだらそれでオシマイだって知らないのか、ウヨクは。

「理屈じゃないんだな、ウヨクは」

ドナドナがそんなことを静かに述べてから、錆びた剣を取り出し、そして僕に向って真剣なる瞳を向け、剣の切っ先を僕に向ける。

「俺はあなたの恩に報いるために、この旅に参加した。道中あまり活躍は出来なかったが、今ここであなたが自害をすることを戸惑っているというのなら、俺が介錯しよう。……………痛みは少ない方が

いい」

そして彼が放った言葉で、その行動の意図を掬った。

僕は全身に冷や汗を掻く。たしかに自害をする勇敢さはすぐには湧き出てこない。だが今ここで彼に介錯をお願いすれば、錆付いた剣で多少は痛そうだが、おそらく自らで自らの腹を貫くよりは痛みも少ないだろう。ならば、お願いをするべきなのだろうか。彼に、介錯を。そして五十%での再生を願うか。僕はウヨクとは違う。下僕なのは同じだが、その価値観がまでが同一なのではない。僕は僕の考えとして、そうだ、そうだな……………。

「どうした？ どうする」

「……………」

「テング。頷いてくれるだけでもいい。もしくは首を横に振ってもらってもいいが…俺は恩人であるお前に、どうせならば生き延びてもらいたい。それが俺が恩を返すということにあたるのならば、猶の事」

「……………」

「迷っているか」

「……………」

嫌な空気が、沈黙を続ければ続けるほど見えない霧となって周囲を纏っているのがわかる。犬少年はもう死を受け入れているかのように目を瞑っている。彼はそうだった、自らの命が消えることを素直に受け入れているのだろう、犬少年は。そしてドナドナ、ウヨク、の目線は僕に向けられている。少し冷やかさが混じっているように見えてきて、そんなに見ないで欲しいと思った。みんなはみんなの信念のような、生き方のようなものを素直に受け入れている。

それに対して僕は、何だかよくわからなくなってしまうている。どうしてだろう。さっきまで『死』んでも良いかと思っていたり、馬車の内で少し楽しんでいたり、逆に逃げようと思ったり、自害を怖がったり。いろんな考えが浮かんでは、また別の形となって僕は優柔不断とはこういうことかと納得し、舌打ちを打ちたくなった。

チツ、と言いたくなってきた。この切羽詰まった状況が嫌だ。誰かにどうにか、してもらいたい。

僕はずっと黙り込んだままだった。何も決断できぬまま、時だけが過ぎていった。

やがて、長い時間が過ぎた。でも、馬車は潰れなかったし、僕らの命は誰一人としては奪われない結果となった。二頭、パトリセアとナツウロロだけが、犠牲となった。

結局、顔の無い天使は僕らを殺さなかったのだ。ただその代わりに僕らは拘束される。

百体の統一された動きをしていた。顔の無い天使たちは、魔法使いたちによる差し金だったから、見事なほどにコンビネーションで僕らの逃げ場を無くしたということだった。

保守派の魔法使い。圧倒的な力を持つ、六カ国中でもっとも閉鎖的な国の連中。

圧倒的な魔力をその身に携える旧制部隊アンシャン・レジムの隊長、ドリユメサ。僕が後に心の中でサドとあだ名を付けることになる男に、墓標荒野の隅っこで僕らは捕えられたのだ。

暗い水の底に半身だけ浸かり続けたような、底冷えの寒さを感じる。

倦怠というべとべとした煩わしさを纏う湿った空気が、感知できる。

何かをされたのだろうか。或いはこれから、何かをされるのだろうか。

息詰まっっていて苦しい。だが目を”開けさせられた”。

耳に歌が入り込んでくる。あの綺麗な歌声ではない。不協和音をふんだんに取り入れている苦痛や不安を呼び込む、或いは追い込む、負の音程の連鎖。錆びた鉄鎖となって、これが僕達四人を拘束する手枷や縄の代わりとなっているようだった。身体、筋肉などにも全く力を込めることが出来ないのはこの不協和音の鎖のせいだろう。気持ちが鬱屈するのも、多分。倦怠を感じるのも。

身体は自ずでコントロールできない。何故こんなことに…？ああ、そうだ。

そうだ、捕えられた……。顔の無い天使 を従えていた魔法使い……。首を切り取られ、血がしたたる白眼を向いた馬二頭……。パトリセアとナツウロロ……。蜂の巣…点滅していた天使ののっぺらぼう……。そして、顔の全部分に刺青を彫っていた華奢な男……。茶色のローブを身に纏った細めの影。刺青男の魔術によって、そう、捕えられた。

そして、意識を取り戻してから、眼を開かされた先では。ウヨクが破壊されているのが目に付いた。

紡いで……切って……繋いで……紡いで……切って……繋いで……紡いで……

どのように破壊されているのか。まず、当然のように服は着てい

ない。脱がされて、裸になっている。

その状態で破壊されていた。彼女は。

発狂しているような、感情の込められていないような、言葉の断片が、何度も繰り返されている。少し遠い向こうから耳に聞こえて来るのは、この屋内が広々としたホール。そのような作りになっているから音が反響している。

紡いで……切つて……繋いで……紡いで……切つて……繋いで……紡いで……

顔全体に刺青が彫られている男の声。

それと僕らの三百六十度を取り囲むようにして建ち並んでいる、百人超えの人間たち。歌を歌っているのはそいつらだとわかる。ゴスペルを集団で歌う人たちのことを思い出させられる。そういう光景だ。茶色と黒のロープ。百人超えが纏っているのは暗めのロープ。黒か茶かのどちらか。

顔全体に刺青を彫っている男は、茶色のロープを着て、裸身のウヨクに表現できない痛々しい行為を連続で行っている。躊躇無しに止めることなしに、ウヨクは破壊されていた。言葉を発することも出来ないのか、床に叩きつけられたり、身体を裂かれたりしても、彼女は悲鳴を上げることままならぬらしく、黙ったままその大男に振り回されている。八つ裂き。

モザイク処理をウヨク全体に施したいと思えるほど、彼女の有様はひどいことになっていて、肉塊と言っても良かった。べちゃり、と床に打ち付けられる。

あれはもうウヨクとは言えなかった。打ち付けられることを繰り返すことでぐちゃぐちゃになった肉や皮や骨の、ミンチだった。

耳に聞こえる歌は悲劇的な調子で、それも終わることをせず続いている。百人以上の人間たちは左右に身体を揺らしながら、餌を欲しがる鯉がパクパクするかのよう大きく口を開けて、音の反響する広いホールに歌を響かせる。ここはひどく寒い部屋だ。照明も冷たい藍色で、全てが薄まって見える。実際、気温も低いように感じ

る。なのに空気は乾燥してなくて、じつとりとしていて、不愉快な重たさを含んでいる。不愉快な空気。不愉快な歌。暴力的な光景。ぐちゃぐちゃのミンチ。刺青を顔中に施している大男。

立ち上がることも声を出すこともできない。顔を動かし、視線を動かすことが出来る程度だ。

身体中が麻痺している。だが、何もしいない訳にもいかないのではと思うから、痺れを堪えて周囲の様子を窺い、まずドナドナと目が合う。その隣に犬少年が死人のように横たわっていたが、呼吸しているようではあるから生きているのだろう。ドナドナも身体を動かすことは出来ないらしいので、僕らはとりあえず目を合わせる以上のことはできない。ドナドナもウヨクの惨状には当然気が付いているらしく、苦々しそうに眉を潜めている。

紡いで……切って……繋いで……紡いで……切って……繋いで……紡いで……

乳房が花びらのように開かされていたし、腸が引き裂かれているお腹から垂れ落ちてるのがへその緒のよう。指が切り落とされて血が噴き出していて、最終的には肉片へと堕ちる。腫れ上がった赤みを帯びた肌、魔法によって焦がされた皮膚、魔法の刃によって斬り裂かれる身体。

紛れも無くウヨクだったものだった。

今はただの肉片と言って違いはなくても。

魔法の力によって何度も、何度も何度も何度も、肉片に変えられた後に、元通りの裸身に戻されていた。戻された後には傷一つ形跡として残っていなかったが、また壊されるから関係がなかった。

痛覚はあるのだろうか。意識はあるのだろうか。あるのだとしたら、恐ろしい、世にも地獄という言葉がそのまま当てはまる、苦しみばかりの拷問だ。そこには、他に何の感情も無いように思える。ひたすらに苦しみが与えられる。あの刺青男は彼女を繰返し繰返しなぶり続けて、彼女は繰返しなぶられ続ける。

「つえ、ええ、えええ」

不愉快さが頂点に達して僕は嘔吐していた。身体のコントロールがほとんど利かない割に、こみ上げてくるものを堪えることが出来ず、吐いてしまった。

その嘔吐物を撒き散らす音が、びちゃ、びちゃ、と不協和音の合唱や、拷問の音、に混じりながらもホールで大きく反響して響いた。だからか、刺青の魔法使いは拷問の手を止めて、僕の方へと顔を向けた。ウヨクの肉片をべちゃり、と床に落としてから、

おい、おい、おいおいおいおい。

と考えられないことをしてるねと驚愕しているような、或いは、心底から呆れているような。そんな声を発しながら、ホールの向こう側より歩いてくるのが嘔吐のせいで霞んだ僕の視界からでも見える。来るな、と生物の本能みたいな感覚が胸奥で騒ぐ。来るんじゃないよ、狂人が、と。

魔法使いなどではない。

あれは魔法使いに召喚されたサタンか何かだろ、と考えてからその男のことを眺めると、刺青が刺青に見えなくなってくる。あれが元々のその男の皮膚の色なのではないか、と思えてくる。ここは悪魔の部屋なんだ、と僕はわかった。そのプライドの高そうな悪魔の部屋の一部に、僕は嘔吐をしてしまったのだ。

取り返しの付かないことをしてしまったと悟った時には、宙に浮かされていて、片腕を捻られていた。ボキウツ、普段聞かない内部の骨が折れたであろう音、鳴った。ああ、と僕は思ったがしかし訪れるはずの痛みは無い。またボキウツ、と取り返しの付かない音が鳴ったが、やはり痛みが無い。彼は無表情で僕を折る。捻る。痛みは一切無い。どんどん意味がわからなくなっていく生きているのか死んでいるのか。ここが何処なのか、何時なのか何時何時なのか、痛みがほどばしって脳味噌が溶けていく、あるいは、砕かれていく。粒子が全身に行きかってキラキラと眩い、だが同時に血流もほどばしって粒子と共に混じって、体外に排出されていくのが痛みが無くともわかる。キモチワルイなんだろうこの感覚は全て

が体外に排出されていき、破壊されていくと共に、諦めという感情、諦観という奴が湧きあがってきていて気が付くと僕は裸体で、元通り傷一つない状態で、悪魔の部屋の床、嘔吐した辺り、で横たわっていた。

そんな僕を刺青男が見下ろしていて、

「…………どうよ？ 痛くないだろう、見てるよりもやられる方が、気持ちが良いだろう？」

と言った。

僕ははとんでもない奴に捕まったのだと、その一言だけでもよくわかった。

ゴスペルが止まっていた。歌が聞こえない。身体が自由になっている。だから声を出せるとわかった。

臆病さに包まれて何も言えないかと思っただが、案外、口は開いた。「なんで、こんなことを？」

間抜けな質問のような気がした。だが尋ねたくて仕方がなかった。周囲を見渡せば何時の間にかドナドナや犬少年も肉片と化している。多分、僕も他のみんなが拷問されている時は、肉片だったのだろう。魔法の力、ということだ。一つ疑問なのは、まず、何ゆえに痛みを与えない拷問などをするのかということ。肉片に変えては再生させるなどという、まるでこのルーピックキューブの仕組みのような行為…………。

刺青男は、くっ、くっ、くっ、と堪えるような笑いをしてから後には真剣な顔付きになる。そして口を開く。近くで見ると、身長が高いのがよくわかる。二メートル、あるかもしれない。

「…教えて欲しいのか…………。そりゃあ、そうだな…こんな所に連れてこられて、肉にされちゃあ…………痛みがなくなるとも…辛いだろうよ…生きてるのが死んでるのかもわからなくなるか…………」

この男は恐ろしい存在だと今、ハッキリわかった。

だがかといって震えるばかりで何もしないというわけにもいかない。教えてもらえそうな情報は出来るだけ引き出すに限る。僕は頷

いた。なるべく恐れが表出しないよう、慎重に頷く。

刺青男は僕の頷きを見て、「そうか」と言葉少なに返答してから、また僕の骨の、何処かしらを折った。痛みはやはり無い。ボキウツ、という不可思議な音だけ。彼は僕の骨を折りながら、うわ言のように、

「紡いで……切って……繋いで……紡いで……切って……繋いで……紡いで……」

とウヨクに対してやっていた言葉を繰返し始めた。

そのうちに僕は肉片になっていったような気がする。意識があやふやになっていた頃には、何もわからなくなっていた。

だが一つだけ、拷問の途中に教えられたことがある。

「…これは、儀式だよ…」

儀式にしては手荒にも程があるんじゃないのかな、と肉片になりながら僕は思ったのを、よく覚えている。後に聞かされる所によると、僕らは三日間ほど、この儀式を受けさせられていたらしい。

儀式が終わった後に僕に与えられた部屋は、やっぱり、牢獄。

牢獄の造りは今までで一番、不思議。

魔法で形作られた脱出不可能な監獄だと、入れられた時に説明された。

「僕の下僕生活は本当にどうしようもないな」

と牢獄の中で、人面瘤に話しかけてみた所、スー、スー、という寝息。

案外人面瘤のこととか、切り離されたりなどの処置をされるかと思っただが、何もされなかった。

保守的で、しかも魔法という力の過信があるから、情報収集を怠っている連中なのかもしれない。だから人面瘤が革命派の交渉物だとも知らない、とか。

そんなことを考えながら一人、牢獄の中にいるとき、綺麗な歌声が聞こえてきた。

僕はそれに耳を澄まして、穏やかな寝息をたてた。

何処にいても聞こえて来るこの綺麗な歌声。どういつ幻聴なのだろう。

頭がおかしくなったのだろうか。

「出る。……お前にちょっとした自由を、体験させてやる」
偉そうな態度、というよりは完全に、お前なんて何時でも殺せる雑魚に過ぎないんだから俺の命令に従ってろよ糞、みたいな感じで舐めきつている態度という風に見える。僕が僻んでいるのか、実際に彼がそういう感情を持ち合わせているからそう見えるのか。舐められているのは間違いないと思うが、僕に拒否権が無いのも、確かだ。

立ち上がり、歩き、牢獄から久しぶりに出してもらおう。

刺青の男は僕を背後に付き従えた状態で、下手に動いたら簡単に殺しちゃうから気をつけろ、と忠告してきた。

本当に殺されそうなので、僕はおとなしく彼の背後に付き従うことにした。

通り過ぎる人々は全て、何か良く聞き取れない発音だが、彼に挨拶らしき言葉をかけていく。彼もその聞き取れない発音の挨拶らしきを、返す。魔法使いたちは茶色のローブ、もしくは黒のローブ。男性が茶色、女性が黒色、で分けられているらしい。

顔に刺青を入れている者は多いのかと思っただが、さすがにこの国でも珍しいのだろう、そんな人間は僕の前を歩いているこの男以外にはいなかった。

世間一般で言う”魔法使いらしい”格好をしている連中ばかりで、ローブにトンガリ帽子に魔術の本らしきを抱えている。そんな人間が数多くいる中で、僕は一人黒スーツ。明らかにみんなが注目していた。どうせならローブを一着、着せてくれれば目立たなかったのに。紛れることが出来たのに。

『オセロが一人お通りだ』

そんな意味の言葉の文字を、宙に浮べて光らせている奴がいた。金髪で、いやらしい微笑みを浮べている。四、五人で束になってこ

ちらを見て、ニヤニヤしているのだ。

『オセロが一人お通りだ』という言葉の意味はわからぬが、あの、金髪がリーダーっぽい四、五人に馬鹿にされているとはわかる。僕は連中に睨みを返しながらも、下手に動けば前方を歩いている鬼畜刺青男に殺されてしまうので、睨み返すだけだ。

そんなこともありながら歩いていく内に、エレベーターらしきのに乗って、下降、いわゆる地下駐車場、みたいな所に連れてこられた。で、魔法なのにこんなのあるんだね、って感じのイカツイ車の助手席に乘せられて、刺青男は運転席に。

鍵などを取り出すまでもなく、車がエンジンを稼働させて動き出す。

「ま、楽にしなよ。これ、飲む？」

意外すぎることに、刺青男がきさく。ジューズらしきを僕に渡してくるが、拒むことも怖くて出来ない。あ、どうも、などと言つて受け取る。でも途中で、受け取ったジューズの容器をただ持っているだけなもの、隣からの視線が痛かった。仕方なく意を決して飲んでみると、おお、案外にもフルーティーで上手かった。

僕がフルーティーなジューズを半分くらい飲み終えた頃に、発進した自動車は地下駐車場らしき無愛想な空間を抜けて、高架橋らしきところを走るようになった。

空が広く、様々な色の…… 顔の無い天使 が飛んでいるのが見えた。僕は思わずジューズの中身を噴き出しそうになったが、それを堪えて、尋ねて良いものかと一瞬迷ったが、尋ねたいという欲求に勝てない。

「あの、あれは 顔の無い天使 では……」

刺青男は、んん、と低く唸ってから、

「あれは 飼われ天使 だ。我ら魔法使いの魔力によって服従した顔の無い天使。お前たちを捕らえる時にも使っていたらどう？」

「つい最近のことなのに、もう忘れたのかい、オセロな坊や」

「その、オセロってのはどういう意味ですか」

「白黒ハッキリするばかりで、その中間のことを考えることのできない単純野郎って馬鹿にされているってこと」

「そういう意味ですか」

「さつき城内で『オセロが一人お通りだ』書かれていたが、失礼だったと謝るよ。……最近、革命派の連中のことを単純オセロ野郎だと侮蔑するのが流行っていてね。気を悪くしたなら申し訳なく思うが、だが、実際君達が単純馬鹿野郎なのもまた事実だろう？ ……

ま、当然、君達はそのことをわかっていないのだろうが……」

「……気を悪くはしませんよ。ただの挑発ですよ、保守派側の」

「……いや、ある程度事実も内包しているさ……。今の革命派は、単純馬鹿だ」

「ただ馬鹿だと言われても、挑発以上の意味は為しませんよ」

「……その通りだ…悪いね、はははっ」

「……………」
「チツ、と舌打ちがしたい。この男、僕をイラ立たせるためだけに……………」

嫌な気分になり、車内は暗い、会話の無い空間となって無言が続くようになった。僕から話しかけるつもりは当然無いので、窓の外に見える 飼われ天使 等が見える、魔法使いの都市の、その景色を眺める。風景。光景。

この都市は、すごいのは確かだ。保守的、とか言ってるからもつと質素な感じ？そういうのをイメージしていたが、ドが付くほど派手で…………… HOMETOWNとは雲泥の差だと言っている。雲がこの都市で、泥がHOME TOWN。そう呼べる程に、ここは発展している。HOME TOWNもあそこはあそこなりに都市部は治安も良く、雰囲気があつて良い都市だったが、ここはまた別物。プリンとミカンくらい違う。刀と斧くらい違う。犬と猿くらい違う。山と川くらい違う。雲と泥くらい違う。これはさつき言った。ヘッドホンとイヤホンくらい違う。緑茶とウーロン茶くらい違う。

巨大たる都市。

高架橋を渡りながら眺望し、やがて目に付いたのは、その中心部に聳え立つ巨城。

明らかに何度も増築を繰返したと思わしき部分が多々見られ、構造に欠陥があるような外観をしている。重力を無視したように横に突出している部分だとか、どうみても宙に浮いているようにしか見えな部分だとか。

（これが魔法による文明の発達ということか）

あの居城を見ると、魔法の凄まじさを改めて実感できる。

魔法という代物の凄みを見る者に伝える、象徴だろう、あの巨城は。そしてこの都市も。

僕がそういうことを考えている間、車内の後部座席の方から、ずっと、寝息のようなものが聞こえていた。スハー、スコー、という呑気な代物なのだが、僕が考え事をする邪魔をずつとしてくれていた寝息だ。

どうやら、後部座席で誰かが寝ているらしい。

誰が寝ているのか。どんな奴が寝ているのか。気になって後部座席の方に顔を向けると、ヘソが見えた。丁度ヘソ。そのヘソ辺りが呼吸によって膨れたり、萎れたり、繰り返しているのが見えたのだった。

前の座席から後ろに振り向いて見えるのはそれだけなので、僕はヘソが後部座席にいるということだけ認識して後に、また景色を眺めることにした。

（これから何処に連れて行かれるのだろう）

と考え、不安に包まれながら。

しばらくすると、何の前触れも無しに刺青男が自己紹介を始めた。意味わかんなかった。

「俺は旧制部隊アンシャン・レシムの隊長で、名はドリユメサと付けられている。現在

我ら、ノーザンス湖を縄張りとする魔法使いの都市は、厳戒態勢を敷いていてな。その原因は勿論、お前たち革命派の数ばかりが多い

連中のせいで、旧制部隊は今大忙しだ。で、捕えたお前たちに対する儀式も終え、様々な事務手続きも終えた。それでお前をあつての牢獄から引つ張り出してやった訳だが……………」

ドリユメサ。またこういう何とというか、覚え辛い名前だ。あだ名を考えよう。よし、サドに決定。

そんなことを考えていたら、

「……………わかってくれたかな？」

などと、何もわかっていないので困ったが、ここは適当でも大丈夫かもしれないと見当を付けて、

「はい、それなりに」

とごまかすような雰囲気を忘れないまま、首肯した。

ドリユメサは僕の首肯を見て、驚いたらしく刺青の中で唯一まともなその両目を、大きく開いたと思うと、

「本当に良いのか？」

と重ねて問うてきたので、僕は首肯は失敗だったと悟り、

「あ、冗談です」

と訂正した。人の話はちゃんと聞かなければ駄目だな、と思った。

「実は、お前にはどうしても一つ、言っておかなきゃならないことがある」

「はい？」

「実の所を言えば、というかさつき言った通り、俺が手助けをしたのはお前だけだ。他の連中はこれから、おそらく死刑。死ぬことになる。そしてお前にも一人、殺してもらおうわけだが……」

「いや、え、ちよつと待つてください」

「なんだ」

「さつき聞き逃した話ですか……？」

「聞き逃した？」

「い、いえ。何でも。え、ていうか、え……こ、殺す……し、死刑は、聞き逃したかもしれません。や、やるんですか……そういうことを？」

「当たり前だ。保守派の我々は通常、革命派の侵攻を許さない。齒向かう者たちは全て我らの儀式を経験させて後に刑の執行にて殺す。それが通常の、我々旧制部隊アンシャン・レジムの仕事だ。本当なら、お前も殺すところなのだが……俺はお前の命を救おうと思っている」

「……何を……」

言っているのか。まったく、意味がわからないので、先ほどの会話を脳内で繰り返し返してみた。車内、しばらく沈黙が走るが、僕の脳内は嵐のごとくに荒れ狂い、情報の整理を行おうとするが上手く働かない。殺す。死刑。僕だけが手助けをされた……助かった？……だが残りの全員は死刑……そして、僕にも一人、殺させる、と言ったか……？

どうということなのか。運転席のサドに顔を向け、とにかく何かし

らを尋ねようと思った時に、ポン、と背後から肩を叩かれたので驚きながら振り返ると、振り返った直後に顔面にパンチ。ぐべっ、僕の顔面にへソだった奴のソレと思わしき拳が、めり込んだ。

「う、うぐ……」

「こいつ、僕がまったく全力を出していないへナチヨコのパンチですら避けられないみたいだけど、本当にこいつなの……？ ドリユメサがずつと探してた……」

「ああ。儀式の時に、あの人特有の粒子のパターンを発見したからな。そろそろ現れる頃だとは思っていたが、やはり現れてくれた……」

「……これで我々保守派、魔法使いの国の安泰は確定的だ。……まあ、記憶を失くしているようだが……リロロペ、この人が記憶をなくしていて良かったな。この人の覚醒が達成されれば、どのような戦力もゴミと化す。この人は何せ、全てを虚無に還すほどの圧倒的な力を携えた、最強の戦鬼、いや違うな、そのように表現してはならないトンデモナイ輩であって、本当は俺たちが平気で話しかけていい存在じゃない！ まあ、今は記憶を失くしているし、変な人格になっているようだから、馬鹿にしたって大丈夫だけだな！ ばーか」

「あ、そうなの。じゃあ僕も馬鹿にしよう。ばーか、ばーか」

「……………」

「あ、怒っちゃった？ もしかして、怒っちゃった？」

「おい、リロロペ。あまり調子に乗るな。お前は寝てる。腹を壊さないように毛布を被ってな」

「もう充分寝たよ。それに、そろそろ付く頃だよな？ 処刑場にさあ！」

「まだ付かない。お前がいると話が脱線する。いいか、寝てる」

「うう、つまらないなあ」

ツインテールでへソ出して幼くて名前がリロロペ。こいつも覚え辛いな。

うん、あだ名はロリペロでいいだろう。

何という、狙ったような存在だろうか。彼女はぶすつと不機嫌に

なりながら後部座席にもたれかかって、そして本当に寝始めた。魔法使いはみんな良く寝るのだろうか。そういえば、ウヨクもずっと馬車の中で寝ていた。

僕は馬車の中での、顔の無い天使に怯えながらではあった、その日々、のことを思い出してしまつて、思い出してから、思い出さなくて良いのと思えた。何かこみ上げてくるものさえあった。

死刑……？このままでは、皆、死ぬ……………。

何とかしたいと思える、のだが。でも、隣と背後には魔法使いという屈強な相手。巾着袋は腰につけてあるが、刀一本で勝てる相手とは、とてもとても、思えない。まだ試していないグミの組み合わせの中でこの二人を同時に相手し、なおかつ倒せる方法はあるだろうか、と想像してみるが思いつかない。それに、この二人を仮に倒せた所で、死刑が中止されるとも限らない。むしろ魔法使いたちの火に油を注ぐようなものか……。だがこのまま何もなくても、この隣にいる刺青男の言ったことが嘘でないならば、死刑は執行されるだろう……。

僕は巨城を見上げながら、泣きそうになるのを堪えた。鼻腔がぐーっとなんと熱を帯びてきたのがわかる。

自分はひどく無力だ。仲間を救うこともできない。

だが僕が自らの無力を自覚して打ちひしがれた所で、何が変わるのか。僕がどうしようもない人間だと自分自身で自覚した所で、仲間たちの死刑は中止にはならない。例えば少年漫画、そこには熱い友情があり、どんな苦難をも乗り越える熱い勇氣、みたいなものがある。見る側が気恥ずかしくなるような熱さ、ポジティブさがある。僕が少年漫画の主人公であるならば、仲間が死刑にされると言われたこの状況でも、理屈でこうして不可能だ、無力だ、と打ちひしがれたりはず、どうやれば彼らを救えるだろうと、必死に考えるだろう。

おそらく、必死で考えられるようになること自体が、この事態を突破できる鍵なのだと思う。

だが僕は少年漫画の主人公ではない。下僕である僕はただの理屈をこねる人間だからだ。そのことは僕自身でよくわかっている。

だから僕はおそらくこの車内の中、後どれくらいで状況が変わるのか、死刑が執行される時が訪れるのかはわからないが、僕は彼らを助ける手段を思いつくことは出来ないだろう。必死さが足りないから。彼らをなんとしてでも助けようと情熱を燃やすことが出来ないから。何故そういう人間なのかはわからないが、そういう性格だから、急に性格を変えたりなんかできやしない。

何も喋る気分にならず、思考も停止したくなってひたすらに気だるい。

ドツと疲れた感じに陥って、身体が重たく感じられて、サドと口リペロの息遣い、車のエンジン音、流れていく景色、所々に見受けられる魔法の都市らしい光景。

車と同じ速度で走る人間の姿。空中にプカプカと浮いている道路標識。箒に跨っているローブを纏った魔法使い。飼われ天使と一緒に空を遊泳している者の姿。透明な壁になっていると思わしき高架橋の透けた壁。うつすらと薄い青空。走る車。

ドリユメサ。サド。旧制部隊アンシャン・レジムの隊長。いわば革命派のもっともたる戦闘要員のはず…その仲間らしきリロロペも戦闘能力は高いとみて良いだろう……。

その二人と共にいる僕の方が、実は危険な位置にいるんじゃないのか……？僕を助けるとか言っておいて後で嘘でしたー、と言って僕を悲しませるつもりなんじゃないのか……？つまり、僕は仲間を助けるような余裕のある位置にいるのではなく、僕だって助けて欲しいくらいな訳。

……こんな弱気な人間に、顔全てに刺青を彫っているニメートルの大男を殺せるはずがない。

むりよく。こんなむりよくな思いをするなんて下僕というのは辛いところだね。むりよく、むりよく、むりよく。

「何を考えているんだ？ 記憶を思い出せそうか？ 覚醒してくれ

るなら、ありがたい話なんだが。あの頃のことを懐かしい……。もう何百年も前のことになる」

「……何百年？」

「そうだよ。今はお前もただの内気な餓鬼に成り果てたようだが、これより以前の世界、まだお前に人面瘤すら備わっていない時。お前は戦乱の世の中で、異彩を放っていたではないか」

「戦乱の世？ 僕が記憶を失う前のことを知っている、ということですか」

「そうだよ。だから俺は、お前を牢獄から連れ出し、お前の命だけは救おうと思っっているというわけだ。勿論、まだお前はまるで目覚めていないのだから、現在はただの餓鬼だ。覚醒が出来ないとわかれば、お前のことは殺すが、覚醒の可能性が高いようならば、お前を生かそうと思っている。生か、死、か。お前の別れ道、って所だ。その選択の自由は与えてやる。もうすぐその時間はやってくる。この車内の中で、せいぜい考えを纏めて置くといい……。何、難しく考えることはない。生きるか死ぬか、それだけのことだ」

「………僕の正体を知っている。無限牢獄に囚われている以前の僕を、知っている……？」

「ああ、そうだ。俺ことドリユメサは、以前の世界ではお前と共に戦乱を駆け回っていた経験のある戦士だった。パワードスーツBabeelを身に纏ってな。今では、こうして魔法使いになったわけだが」

「僕が……そしてあなたが……」

「まあ、異彩を放っていたお前は、あの激しい戦場の中でパワードスーツも無し、生身で戦っていたがな。ああ、懐かしいことだ。何せ、何百年も以前のことだ。前世から今の世にやってきてから、あまりにも月日が流れた。だが俺は、お前の異彩をいまだ覚えている。まあ、今となつては魔法を身につけ、何百年も戦い続けた俺の方が戦闘力は上かも知れんが……それでも過去を懐かしませてくれるものだ。お前はいまや姿形こそわずかに違い、牙が取れたような腑抜

けた様になつてはいるが、覚醒さえすれば自ずと以前の姿に戻るこ
とだろう……それにしても……」

(……… 饒舌、だな……… こいつ、喜んでいる………)

僕は袖を捲くつて人面瘤を眺めた。無限牢獄から出てよりずっと、
右袖の中で寝息を経てグミを貪つてきた瘤。それが僕の身に付く
以前、記憶のあつた頃、前世とでも呼ぶべき場所にて生きていた時。
僕はやはり犯罪者だったから、無限牢獄に捕えられていた。だから
人面瘤が付いている。覚醒？覚醒をすれば、どうなるのだろうか。
力が身に付くのだとしたら、覚醒を望むべきかもしれない。そうす
れば、むりよくとが言つて下僕生活を悲しむ必要もなくなる？

だとするならば……いや………はあ……… 何だかんだ言つて、僕はま
た考え事をしていて理屈染みている。今考えるべきは、みんなをど
うやって助けるかであつて………でも、助ける手段は思いつかないの
であつて………覚醒の仕方なんてわからないし、その覚醒を試してみた
所で魔法使いの連中に勝てるかはわからないし。

試しにサドに対して問いただしてみよう。それとなく、という雰囲気
を装つて。

「どうすれば、僕は覚醒できると思いますか」

「いや、わからん」

即答だった。あまりの素早さに腹正しさが胃辺りでムカムカした。
再び車内は沈黙した。スカー、ズゴー、と背後からの寝息が軒に
変わつて、うるさい。

やがて自動車は、高架橋を降りて、比較的一般道路と言つた雰囲気
の道を走るようになった。

もう一時間くらいは車に乗つたままだ。ソノ間、何だかんだ気だ
るかつたり、身体が重たくあつたりしたが、思考を続けていた。理
屈をごねていた。だがそのどれも、仲間達を救う結果となりうる
確証のある考えではなかつたし、無茶な行動を取る気持ちにもなら
なかつた。なれよ、仲間達を思えよ、と自分で自分に釘を打ちたく
なるのだが、やはり僕は何処か冷静で、臆病であり、勇敢になれる

気がしない。

思索が堂々巡りのような感じを繰り返して、同じ場所を行ったり来たりしているような。

進展の無い、突破口の見つからない、迷路。迷宮。

このサドという男が僕の前世で、僕の味方だったというならば僕の仲間を救ってくれてもいいだろうに。ていうかそれ以上にシヨックなのは、僕がかなりヤバイ側の人間だったらしい事実だ。まあ、サドという男が妄想狂という可能性も零じゃないが……パスワードスーツBabe1のことを知っている辺り、彼の言っていることがただの妄想とは思えない。僕の記憶にもBabe1の情報は組み込まれている。あれは確かに戦乱の世にて、使われた、人にとっての兵器だった。

そして僕はそんな戦場で、生身で戦っていた戦闘狂だった、と？
笑える話であり、と同時に背筋が寒くなる話でもある。

元がそういう人間だから、仲間を本気で救いたいと情熱を燃やすことが出来ないのではないだろうか。

僕はここにいるサドのような、何処か逝っちゃってそんな狂人、
そういう側の人間なのではないだろうか。

ウヨクやドナドナや犬少年。三人は、良い奴だ。良い仲間だ。

馬車の中で僕ら四人は、わずかな時ではあったが共に戦い、共に笑った。

でももうあれは過去のことなのだろう。僕は彼らの仲間たりえない。いや、仲間でいたくないのかもしれない。冷静に彼らを見捨てるような人間だから。なら、元々こういう狂人の側の人間だからと認めて、彼らと自分は別の人種だとわかれば……………。

（僕は何を考えているんだ！）

やはり自分は冷たい人間なのかもしれない。

彼ら三人を見捨てて自分だけ助かるという、結論を出そうと、した。
た。

今、間違いない。

生きるか……死ぬか……生きるか……生きるか……死ぬか……生
 きるか……死ぬか……死ぬか……死ぬか……生きるか……死ぬか……
 ……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……
 死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……
 ……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……
 ……生きるか……死ぬか……生きるか……死ぬか……

考えている内に身体の凍え。冷凍された魚が目を真つ黒にするよ
 うに凍結して、迷宮と化した脳味噌の中で何度も行ったり来たりす
 る生死。右と左に分かれた脳味噌に二文字はこびり付いていて、ソ
 ノ中に様々な事柄が内包されている。

もう考えたくないような事柄が、勝手に浮かび上がってくる。

自分で選択する云々じゃない。勝手に湧き水みたいにボコボコ浮
 き出てきて、考える、考える、と強要するような。過去。今。未来。
 生きる。死ぬ。

それら全てが浮き上がってくるに伴ってまるで厳寒の地でシャツ
 一枚で佇んでいるような不安、純粹な冷たさ、どうしようもない感
 覚。それら全てが脳味噌を取り囲んで三百六十度、サラウンドで毒
 針を突っついてくるような気がする。毒針によって脳は麻痺。腫れ
 上がり、やがて膿むだろう。つつか、もう膿んでいるかもしれない。
 魔法の都市には似つかわしくない、墓標荒野の乾燥地帯と似てい
 る場所に自動車が入り込んで、走行、物々しい雰囲気の魔法使い連
 中が屯する、人の数は多いのに厳肅である空気の荒れ地にやってき
 た。つまり、処刑場なのだと思う。

広く開かされた、人の一人も、枯れ草さえも生えていない土だけ
 の空間が中央にぼっかりと空いていて、ドーナツの穴のよう。その
 周辺には大勢の人間たちの群がり。

ドーナツの穴の部分には何も無いが、僕から見て奥側には一つだ

け、簡易な作り、鉄の高台らしきが一つ置かれており、誰かが演説などするのだろうかと思える。死刑を執行する前に盛り上げるための言葉でも打つつもりなのかもしれない。悪趣味だ。

処刑されるであろう三人の姿は、まだ、見当たらない。

「はは。人殺しを覗きにきた悪趣味な野次馬だらけだな。よし、降りろ……リロロペ。お前も起きて、外に出るんだ。旧制部隊アンシャン・レジムの副隊長として、大衆に恥を晒すんじゃない」

「んー、んんう」

「起きろつつつてんだろうが」

「ぼぎやアつ。いい音が鳴った。めり込んだんじゃないか。」

「いてー」

「起きないから悪いんだよ」

骨とか折れててもおかしくなさそうな衝撃を与えられたのに平然としているロリペロを見て、やはり魔法使いは常人の感覚で計れる相手じゃないかと再認。

「あーよく寝たッ」

などと伸びをしながら車内から出てきたロリペロと、その一・五倍ほどの巨大さを誇る刺青男のサド。その身長差の激しすぎる二人には、手を出したら君なんて瞬殺しちゃうんだから大人しくしてくださいよね、みたいな静かな殺意つうのだろうか、僕に対して妙な真似をするなどただ突っ立っているだけに忠告されている気がする。

僕がびびってるだけかもしれないが。

(にしても……)

処刑場の様子を窺うと、気分がより鬱屈させられる。

野次馬？五百人ほどは、いるような気がする。黒と茶が入り混じってごちゃごちゃ。

ゴキブリのように見える。

ゴキブリ。群がってわらわらと人の気も知らずにいい気なものだ。処刑という行為は見世物の一つ、つまり娯楽の一部として考えてい

る連中で、下卑たるこういう様を楽しみたく思うのはその性根が下卑だからだろう。普段から下卑な行動をしていてそんな自分が嫌いなんだよとか口ではいいながらも、毎日毎日、という生活に伴う苦痛に簡単に押し潰されて下卑たる行動をしないと気がすまないから、こうやって下卑たる空間にやってきて、ぺちやくちやくぺちやくちやく、汚ねえ唾吐きながら死刑の執行の時を待っていやがるんだろう、この腐れ野郎ども。ゴキブリならゴキブリらしく日の元に出てくるんじゃないで陰りの中で一生を過ごし、しがみ付くかのようにして笑顔も作らず真顔で辛そうにしてるよ。で、ゴキブリホイホイで殺されそうになつた時だけガサガサ音を鳴らして素早く逃げるみたいな、そういう逃走劇みたいな、常に気分が落ち着かないみたいない感じだ、いてくれればいいよ。

それがこんなにたくさんの数で集まってワラワラしてるの、ムカツクんだよね。意味わかんないんだよね。今すぐここから消えろよ。この世から消えろよ。顔の無い天使に殺されるよ。再生せずに滅亡して生物やるのをやめろ。死物になれ。

鬱憤を晴らすために長々と悪態を心の中で付いている内に、ドーナツの穴ぼこの位置に到着していて、大勢の野次馬のぺちやくちやくという雑音に囲まれながら、ロリペロとサドに何がどうなるのか、何時処刑は始まるのか、などの仔細を尋ねた方がいいのだと思うのだが、口が開かない。この空き地のある種異様な空気感に吞まれているようだった。緊張すると起きるあのふわふわ感が、僕の身に生じていた。

地に足が付いていないと表現できるこの状態。

巾着袋を掴み辛くなると思ったので、もしもの時に備えて、今の内にグミをいくつか握りとおいた。赤、二つ。白、二つ。計、四つ。

それから後、しばらく立たされたまま待った。

空が曇り始めた。雷さえ鳴りそうな悪い天気になってきていた。何者の呪いのせいだ、と漠然としたことを考えたりした。

時間が合わなかったのだろうか、誰か遅刻している人を待っているなどしているのだろうか、場はしばし何事も起こらぬまま、雑音のぺちやくちゃという喧騒だけが五月蠅かった。

「大衆が暇そうだな。余興の一つくらいをしてやろう」

「あーいいね。僕もちよつと退屈だと思ってたんだよねー」

「別にお前の退屈を凌ぐためにやる訳じゃないがな」

「言い方が冷たいんだからあ」

「……はじめぞ」

サドとロリペロがそんな会話をしているので二人が何をすることもりなのかと眺める。

眺めている内に、小道具みたいなのが宙から現れて、荒涼の地を華やかに変えていく。どうやら、つまり、ショー、で人々の暇を潰して差し上げるつもりらしい。

親切を働かせて聴衆を味方につけるなどというやり方だな。そんな皮肉な見方をしながら、死刑を執行する場所でやるとは思えない、魔法による自由闊達で豪華なショー。をゴキブリな聴衆と共に眺めることとなった。イラ付かせられるが、この状況を突破できる可能性を見つけ出すための方法、を考える時間にはなるだろう。だが一つ困ることには、死刑されるであろう僕の仲間である三人が何処に配置されることになるのか、正確にわからないということ。このドーナツの穴ぼこのどこかに配置されることになるとは思うが、助けるための対象の位置くらいは、ハッキリと理解しておきたい所。

やはり分が悪すぎる状況なのは確かだ。だが今の僕には、人面瘡があり、グミもある。

そして仲間。人面瘡。前世で僕が戦闘狂だったからって、今の僕は僕だ。気に病む必要は何処にもない。うるさいこのゴキブリどもがいくら熱狂しようが、死刑をショーと勘違いしている連中を喜ばせるわけにはいかない。こいつらを冷たくしてやらなかったら、僕は僕を許していいはずがない。少年漫画の主人公のようにはいかなくても、そつだ、僕は理屈で物を考えるのだから、理屈でこの状況

を切り抜ければいい。

皆が生き延びる確率の高い方法を見つけ出し、こいつらの手から逃れてやる……。

現在は夕方。

ドーナツの穴のような位置にいる僕とサドとロリペロ。

五百人ほどの野次馬が輪のようになっていて、僕の逃げられそうな場所すらほとんど無い。野次馬も一般人というよりかは、それぞれがロープを身に纏っている所から見ても、魔法使いと見て間違いないだろう。

二箇所ほど、比較的密度の薄い、逃げやすそうな箇所がある。いわば一口くらい齧られたドーナツみたいな感じで、その二箇所だけ欠けている。逃げるとしたら、あそこに逃げ込めば確率はわずかに上がるだろう。わずかに。

仲間を拘束から外さなくてはならないし、しかもその三人が意識を失っていたら、僕が三人を運ばなければならぬ。また、そういう行為をするためには魔法使いたちの足止めの必要がある。どうにしろ……頼みは、グミ……これ次第だな……。

（意識がない場合は、目を閉じるように合図をする必要もないからな……。好都合な部分もあるが……赤の効果でどれだけ力を発揮できるのかも、まだ試したことはないからな……）

自分の能力でさえも銀色の巻物でその効果を確認した程度で、実戦で使用したことはない。副作用が強いと書かれていたから、その点も心配だ。

魔法使いたちの実力も未知数で、下手に自分の殺気などを察知されれば、簡単に殺されてそれで終わりだろう。

白のグミ二つ、赤のグミ二つ。それによって発される特殊な力。

それをいかに、うまいタイミングで利用するかが、もっとも重要なポイントのはずだ……！

（あとは三人がどの位置に配置されるか……。二箇所あるドーナツの脆いところの近くに配置されてくれれば、近ければ近いほど、勝

率はわずかに増えるはず……。それでも確率で言ったら高くは無いだろうが……。人面瘤とグミの能力に期待するしかない……。頼むぞ)

僕は袖の上から人面瘤の、オデコ辺りを、頼むぞ、という意図でさする。

他の皮膚よりもわずかに浮き上がっている人面瘤。

サドはこの人面瘤のことを知っているようだったが、にも関わらずこの人面瘤を除去しなかったのは、どういふつもりだったのか知らないが、馬鹿だ。

これのおかげで僕はまだ絶望することなく、仲間を助けるという意志を持つことが出来る！

シヨールは時間を置くに連れて派手になっていた。

炎の竜が舞い踊り、氷の虎が空を駆けて、色とりどりの花火のような輝きが空気中で点滅を繰り返す。スライム状の人間の形をした変なものがプニプニしながら踊り回り、中には楽器を持っている奴もいてそいつらが音楽を掻き鳴らす。

僕はそのシヨールの中、真剣な顔つきになり過ぎて作戦を疑われないうよう注意しつつ、時が過ぎるのを待った。

仲間がこの処刑場に運ばれてくる時間を、何度も作戦のシミュレーションしながら、待った。

も興奮しているのだ！という演説手の場を盛り上げるための工夫で入れ歯が取れてしまったかのように見えたが、実のところは魅せるための演技……！あの老人を入れ歯を落としてしまったのではなく、わざと取った……！それに気が付いていないフリをすることによって、私はこんなにもこの死刑が執行されることで興奮を覚えているのだとアピールしている……。

そんなわけがない。

この演説、皆、どうでも良いのだろう。

形式的という奴。中身なんてほとんどどうでもいい。体裁だけ整ってればいい。

入れ歯が取れて、もがもが、と言っているだけのソレが体裁を整っていると呼べるかどうかは怪し過ぎるところだが、保守派の連中は自らたちの定めた形式に形式を重ねる内に、別にしなくても良い演説をしたり、儀式をしたり、しているに違いない。

これが保守派の悪い所だ。その行為が本当に必要なのか、不必要なのか、という本質的なところを考えず、昔から定められているキマリだから、という理由だけで演説をしたり、儀式をしたりする。みんなこれが必要なのでは、とお互いに薄々気が付いているから、もがもが、とかいう適当過ぎる演説、中身がまったくもなっていない。真剣な表情だけしてれば、OK、みたいな。

真剣な表情だけしてれば、OK、みたいな。

革命派の僕としてはこのような状況、やはり許せたものじゃない。死刑？軽々しく仲間の命を奪わせるつもりはない。

もがもがというBGMとしか思えない音の連続を聞きながら、僕はグミをギョツと潰れない程度に握り締める。グミを潰しちゃうなどの単純なミスを犯すつもりはない。もがもがなどという保守派の形式に惑わされるつもりもない。

心の準備は出来ている。後は、三人が配置されるのを待つだけ……！

「もがもが」

そして呪文のごとくに、老人が短いもがと共に、マイクの前で十字を切った時。

大衆たちは事前に示し合わせていたらしく、一斉に、うおお、と歓喜のような雄叫びを上げた。その雄叫びは天を衝くかのごとくに声量が大きく、僕の鼓膜をひどく震わせた。処刑場にいる僕以外の全員が同時に雄叫びを発したようだった。何故雄叫びを発したのかと言えば、盛り上がったからであって、盛り上がった原因は勿論、処刑場に死刑囚が姿を現したからに他ならない。

老人が十字を切ったことよって、今まで隠されていた三人が突如として現れたのだ。隠されていたのか移動してきたのかはわからないが、それはどうでも良い。

処刑場は熱狂に包まれた。ゴキブリどもが騒ぎ立て、老人がそれを壇上から眺め下ろしている。サドとロリペロは、ぱち、ぱち、と熱狂こそはしていないが拍手をしていて、困惑の表情を浮べているのは僕だけだ。

犬少年、ウヨク、ドナドナ。牢獄の中では顔を合わせることは無かったから、みんなに会うのは久しぶりだ。

あれ、こんな顔をしていたっけ、と三人に対してふと感じる。

牢獄生活のせいで三人ともヤツレタのかもしれない。そのせいだろうか、三人に対してふと、奇妙な感覚が走る。だがそれは一瞬のこと。瞬きを何度かすれば、そのギロチン台に括り付けられているのは仲間の三人だと、わかる。

僕が救う三人。死刑にさせるわけにはいかない。

(寝ている……いや、違うな)

三人は意識を失っているらしい。ギロチン台に首をセットされている状態で、意識が無い。

彼らの頭上で夕陽を反射させて朱に煌く首を刈り取るための刃が、物々しい。

あれが振り落ちる前に、三人を救い出さなければならぬ。斜陽

いける、はずだ。

（そう思わなかったら、こんな大胆なこと、できるはずがない……！）

可能性で言ったら、二十、三十%と言った所だろう。こんな分の悪い、命がけの行為、普通はやらない。だが僕は戦闘狂なんかじゃない。サドみたいな狂っている奴に崇められるような狂気の人間ではない。僕は、冷たい人間じゃない。やれる。甲を歩く乙の下僕。それが僕だ。僕なら、やれる。例え緊張していようが、怯えていようが、できるから、できる。やれるから、やれる……。

少年漫画で行ってやる。そういう気合で、この場面を乗り越えてみせるって感じで。

「もがもが……もがもが……もがもが……」

ゴキブリたちの喚き声が鳴りを静めてきた。もうすぐ終わるのかもしれない……。

老人が十字を再び切った……。

それに伴ってギロチン台周辺に、頭までロープを被り、般若の面を付けた魔法使いが三人出現する。なるほど彼ら三人はそれぞれが薄い紐を握り締めている。あの紐が手離された時、あの刃がストンと落ち、仲間の首もスポンと抜けるということだろう。そう推測できる。

（執行の時は間近だ……）

いつもの悪い癖が出てきた。緊張するに伴って発動してしまう浮遊感と、身体全体の感覚が麻痺してくる感じ。自分が地に足をつけているのか不明になってきて、自分の心臓の、ドクン、ドクン、という鼓動が聞こえてくる。次第にその鼓動がやかましくなってきた。もがもが、を聞いていたいのに、ドクン、ドクン、が邪魔してきてもがもがが聞こえなくなってくる。

やばい、と思うと余計にやばくなってきた。悪循環だと自分でも理解できるが、自分で自分をコントロールできるなら問題などあるはずもないが、器用な人間ではない。不安を静めることが出来ない。

思考を止めることが出来ないのと同じように。やばい。

もうじき、演説は終わると思えた。

老人がゴキブリに向けて、両手を振るようなことをしている。何様なのか。

僕は怒りを利用して不安を静めようと思い、老人に対して怒りのオーラを滾らせてみるが、しかし不安の方が勝ってしまい、全身を緊張感が包み込み、ガタガタと手足が震えそうになる。怒りでも静めることができない。どうする、どうする……。どうすればいいのか。

歌だった。

綺麗な歌だった。

僕の緊張が最高潮にまで高まった瞬間に今、聞こえてきたのだった。喧しい心臓のドクンという音も、老人のもがもがという声も、ゴキブリのざわめきも、全てを弾き飛ばして脳味噌に直接届いてきたのは牢獄やHOME TOWNで耳にした、あの綺麗な歌声、だったのだった。

全てが逆転した。不安は静まり、高揚だけが胸奥で滾り、気合が全身にみなぎって力が入ってきた。血流が指先にまで勢い良く流れているイメージが走り、自分がしっかりとこの処刑場に足をつけて存在していると、認識が、来た。確かな認識が。

それとほぼ同時だった。

老人が演説を終えて、ゴキブリたちに頭を垂らした。どうして頭を垂らしたのかはわからない。それは彼らの社会的慣習みたいなもので、僕にとってはどうでもいい。ただ僕の視界は鮮明で、その頭を垂らした瞬間の大量の安堵たる息遣い、それを間違いなく察知した。演説は終わったのだ。

僕のこととは決まっている。シミュレーションはショーの間に何度も繰り返したからな！

まずは赤のグミを二つ人面瘤に一気に食べさせる。『強調』。同じ色のグミ二つを食べさせる事で特殊な能力が自身に起きてくれる。

赤を二つ食べた場合は、全身が後々に一日ほどは動かせなくなる副作用があるそうだが、数時間、すさまじい筋力、運動神経の発達、鉱石よりも硬い骨、とにかく何事にも屈しない強靱なる肉体を得れる、と銀の巻物に書いてあった。

『腹の中で何かが造られた』ずぶしゃあ。

赤い霧を纏う剣を握り締めてから、僕は構える。そして、まずは作戦の開始の、その狼煙となる初手、剣の投擲……！

『炎刃！』

そう叫ぶことで投擲はより力強い代物になる、という直感があった。

そして実際に赤い霧纏う剣は、炎の刃そのものとなって、演説をしている魔法使いの老人。

その頭部を眉間から、見事に貫いて、彼を燃やした。我ながら驚くしかない勢い、そして凄まじい炎だった。もがもがの老人の頭部はすぐに燃え尽きて灰になり、演説台の上にはもう派手なローブだけがあつて、それも宿主を無くした身体がすぐに地に伏したので、汚れてしまい、炎が燃え移って灰になりはじめた。

ゴキブリたちは静まり返っていた。処刑場の沈黙は、痛々しいほどだった。

連中は何事が起きたのか、まったく理解できていない様子だった。場が固まるとはこういうことを言うんだと思いながら、僕は、やってやった、という感覚と、やってしまった、という感覚が同居する中で、自らの繰り返したシミュレーションのことを思い起こし、次の行動に移るべく白いグミを人面瘤に食べさせる。白の『強調』。それによって発動されるのは周囲の人間たちの知覚を麻痺させる、強力な発光。光を直視した相手を数分、五感を完全に麻痺させるので意識を失っているような状態に出来る。と、銀色の巻物に書いてあった。副作用は次の日の一日、吐き気にずっと悩まされることになること。が、次の日のことなどさして重要ではない。重要なのは今。この救出作戦さえ成功すれば、ウヨクやドナドナや犬少年

を頼りにすればいい！

僕は光を発動する直前に大声を張り上げること、ゴキブリやサドやロリペロの視線を僕に集めさせる。ただでさえ演説台にいた老人が突然炎の刃で灰に変えられた直後だ、もう僕が犯人だと理解した輩は僕を見ているが、大声を張り上げるに越したことはない。

言葉の内容は、すでにシミュレーションで考案済みだ。

「ゴキブリどもめ！ オセロをする脳も持たない、糞馬鹿野郎ども！ その足りない脳味噌で、こつちを見てみるよ！ そんな簡単なことも、できねえか！」

単純な罵りだったが、状況が混乱していることと、言われて腹正しかつたのだろう、一気に僕に視線が集まったのがわかる。笑いを堪えるのが大変だ。こうもシミュレーション通り、いや、それ以上に上手くいっていると面白くて仕方がない。

『白光！』

全員の視線が集まると同時に発された、五感を麻痺させる光は想像以上の効果を見せてくれた。光光光。処刑場全て、ドーナツの全て、に行き渡った。光速で。誰がこの攻撃を回避できるものだろうか。全員にしっかりと効果を見せてくれたと、周囲を見渡せばそれがわかる。全員が石像のように固まっていて、呆然とし、瞳に光が灯っていない。眩しすぎる光を当てられて全てが麻痺しているというのだ。サドやロリペロに効果があるのかが不安だったが、彼らも人の子ということだろう、しっかりと麻痺してくれている。

この時間を利用してこの二人を殺してもいいのかもしれないが、そこまで時間の余裕はないし、正直、五感を麻痺させているにも関わらずこの二人は殺せる気がしない。刃で貫いても生きてそうな気がする……し、顔の無い天使で殺さなければどうせ『死』ぬことにはならない。なればこそ今この二人に刃を突き立てれば保守派の戦力をダウンさせることにはなるのだろうか……。

(ためしに……)

優先するべきは逃走だが、二人を倒しておけば、という気持ちだが

上回り、赤の霧纏う剣で二人を斬った。案外、簡単なもので野菜を切るかのような感覚で、斬れた。血が噴き出た。光の灯つてない二人の身体が、地面に血のたまりを作った……。

(……逃げるか)

死体を見下ろして安心している時間は無い。急いでギロチン台へと向かい、今にも紐を手離してしまいそうな般若の面に注意を向けつつ、赤によつて強化している体を使うことで、三人を解放する。想像以上にグミの効果が凄まじい。三人の救出はたやすく済んだ。三人を背負っても身体はまったくその重さを感じず、自分が風となつたかのような錯覚さえ覚える。万能感。ゴキブリ退治をする時間さえあるんじゃないか、と僕は心の内で嘲笑うかのようにして思つてから、だがそれでは戦闘狂だ、今は逃げるのを最優先にしなければならぬ、もうすぐ白光の効果も切れるし……そう思い直し、ドーナツの脆い部分に突撃し、たまたまそこに屯つてる連中を炎刃で薙ぎ払つて灰にしてから、後は必死で荒地を駆け抜けた。

赤の強調による副作用だろう、筋肉痛がすぐに生じた。動けなくなる程の副作用が発するのはまだのはずだが、銀色の巻物に書かれている情報が間違っている可能性もあるだろうか。

それが少し怖かったし、走っている途中に白光の効果が切れたのだらう、ゴキブリたちの騒がしいざわめきが遠くから聞こえてきたので、魔法の力で追跡されるのではないかという不安も生じてきた。だが不安よりも、勝つた、という歓びのほうが強い。

計画通りに成功できた、仲間たちを救うことが出来た、と。

シミュレーションで想像していたよりも随分と楽に作戦をこなすことが出来たのは、グミの『強調』による特殊な力が、思っているより遥かに凄まじかったおかげだろう。

明日辺りから襲い掛かってくる副作用のことが今から身に非常に重いが、しかし一日中横になってたまま達成感に浸れるとも思えば、その副作用の重さ、辛さも、紛れるのは間違いない。

笑いたくなってくる。

笑みを抑えることができそうにない。実際、大声で笑っていた。周りに人はいないし、大きな声で笑っても問題はなかった。そういう荒地だから。

しばらく僕は笑った。みんなが早く意識を取り戻してくれれば、と思いながら。

彼らが意識を取り戻すはずはないのに、意識を取り戻してくれればと思っていた。

はじめから背負っているモノには、意識なんて無かった。だから、取り戻すはずが無い。

両足を斬られた。一刀両断だった。スパリ、と大根が斬られるかのようにして、斬られたのは僕自身の両足で、背負ってる三人ごと地面に突っ伏する。

「……いてえ……」

そう呟きながら、前を向いた。僕を斬った者。

刺青を顔中に行っている、ニメートル越えの華奢な男の姿が、僕を見下ろしている。

「楽しかったかよ。……ゴキブリの下僕君？ いやいや、オセロの坊や、でもいいかな？」

「まったくさあ……。何で君から人面瘤を取らなかったのか。もうちょっと考えなかったの？」

「あと、魔法使いが人の思考を読み取る魔法を使用する可能性、くらい考えなくちゃだめだな」

「そうそう。後ついでに言わせてもらうと、助ける対象が意識を失っている場合、もっとちゃんと、その対象が本物かどうか確認した方がいいよ。ただのお人形を運んでいるなんて、惨めなことをしないでずんだんだから」

「魔法使いに翻弄されたオセロの坊や。お前の選択はここでオシマイだ。生か、死か。覚醒が成されればお前には生が待っていた。だがお前は残念ながら、死、を選択した」

「覚醒するような男なら、あそこにいた魔法使いを全員血に還すく

らしいのことは、してくれないとねえ」

「残念だ下僕君。いや、テンガ君、だったかなあ？ いやー、ちょっとは楽しい見世物だったよ。俺達が下準備を念入りに済ましておいてあげた、シヨー。いやー、俺たちのお遊びのシヨーよりかは、盛り上がったよなあ？」

「うん、そうだね。お疲れ様。さ、どうしよつか、ドリユメサ。殺す？」

「いやー。そうだなあ……。死つてのには、様々な死に方があつた。ただ単純に死を迎えさせるなど、かつて戦闘狂だった彼には失礼かもしれない……。ちょっとは楽しい死を味合わせてあげなきゃ、彼の奥底の魂が納得してくれないだろうから……。最高の死の舞台を、お前に用意してあげるさあ……。」

「ドリユメサつたら、鬼畜っ」

「さあ、帰るぞ。そして行こうか、テンガ君。君の仲間と一緒に、君に最高の死を」

氷の雨が降っていた。透明な雫の固まった結晶が、ぼた、ぼたと降り注いでいる。

『な』

『う』

『ど』

『げ』

血の涙を流している眼球を持たない人の顔には骸骨が浮き出ている。既に死んでいるに等しいのに、死相が出ているんだね。流した血が地面に文字を描いて、僕に、な、う、ど、げ、と発音させてくれた。遺言かと思わしき四つの不吉な紅の血文字が、ウロボロスの満月の月明かりに当てられて紅として蛍光している様、不吉な予兆。避けなければならぬ。不幸から逃れなくてはならない必死に汚水でもがき苦しんで不幸から逃れなくては、不吉な予兆の不安から逃れられないはずだから、逃れなくてはならない。ハッ、と気が付く。

この血の意味を解き明かさなくては、僕はきつと逃れられない。

(何から逃れる?)

「もちろん、あのような姿に成り果てることから」

人差し指を血の涙を流している人に突き出した。血はまだ流れている。僕に指を突き出されていることがあの屍から見えているだろうか。眼球を失くしている亡骸。屍。ナメクジが血に塗れながら涙と共に流れ落ちて、地面ねウネウネとしていたが、やがて血に溺れて息絶えていた。

怒張した空が落ちてくる。

建築された塔が天より姿を現し地上を踏み潰して穴だらけにしていく。

刃もあつた。冷たい、無情な銀色の刃が、ストーン、ストーン、と地上を切り身にしていく光景。

人々の悲鳴があつた。親子がいて、恋人がいて、老人がいて、赤ん坊がいる。それらの全てが声帯の精一杯を振り絞つて、『助けて』と命を請うていた。だがストン、と振り下ろされる刃が助けを請う声ごと纏めて、引き裂いていく。

「ああいうのから、逃げなくちゃいけない。……ああ、もうすぐここに来そうだ。逃げなければ駄目だ」

そういうことで、刃から逃れるために走り出した。

黄緑の草むら生い茂る平原。あと何故か、五十センチくらいの大さのサボテンが群生している。トゲトゲしいので刺さったら死ぬかもしれない。現に、サボテンの針に突き刺さって体を貫通させて死んでいる輩もいた。

ひどい場所だ。

血、むせ返るような臭気が、時たま、鼻につく。

ただつ広い草原にサボテンは何処にでもあつた。花を咲かしているモノもあつたし、今にも崩れ落ちそうなほどに乾燥しているモノもあつた。どのサボテンも棘だけは鋭かった。

何時までも、何処までも、サボテンと草むらは続いていた。

何時までもたつても、ここから抜け出すことが出来なかつた。

氷の雨がまた降り出した。一時止んでいたのだが、結晶がぼた、ぼた、とサボテンや僕や死んでいる人などに降り注ぎ、すぐに溶解している。溶けない粒もあつたが、溶けない粒はただ粒として転がるばかりで、僕が足で踏むとバリリ、と良い音を鳴らすのだった。踏み砕かれる音。

「はあ、はあ、疲れたあ」

今までずっと長いこと走ってきたけど、ようやく呼吸が息苦しくなつたので立ち止まつた。

丁度、周囲よりわずかに高くなっている所で、僕は三百六十度を見渡す。色褪せた、くすんだ灰色をしている平原がそこにある。草むらやサボテン、氷の結晶。全てはくすんだまま。振り下ろされる刃はもう見当たらない。逃げ切ることが出来たらしい。

ひたすらに、地平線が見えるほどに広い平原。果てはあるのだろうか。行き着く場所はあるのだろうか。わからない。わからないので一度天を仰いでから、深呼吸する。深呼吸してから視線をまた地上に戻してみると、僕は人差し指を前方に突き出さずにはいられなくなった。

眼球の無い、血を流している人が僕のいる方を向いたまま突っ立っていた。

ただらだと流れる血が、やはり地面に四文字を描いていた。

だがわずかに変化がある。文字が、増えている。

『ならくの底に落下する』

『う』

『ど』

『げ』

「……………ならく」

呟いた瞬間に景色が広がっていき、変わっていき、僕は違う人間へと魂を移っていくのを感じる。全身が震える。がくがくがくがく。ねじりに吸い込まれて、違う場所、違う時間、違う人物。

僕はナラクの前で、気が付くと手を差し伸ばしている。

その手にナラクの掌が覆いかぶさって、うるつとした瞳をしながら彼女は、しわがれた声で言った。

「本当に行ってしまわれるのですか。危険な場所です。そのような所にお一人でお向かいになってはお命が失われてしまう……………。私はこの姿のままでもいいのです。あなたがいてくだされば……………」

「いえ……………私は行きます。人は困難に立ち向かってこそ、幸せを掴むことができるのです。私はあなたのそのままの御姿を当然のように愛していますが、しかしあなたはやはり、若さを求めて暗闇に心を引きずり込まれている時がある。そのようなあなたを救うためには、例え一人でも、……………」

「お止めください。肉体を若返らせる薬のあるとされる神秘の洞窟は、侵入者を拒む数多くの罠が設置されていると聞きます。私はこ

のままの姿でも良いのです。あなたがいてくだされば……」

「すぐに帰ってきます。三日、いや、五日で。あなたを長く待たせはしません。では、数日後に！」

「ああっ！」

ナラクが嘆かわしそうにし僕を追いかけようとするのを、ミイラの執事が抑え込んでいる。

その嘆かわしそうな御姿が可哀想だと思いながら、僕は神秘の洞窟へと馬を使って向う。できるだけ早く、薬を見つけ出し……。

（この人はナラクの愛する人か何か……？ これは幻？ それとも過去に実際にあつたことなのか？）

それはわからなかった。確かなのは、僕の魂が、この紳士風な男の中に入り込んでいるということ。彼の思考や、視線が僕に伝わってくるということ。

彼はナラクというあの老人を愛しているらしかった。僕にはまったく理解できないことだが、彼は心底よりそう思っているらしい。それが彼の思考、若返りの薬を真剣に求めていることから理解できる。

場面が切り替わって、バリバリという音が鳴り、洞窟。

彼は若返りの薬を手にしたまま、今にも息を絶やそうとしていた。

僕は彼の奥底で魂として、彼に、死ぬな、と声を掛けてみるが聞こえないらしい。

胸に罫の毒矢が突き刺さっている彼。薬を手にしたまま、彼は虫がいる地面に倒れて、無言のままに朽ち果てようとしている。僕は彼が息を絶やすまで、彼の内部で魂として彼の思考を聞いていた。彼の最後の言葉は、「さようなら」、だった。

また場面が切り替わる。バリバリ、という音が止むと僕の魂はナラクの翡翠ルームでぶかぶかと浮かんでいた。丁度、ナラクに報告が届いた所だった。執事が彼女に告げる。

あの方が、亡くなりました、と。

ナラクは玉座に座ったまま、しわがれた顔をさらに皺くちやにしまったま、茫然自失としていた。

涙も流していなかった。

ただひたすらに彼女は呆然とした表情で、宙を見つめている。

場面が切り替わる。バリバリ。ナラクの派手な寝室。天蓋つきのベッドで横たわったまま、ナラクは呻くようにして言葉を繰り返した。

壊れてしまえばいい……壊れてしまえばいい……壊れてしまえばいい……。

永遠に続くかと思われる長い呻きだった。

僕の魂はその幻とも過去とも見当のつかぬ光景を眺めながら、また場面をバリバリと移り飛んで行く。

ハッ、と気が付くと僕は僕に戻っていた。

色あせた灰色の草原でまた立っていた。眼球の無い血を流す人はまだ血を流している。

また文字が追加されていた。

『ならくの底に落下する』

『うよくの人々は殺される』

『ど』

『げ』

なるほどな、次はあの人の幻、いや、きつと過去なのだろう。それを魂となって眺めに行くことになるのだろう、と推測した時にはもう僕の魂は時間を超越し、場所を超越し、バリバリと場面が転換される音が鳴って、誰かの身体の中にいる。

その誰かは氷の木が林立している、森、ああツララ氷森林らしい。そこを走っている身長の高い男……この身体が誰の者なのか、その狂った思考回路からすぐにわかった。サド、だ。

「見いつけた」

過去のサドの思考回路はやっぱり、狂っているようで、そしてひどく高揚しているらしい。

獲物を見つけた肉食獣のように、彼は舌なめずりをしていて、気味が悪い。追いかけていた何者かを、彼は見つけたらしい。それを殺すつもりなのだろう、か。

過去のツララ氷森林には雪が降り積もっている。その真っ白の雪に血が弾けて、赤い斑模様を作る。

サドが獲物を、簡単に八つ裂きにしてみせていた。殺戮という言葉がぴったりな、情け容赦の無い行為を、標的に。血が、降り積もる雪に隠されてすぐに見えなくなるが、また新たな血が撒き散り、幾重もの血と雪の層となっていく。ミルフィーユみたいだ。

僕はサドの中に潜む魂として、殺戮をただ眺めていた。楽しくない。

まったく、楽しくない。

殺さなくちゃいけない。

殺さなくちゃいけない。

殺さなくちゃいけない。

いや違う、違う違うよ。殺されなくてはならない、だ。

古来より殺されなくてはならない存在は常に存在してきた。それは殺されるために殺された、殺されるために存在した、そのために生まれてそのために死んでいく、そういう存在でだからこそ殺されなくてはならない。安堵を感じさせるために殺す……というよりは、ただ殺すためにある存在だから殺さなくてはならない。その判別は俺がする。何故俺がそれをしなくてはならないのかは神のみぞ知る。でも神つて実は俺だもの。俺以外に俺の神なんていないんだもの。だから神は判別をして殺す者と殺さない者を見分けることができる。判別して、躊躇無く、殺す時は殺すし、生かす時は生かす。殺す者に躊躇をしてはいけない。判別の後には即座の執行を為さなければ、神としての役割をサボっているに等しいからだ。危ない危ない、神が判断を誤る所だった。てへつ。

神が絶対的に正しいとは限らない。神を信じない者もいるし。神という存在を信じる者がいるとしたって、神の存在を絶対的に肯定しているとは限らない。神は神だが、それが全てにおいて正しい存在ということではない。だから神は良いんだ。サイコーなんだ。この気持ちを誰かにわかって欲しいなあ……。絶対的に正しい訳じゃない癖に、神は絶対的なんだよ。俺は神だ。神は俺だ。俺は絶対的なんだ。ああ、何度この思考を繰り返してきただろう……。この思考が俺を絶対的に肯定してくれるから、俺は何時だって自らの死の執行を躊躇無く行うことが出来て……。自分が生きていることが正しくて、死ぬ存在が死ぬことも正しいって、わかるんだからあ……。
(ほんと、こいつやばいな……。自己中の行き着いた先みたい……。)

脳のブレーキが壊れてるような思考回路……)

僕は脳のどの部分が人にブレーキを利かせるのかは知らない。

サドの内部にいるからといって、彼のどの部分が壊れているかはわかりはしない。わかるなら彼のことを直してあげられそうだけれど。わかるのは、彼がバグッているということだけ。

ツララ氷森林にミルフィュー。白と赤。雪と血。幾重にも層となっていて、死体も雪に塗れて消えていく。二人の男女がまた八つ裂きにされた。神に死ぬ存在として判別され、命を奪われていた。眼球に雪の結晶が張り付いても、まばたきをしなくなって。死物になつて。

くっ、くっ、くっ、……という典型的な狂人の呻きを最後にして、また時間や場所が移り変わっていき、バリバリ、と鳴り響く。

(今度はどこだよ)

そう思いながら僕の魂の視界は、景色を映し出す。家……？木造の、家。

「お誕生日おめでとう。もう、十年を過ごしたから、十歳だね」

「本当におめでとう。ほら、あなたにプレゼント」

「わあ、ありがとう！ 私、嬉しいなあ！」

彼女は大きな包みを開いて、期待に満ちたキラキラとした瞳と共に、包みを開いた。

中に入っていたのは、魔道書、と、花飾り、だった。

彼女は感激のあまりにきやああああああと発狂したかのごとくに咆哮しながら魔道書と花飾りを抱きしめて、ぴよん、ぴよん、と自重せずに室内で跳ね回っていた。ただでさえ暖炉で暖かくなっている室内に、彼女の熱狂と言っても良い、熱が広がっていき、室内は暖かみを増していた。

暖炉。木造の家。ハッピーバースデー。心暖まるための言葉と、柔らかい空気の綿がふわふわと浮遊している時間。蠟燭の灯火。プレゼントもらって、はしゃぐ人。それを微笑ましく眺める他の人。ラジオから流れる賑やかな楽器隊の奏で。マシユマロのように柔ら

かい空気。時間。その時間……。私、どっちも大切にするからね。みんなで、これからも頑張ろうね」

その言葉を機に、バリバリ、と音が。

空間が裂けて、僕の魂はまた場所や時間を超越し、またツララ氷森林。

倒れている男と、倒れている女がいた。血を噴き出して、失血死していると思われた。もう雪に身体が半分埋まっている。

一人の女性が、倒れている二人の前に跪いている。その女性は自らの花飾りを黒髪から外して、倒れている二人の間に置いた。

「みんな殺されちゃったよ。残ったのはもう、私一人だよ。でも、私、頑張るよ。みんなの分も頑張るよ。この世界を変えなくちゃね。この髪飾りはここに置いていくね。私、一人でもやってみせるよ」

黒のローブ、紅蓮の瞳。彼女は二つの亡骸を右眼と左眼にしばらく収めていたが、やがて立ち上がり、周囲を警戒しながら、走り始めた。

バリバリ。僕の魂はまた移動を開始し、過去の彼女とは別れを告げる暇もない。

僕はまたも、僕として、サボテンばかりの平原で、自らの身体として立った。

眼球から血を流している人は、相変わらず血を延々と垂れ流している。だから文字はまた増えていた。

『ならくの底に落下する』

『うよくの人々は殺される』

『どなどなの歌が聞こえる絶望』

『げ』

ドナドナ、か。

僕が文字を読み終えた時には既に、魂は様々を超越して旅をし、また誰かの中に入り込んでいて、思考の声を聞く。

俺は彼女たちを幸せに出来ているのだろうか。娘はまだこの世界に来てから、わずか数年だ。容姿は二十歳程度。ずっと若々しいま

まなのは、それは、良いことは多いが、悪いことも多い。娘がちゃんと生きていけるように、この世界で随分と長い俺が、妻と共に彼女に様々な知恵を授けなくてはならない。そうすれば娘はきつと幸せになれる。血の繋がっていない、まだ共に生き始めて数年しか経過していない仲だが、俺は彼女にこの世界のことを教えよう。

(ああ、血は繋がっていないんだ……)

ただドナドナにとっては血が繋がっているのかいないのか、それは問題ではないらしかった。騎士、として在ろうとしているのだから、彼は。誠実？真面目？何だろう。ただドナドナは騎士として毎日鍛錬に励んだおかげであるう屈強たる肉体で、よく働いている。その都市で、彼は治安を良くするために日々、活動しているらしい。騎士の住まう都市、スミレ湖を中心にして広がるKNIGHT TOWNで。

今のように何処かやつれたような、疲れているような、そういう雰囲気は彼には無い。頭髮も白髪というよりかは銀髪。笑顔が眩しい、って感じ。たくさんと同じ鎧を身に纏っている仲間たちと共に都市をパトロールし、時には暇そうな誰かの話し相手になっていたりもする。へえ、良い奴だねドナドナ。と僕は思う他なかった。

バリバリ。音が鳴る。場面が転換して、平和なKNIGHT TOWNの様子は一変し、火の粉が飛び交う戦乱の場所。

「違う……違うんだ……誰が、誰が俺にこんなことをさせた……」
彼は突き刺してしまっていた。娘のことも。妻のことも。銀髪が、ぞわっ、と白髪になっていく。

戦乱の地で、火の粉と血液。

燃え盛るKNIGHT TOWN。彼の仲間であろう騎士たちも燃えて、灰へと落ちていく。

「誰が俺に幻を見せた……！ 許さない……俺は、絶対に許さない……許さないんだ……う、あ……」

彼は血したたる剣の血を、拭き取ることもしないまま、ふらふらと、道を歩いていく。

彼は天を見上げる。魔法使いや、顔の無い天使 たち。

「だが俺が殺してしまったのなら。彼女達はやがて再生されるはずだ。そうだ。そうじゃないか……ははは……」

場面がバリバリと切り替わる。

すっかり様子が変わったKNIGHT TOWN。戦乱が起きていた頃の傷跡はもう残っておらず、復興されており、人々が楽しそうに街並みを歩いていく中、白髪でやつれていて、なまぐらの剣を背負っている男は、一人だけ街並みの中、動きを止めていた。

「おかしいじゃないか……」

彼は声を出さずに呆然自失としていたが、やがてベンチに座って、頭を抱え、顔を俯かせた。

俯かせたまま、一日中顔を上げなかった。日が落ちても、再生は起きず、娘と妻は失われたままだった。

「俺が破壊したのか……違う……魔法使いが……魔法使いが俺に幻を見せたんだ……」

ドナドナが顔を上げた時、太陽の光が彼の眼球に差し込まれた。

真っ赤な太陽の光を浴びながら、彼はよたよたして、道を歩き始めた。

「俺はどうすればいいんだ。教えてくれ、誰か」

迷子のドナドナは何処に向うのだろう。魂の僕には彼を見送ることしかできない。過去の彼。過去の人々。過去の彼女。過去の死んだ人。過去の生きている人。魂の僕はそれら全てを眺めて、そして眺めるだけだ。

バリバリ。場面が転換して、僕はまた血が垂れることによって形作られる文字を眺める。

『ならくの底に落下する』

『うよくの人々は殺される』

『どなどの歌が聞こえる絶望』

『げばくは己の狂気を知る』

今度は自分の過去か。

あまり良い予感は、当然しない。

脳味噌の構成。

それってとてもシンプルなんだって。『間抜けの壁』っていう本をちよつと開いてみたら、書いてあつただけど、神経細胞とグリア細胞と血管という三つで構成されているに過ぎないってさ。

まあ、だからどうしたって話。

海馬とか大脳とか……僕はまったく細かなことを知らないああナサケナイ。でもいいんだ、ナサケナイという感情を味わうということも経験の一つであり、楽しい。

虐殺も悪くない。殺す対象と向かい合つて、互いの凶器を使い合つて、で、殺す。とてもシンプルな構造に過ぎないけれど、その内部には様々な要因、要素？みたいなのが含まれていて、その優劣で殺される方が僕か、相手か、決まっちゃう。幸運なことにその点において、優、の要素を多く身に付けた僕は、この分野においては負けないから、殺されないで済むのであるが、それが僕という人間であり、それしかできないのだけれど、でもこれが出るから皆に必要とされるのだから、今日も殺戮の場ががんばらなくちゃ。下準備や、精神状態を整えたりとか。やっておかなきゃいけないことはたくさんあるから、ね。脳の調子も上げておこう。結局僕らは脳味噌で戦っているんだと、『間抜けの壁』を読んでみた僕は思うんだ。うん、しんぷるいずべすと。これ、大事ねきつと。って、誰に言ってる。誰も聞いてないって……。

(……僕が聞いている、けど)

僕、僕は魂として僕の中で僕の思考をまるっと全て、聞き洩らさないように、拝聴している。はてはて遂に僕の魂は過去の僕の内部に侵入して、僕がどういう人間だったのか知ろうとしている。はあ、でも勿論これが過去なのか、幻なのか、わからぬはず。魂。

眼球が踏み潰されてプチリ、と小気味良い音が鳴る。腕を切り取

られて苦悶の表情でうずくまっている人が、首を切り取られ、舌を引き抜かれ、惨めな姿と化して戦場の血の溜まりに沈められる。命を懇願する者が、命を捨てた者とみなされ腸を引きずり出されては、肩を抉り取られる時、己の姿がだるまになることに怯えて、ひたすらに命を懇願する度合いを強める。それがさらに命を捨てたこととみなされて、宇宙の塵よりも神秘的なだるまへと堕ちた。

小腸の一部分に防腐を施した状態にして、首飾りにしている人がいた。パワードスーツを身につけて顔を隠し、素性を隠し、ひたすらに殺戮の舞台上で、己の命を賭して、狂気と思われても仕様の無い様相と成り果てた上でも戦いを続けている。勝者の勲章としてであるうか、十の眼球に針を通して首飾りにしている者もあった。皆、首飾りをつけていた。勝った者ほど、より多くの人間の一部分を身に付けていた。パワードスーツの上にそれを付けて、己の強さを主張して、相手を威嚇しているように見える。

黒煙が辺り一帯を覆い尽くしているが、これはわざと焚かれている煙らしく、火事などで生じている煙でも無いらしかった。延々とその煙が戦場を纏い、闇討ちが生じやすくなる視界を遮るための闇闇を生み出して、背後からの暗殺という手法が成功する確率の上昇している空間となっているから、暗殺、という手段を取る者の比率も上昇している。

人の憎悪を生む比率も、ソレに伴って上昇しているように見える。暗殺をされる時の後悔、怨嗟、怨念、憎悪、諦観。闇の中での暗殺は人に負の感情をもたらして、戦場の悪臭、よどみを、より濃厚に、濃密に、凝縮して表面張力でようやく場の暴発が防がれているかのような、瀬戸際の修羅場とでも表現したくなる空間を生み出している。

おぞましかった。僕は魂であるがゆえに、その戦場全体の空気を察知できる、感覚が研ぎ澄まされてる、みたいな感覚で、戦場全体の感情の動きの様子を上空から観測したり、過去の僕の内部に入って僕の思考を聞いてみたり、する。拝聴、拝聴。

戦場の匂いは甘美であり、と同時に常に背筋が浮つくような、背骨から刃でえぐり取られるような恐怖感、それを忘れないようにしなければならぬ。コロサレタクナケレバ。コロサレタクナケレバ、自分を殺そうとする意志、つまり殺気を汲み取り、なおかつ殺気だけではなくて何処からなら相手は僕を攻撃しやすいのか、僕を暗殺しやすいのか、と考え、わざと隙を作っておいて相手をそこに誘導する。誘導した相手が現れてくれたら、まあ、その相手は殺すことが出来るが、それを読む相手も大勢いて、そういう奴に限って耳をたくさんつけた首飾りだとか、顔のパーツ全てを混ぜ込んだ首飾りなどをつけていて強敵なので、そういう相手はそういう相手なりの手法を取ってくるから怖いね。恐怖だよ。故に恐怖に遅れを取らぬように、自ら自身も恐怖の色に、カメレオンのように色を変えてしまえば、恐怖の中で浮き上がることをしないで済むから、生きることが出来る。浮き上がるとハイエナにすぐ命を狙われてしまうので、恐怖に染まって沈んでいなくてはならない……深海に沈んだ海賊船の船員が、骸骨のまま深淵を歩くかのように……。

（やめる。人を殺すのはやめる。そんな冷静に、人を殺すのはやめる）

僕は憎しみが憎しみを呼ぶという連鎖のことを、知識として誰かに教えてもらったことがある。だから知っている。憎しみに憎しみを返した時、誰も報われたりしない。痛い話、怖い話、そんなの本当は無くて良いんだよ。みんなで心暖まる世界を構築するために、優しさで持つて、互いの心を理解し合うことが、本当のコミュニケーションというものなんだ。暴力で解決するなんて、痛いじゃないか、辛いじゃないか、或いは怖いじゃないか。何で血を見たがるんだ。こんな黒煙に塗れた戦場で刃を振り、憎しみをぶつけ合って、冷静に状況を分析しつつ相手を殺すために背後からの一撃を狙うだなんて、禍々しい人の性根の為せる業だよ。疲れるばかりじゃないか！僕はとても嬉しそうだ。こんなに嬉しそうな僕は、あまり見かけない。何故僕はこんなにも嬉しそうなのだろう。そんなに嬉しい

ことなのだろうか。殺戮というのは、暴力というのは、何が嬉しくて、何が楽しいというのだろうか。これは幻じゃなくて過去だとしたら、既に僕が過去に通り過ぎてきた経験ということ。記憶として封印されている、あるいは紛失した過去の情報がこの光景だとして僕は僕として確かに血を噴出させる経験があつた……？だからあの処刑場で、ゴキブリだとみなした相手を躊躇なく燃やして灰に落とすような、大胆なことをする度胸があり、もしかするとそれは度胸ではなくて快樂として行った可能性があるのか？いや、違う僕は緊張していた。だがやらなければいけない状況だから殺したに過ぎず、でもよく考えたら快樂だつたかもしれない。

綺麗な声が僕を突き動かす。何時から聞こえたのか、よく覚えている。牢獄に囚われていた時に、僕の耳に突如として響いた救済の声音。死んでいて欲望などまるで無い僕自身にこの綺麗な声が、目覚めよ、目覚めよ、と語りかけているような気がしたよ、これのおかげで殺戮もできるんだ、ありがとうと感謝しながら綺麗な声をまた耳にする為に、相手を殺すことにエネルギーを傾けるから。そうすればいずれは、この綺麗な声が声だけでなく、その姿も現してくれるだろうと信じていて、つまりそれは発展ということ、僕の生きる意味と転じてくれて最高だ。人が人を殺した時に得る勲章の首飾りも、素性を隠す効果もあるパワードスーツも、僕には纏う理由がない。僕は僕として綺麗な声という存在のことを思い、そのことをまだ思えることが出来るのだという報酬だけで僕には全てが充分だ。満ち足りることになるから、首飾りという勲章はいらない。殺戮に対して後ろめたさも感じないから、パワードスーツを纏うこともしない。むしろ僕が相手を殺したのだとハッキリと姿を現している感じが、報酬を与えてもらえる度合いを高めてくれる錯覚、いやこれは錯覚じゃなくて確かな理由として存在していてああぐちゃぐちゃになってきた、これでは駄目だ冷静になって戦場では戦わなくては殺されてしまつて綺麗な声を聞けなくなつてしまつから。眼を瞑つて黄金の粒子を眺めて、意識の集中を。

ああ何言ってるんだよこいつは確かに僕だ、僕らしいことを言っていてやがる綺麗な声も黄金の粒子も僕が頼りにしてきた思考の一部分でそれは僕特有の表現の仕方だったはずで、でもこいつはそれを完全に僕のタイミングで思考内で使用している所から見ても、やはりこれは僕であって僕の過去である可能性が高まってきた気がする。例えばこれが僕だとして、僕の魂が僕の内部に入って僕の思考を読み取って僕がこれを間違えなく僕の過去だと認識した場合。僕は魂の旅を終えて、元の自らに戻った時、どんな表情をすればいい？どんな顔をして、人前に出ればいい？人前でどんな表情をすれば分かんなくなることも有り得る程、この状況は危険だ。抜け出したい、もうこの思考を聞くのは嫌だ。ただの極端な人だ。狂っているかどうかはともかく、極端な人だよこれ。って、こういう性格を完全に否定しない僕がいる時点で、僕はやはり過去にこの僕だった可能性が高いのではないか、僕の過去がこのような僕でないならば、僕は当然こういう極端な思考を完全に否定し、狂ってる狂人マジ死ぬよ消えるカス、とか言ってるはずなんだよ、でも僕はこの僕の性格に対してちよつと肯定していやしないか。いや、正直、どんどん肯定に傾いていく自信がある。妙な自信がある。この身体の内部に長く留まれば留まるほど、この思考回路に同調してしまう自信がある。そりゃそうだこれは僕の過去。同一人物なんだから基本的なモノの考え方は変わる訳がない。そうだこれは幻じゃない過去で、そして僕はまた殺戮を行ってその報酬として綺麗な声を聞く。なんで綺麗な声を聞くのに殺戮が必要なの？それは、簡単に行ってしまうと殺戮を行うと一人になれるからだ。どういうことかという、人と馴れ合わず己の世界で己の思考、などを高めていくと甲の中の乙に過ぎない僕という存在が、次第に甲の中の乙ではあるがほとんど甲である、という感じになっていく。つまり自分こそが世界だ、という風に、自分を頼りにし、相手を殺し、より孤独を深めれば深めるほど自分は自分のための世界を形作っていくんだけど、どうやら綺麗な声というのは自分が自分だけの世界に浸っている時ほどに聞こえ

てくれる代物なんだね。割合。だから殺戮を行うと相手を殺して、余計に自分の孤独が深まり、それによって自身のための世界がより強く構築され、結果としてより甲になれる。甲のなかのわずかな乙にすぎない自分が変形し、乙のなかのほとんど甲、みたいな感じになる。で、綺麗な声はそういう甲の状態が強まっている時ほどより濃厚に聞こえて来るから、甲の状態最高！という話になるんだね。だから殺戮をしなければならぬ。やがて綺麗な声は姿を現してくれるに違いないよ。でもそのためにはもっと自分の世界を構築する必要がある。僕がもっと甲になる必要がある。僕がもっと世界になる必要がある。その時僕は最高である。綺麗な声の持ち主に出会い、その姿と共に生きていけるなら、それ以上に幸せなことはないのだから。これが僕である。甲が僕である。乙も僕である。甲乙はつけがたいが、どちらでもある僕。殺戮をすればするほど自分の世界を構築し、やがて僕は綺麗な声の持ち主に出会うであろう。その時が楽しみだよ。だからこうやって元気に、張り切って、相手を殺すことができるんだ。別に一方的に相手を殺すわけではない。相手と自分で、自分が報酬をもらうために尽力し、勝つか負けるかだ。勝った方が報酬を手にすることができる。人によってその報酬は違う。僕にとっては綺麗な声。人によっては、首飾り。そういうことだ。

僕は狂ってなどいない。僕は己の狂気など抱えてはいない。ただ回りから見れば狂気に見えることもあるかもしれない。だがそれは他人の話だ。僕の甲の中での話じゃない。範疇じゃないんだ。僕は僕自身から見れば、僕はまったくもって狂ってなどいないだろう？ さあ、今日もまだまだ殺し合いは続くから、刃を持って。

(いや、やっぱり狂ってるだろ)

僕は何だかんだ言ってこれが狂っていると、今、考えた。

僕はこの過去の僕とは別人になれるのかもしれない。

下僕は己の狂気を知る？

僕が知ったのは過去の僕の狂気だけだ。

下僕である僕には狂気など、無い。

良かった途中この僕の思考に染まってしまいそうになったけれど、僕は下僕の僕として僕足りえるようだ。さて、魂の旅はもう終わりでいいだろう。

僕は下僕だ。甲を歩く乙にすぎない下僕だ。

僕は甲などではない。世界などではない。

それでは俺は神だ、などとのたまうサドと同じレベルだ。

断じて、僕は甲などではない。

病室の匂いを嗅いだ、と思いながら目を開けると知らない天井があった、ありましたよ、うわー。と虫が何匹も張り付いているような模様の天井を眺めながら、被らされている毛布を捲り上げると、自分が病人の格好をさせられていることを知る。点滴とかはされていないので、起き上がり、隣に置いてある医療器具っぽい、メスとか注射器とか、薬とか、置かれてるトレイから、薬を一錠拾い上げて舌上にのせた。そして、飲み込んだ。ゴクリ。何の味もしない。

透明な空気、澄んでいる一室には妖精が住んでいるような気がする。RAINBOWな妖精。水ばかりが行き通る澄んだ場所にだけ住む、虹を纏う妖精が住んでいるんだ。まあ妄想だ。住んでいる訳がない。でも、何で住んでいる訳がないと決める？見えないから？万人に見えないからって、虹色の妖精がいらないとは限らない。見える存在には見えるのかもしれない、虹色の妖精が。

全ての人間には認知できない、としても、いるのかもしれない。

鏡が一枚壁に掛けられているので、鏡越しに部屋を眺めてみれば、虹色の妖精が写っているのが見えるかもしれない、と気が付き、鏡を覗き込んでみた。綺麗に掃除されているピカピカの鏡だ。まるでその鏡の中に手を差し伸ばせば鏡の世界に入り込めるかと錯覚させられるほどに、ホコリ一つさえもついていない綺麗な鏡。何故、ここにはホコリが無いのだろう。清涼……。

妖精は写っていないかった。

僕が写っていて、そして不敵に微笑んでいる。

違う違う、こんな不敵な微笑みを浮べるのは過去の僕だ。僕は僕だ。僕は僕であるから僕なのであって、下僕であるから僕なのであって、僕僕僕と自分を僕と呼称するからこそ僕なんだ。不安を抱え、

臆病で、内気で、でもやる時はやるのさ。それが僕さ。世の中の為に生きるのさ。それが僕だ。僕は僕だ。

お墓の前に立っている僕は黒いスーツを身にまとい、死を象徴する花束を両手で持つ。

泣き出しそうな雲たちが、ゴミ集積場の発する煙のようにもくもくと激しい。どこにいくのだろうか雲たちは。僕はここで見送ろう。白い花束を持って、この死んだ人のお墓に供花……。

墓には当然名前が刻まれている。

『下僕 テンガ』

僕は目を見張ったまま動けなくなった。花を捧げようと思っていたが、その動きを止めて、ずざざと後退りする。こんなはずじゃない。僕は僕に花を捧げようとしていた。供花……。ゴミ集積場の煙が墓場に落ちてきて、霧のように景色を隠してしまう。僕も景色の一部であり、隠されてしまう。その生が嘘偽りであったのかのような妄想に捕えようとするかのごとくの、隠蔽。隣に顔を向けると一人の男性がいた。それは老人で、白髪で、どこことなくドナドナを想起させる人でもあった。彼は呟くようにして呻いた。

「まるで不幸の唄を轟かせるようだ。腰が曲がって、骨に還っていく恐怖にだけ捕らわれて、墓場で自らの名前をよむ。黄泉への導き」しわがれた声。その奥に、たしかに優しさを感じた。

ありがとう、と言いながら僕は土に還った。

プレハブのような造りの、誰でも受け入れるが故に誰でもいいと宣言しているようでもある白の部屋。槍のごとく雨が降り注いで、血がびちゃびちゃに乾いて黒ずんでいる。

僕は制服を身に着けたまま最期の問題を解いたつもり。生か、死か、二択に。

悩まされること六十六年間。何とも表現し辛い匂いがする。鼻で嗅いでいるのか、口で嗅いでいるのかわからない。脂肪が垂れ切った匂いかもしれない。みんな血を噴き出して黒く染まる。でも中身に詰めてあるうちはいいんだ。問題は、蠟燭が溶けてキャンディーが失われる時間だ。

椅子の理を説いて、二択の正解を導けない。悪方向の狂いが非効率と、圧倒的な恐怖を生み出したという歴史を覗いて戦慄を走らせて、慄いて、病院の澄んだ一室の鏡のことをふと思いついて、そこにいた僕の他に、人がいたような気がすると思いつく。過去の記憶をいじって、僕は鏡の中にもう一人の存在がいたことを認める。

髪の長い女の人だ。
恐怖を伝えるような。

紅蓮の両瞳が、僕をまじまじと見つめている。

彼女はもう服を脱いでいて問いかける言葉が淫靡だった。

これからまどろみを生むつもり表情を見せ付けられ、血管が収縮するような拡大するような激しい心臓の鼓動に合わせて、しかし瞬きを何度か繰り返す内に、彼女は全身を穴だらけにして空間に潰されていった。紅蓮の両眼だけが、ぼとり、とベッドに転がって、僕はその二つを拾い上げて自らの窪みに閉まった。ようやく視界が開けた、と思った。

僕は今まで眼球がなかったのに、彼女が服を脱いで裸だということも知っていたのか。

紅蓮の両眼からは真っ赤な血ばかりが流れる。そうか、床に文字を描こうと思って下を向いたら、既に四列が描かれていた。

『ならくの底に落下する』

『うよくの人々は殺される』

『どなどなの歌が聞こえる絶望』

『げぼくは己の狂気を知る』

ひっ、と呻いて僕は、おそろおそろ、前に顔を向けた。見たくない者がいるような気がした。

でも、いた。

僕が、下僕を見ていた。

あれは魂の旅を終えたばかりの僕だ僕が僕を否定してきたばかりの僕だ。じゃあ今のこの僕はどんな僕なの？どこで分かれてしまったの？僕は血を流している。眼球がないような、あるような、いつから眼球があつて、いつから眼球が無かつた？それは考える必要があること？それとも必要のないこと？世の中に必要のあること？世の中に必要のないこと？僕は世の中のためになることをして世の中に認められて、世の中で生かされたい。

でも眼球が僕自身のモノじゃないし、僕は過去の僕を否定した立派な下僕の僕ではなくて、違う僕なのじゃないだろうか。じゃあ僕って何だ。そもそも僕って何なんだ。誰か僕が僕足りえると確認できるものを教えてくれ。

あ、そうだ。

ようやく彼女の下半身までが完成された。声帯を作り終えるまでにはもうちよつと時間がかかる。下半身を作るまでも長年の時間が過ぎたものだが、上半身はもっと時間がかかるだろう。乳房を柔らかくしないといけないし、顔の細かなパーツ作りをしなければならぬし、脳味噌を作る時には、誰かから細胞を拝借してくる必要性も出てくるかもしれない。

全ては僕が僕足りえるためのことで、僕のエゴということだ。

だが人に多大な迷惑さえ掛けなければいいんだ。多大な迷惑を掛ける時は、多大な迷惑を掛ける前に自殺しなければいけないけど。

そうできるといいな。及第点だよきつと。

でも彼女の脳味噌を作る時には、誰かに迷惑を掛けてしまつかもしれない。ああ、そうだから少しずつ、多くの人から脳味噌を分けてもらえばいいかもしれない。ほんとうに一部分だけを多くの人から一斉に、盗み取って、彼女を構成するために使う。そうすれば彼女にはいろんな人間の思索が入り込んで、きっと彼女は賢くなるに違いない。賢い彼女はきっと綺麗な声を発してくれるから、僕の目的は達成される。僕は僕足りえると証明することが出来て、満足する。

自らを満足させるためだけにこれだけの手間をかけるだなんて。

『狂っている』

僕が下僕にそう告げる。その姿が誰かに似ている気がした。

僕だ。彼は僕にそっくりだ。下僕は僕にそっくりだ。僕は世界？

狂ってしまいそうだ。血の涙を、流そう。

「なんなんだよこれは、本当にふざけるんじゃないやねえよ！ 僕の精神をおかしくして、過去の僕に戻してしまおうっていう算段だったのか！？ 殺すならさっさと殺してくれればいいんだ！ もう僕は『死』を選択したんだろ！？ 何でお前の実験道具のように幻を見せられて、精神を錯乱させられそうになってしまわなければいけないんだ！ 僕は下僕だ！ 甲乙付けがたい下僕ハツ？ それは僕なんだよ、僕は僕なんだ！」

叫んでから顔を上げると、霧立ち込める湖の中に浮かんでいるとわかった。波が無いから、流れがないから、湖だとわかったのだ。魔法の力で魂の旅に連れていかれて、精神を錯乱させられそうになった。

サドは刺青の顔で、巨大な身長で、僕を見下ろし、憎たらしい表情を作っている。二度と忘れられないような憎たらしさを湛えている顔つき。

ボートに乗っていた。

ウヨクとドナドナと犬少年が死んでいるかのように横たわっている。

声を掛けても返事をしない。でも熱はある。生きている。

「生きてる……？」

死んでるよ、とでも返事されたら返り討ちを覚悟で首を絞めてやるう、と思いつながら問いただしてみる。「生きているよ。意識を失っているだけだ」。

「そうか。そうなの。ああ」

でもサドから逃れる術は無さそうだ。ここは湖だし、ボートの上で逃げ場もない。辺りを見渡すと蛍光があった。青と、オレンジ。

「今日は繁栄の三日月だからな。スポットが輝きを持っている。ノーザンズ湖に、別の世界からの繁栄のための道具が誕生するだろう。」

だが今はそんなことはどうでもいい。今大切なのは、お前に最期の選択をさせてあげることだからな」

「お前、ふざけてるのかよ……」

怒りが滾る。今すぐにこいつを殺してしまいたい。

何が選択だ。僕に何の選択の余地があるっていうのだろうか。にも関わらずまだ選択をしるなどと、のたまう。こいつを殺したい。死ぬ前に。

「両足で立てるお前だ。まだお前の力で立ち上がり、選択をする気概もあるはずだ」

たしかに、大根がスパツと包丁で斬られるようにして斬られたはずの僕の両足は、魔法という万能すぎる力で復活を果たしているようだった。或いは、斬られたこと自体が幻だったのかもしれない。いや、何処から何処までが幻で、現実だったのか、わかったものじやない。そもそももしかしたらこの世界が幻かもしれないし、僕自身が幻かもしれない。現実なんて、何一つないのかもしれない。でも、綺麗な声さえあれば僕にはそれで充分なはずだ。そうだ僕は僕の確証を得るために綺麗な声を持つ人物を作り上げなくてはいけない。ああ、違うそれは幻の話で……。

考えている途中で、サドが言葉を放った。そして、音が聞こえてきた。

「見えてきたぞ。心臓が」

どくん、どくん、どくん、どくん。という典型的な心臓っぽい音が湖に立ち込める霧のせいで視界が悪い中、やがて姿を現した。

「たしかに、心臓、だ」

「だろ……？ 魔法使いにとっての要。源。ノーザンス湖に生えている大樹に、人面瘤のごとく寄生しているこの心臓。これこそが、革命派にとつての標的と言っても過言ではない。この心臓さえ停止させれば、魔法使いにエネルギーは供給されなくなり、保守派の戦力はほぼ皆無と化す。その間にこの大樹の根っこを切り裂けば、この世界の既存の理は壊れる。この大樹こそが、六つの湖が枯渇する

ことを永遠に防いでくれる、ルーピックキューブの基盤。湖の水を潤わせたままにする、命の大樹だよ”

目を見張る巨大さを誇る大樹だった。命の樹というのも納得がい。そして大樹の周辺だけ霧がやけに晴れていて、大樹の天辺まで天を仰げば見える。空には丁度、繁栄の三日月が輝いていて、その照射が命の大樹を、煌々と、照らしている。

その大樹の幹に、たしかに人面瘤と似ているかもしれない、寄生している心臓。どくん、どくん、と人間の心臓に似ている形をした黒色のそれが、おそらく鼓動するたびに魔法を使うためのエネルギーなどを放出しているのだろう。そのエネルギーを利用して、保守派の連中は繁栄を続けている？

革命派の目的は、この世界の理を変えること。つまり大樹の根っこを切り裂き、湖を枯渇させること。湖はこの八十年周期の世界が再生されるための要だから、湖が枯渇してしまつたら再生は達成されない。

だから革命派は保守派が独占している魔法の力を得て、顔の無い天使を全て飼われ天使に変えることで、世界の破壊を防ぐ必要がある。まずは破壊を防がなければ、世界の理を変えて再生を不可能にすることは人間を滅亡させる結果を導くからだ。

そして革命派は、魔法の力を保守派だけの物ではなく全ての人の物とすることで、新たな世界をより繁栄したものにしようとする。これが目的。

だが、心臓は、魔法のエネルギー源であるその心臓は、世界の理を変えるために根っこを斬り落とさなければならぬ、命の大樹の幹にくつついている……。

つまり、命の大樹が斬り落とされれば、心臓もおそらく鼓動を止める。永遠に止める、のではないか？

「一時的に止めて、また動かすことが出来るなら、魔法の力を全体が使うことで世界をより繁栄させるといふ案は通る。一時的に鼓動を止めさせて魔法使いの戦力を無くし、争いの決着がついたら心臓

を再鼓動させて、みんなの繁栄のために魔法エネルギーを活用する。それはいいことに間違いない……。だけど、どう考えても、そういう風に上手くはいかない……。命の大樹を斬り落とした瞬間に、心臓も壊れてしまつては、もう魔法のエネルギーを活用することは今後一切できなくなる、ということ……」

「その通りだ。ついでに言わせてもらつと、革命派にはもう一つ愚かなことがある。連中は、エネルギーが無尽蔵な代物だと思つてゐるのだ。万人全てが使つても使つても、枯渴しないのが魔法エネルギーだと誤解している。だがそれは誤解だ。魔法エネルギーにだつて限界はある。さらに言わせてもらつたら、革命派の多くの連中は、エネルギー源がこのように心臓の形をしていることも知らない。命の大樹のことは知つてゐるが、命の大樹に心臓が寄生している、ということを知つてゐる者はほとんどいないのだ。まあ、その点に關して言えば、この国に住んでゐる民の多くでさえ、この状態を知つてゐるのは一部の者だけだ。旧制部隊などの軍部や、お偉いさんくらいだな。命の大樹は基本的に、その姿形を見せぬように徹底的に管理、この湖も閉鎖されているのが通常だからだ。革命派は心臓と命の大樹、そして湖、これら三つがどれも切り離せぬ関係にあることを知らないのだ。それを知らぬまま、革命と訴えてゐる……。だが、知らぬことが必ずしも悪いとは、限らないのだが」

「……………」
「知らないこと、は無知、ということ。無知は取り返しのつかないことを引き起こす確率の高い、人間の悪癖じゃないだろうか。」

それが悪いとは限らない、と口走り、サドは話を転換させようとした。どういう意図で。

ぴちやり、という水の零れるような音が小さく鳴つた。静かな湖の上で、よく響く。少しの間が空いてから、僕は月明かりを仄かに浴びているサドに尋ねる。人面瘤を黒スーツの袖の上から、さすりながら。

「どづいことですかね……」

僕らに乗せているボートが、大樹の麓、砂浜になっているところに座礁した。

心臓のどくん、どくん、どくん、という音がやかましくなっている。僕の心臓が鼓動しているのか、命の大樹に寄生している黒の心臓が鼓動を早めているからか、それとも大樹の麓に辿り着いたから鼓動が大きく聞こえるようになったのだろうか。どくんどくんどくんどくん、と心臓の音色が喧しくなつたと感じ、見上げる。

黒い。真つ黒だ。張り巡らされている血管だけが、赤い。

「さあ、お前だけ降りろ……。ああ、そうだ、その消耗品ではない犬も、連れてこい」

「……犬少年を？」

「そうだ。俺の命令に従わなければ、すやすや眠っている他の連中を殺すぞ。人質を取られている上にお前自身の命も掴まれているという、どうしようもない状況を忘れるな」

「……………」

「早くしろ。俺は気が短いんだから」

たしかに苛立っているらしかった。彼の周辺を湯気のようなものが漂っているのが見えて、蜃気楼のよう。(あれは……魔力が可視化されたものだろうか)。直感で理解する。渦のように彼の周囲を右回転で、回っている蜃気楼の流れ。

大人しく従わなければ、確かにサドは僕らの内の誰かの命を奪いそうだった。そういう男だと思える。大人しく従っていても命を奪われそうな予感もするから、どっちにしろ殺される気がするのだけだ。

悪あがきが出来るチャンスを見つける程度のこととはしたい、が……。

(もう何をすればいいのかも、わからなくなってきたからな)

「よっ、と」

そう思いながら、横たわっている犬少年を背負う。さすがに少年なので軽い。

ボートから降りる時に姿勢が不安定になるせいで足を躓きそうになったが、倒れるまでは行かない。砂浜に足を着けて、ふう、と一息つきながら砂浜に足が埋まらないように、数歩歩く。ざく、ざくと小気味良い音を鳴らしながら砂浜を、サドの背を道しるべとして進んでいく。なかなか砂浜は広くて、右にも左にも広がっている。一分間程度は、歩き続けた。そして一分間歩いた辺りで、砂浜は途切れていて、目の前には大樹の幹。地面をうねるようにして這っている巨大かつ無数の、茶色の根っこ。

そして幹に埋め込まれるようにして在る、青紫色の結晶らしき物体。仄かに蛍光していて、月明かりを反射させて発光しているように見える。無数の巨大な根っこたちに包まれるようにして、隠されるようにして、仄かな発光をしている。

「その消耗品はこら辺に置いておけ。根っこを背もたれにでもしてやるんだな」

「消耗品じゃない。犬少年だ。サト、という」

「サト？ そうか良い名前だな。だがそんなことはどうでもいい。

お前は動きが遅い。さっさとその消耗品をこら辺に置けよ」

「……ああ、わかったよ」

いちいち消耗品だとか告げてくる煽り体性にはウンザリだ。適当に相づちを打ちつつ、犬少年を茶色の根っここの這っている辺りに座らせてやり、砂で汚れぬように倒れない体勢にしてあげる。犬少年はまったく起きる気配を見せない。魔法でも掛けられているのだろう。寝息を経ててすらいない。熱が無ければ死んでいると想像してしまうくらい、生きてる感じがしない。まるで人形のよう。

「安心しろ。人形などではない。しっかり、生きてはいる」

(……思考を勝手に読んだか)

「常にお前の思考を読んでいる訳ではないから、そう気味悪がるこ

とは無い。……さあ、お前もそこら辺に座ると良い。俺も少し立っているのが疲れたから、そこら辺に腰を下ろして、お前の最期の選択について語るとしよう。……さあ、早く座れ」

(一々、気に障る言い方しやがって)

「気に障るようにわざと言ってるんだよ。……また気に障ったか？

ほら、早くそこら辺に座れ。時間は無限では無いのだからな」

「ああ、わかった。大人しく従う。だから思考を読むのはもう止めてくれませんかね」

「はっ。お前が妙な企みをしないとハッキリすれば、そうもしてやるがな。せいぜい下手な思考をしないように気をつける。俺を怒らせないように、心の底から俺を尊敬なりするんだな、戦闘狂サマ」
本当に腹正しい奴だ、と思うが反抗する術は見つからない。

ここは大人しくするしかないので、適当に座りやすそうな根っこを決めて、そこに座った。

「それでいい」

ニヤツと唇を引きつらせながら、サドもそこら辺に見当を付けて座った。

彼の左側で青紫色の結晶らしきが仄かに輝いているのが、気にかかるな、と漠然と思いつながら、しばらくの間ニヤニヤしながらサドがこつちを見てくるのが気味悪かったので、沈黙に耐え切れず何か話題を振ろうと思案し、思いつく。

(そういえばさっきポートで、無知も大切だ、とか言ってたが……)

「ああ、ソノ話の続き。気になるならしてやってもいい」

(また読みやがった)

「そう腹を立てるなよ。昔のお前はもつと理知的で、簡単に怒ったりはしなかったぞ？　いまだお前には、声、声が聞こえるんだろう？　ならやはりお前は覚醒が出来るということ……くく……くく……

……くく……ああ、そうだ、くく、とか笑ってる場合じゃないな……。

そうだ、革命派の無知　　はそれはそれで良いことだ、と俺は確か言っていたな？」

「ああ、言っていたよ。話を続けてくださいよ」

「おいおい。下手な言い方をして俺を怒らせたなら殺されちゃうぞ？」
どっちにしる殺すんだろうが。と叫びたい衝動を堪えてから、この思考も読まれたかな、と思いつたり、サドの表情を窺ってみると、三白眼を大きく見開いているのに口元は笑っているという不気味極まりない表情で、僕を見ているような、でも、どこも見えないようにも見える。宙を眺めているというか。

背筋が刃で抉り取られるような寒気がしたので、ゾツとし、背後に振り向くと、霧とポートと砂浜、という風景。

サドのいる方に顔を向ける頃には、彼は奇妙な表情はそのままに、唇を動かしている。

「くいいい……くっ……くっ……くいいい……」

三白眼のままに、唇を大きく横に裂いて、白い歯が犬歯まで剥き出しになっている。どういう意味を持つ行為なのか、理解が難しい。また背筋がゾツとしたので、背後に振り向いてみるが、やはりあるのは霧とポートと砂浜。また前に顔を向ければ、今度こそ彼は口を開く。

青紫色の結晶らしきがキラリと輝いた頃、横に裂く準備運動みたいなことをしていた唇が開いて、言葉が紡がれる。

まず彼がしたことは自分の発言の訂正だった。

「まあ、無知が良いということでもないのだと思うのだが」
どっちだよ。

僕は彼のいい加減さがあまりにいい加減すぎるので、本当、眉を潜める他なかった。僕は心の中で悪態を付いたが、彼はそれを読んだらうか。

サドは言葉を続ける。

「人は鞭を打つ。自らの身体に、痣となり残るような傷を、鞭を振う事で作る。生み出す時がある。それはどうしてそんなことをすると思う？ ああ、わからないか。それはな、人は鞭を使うことで己を奮い立たせることが出来るからだよ。だから鞭は大切だな。飴と

鞭という言葉もあるくらいだ。大切なのは両立なのだよ。無知な者はそこがわかっていない。両立の大切さを知ることこそが世の中を良きものに変える。飴と鞭だ。無知では、それが理解できない」

鞭と無知で言葉を掛けているのかと理解することに気を取られて言っていることがあまり理解出来なかったが、まあ大体言いたいことは掴めた気はする。バランスが大切だと？まあ、わかる気はするが……。

(だが……この男が言うには、あまりに信用できなさすぎる)

「そうだろうさ。俺だって自分でバランスなどと述べられる人間だとは思っていないよ。俺はさあ、そういうのが嫌いなんだよ。世の中が上手く成り立っていくためにはバランスが必要です。そんな言葉はなあ、人間には衣食住が欠かせません、とかいう当然なことを得意気な顔をして言うのと同じことだろう？ ああ、当然なことを語るのには大切だろうさ。人は簡単に、単純なこと、大切なことを見失うとは言うしな。……だが、あまりにも退屈だ。当然な言葉というのは」

(結局、刺激を求めてるとかそういうことか)

僕がそういうことを思った途端に、彼の様子が変わった。

「馬鹿にするんじゃないねえ！ そんな簡単なことじゃない。結局、なんて言い方をして俺の機嫌を損ねるもんじゃないやねえぞ、命を握られてる輩が！」

「すみませんね」

どうにも面倒くさい奴だ、と思いそうになったが思う手前で思うことをやめたような気がするけど、やっぱり思ってしまった気がする。読まれてしまったらどうか。怒るだろうか。

だがサドは先ほどから表情がずっと一定で、大きく眼を見開いたまま口だけ笑っているという状態のまま変わらない。気味が悪い……。あ、これも読まれてしまうだろうか。

「……はっ。安心しろ。俺もそこまで怒りっぱいわけではない。自らの思考をコントロール術というものも旧制部隊アンシャン・レジムの訓練内容には含

まれているのでな。今さつき怒ってみせたのも、刺激を求めてやってみたに過ぎないさ。ああ、話が脱線したな……ま、とにかくさ、俺が言いたいことは、混沌カオスって良いね、ってことなのだが……」

「悪役らしい、言葉ですね。少し小物っぽくもありませんが」

刺激を求めているなどと偉そうに言う相手なので、少し尖った言い方をしてみると、その挑発に乗ったということか、実際に感情が高ぶったのか知らないが、サドは声を荒げる。

「いいかあ？ 革命派と保守派、などと言って二つにしか勢力が分

かれない時点でつまらねえ状態なんだよ！ 混沌カオスってのはもつとご

ちやごちゃで、複雑で、つまり面白くなくちゃいけないんだよ、刺

激的でなくちゃいけないだ！ 何百年も旧制部隊アンシャン・レジムなんて所で隊長

やってるとよあ、本当に毎日毎日つまんねえ仕事、ご機嫌取りみて

えな、本当そういう退屈な毎日を送らされて俺は困っちゃうんだよ

なあ！ 俺は激しく戦争がしてえんだよ！ それも三つ巴のような

複雑で死人が大勢出るような、負の感情が渦巻くような、そういう

渦の中に自らを没頭させてえんだよ！ それがこうして最近、革命

派だとか言って連中がこの国に押しかけてくるようになったかと思

えば、弱えの弱えの、何なんだよあはよあ！ 魔法って最高ツ！

あれだつたら昔、国内で勃発した内紛の時に戦った同じ魔法使い

相手の時の方が盛り上がったって話だぜ……ほら、あのウヨクって

いうお娘さん？ あれの仲間とかさあ、一人残らず雪に血に塗れさ

せて蹴散らしてやったけど、革命派の連中はあいつらの十分の一以

下の実力しかねえ！ ああ、退屈退屈退屈退屈退屈退屈だ！

俺はなあ、あの何百年前での、あの戦場……血肉吹き飛ぶあの戦乱

……ああいう刺激的な所に身を置きたいんだよ！ ずっと俺は退屈

に縛られているんだあ……。俺はこの世界が壊れようが、壊れなか

ろうが、そんなもんは実際の所どっちだっていいんだよ！ ただ刺

激ダ……無知……鞭……鞭……そう、そうさア……無知など消えて、

鞭ばかりが走ればア……世界には激しい痛みが走って、またあの戦

場のような漆黒の負負ばかりの空間を体験できるんだよオ……そ

のためにはあ……お前……お前が目覚めればいい……覚醒しろ
オ……そうすれば、世界は最悪なことになるに違いねえんだア……
それが最高なんだよオ……サイコーなんだよオオオオオオ！」

こいつ、殺してやらないと駄目だ、と僕は、呆然とした。

サドは興奮した様子のまま立ち上がり、くっ、くっ、くっ、と呻
きながら彼の左側にある青紫色の結晶らしきに指を突き出した。

「これを斬れば世界の湖は枯渇するウウウ！ そうすれば世の中は
混沌だ、混沌に染まるんだよオオオ！ わかるか、その重要さが、
お前には分かる筈だろうがアアア！」

また背筋がゾツとさせられた。いや、ゾツ、どころか、ゾワツ、
かもしれない。

「ほら、人質だよ、人質イイイ！ ていうか、人質取るまでもない
かアアア！ その人面瘤には 顔の無い天使 の液体を大量に注入
しておいてやったんだアアア！ だからアアア！ この結晶を破壊
することが出来るんだよねエエエ！ 結晶を壊せば当然、湖は枯渇
ウウウ！ ホラホラアアア！ お前たちの元々の目的だったんじゃ
んかアアア！ 世界崩壊しちゃけど、いいじゃんいいじゃん、混沌
って最高じゃん！ 人質殺しちゃうよ！？ ていうか、お前も俺と
同じ穴の貉じゃねえか！ 世の中めちゃくちゃにしよう！ 俺は神
だ！ お前は世界だ！ ほら、すごいじゃねえかアアア！？ 神と
世界があれば全てをめちゃくちゃに出来るんだろウガアアア？ 鞭
で無知を滅ぼそう！ 無知は無知ですぐ行動を起こしてくれるから
それはそれで、俺としては混沌を作るための材料になってくるから
嫌いじゃない、ていうかむしろ好みなんだけど、やっぱり無知は鞭
で殺そう！ さあ覚醒しようぜえ兄弟！ 俺が弟分で、お前が兄貴
分つてことで、取り分はお互いに分け合つてさアアア！ 混沌な世
の中を楽しもうじゃん！ 愉快で刺激的で、最高、サイコオオオ！」
サイコオオオ、と絶叫しながら瞳孔開ききつちやってるみたいな
顔付きで、サドがずんずんとこちらに迫ってきた。塵気楼、湯気
のような魔力の滾りがより沸き立っていて、禍々しく見える。その顔

があまりに殺気に満ちていたので、僕の身体がそのあまりの殺気に
対して勝手に反応し、背後に跳び、グミを巾着袋から鷲掴みにし、
人面瘤に食べさせて僕の武器を出現させる。血。ずぶしゅあ。

「!？」

その刀の纏う霧色が、黒、になっている。黒のグミなどはないは
ずだ。

「顔の無い天使 液体をたくさん吸った人面瘤は、黒の刀を出
現させるんだアアア！ 破壊の力を持つ、鋭い刃だよオオオ！ な
んだ兄者ア！ 殺る気満々かよアアア!? 黒の刀は結構強いから
ねエエエ。でもだめだめ、俺には人質という手段があることを忘れ
ちゃいけないアアア！ 犬少年だけでなく、ボートで呑気に眠り
こけてるぐーすかの二人も、魔法で簡単に殺せちゃうから人質だか
んなアアア!? ほらほらこれが最期の選択つてことだよ兄者アア
! 世の中ぶち壊して仲間の命を救うか、世の中壊さず仲間を見捨
てるかのどちらかアツ！ 選べ、選べ選べ選べ……選べエエエエ
エエエエエエ！ ……………えらべない？ 選べないの？ アアアそう、
ジャア選べないなら、ヒヒツ！ まずは、ヒトリメエツツ！」

一瞬にしてサドの手元に犬少年が、まるで磁力で引つ張られるか
のように吸い寄せられると、手で鷲掴みにされた。犬少年の頭部が
大柄な彼の手に、すっぽりと納まる。

「や、やめろ…………わかった…………」

「消耗品のことなど気に病むナアアア！ ホラ、もう遅イイ握力入
っちゃってるカラツ！」

脳味噌や頭蓋骨や髪の毛や頭の皮膚。

犬少年の頭部が。

ボールが弾け飛ぶようにして、ぐしゃりと砕かれた。

弾け飛んだ時に犬少年の声が聞こえたような気がする。気のせい
かもしれないが、実際に聞こえた言葉かもしれない。何か魔法の力
のおかげかもしれない。彼の思考が伝播してきた気がする。それは

彼の頭部が砕かれた瞬間に、僕の頭に言葉として届いてきた。

彼は言っている。

（人はみんな死にますね。その間に楽しい記憶をたくさん詰め込めれば、きつと人は幸せなんだと思います。僕の役割は、犬人間として、人間を背に乗せて道を走ることでした。そういう役割を僕は達成できませんでした。ですが、僕は皆さんとわずかの間でも、共に生きることが出来、その間の戦いの記憶を、この脳味噌に刻むことが出来ました。僕の記憶はすぐに投棄されてしまいますから、少しの記憶でも、僕にとっては宝物のように感じられる時があります。

今、僕の記憶は潰れれば無くなって、失われてしまいます。ですからその前に、テングに、この記憶を、僕がこの旅の間に見た景色、記憶を出来る限り伝えます。僕はまた記憶を失われて復活することでしょう。でもそれは僕でありながらも僕ではないのです。どうかこの僕がいた証である記憶を、あなたに取っておいて欲しい。それがこの僕の生きた証だからです。こうやって一瞬にしてたくさんの言葉や、記憶をテングに送れるのは、これは、魔法の力か何かのおかげでしょうか。こういう力が万人に備われば、世界は確かに幸せになるのかもしれない……、では、さようなら。次の犬少年である僕が、あなたのお役に立ちますよう、祈っておきます。さよなら、さようなら。ほほん」

時が止まったかのように。

一瞬の間に犬少年が、死ぬ前に僕に伝えておきたいこと、それは彼が彼であったこと、彼が彼として生きたことの証？記憶が流れ込んでくる。彼が生きていた時、旅の間に見た、景色、交わした会話、感じた感情、印象に残っていること……。

（生きていたんだ！）

その記憶や言葉を受け取った時、僕は確信のような、そういうことを思った。

彼は生きていた。

犬少年は、たった今脳味噌が潰されたその瞬間まで、犬少年とし

サドは無言のまま、こちらに迫ってくる。

一瞬、ふわふわとした感覚にも襲われるが、頭に綺麗な声のことが過ぎる。

「いける」

力強く黒の刀を握る。

自分が神だと勘違いしている恥知らずを、ここで、殺す。

「殺せるなら殺してみろよこのオセロの餓鬼がアツツ！」

サドの膾炙楼のようだった魔力が、よりハッキリとした禍々しい渦となって暴発、彼の全身を覆い隠すほどの毒霧のような様相となつて渦巻いている。ドロドロとしたその毒渦を纏ったまま、表情は、神というよりは、欲望にトリツカレテイル悪魔だった。

それが手に持つ赤刀が殺意を剥き出しにしたまま、僕に躊躇など無しに振り下ろされる。やばい眼で捉えられない、とわかり冷や汗を走らせる一瞬の間。刹那という奴。

ガキンッ。

黒の刀がそれを受け止める。赤刀の太刀筋をまったく捉えられなかったにも関わらず、僕は斬られなかった。僕が実力によつて受け止めたのではない。黒刀が己の意志を持つが如くに自在に動き、僕の身体が縦に引き裂かれるのを防いでくれた。……敵の攻撃を勝手に受け止めてくれる、黒刀？

「チッ……。面倒だ……！」

不機嫌そうに舌打ちをしてから、だが下がったりはせず攻めの姿勢、サドは赤刀を振り下ろす速度をより強め、血しぶきが僕の眼前で軌跡となつて霧状に踊り狂うかのような錯覚。縦横無尽の角度で僕を斬ろうと試みる追撃だが、しかし黒刀は僕の両腕を引つ張り上げて意思でもあるかのように動き、反応し、赤刀から発される殺すという殺意を一つ残らず、捌いてくれる。新鮮な魚を一瞬にしてどの程度の重さなのか、売れるのか、オスカメスカ、大きさは、などを一瞬にして判別してしまう目利きの師匠のごとくに、黒刀は斬撃を捌く、捌く、裁く、捌く捌く捌く。

「……フザケテンジャネエエエエエ！」

捌かれ過ぎてイラつきが怒張にまで達したらしいサドは、しかし感情が昂ぶっているにも関わらずバックステップをして引き下がる。身体レベルで一時体勢を整えることを判断したのかもしれない。彼が歴戦の狂野郎であることは間違いないだろうから、いくら感情が昂ぶっても、戦闘中、判断を誤らないのだろう。

（後もう少いでこつちが反撃できる隙が生まれそうだったのに……思考を読まれているか……）

「ああ、読んでるよ！　ったく、幸運だよなア……。黒刀が自動防御してくれるおかげで、俺がいくらお前の思考を読もうが捌かれちまうんだな？　裏を搔くも糞もありやしないなあ。刀の方で勝手に全部、やってくれるんだからよッ！　うらやましい限りだよ。……しかも、赤刀と交わる度に、俺の魔力を吸い取っていやがるじゃねえかアアア！　どんだけお得なんだよオオオ！　うらやましいなアアアアアアア！」

（吸い取っている……た、たしかに屋気楼が……）

僕を取り囲んでいる魔力の湯気が、足元から沸き立つようにして頭上まで渦のように昇り上がってくれている。これも黒刀の能力？　自動防御に、破壊の力に、吸収の力？

（これだけの力、凄まじいくらいだが。ふ、副作用も、すさまじいんだらうな……）

「俺の兄弟になるなら、勿論、そのような副作用など、魔法の万能さで解決して差し上げるのだぞ？　ようく、考えることだ……もしかしたら副作用で心臓止まっちゃうことも、あるかもよよよよ？」

「僕はお前を殺す。決めたことだ。副作用など、耐えてみせる」

「良い決意だッ！　じゃあその決意が変わってくれるように、弱気にさせてあげようウウ？　この赤い刀でお前を、だるまにして、貧弱にして、弱った所でまた決意を聞かせてもらうぞッツツみたいな！　ふへっ、それでまた混沌カオスが深まるッツツ！　ヤッタアアアアアッ！

（……マジ　チッ！）

「……てめえ、何俺の悪口思ってたよ、読んでんだぞオラアアア！」

黒刀で吸収していようが、サドの魔力は無尽蔵なのだろうか、相変わらず禍々しいほどの質量を持ってして、プレッシャーかけてくる。ぐおお、という勢いで僕の方角へと一直線に、赤刀を構えた体勢で、再接近、凶器を振り上げてくる。

(同じ事を……?)

「んなわけねえだろうがッ！」

(!)

サドの周辺で渦を巻いているばかりだったサドの魔力が可視化されたものであろう、蜃気楼が、ぐにやぐにや、と姿形を変え、赤刀と化す。その数、十本。持ち主の意志に呼応するかのように僕を取り囲み、その柄は誰にも持たれていないというのに、空气中で振り上げられる。三百六十度を取り囲まれ、計十一本の赤刀。

「死ねやアアアアッッ！」

同時に、振り下ろされる。さすがに黒刀一本でその全てを振り払えるはずは無い、のだが、しかし黒刀に宿っている能力は自動防御、破壊の力、吸収の力、だけではなかった。まだ力は隠されていて、それが人面瘤の意思によって発露される……！

(鉄壁の守り、か……?)

「て、てめえ……本当に人を怒らせるのがお上手だなア……小細工……小賢しい……」

亀の甲羅に守られるが如く。

堅牢な壁がドームの形となって全方向からの振り下ろしを妨げてくれた。

盾の能力ということだろうか。

しかも、赤刀十一本がその盾によって、刀身を折ってくれた。十本全てが、キーン、と良い音を響かせながら宙に舞い、砂浜に切っ先から突き刺さったのだ。

どうやら、自動防御と吸収の力と破壊の力と盾の力、その全てが

複合されて発動されたらしかった。その証拠に、全身に力強い魔力の滾る感覚が漲っているし、その分、二メートルもあるサドが何処か小さくなって見えるように。

無尽蔵かと思えた魔力の、枯渇する気配さえ窺えた。
いける。

そう思いながらサドの方に視線を向ける。

阿修羅のような表情の彼が、両手の指先、指十本をわなわなとさせながら、血管を浮き上がらせて刺青を歪ませている。つまり、表情が異様なほどに歪と化していた。

そして、ピキ、ピキ、と何処かしらから音を立てながら、彼は僕に対して咆哮する。

「……おい。おいおいおいおいおいオイイイイイイイイイイイ
イツイイイ！ ……何で、ナンデ、何で何で、何で、勝てる
かも、とか思ってたの？ ここは魔法使いにとつてのエネルギー貯
蔵庫だぞ？ 無くなりや、注ぎ足せばいいんだよこの馬鹿がアアア
アアアア！ 殺す殺すマジでお前を殺す！ お前なんざもうイラ
ネエエエエエエエエ、今すぐに殺戮大殺戮開始ツツツ、お、
た、の、し、み、だアアアアアアアアアアツツツ！」

（黒い心臓から、無理矢理にエネルギーを引っ張り出している……
？）

サドと命の大樹に寄生している黒の心臓。

その二つが接続されたかのごとくに、塵気楼の線が、二つの間を結び上げる。ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン、ドクン。黒の心臓の音は加速し、塵気楼のゆらめきも伴って増幅している。それがサドの周囲で集束されて、より凶暴な渦巻きと化し、無尽蔵かと思える魔力の滾りがそこに復活する。復活、している。だがそれは意味の無い行動のはずだ。

先ほどまでのサドならば。怒りなどの感情を溢れさせながらも、冷静に物事や状況を判断し、その判断に基づいて行動を選択しているはず。その冷静さがあるならどうせ吸収されてしまうエネルギー

を収集、再集束させるなどという手法は、選ばないだろう。

彼はもう冷静では、無くなっている。

心の声を読まれている気配さえも止んだ。

今までの十倍は軽く超越していそうな魔力の渦を呑み込んだサドの姿は、悪魔とは、もはや違う。あれはある意味では、神、と勘違いしたくもなる姿だ。赤、青、緑、白、オレンジ、黄。六色の色鮮やかたるが彼を守るかのようにして複雑に混ざり合い、絡み合い、様々な色彩を生み出している。その色彩の洪水の中でも、彼はよく目立つ。浮き上がるように。

黒の神とでも呼べばいいだろうか。

全身を、闇よりも深い漆黒と変えて、顔の無い天使と同じようにのっぺらぼうと化しているから目も、鼻も、口も無い。ただひたすらに闇。濃厚な闇。濃密な闇。塗り潰したような漆黒。六色を纏う、闇。

音も無しに、僕のいる方角へと歩いてくる。一步ずつ、ゆっくり、ゆっくりと。

足音は聞こえない。凶器など何一つ持っていないのに、赤い刀を持っていた時の彼よりも圧倒的に怖い。恐怖、そのものだ。心を読まれていないはずなのに、勝てるのか不安にさせられる。冷静でない彼が選んだ手段の**はず**なのに、さっきはこれで勝てる、と思っていたはずなのに……。

圧倒されて、後退りして。

気が付くと、湖に足を、ひたり、とつけてしまっている。波の無い湖の**はず**なのに、砂浜に繰返し押し寄せる水の波に、靴を塗らされて、靴の中の靴下に水が染み込んだ。

怯えても、仕方がない。

水のおかげで、頭が逆に冴えた。

怯えても仕方ない。ならば、今度は、僕の方から斬り付けられたい。

僕は袖の上から人面瘤のオデコ辺りに見当をつけて、頼むぜ、と

現れる闇のような漆黒！ 塗り潰れている黒に刀の一閃を！ 闇黒闇黒闇黒。その黒に黒を叩きつけて、全てを吸い取る感覚……ぐさり！……貫いた……六色と黒色、つまり七色が僕に集束していく……。サドに集束していた七色が、僕のモノへと成っていく……。吸収に、成功した。

一息をついてから、跪いている男を見下ろす。

「終わりだな……。後は、僕がお前を、もう一度、斬るだけだ」

黒刀の切っ先を、元通りの刺青顔に戻ったサドの喉仏あたりに、向ける。

放心したような光の灯っていない、脱力した様子の彼。

「黒イナア……」

僕、のこを見上げて、そんなことを言った。

サドの魔力を吸い取った僕は、今、闇より漆黒ののっぺらぼうなのかもれない。サドから見ても、そう映っているのかもれない。

「だが、こんな魔力は僕には必要ない。お前を斬ったら、これを解放して心臓に戻してあげるだけのことさ。……覚悟は出来てるよな？ 僕はお前を、殺す」

腕に力を込める。首元辺りから彼を斬り裂く。

そう思いながらしばらく彼を見下ろしていると、一瞬のことだ、それは本当に一瞬のことだったはずだが、僕は、見た。

サドの弱々しい姿に僕の姿が重なった。

そんなはずがない。僕が黒い姿になっているから、僕が加害者のようになり、彼が被害者のようになって、そして普段から下僕という立場に追いやられ被害者とも言える僕だから、被害者である僕に僕の姿が重なったという程度のことだろう。不愉快だ。その程度のことだと言えども不愉快だ。今のは見なかったことにしよう……。こんな男と、僕自身の姿が重なるなんて……。

僕は先ほどの見間違いを完全に振り切るためにも、刀を両腕、両手で、握り締め首に標的定めて、刀を振り上げる。

そして、振り下ろそうとしたが。

「あ、うぎゃ、うがうごあだがぶ、ほあがあが、らら、あ、ぐ、
がぎゃぐ、ろろ、ろろろ、ごろろりるああ、う、うぎゃぎゃ、ほ
らがらねら、らら、あ、ぐがげ、らおがだ、がろろろろ、あ、う
ぎゃごえら、らぐど、うがやや、あ、うぎゃ、うぎゃぎゃぎゃ
「！？」

「りろ、りろろろろ、りりりりろろろ、りろ、りろろペ
ペペペペペ、りろろペええええ！」

「……りろろペ……。……ロリペロ、ロリペロが、いるのか、この
場に」

ずさつ、と背後辺りから足音。背後での気配を察知して振り向いた時には、もう飛び上がっている幼い少女の、植物に紛れるような服装をしているのが、眼前にいた。

「遅いんだよね。気が付くのが！ くらえ」

「……！」

全身が、木、みたいな奇抜な格好をしているロリペロであるが、彼女が片手に持っているのは、水晶玉、のような丸い玉。そしてその玉が、僕が吸収したばかりの魔力を奪い取り、吸い取っていく。しゅう、しゅう、しゅう。パンクした自転車から空気が漏れるかのような空しい音。しゅう、しゅう、しゅう。多大な魔力が急激に身体から抜けていくことによって発する、強烈な虚脱感が全身に走り、跪く他なくなっていく。魔力の出し入れは、肉体に負担を掛けるらしい。脳味噌中ぐるぐるになり、気分が悪くなり、身体が小刻みに震える。寒い。

何とか視線だけは、木に擬態しているつもり、実際にはお遊戯会レベルの木コスプレをしているロリペロに向ける。得意気な彼女が得意気に僕に見せ付けるようにして持っている水晶玉には、黒、赤、青、緑、オレンジ、白、黄、が渦となって右回転している。全て、抜き取られた……。

「さっすが僕！ 大事なところで大活躍しちゃう！ 大丈夫だったドリユメサ。こんな格好でだいぶ嫌だったけど、おかげで僕らの勝

ちだね」

明るい調子で得意気な様子は絶やさぬまま、木の擬態で歩き辛そうにトコ、トコ、とサドへと近づいていくロリペロ。

サドはまだ冷静さを取り戻していないのだろうか、「あ、ぎゃ、うごくぐぐ、あぎゃ……」、などと言葉にならない言葉を紡ぎ続けている。彼の場合感情が昂ぶり過ぎていた状態で急激に魔力を抜き取られた事が、精神に異常をもたらしたのかもしれない……。

今すぐにも二人を黒刀で斬りたい所だが、僕も魔力を急激に吸い取られたことで虚脱状態みたいなことになっている。ああいう便利な球体があるのだから、やはり魔法という文明は便利な代物だ……。殺せると思ったのに、邪魔された……。あと少しだったのに……。

拳を地面に叩き付ける気力も今は無い。黒い霧もいつ消えてしまふかわからない。急がなければいけないが、焦っても身体に力は戻ってこないらしかった。もしかしたら副作用も併発してきたのかもしれない。だとしたらもう負けだ。……だが、僕もこのような状態だが、サドの様子もひどい。故に、まだ勝機はあるかもしれない。「ねえ、大丈夫？ 魔力を再注入して平気かな……。叩けば治るって訳でもなさそうだし……。ポンコツみたいになってる……。ちよつと、しつかりしてよ……。あ、ちよつと、危ない……。お、落ち着いて……。」「あ、うがくごごご、ふやごふふつふ」「魔力を抜き取られるだけでこんなことになるだなんて……。精神が乱れすぎて。その男が悪いんだね。その下僕のせいでこんなことに。仕方ない、僕が代わりにやるしかないね。この男、うざいよね」

(うわ、まじかよ)

「お前も急激に魔力を身体から吸い取られて動けないみたいだね。逃げ場はないね。僕から逃げる術はお前には無いよ。ドリユメサの代わりに、僕がお前に刃を突き立てる。死を、選ばせてあげる」

お遊戯会の木、のコスプレをしている彼女が、トコ、トコ、とやはり歩きづらそうにしながら迫ってくる。随分と阿呆らしい光景で

はあつたが、空气中に十字を切つて斧を片手に携えた彼女の瞳には、確かな殺意が込められている。

斧はわざとなまぐらのように錆びていて、振り下ろされたら錆が傷口にひどく染みそう。そんなことを思っている場合ではない、斧が、振り下ろされる。

ガキンッ。

自動防御はまだ働いてくれたが、働いてくれたのは自動防御だけだったように感じる。黒刀の力が弱まってきている。盾が発動されなかったし、吸収もしてくれない。破壊の力などという強い力も感じる事が出来ない……。

そして今、振り下ろされた斧を何とか受け止めてくれたが、その衝撃で刀が。

折れた。真つ二つに。弾け跳ぶ刃。二つに分かれた。

終わった、としかもう思えない。見上げれば身長の小さいはずのロリペロに、見下ろされている。殺意の籠っている瞳が、僕を見下ろしている、彼女は白い歯を見せて微笑んでいる。木のコスプレをしているのだけが滑稽だが、笑えやしない。斧がもう一度振り上げられる。

生存本能という奴で、逃げてもどうしようもないはずなのに、折れた黒刀を杖代わりにして僕は必死に後退りをする。身体が上手く動かないから後退りすら上手にはいかないが、木のコスプレをしているせいで動き辛いロリペロから振り下ろされる斧の、一撃を、交わすことは出来た。彼女の斧の刃は、砂浜に振り下ろされた。

だが彼女は微笑んだまま、トコ、トコ、とゆっくりと僕に近づいてくる。木のコスプレが滑稽に見えていたのに、どんどん、その姿形すら恐ろしく見えてくるから不思議だ。僕はわずかに取り戻してきた力で、巾着袋に手を突っ込み、手当たり次第でグミを食べさせた。人面瘤の膨らみはもはやほとんど失われていて、顔すら僕から見えかかっていたが、口はまだ残っている。無理矢理にそれを食べさせて、『反発』、でロリペロを吹き飛ばす。格好のおかげか、呆

気なくロリペロはやるせなさそうに吹き飛んでくれて、時間稼ぎにはなる。血。ずぶしゃあ。新たに出した刀には、もう何色の霧も纏われていない。血を付着させたただの一本の刀に過ぎなかった。だが折れた刀よりはマシだと思っしかない。トコ、トコとゆっくりとロリペロは斧を持ったまま僕に近づいてきている。杖代わりにして刀を支えにして僕は、何とか、立ち上がることが出来た。もうそれだけで精一杯だ。立つことしか出来ない。もう戦う力は残っていない。だが、それでも、立つたまま死のうと思った。

「逃げないの、ねえ、逃げないの？」

ロリペロがそんなことを尋ねてくるので、

「逃げないよ」

と答えた。そう、と素っ気無い返事をしてきて、

「じゃあ、これでオシマイ」

と再び斧が振り上げられる。歪な顔つき。白い歯を見せている微笑み。動き辛そうにしながらも、しっかりと斧は振り上げられている。

僕は目を閉じないでいた。閉じないで殺されようと、全身ががくがく震えるがそうしようと思えば彼女の表情や動きなどを眺めていた。その背景にある命の大樹の太い幹や、根、それに寄生する黒い心臓のことも。霧まとう景色。空に浮かぶ繁栄の三日月からの照射。それに照らされる砂浜や青紫色の結晶らしき、そして僕やロリペロ…そして、サド？サドの気配がどんどん膨れ上がっている。ロリペロの背後に忍び寄ってきている、『大きな口』。怪物のような姿のそれは、だがその口周りに刺青ばかりが彫られていることからサドだとわかる。迫ってきている。恐ろしいスピードで。何も躊躇していなさそうな速度で。

「お、おい、後ろ……!!」

「はあ？ 何を古典的な……」

「ち、違う……」

「？」

僕があまりに緊迫した様子で言うので信じたらしく、ロリペロは背後に振り返る。

その時点ではもう、『大きな口』は彼女に向って口を開いていた。大きく、大きく。

「……………ひ……………や……………つ……………」

彼女が悲鳴を上げる暇もなかった。『大きな口』が木のコスプレをしている彼女の天辺から覆いかぶさって、足元まで一瞬にして呑み込んだ。何の間も無しに、水晶玉や斧なども全てひっくるめて丸ごと、一息で、それは彼女を呑み込んだ。咀嚼もなく、何の騒がしさもなく、一瞬で、本当に一瞬で、ロリペロはサドに。いや、怪物に。大きな口に呑み込まれた。

怪物の変化はすぐに始まった。ぐ、ぎゃ、る、ごご、あぎゃ、ぐごと。様子がおかしかつたサドの呟いていたような言葉にならない言葉が怪物より発せられながら、関節がごき、ごき、と鳴らすような音、腹がぐるると空いたことを示すような音、そういつた音が鳴るに伴って『大きな口』そのものであった怪物は小さく纏まって行き、形を構成し、骨格を構成し、皮膚を構成していき、やがて人の形へと戻る。その人の姿とは紛れもなくサドその人であり、二メートルある身長と華奢な体型もそのままだ。そして精神状態も落ち着いているように見えるし、身体も自由に動かせるらしくて手をグー、パー、したり、首を左右にゴキゴキと動かしたりしている。

仲間じゃなかったのだろうか。仲間だったはずだ。旧制部隊アンシャン・レジムの隊長と副隊長という間柄で、何年一緒だったのかは知らないが、共に戦ったこともあったはずだ、今だって、彼女に助けてもらったからこの男は命を救われたのではないのか。それが今、その彼女を使って、この男は魔力も取り戻した上に精神も安定させて、平然とした顔つきで僕を眺めている。

「仕方が無いだろう、これが混沌カオスってことだよ。……………ねっ？」

僕の思考をまた、読んでいる。

こんな奴に負けたくはなかった。こんな奴を世の中に放ってはい

けないはずだ。だが力がもう無い。新しい人面瘤を、なんていう風に自由に替えが利くことではないし、僕自身の身体自体がもう限界だ。悔しい。単純に、悔しい。こんな奴に負けるのだ。こんな奴に……。

「さア、じゃあ、コロサレヨウカア？ もうイヤア。面倒臭い、カラ」

十字が切られ、彼の手に再び赤刀が出現する。もはや僕にできることは、先延ばしだけだ。

「お前さ、こんな簡単に終わりにしちゃっていいわけ？ 何百年も前から過去の僕を待っていたんだろ？ だったら、さ、こんな簡単に首を撥ねて殺したら、感慨が深まらないんじゃないの？ しかもこんなに弱っちい状態の僕にさ」

思考が読まれているのだから時間を先延ばしにするという僕の意図も読まれているはずだった。だが案外なことに、サドは納得したような様子を見せる。

何事か思慮するかのように顎に手を置き、何かを閃いたのかパツと表情が明るくなる。

「たしかにそうかもしれないア。そうだな。じゃあ俺、この砂浜、命の大樹の周辺をさ、ちよつと散歩してくるわ。その間、俺自身でも過去とか振り返ってさあ、ほら、俺の心の中で生きているリロロペとも会話して楽しもうかなとも思うし。たしかに、過去のお前を俺はずっと待っていた。そんな相手を簡単に殺しちゃうのはたしかに興の冷めること。大体、この大樹周辺を一周するのに掛かる時間は、八分間って所か。思考も読まないでおいてやるよ。どうせ俺の勝ちはもうゆるがない。そんな老人よりも力無さげに、ギリギリようやく立っているだけの男相手なら、もうどうしたって勝てる。じゃあ、俺はちよつと散歩だ。せいぜい八分間、これまでの人生振り返っておけよ。何処で選択を間違っていたのだろうか、ってさア。ヒヒッ」

不敵な笑いを発しながら、そして身体を変な感じで痙攣させなが

ら。

サドは僕に背を向けると、手を振りながら向こう側へと歩いていった。本当に散歩をするつもりしかつた。思考を読まないというのも本当らしく、読まれている感じ、覗かれている感じ、が消失。僕は砂浜の中で一人、杖代わりの刀を地面に突き刺したまま、呆然と、しかし命が残り八分間という事実だけを認識し、景色を見渡した。ボートの方を見てみるが、ウヨクとドナドナは眠っているまもらしい。二人の影は、霧を纏いつつ、動かない。

空を見上げれば、三日月が丁度、どくんどくと鼓動している黒い心臓に、重なるうとしていいる。心臓にめり込んで行くようにして、戦いの前の時よりも、三日月はわずかに位置を移っている。霧と雲の判別が付けづらいほどに、湖の上空は曇っているが、命の大樹の周辺だけは本当に晴れていて、雲も霧もない。だから心臓のどくんどくんとという鼓動によって、筋繊維が、びく、びくと動いているのがここからでも、よく見える。

視線を下げれば砂浜。根っこがいたるところに張り巡らされている、砂浜。湖の波が、海のごとくに押し寄せているのが不思議。貝殻がそこら辺に、落ちているが、魔法の影響だろうか、どの貝殻も模様が奇抜かつ、奇妙。綺麗でもあり、違和感があるものもある。そんな砂浜で一人、立つことしかできない。

屍に落ちる寸前の、衰弱しきった老人のように。

過去を振り返り涙を流し、処刑の時を待つ八分間など、辛いだけかとも思うが、なかなかどうして、こうして死ぬんだと実感しながら景色を見渡すと、ここが天国なのではという錯覚が生じてきて、それが気持ち良い。

「……死ぬ寸前にだけ見える景色、ってことかな……はは、なんか笑える……」

黄泉への導き。

そんな言葉を浮べながらぼやんとして、思い出してみるのには下僕として旅してきたこと。ウヨクやドナドナ、そして犬少年。この世

界に来てからのこと。仮面の人がいた無限牢獄から出て、乙として甲を歩き、テスタ兄妹に湖のことを教えてもらい、ナラクの館で世界について教わり、顔の無い天使と対峙した……。そこから先、駆け抜けるようにして日々を送って。

今はここで、残り五分間程度であろう命の鼓動を、どくん、どくん、と鳴らしながら立っている。

犬少年の亡骸が散らばっている方角に顔を向けると、彼の死骸がわずかに転がっているままなのが見える。首が無くなっている彼。

彼の記憶は僕の中に流れ込んで、ああ、そうだ、僕が死んでしまつたら彼の記憶も失われてしまう。何とかしたいが、もう、どうしようもない。魔力もないし、人面瘤だって失われて、僕はただの下僕だ。人間だ。たった一人の、力を持たない何処にでもいる人間の内の一人だ。

それが僕だ。

犬少年の記憶を掘り起こすように探ってみる。せめて彼の記憶を眺めてあげなければ、彼の死に報いることにならないような気がした。犬少年は新しい犬少年として復活しても、それはもうここまでみんなと旅をした犬少年ではないから。過去の僕が、多分僕ではないように。

過去の僕。それが殺した人々。それは互いに殺し合いをする前提であったから許される殺人であつただろうか。命を奪ったことは事実だ。だから今の僕も、過去の僕が命を奪ったことを、思い続けなければいけないだろうか。まあ、残り命も、数分しかないけれど。

サドの姿が大樹の、彼が歩いていった方角とは反対の側から、見えてきた。本当に命の大樹の外周を周ってきたようだ。彼の姿を眺めながら、僕は残り時間を使って犬少年の記憶を眺めていることにした。僕は僕の過去を覗き込むことが、やはり辛いし、これが僕だとは認められない。だから犬少年の記憶を覗きたいと思うのかも知れない。そうすれば自分のことから離れられるし、犬少年の死に報いることにもなる気がして、そしてそれは過去の僕が殺した人々

に対する死にも報いる行為のような気が、するから。

(……………?)

そして、その途中で。

僕は、その記憶から、一つの情報を。

掬い取った。

慌てて僕は懐に手を入れて、『ソレ』が今も胸ポケットの中に含まれているかを探してみる。

捕まった時に回収されている可能性もあつた。だが、特に『ソレ』は、戦いに関係する代物ではないはず。ならば、残っている可能性は高い。

……………あつた。……………ある。

犬少年の記憶から引つ張り出された情報が正しいならば。

これは。ここに入っている代物は。

僕は空を見上げる。繁栄の三日月が丁度、黒の心臓に重なっているせいで、見えない。見える位置に移動しなければならない。だが、サドから見て僕の姿はもう映っている。怪しまれないように、慎重に移動しなければならぬ。思考を読まれた瞬間、アウトだ。もう僕はこれのことだけで頭が一杯になってしまった。おそらく唯一の僕の命が救われる策。今まで気がつかなかった手法。ただ月が見えなければ駄目だ。丁度、月が、黒い心臓に重なってしまっている。時間を稼がなければ……………時間、時間さえ過ぎれば……………。三日月がハッキリと見えるようにさえなれば……………！

「よう、どんな八分間だったよオ？ 楽しい時間だったかナア？

それとも辛い時間だったかナア？」

話しかけてくるサドの表情には、勝利を確信している者の油断が見受けられる。頬が緩んでいて、笑いを噛み殺している。思考は読まれていない。まだいける。三日月はまだ見えない……………！

幸運なことに、彼からぺちやくちや喋って、時間を稼いでくれている。彼はそんなつもりはないのだろうが。

「俺もさア、散歩しながら色々思ったんだア……………リロロペに意見を

聞いたりもしながらさ。この世の中はどうあるべきか。そういう話だ。お前は どう思うよ？ この世の様々な理不尽や、不平等。俺たちがこうやって話し合っている間にも、誰かが死んで、誰かが誕生している。お前が死に怯える恐怖を体験している間にも、誰かが幸せで満ち溢れていて、お前の不幸など誰も感知してくれない。なあ、この世つてのは本当に不思議だよなあ？ そう思うだろう、お前もサア？」

時間稼ぎに乗らない手はない。

三日月のせいで気が散るが、会話をしなければ怪しまれる。

「……というか、世の中はそういうものだったのは、受け入れるしかないことだと僕は思うな。……そうしなければ、今のこの状況だつて、受け入れられやしない」

「ハハハツツ！ ソレモソウカア！ それって何だか可哀想だけど、でも仕方がないよねエ？ お前は立派だよ、ご・立・派ツ！

素晴らしいナア。やっぱり昔、あれだけすごい狂人だったことはあるよツ！ お前は時を経て、世界を越えて、ご立派な常人になったんだアアア！ 羨ましいナア、でも退屈だナア？ やっぱり常人にはア、狂人のことは分からないだあねえ。俺はお前に理解してもらえると 思っていたのに。この常人ばかりの退屈な世界を、お前と共に混沌で塗りたくりたかったのに……アアア、ナントイウコトデショー！ 狂人は、常人になつてしまつたア！ 人面瘤に悪の気を吸い取られちゃつたのかナア？ 良い成分を貰つて、立派な脳味噌になつたんだねエ……アアアだから退屈を受け入れることが出来るんだアアア！ アーアーずるいずるいずるい！ 俺もそんな人間になればサア、こんなに脳味噌の中で苦しむこたア無かつただろうにヨオ！」

無茶苦茶なことを言っている。相変わらずの自己中だ。

「お前が苦しいから、常人が自分よりも世界を受け入れて退屈を凌いでいる姿が、羨ましくて、お前は常人が妬ましくて、殺すのか？ 苦しめたく思うのか？ お前が狂人か常人かは僕にはわからない

が、常人も狂人も結局どつちも、人じゃないか。そんなこと、簡単に分かれることのはずなのに、お前は自我に苦しめられてるのが自分だけだとして認識できないんだな……！ 可哀想な、奴だな……！

思わず出てしまった挑発的な言葉で、しまった、と思う。三日月はあと少し。

怒らせて殺されてしまふかと思ったが、サドの精神は落ち着いている。

「死を前にすると、悟りを開くものなのかな。ヒヒツ。可哀想？

俺が、可哀想？ 哀れんでくれるんですねエ……優しいですねエ……

……でも、そんな優しさがあったって、世の中の中じゃ、そんなもんゴミ以下の価値しかネエ。ヒヒツ」

「それはお前の価値観に過ぎない。何がゴミで何がゴミじゃないか、お前に全部判別できると思うなよな」

「でもサア、ゴミってあるよ？ 本物のゴミってあるよねエ？ 自

他共に認めるゴミって奴、あるよネエ？ みんな気が付いているん

だよ、本当はサア。それは、人間様だ……人間様は、ゴミクズの集

合体のゴキブリより厄介な命のしぶとい糞つたれ以下の味噌つかすだろうが、アアツツツ！？」

（興奮してきたな。まずいか）

三日月はまだ。

「お前はこの世界にやってきてから、どんな目に遭ったのか思い出してみるヤア！ 理不尽だっただろうが、不平等だっただろうがア？ おうおう可哀想にナア。下僕とか言われちゃう立場に、否応なくさせられてしまって、自他共に認める下僕と化して他国に使者として出されて、呆気なく捕まっちゃって、この国で俺に散々な目に遭わせられたナア？ 見たくもない、せつかく忘れていた苦々しい過去を見せられて、血、臓器、負、それをその脳味噌一つで享受して気も狂わず、理性を保つてご立派な言葉をツラツラと悟ったかのように抜かす。ああ。アアア、ご立派だよ本当にお前はご立派だア

！ その受身体質！ 何で世界の理不尽を受け入れる馬鹿で阿呆で
糟な脳味噌で世の中を生きることが出来る？ さあ、答えてみ
ろよ。お前は どうして 生きて いるんだ？ お前は下僕にされて、先
にこの世界に生まれた力ある者に捨て駒のように使われているに過
ぎないじゃないか。そんなお前が生きる理由を、答えられるなら答
えてみるよ。お馬鹿な回答を、答えてくれよオオオ！」

三日月が遂に、黒の心臓を通り抜けて、その姿を僕の眼前に現し
たのが、照射のおかげでわかった。サドが照らされて、僕が照らさ
れて、砂浜が照らされて、犬少年の亡骸や、ウヨクやドナドナの眠
っているにも照らされた。月明かり。月明かりが、僕らを照らす。

僕は、懐からナラクの館で渡されたあの、純金製の月のタロット
カードを取り出した。

「お前、そりゃあ、お前を下僕たらしめる証じゃねえか。そんなも
ん取り出して、僕はやっぱり下僕ですとでも言うつもりかよ。失笑
モノだぜ、そりゃあ！」

サドが勝手に人差し指を突き出して大笑いしている。やはり彼は
知らない。月のタロットカードは僕を下僕たらしめるために渡され
た証などではない。

「違う」

と簡潔に否定してから、することはタロットカードを三日月に重
ねて、唱える言葉は、犬少年の記憶から掬い取れば呟くことが出来
る。

「僕らに繁栄永久に降り注ぐ」

月の光線が一本の線となって集束されていく。

世界が真っ暗になる。

月明かりによって見えていた全てが黒く染まっていく。砂浜も心

臓も大樹も僕もサドもウヨクもドナドナも犬少年の亡骸も青紫色の結晶らしきも、全てから光が失われて、そして失われた光は一箇所に集中して一つの線、つまり直線となって月のタロットカードと三日月を繋ぐ。

そのタロットカードを持つ僕自身と、僕の標的であるサド。

その二人だけが暗闇の世界の中、浮かび上がっている。だから僕は、彼を斬ることが出来る。

「ヤ、ヤメロ。ナンダそれはア……。俺はそんな力で殺されるような存在じゃないんだ。そしてこんな形で生を終える輩でもないんだ。俺はまだ生きるんだ、生きて生きて生きて、全てを混沌カオスに追いやらなくチャイケナイノニ、ナンデお前なんか……。！ ヤメロ……。ヤ、ヤメロ……」

「僕の回答は、お前を殺す、だ。そして僕は僕の意志と、甲の意志に沿って、生きていく。この世界にやって来て、確かに僕は下僕として、良い思いばかりはしなかった。特にお前に捕らえられてからは最悪だったよ。僕は、お前を殺す」

「イ、一緒ニ、世界ヲ、ぶち壊そうぜエ、同類」

「イヤだね」

繁栄の三日月より捧げられる永久に伸び行く、天を衝くが如き塔のような。

月とカードで結ばれた一本の繁栄を示す剣で。

人間を袈裟切りにし、斬り殺した。

虚脱に襲い掛かれて、立っていられなくなり、砂浜に横たわる。全身全霊を尽くしたという感覚がある。仰向けになって夜空を仰ぐと、心臓の筋繊維をびく、びくとしている様や、光を取り戻した風景、ハッキリと綺麗に見える星空。

「やったよ」

呟いてみるその声は耳によく響く。だから何度か繰り返す。やったよ、やったよ、やったよ。

握り締めている純金製の月のタロットカードには『下僕 テンガ』と裏面に書かれている。元々の目的である革命を為せたとは言えないだろうが、おそらく、これでいいんだと感じれる。やることはもうやった。僕の役割も。あの男を殺しただけで。

どうにしろ、副作用で死ぬような予感もある。破壊の力を己の身に宿したのだ。もしかすると自身がその破壊の力に吞まれて、死ぬ可能性もあるかもしれない。

ゆっくりと息を吸い込んで、肺に酸素が凝縮したのを感じてから、ゆっくりと吐き出す。それを二、三回繰り返すと少し気分が落ち着く。その状態のまましばらく動かないで、砂が背中に張り付く感じが少しムズ痒い。また息を吸って、そして吐く。

サドを殺した瞬間に、僕は僕の過去を斬ったのだと、思えた。不思議なことだけれども、そう感じた。ある意味では、自分が直視したくない僕自身の過去、それと僕は対峙している気分でも、あったのかもしれない。だからあれほど、殺さなければいけない、と思えたのかもしれない。僕の姿がサドに重なって見えたのも、そういうことかもしれない。

とにかく、終わった。

魔力の込められている、月のタロットカードのおかげで。何でナ

ラクがこのようなカードを持っていたのかは、わからないが、犬少年が発する前にナラクにカードのことを教えてもらっている記憶が残っていたおかげで、僕は勝てた。

まるで、こうなることが前提であったかのように、奇跡的な勝ちだったと思える。タロットカードに気が付きさえしなければ、間違いないく殺されていたのは僕だったはず。

「ほんと、感謝だな」

そんなことを呑気に呟きながら、純金製タロットカードの、その描かれている月を、眺める。繁栄の三日月を模し、描かれている三日月。

突如として、金が光を反射させるのとはまた別な、強烈な光がそのカードに描かれている三日月より発される。うわっ、と思わず叫びながら、眩しいので袖で目を隠し、それでも眩しいので、純金製のタロットカードを、思わずそこら辺に放り投げる。

光と共に、やがて聞こえてきたのは、声。

それは老婆の声。タロットカードを僕に託した、下僕の僕の主である者の、声。

「よくやってくれたな。長旅、ご苦労だった。お前たちのおかげで、私の目標は達成される。ウヨクを中心にして、私の計画はすべて順調に進んでくれたらしい。遠くから見ている、ハラハラさせてくれる場面も何度もあったが、まあ、大体が想像通り。あのドリユメサという男がお前の過去の姿を求めることも、犬少年の記憶がお前に行き渡ることも、そして最期に、たっぷりと魔力を貯め込んだタロットカードを使って、あの男を殺すこともな」

光が止む。

袖を目から離し、視線を声のする方へと向ければ、たしかにそこにいる。

幻ではない。ナラクという老婆そのものが、砂浜の上で立っている。純金製の月のタロットカードから現れたようにしか見えない。魔法で？と、タロットカードの中に隠れていたとでも言うのだ

るうか？

「そんなわけがないだろう。この月のタロットカードを利用してここに身体転移を行ったのだよ。よくやってくれた下僕よ。全ての事は、確率は高くは無かったが、上手く運んでくれた。ウヨクという命を顧みぬ勇敢な魔法使いと共に、下僕がどこまで活躍してくれるものかとドキドキしていたが、ああ、まさかここまでやってくれるとは思わなかったよ。命の大樹の在り処や、魔法エネルギーの源がこのように黒い心臓であり寄生していること、それだけではなく旧制部隊の要である隊長と副隊長まで始末してくれたのだ。失われたのは消耗品である犬少年の命くらいのもの。下僕よ、そなたには褒美をやらねばならぬ。活躍したものには、褒美、だ」

老婆は僕の心を読んだ。

魔法を使えると言っていたな確かに。だが、心まで読めるなら、もう魔法使いとしての能力は随分と高いんじゃないのか、この老婆は。

「まあな。かつて私は魔法使いの国にいた男と愛し合った時に、彼から魔法の力を教授してもらったのよ。本来そういったことは魔法使いの国に住む者としては禁忌らしいが、まあ、そういうことは私と彼の間には関係が無かった。……もう、その彼も死んでしまったがね」

（彼……僕がああ過去のような幻のような空間で身体に入った、最期を洞窟の中で迎えた、あの男、か）

「今、何て思った？」

「あ」

ナラクの気配が怒気を纏ってこちらに迫ってきた。そして仰向けで倒れている僕を魔法の力で宙に浮かすと、襟を掴んでくる。

「彼の最期を見た？ 彼の死ぬ時をお前が知っている？ どういうことだ。魔法の力でそれを見たのか？」

「僕にもよくわからないんですよ！」

「よくわからなかるうが、知っていることは洗いざらい喋れ！ そ

れで、彼は最期の時、何て言っていた？ 何と喋っていた？ 彼が矢で貫かれて死んだということは知っている。彼は死ぬ間際、何を思い、何を願い、何を考え、息絶える時にどんな思いでいたというのだ？ 知っていることを今すぐに話せ」

「さようなら、と言っておりました」

「……………なるほど、なるほど、なるほど、なるほど、なるほどなるほどなるほど」

ナラクは、なるほど、と言いながら時折クススと笑いつつ、僕を手離す。僕は立つてもいられないので地面に突っ伏するが、そのことに気が付きもしない様子で、ナラクはクススと笑いながら、しかし何と言えはいいのだろう、嬉しそうでもあった。そう、見える。

「アノ人らしい！ 随分とアノ人らしいよ！ ああ下僕よ、そなたには本当に感謝しているよ！ おかげさまで、お前たちの働きのおかげで、……………ああ、丁度、ウヨクが目覚めたようだ」

「……………ウヨク、起きた？」

サドが死んだおかげで彼女に掛けられていた魔法が解けたということだろうか。

だが、ならばドナドナも目覚めるはずだが、ドナドナはボートで寝ているままだ。僕は何かに違和感を持つ。何処かが不自然じゃないのか？このまま寝そべっている場合なのか？何かに焦らなければ行けないのではないか？

ただまったく状況が理解できない。ナラクが月のタロットカードを利用してこの場に現れただけでも、驚くことしか出来なかったのだ。場に流される他ない。

しばらく、僕には聞こえない程度の音量で、二人が二人だけで何かを小言で打ち合わせているのが、ひそ、ひそ、と少し遠い位置より聞こえる。が、聞こえるだけでその内容とかまでは、聞き取れない。丁度良い塩梅で、二人は秘密の打ち合わせをしているのだ。

だが状況は、大きく転ずる。

ウヨクが、口笛を吹いた。ヒュー、ヒューと。

すると霧の中から 顔の無い天使 が、一体、現れた。いや、ウヨクの命令に従っている所から見て、あれは 飼われ天使 と見て間違いないだろう。そしてウヨクは一体の 飼われ天使 を引き連れて、何処に向うのかと思えば、青紫色の結晶らしきの目前であった。

嫌な予感が、より高まる。僕はこの時になってようやく、ナラクの過去の中で、彼女が天蓋付きのベッドで呟いていた独り言のことを思い出す。

『壊れてしまえばいい……壊れてしまえばいい……壊れてしまえばいい』

そしてウヨクの言葉も。

『私、一人でやってみせるからね』

それらの言葉の意味は、革命を起こして既存の世界を変えていくという意味ではなく、ただ単に世の中をめちゃくちゃにしたいということ？

それではサドと変わらない。僕がたった今殺して、今は砂浜へちやりと倒れた男と、ほとんど変わらないじゃないか。

「……や、やめる……」

声を張り上げたかと思うが、叫ぶほどの声量になつてくれない。

ナラクとウヨクが青紫色の結晶らしきの前で、互いに示し合わせたように顔を見合わせ、満面の微笑みを湛えている。そして彼女らは、飼われ天使 に指示を出した。

『壊せ』

と。

「ありがとうテンガ。旅は楽しかったよ。それは本当。私が嘘を付いていたのは、目的。私はナラク様と志を共にする者。本当に革命を志す者だったら、きつと、もつと念入りな準備や、大勢の仲間を引き連れたり、するものだよ。私がしたかったのは、はじめっからこれ。魔法使いの国でかつて生じた内乱の生き残り。そしてその内乱を起こした者たちの目的は、魔法使いの国を破壊することに他ならなかった。こうやって結晶^{コクリ}を壊すことで、国だけじゃなくて全世界が壊れてしまうのかもしれないけど、でも、チャンスはきつとこれが最初で最後だから」

「だ、だったら、心臓だけを壊せばいい。大樹を壊す必要はどこにも、ない」

「大元である大樹を壊さなきゃどうしようもないの。そうしなきゃ、また大樹に心臓は寄生してしまうものだから。心臓は何度でも甦る。大元を断たない限り。なんでもそう。大元を断たなくちゃ、どうしようもない。……だからテンガ、嘘付いていてゴメンなさいね。そして、ここでお別れ。あなたを助けることは出来ない。破壊の力に押し潰されてしまうから……。せめて、安らかに、眠ってね……」

無理矢理に、ポートに、乗せられた。

ウヨクは寂しそうな表情をしている。自分の目標を達成したはずなのに、ポートの上から見える彼女の表情は、どう見ても暗い。闇よりも暗い。ナラクだってそうだ。

あの二人は、幸せそうには見えない。

ずっと彼女ら二人は、僕らのポートが湖へと突き進んでいくのを、ぼんやりとした、悲しそうな表情で、戦争に行く人を見送る人のよくなやるせなさで、眺めているように見える。或いは無人島で取り残されてしまった人、が最後の助けをぼんやりと見送っているよう

にも。

例えば、どうしたら彼女らは救われただろうか。

或いは、どうしていたらこのような結果は導かれなかっただろうか。

ウヨクは大元を断たなければ結局、駄目、と言っていた。

大元とは何なのだろうか。何が原因で、人の行く先は別れてしまうものなのだろうか。

サドが言っていた。不平等だと。理不尽だと。そして僕が不幸な時にも、誰かは幸せを感じているだろうし、その逆も有り得ると。万人に幸福は行き渡らない。また、不幸も。

だがそれは、そういうものと受け入れるしかないはずだ。

幸福も不幸も、それは、人によって差があることも、受け入れるしかない部分は、あるはずだ。

理不尽だろうが不平等だろうが、僕らはまた明日を迎えるし、或いは僕なんかは副作用によって明日の太陽を拝めないかもしれない死ぬ、かもしれない。

でもそんなこと知る由もなく、他の大勢の人々は、まあ今から世界は命の大樹の結晶コヲが壊されたことによって、混沌カオスへと転じていくのかもしれないが、僕が死ぬことなど知りもしないし、わかりたくもないだろう。

それは全ての人間がそういうものだ。人間は、そういうものだ、という、性質みたいな、格好良くいうと業、みたいな、そういうのをたくさん抱えて、今日も生きていくしか。死ぬ時に死ぬしか、ないのならば、だったらそれを受け入れて、大勢を巻き込まないように自分の人生を歩んでいくしかないんじゃないのか。

今、湖の上空に一本の、黒い光を帯びた粒子、がキラキラと天へと舞っている。アレは結晶コヲが破壊された瞬間に心臓から発された、どこか不吉な吉兆も持っている粒子だ。世界の湖が枯渇していく証だ。これから人々は再生されない。再生されないうまま 顔の無い天使 に殺され、魔法によって逃れるという術も持てず、おそらく、

全滅するだろう。人間は。

サドは喜んでいられるだろうか。あいつがゴミだと評した人間たちは、これから全てがぶち殺されて、壊されて、滅んでいく。混沌カオスの中に身を投じていく。

そしてまだ霧に包まれて夜明け前のような様子の湖の表面で、僕はボートに乗ったまま、全身が氷のように冷たくなってきているのがわかる。多分、もうすぐ死ぬのだと思う。身体があまり動かなくなってきたし、全身が気だるいし、なのにごどこか幸せな感じがする。死ぬんだ、と呑気に思ったりする。

ふと、隣で寝ているドナドナに声を掛けてみた。

「おい、起きろよ」

でも彼は起きない。眠りこけたままだ。呑気なものだ。恩を返すとか言っていた癖に、こうやって僕が死ぬ時になっても彼は眠りかけている。

だが、起きてこられても、もう僕は副作用のせいかなのか、とにかく肌寒いし、自分自身でこれは死ぬなと理解できてもいる。受け入れてもいる。だから、死ぬのだろうと思う。

眼を瞑る。黄金の粒子が見える。

甲のことを思う。乙である自身の感覚が薄れていくのを感知する。血が薄くなっていくのも。

犬少年の記憶が失われようとしている。ああ、そうだ、と思いついて、ドナドナに犬少年の記憶が移ってくれと念じてみる。実際に移ってくれたかはわからないが、ドナドナは一瞬、眉を潜めたような気がするから、成功したかもしれない。安心したので、もう一度目を瞑り、黄金の粒子に意識を放る。何年間、この黄金の粒子を眺めてきたことだろう。何回、この粒子を眺めてきた事だろう。だが今、その黄金の粒子の流れるような粒たちの数が、少なくなっているのがわかる。きつとこの粒は生命としての奔流とかそういうことで、今ここで身体が冷えているから、数が減少してきているのかもしれない。

そのことが空しく感じられ、つらいので、目を開けてみると、驚くべきことに視力がほとんど失われていた。さっきまでドナドナの表情、眉を潜める、などの部分も見えたのに、いまやそれが見えない。ドナドナの顔が曇ってみえて、歪んでいる。自分の手を見てみようかと思っただけ、手の輪郭さえもぼやけてしまっている。眼鏡が必要だな、と漠然としたことを思ってみてから、もう死ぬのだからいいか、とも思い直した。

最期の時が近づいてきている感覚に気が付く。全ての、甲を感じるための五感、つまり生きるための能力が失われていくのを感じずる。

全てが閉じていく。僕の脳味噌が閉じていく？外からの情報が失われて、真っ暗い空間に自分が落ちていくような感覚。そこは目で見ているのでも、耳で聞いているのでも、鼻で嗅いでいるのでも、舌で味わっているのでも、指で触っているのでもない。でも、ある。第六感？不思議な話。

そこは暗闇。だがサドが発していたような気配の暗闇ではない。暗黒ではない。

この閉じた世界で。閉じた空間で。

だがそこに、いる。

要は、それは綺麗な声を発していた正体なのだとして理解するのは簡単だった。

後姿が、どのような代物なのか、よく表現しづらい。モノクロのような、全てが混ざり込んでいるような、でもそこに在る。後姿だとわかるのだから、一応、形を持っている存在なのだろう。

声を掛けてみる。実際に声が発せた訳ではないが、後姿はそれに反応し、こちらに振り向いた。

相変わらず、後姿の時と同じで、全てが混ざり込んでいて、モノクロであるようなのに、色がごちゃごちゃしているようでもあって、形が在るのだとかるうじてわかるような存在。

何をどうすればいいかわからない。綺麗な声を持っていたのはそ

の存在だと、考えるまでもなく理解できるのに、どう振舞えばいいのか、は良くわからない。ごちゃごちゃ。ぐちゃぐちゃ。それは脳内のことか。脳の外のことなのか、もうその区別すらない。閉じたからだ、と僕は気が付いたが、僕はもう僕である必要もない。閉じられたこの場所にはもう甲も乙もない。ただその存在がごちゃごちゃと存在していて、たった今、こちらに振り向いた。

自身もごちゃごちゃになっていると気が付く。

線と線が入り混じって混雑したノイズとなっていてるかのような自身と、あの存在とでもう位置の把握もなくなり、彼我という関係性すら失われる。ズズズ、と脳内でも脳外でもないとしたらここは何処なのか？五感で理解しているのでもないのなら、何なのか。

だが、言葉が走った。

その存在から放たれたのか、或いは、自身が言ったのか、それはもうどうでもいいことで、わからなくてもいいことだろう。とにかく、言葉は放たれてそれはこういう言葉だった。

「生きてる」

何てことは無い当然の言葉だ。大きな声で笑いたくなくなってしまふ。笑い飛ばしたくなってしまふ。結局こんな言葉で落ち着く。この闇の中でもうぐちゃぐちゃになった自身で、綺麗な声のその存在が姿を現し、向かい合い、距離がなくなり、そして発された言葉は当然にも程がある一言に過ぎないのに、でも何でこんなにも的を得ているのだろう。大切なのだろう。重要なのだろう。

「ああ、生きてるよ」

返せる言葉もこれだけでもう形があるのかもあやふやになっていて、これは恐らく生きてるなんて状態からはもっとも程遠いとも言えるはずなのに、でも実感という奴が充分に籠っているこの言葉が数秒間反響して、と思っただら永遠に反響した。永久にこれが続いていくのだ。

「生きてる」

「ああ、生きてるよ」

「生きてる」

「ああ、生きてるよ」

「生きてる」

「ああ、生きてるよ」

とても単純すぎる応対がこれから永久に続いていくのは形を失い時間という概念からはみ出したから、かもしれないがこれは、死、と呼んでも差支えないはずなのに言葉は、生きてる、生きてる、と繰り返されていく。その奇妙な永久がずっと続いていくこの状況にしかし確かな安堵が含まれている自身、つまり僕が、僕としてこの永久で僕であり続けるだろう。これは多くの人が、死、と呼べる永久のはずだ。でもここでは応対が繰り返されて、僕にとっての暖かみが間違いない。どう考えても暖かさを感じる器官さえ、もう失われているはずなのに！

これこそ甲乙付けがたい。僕はもう甲でも乙でもない。
でもそれさえもどうでもよく。

ただ応対ばかりが続いていく不思議な暖かみ。

永久に続いていく。ただひたすら、永久に。

「生きてる」

「ああ、生きてるよ」

「生きてる」

「ああ、生きてるよ」

「生きてる」

「ああ、生きてるよ」

「生きてる」

「ああ、生きてるよ」

「生きてる」

「あまのこ」
「あまのこ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7562x/>

甲乙付けがたい下僕ハッ？

2011年12月13日01時50分発行